

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(42)

南九州西回り自動車道(芦北出水道路)建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

ろく たん が まる
六反ヶ丸遺跡 3
— C・D地点 —

(出水市六月田町)

2022年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景（東側上空から）



小型仿製鏡と鈴

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道（芦北出水道路）の建設事業に伴って、平成29年度から実施した出水市六月田町六月田下に所在する六反ヶ丸遺跡C・D地点発掘調査の記録です。

本遺跡は、出水平野を流れる米ノ津川の右岸、標高約6mの自然堤防上に位置する縄文時代～近代までの複合遺跡であり、発掘調査により発見された遺構・遺物は、当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものです。

本報告書では、遺跡の東側にあたるC・D地点についての調査成果を報告しています。調査区全体の中で最も多くの遺構・遺物が発見されました。古墳時代の竪穴建物跡が多数発掘され、他地域の影響を受けた多くの土器や小型仿製鏡など多数の遺物も出土しており、九州北部・中部などとの交流が盛んであった集落の様相が窺える貴重な資料であると考えます。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただくとともに、文化財保護の普及・啓発や研究などの一助となれば幸いです。

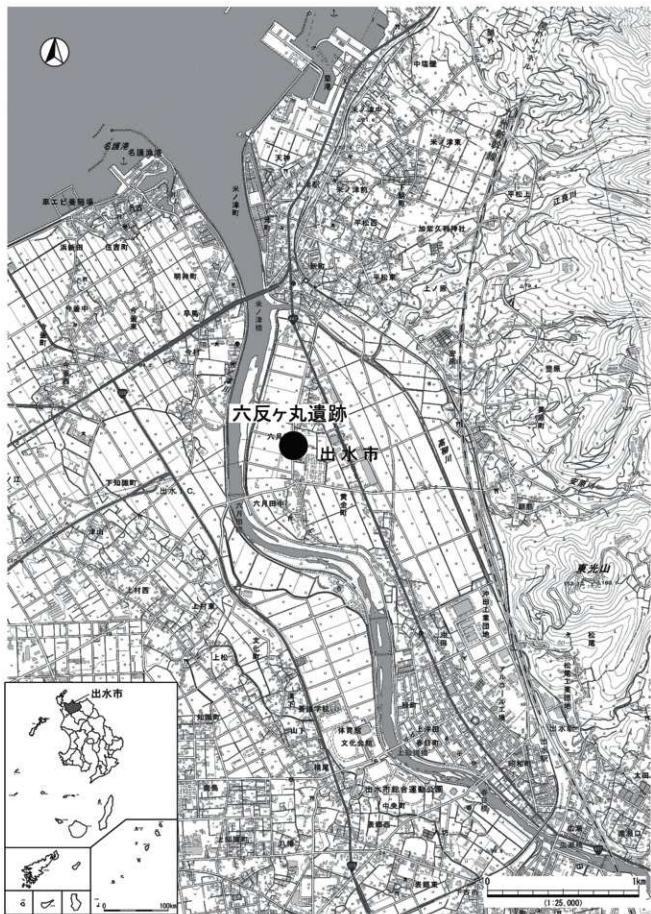
最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで、御協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所、出水市教育委員会、並びに調査において御指導いただいた先生方や、発掘作業、整理作業に従事された方々に対し、厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 中村和美

報告書抄録

ふりがな	ろくたんがまるいせき3								
書名	六反ヶ丸遺跡3 -C・D地点-								
副書名	南九州西回り自動車道(芦北出水道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	第42集								
編著者名	小田裕人 眞邊彩 浦博司 百枝勇一 池畑耕一								
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター								
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL. 0995-70-0574								
発行年月日	西暦2022年3月								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因	
		市町村	遺跡番号						
ろくたんがまるいせき 六反ヶ丸遺跡	鹿児島県 出水市 六月田町	46208	208-73	32° 6' 27"	130° 20' 29"	本調査 20180507～ 20190130	567	南九州西回り 自動車道(芦 北出水道路) 建設に伴う記 録保存調査	
						本調査 20190507～ 20191128			1129
						本調査 20201001～ 20201126			
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
		縄文時代	-	南福寺式土器・西平式土器・磨 製石斧					
		弥生時代	-	突帯土器・板付式土器 磨製石鏃・打製石斧					
		古墳時代	竪穴建物跡10軒 竪穴状遺構1基 土坑33基 土器溜6か所 埋納遺構1基	土師器・石皿・砥石・台石・磨 石 鉄鏃・小型仿製鏡・ガラス小玉		小型仿製鏡の 埋納された建 物などの集落			
		古代	掘立柱建物跡1棟 竪穴遺構1か所 土坑7基 土器焼成土坑2基	土師器 須恵器 緑釉陶器, 青磁(越窯), 瀬戸 焼, 土錘, 転用硯		竪穴遺構や土 器焼成土坑な ど検出 転用硯・越窯 青磁・緑釉陶 器など出土			
		中世	-	青磁・白磁・瓦質土器・滑石製 石鏃片					
		近世～近代	掘立柱建物跡3棟 土坑5基 溝状遺構2条 石列遺構5か所 石垣1か所	陶磁器(薩摩焼・伊万里焼・琉 球焼など), 石臼, 石硯, 石製 田の神像(笠), キセル, 青銅 鈴, 鉄製品, 古銭		モイドンと呼ば れる祭祀遺構			
	時期不詳	ピット380基	-						
遺跡の概要	<p>出水平野を流れる米ノ津川の右岸、標高約6mの河岸段丘上に位置し、縄文時代後期から近代までの複合遺跡である。発掘調査対象部分は東西に細長く、生活道を挟んで西側からA～D地点に分けられ、本報告書は、C・D地点の調査結果である。</p> <p>調査区全体に古墳時代の竪穴建物跡、土器溜、古代の竪穴遺構、土器焼成土坑、近世の掘立柱建物跡、近世～近代の石列遺構及び時期の異なる多数のピットが検出された。遺物は流れ込みのものも多く含まれるが、古墳時代の甕や壺、高坏、小型仿製鏡、ガラス小玉、古代の土師器・須恵器、転用硯、近世～近代の陶磁器、古銭、キセル、青銅鈴などが出土した。</p>								



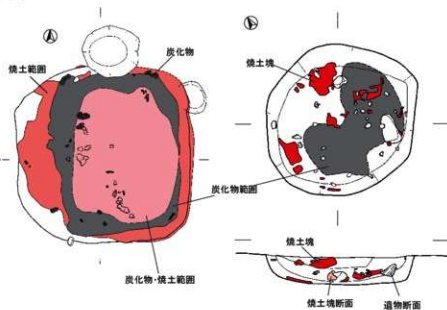
六反ヶ丸遺跡位置図 (1:25,000)

例 言

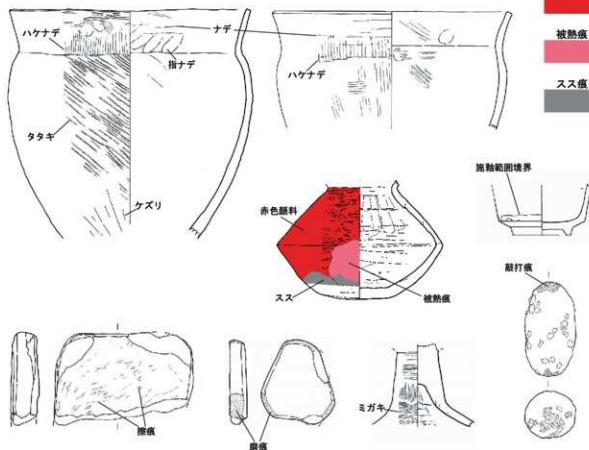
- 1 本書は、南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設に伴う六反ヶ丸遺跡C・D地点の調査報告である。
六反ヶ丸遺跡は、鹿児島県出水市六月田町六月田下に所在する。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下「鹿児島国道事務所」という）から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という）が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「調査センター」という）へ調査委託した。
- 3 発掘調査は、発掘調査支援業務を平成30年度・令和元年度に株式会社島田組へ委託し、調査センターの指揮・監督のもとで行った。令和2年度は調査センターが調査を行った。
- 4 整理・報告書作成事業は、平成30年度から令和3年度まで調査センターが実施した。
- 5 掲載遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。
遺構番号はA地点からの順番とする。
- 6 掲載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 9 本書で使用した方位は、すべて座標北（G. N.）であり、測量座標は国土座標系第2系を基準としている。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。空中写真撮影は、平成30年度・令和元年度に株式会社ふじたに再委託した。
- 11 本書に係る遺構実測図の作成及びトレースは眞邊彩・浦博司・小田裕人・百枝勇一の指示・確認のもと、調査センターの整理作業員が行った。
- 12 本書に係る出土遺物の実測・トレースは、眞邊・浦・小田・百枝の指示・確認のもと、調査センターの整理作業員が行った。なお、報告書の作成には、adobe社製の「Illustrator C C」、「Photoshop C C」を使用した。
- 13 出土遺物の写真撮影は、福永修一が行った。
- 14 金属製品の保存処理は、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）の中村幸一郎・水濱功治が実施し、銅鏡・銅鈴等一部は公益財団法人元興寺文化財研究所にX線透過撮影・実測図作成とともに委託した。
- 15 本書に係る自然科学分析は、年代測定及び樹種同定をバリノ・サーヴェイ株式会社と株式会社加速器分析研究所、金属製品の蛍光X線分析・鉛同位体比測定を公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
- 16 本書の執筆は次のように分担し、編集は小田・眞邊が行った。
第I～III章 百枝
第IV章 小田 眞邊 浦 池畑
第V章 バリノ・サーヴェイ株式会社
株式会社加速器分析研究所
埋文センター南の縄文調査室
公益財団法人元興寺文化財研究所
第VI章 小田 眞邊
- 17 使用した土色は「新版標準土色帖」（1970 農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。
- 18 遺構種別ごとに略記号を付けて調査を行った。遺構の略記号は以下のとおりである。
S I : 堅穴建物跡 S K : 土坑
S B : 掘立柱建物跡 S D : 溝状遺構
S X : 土器溜、石列遺構、石垣
P : ビット
- 19 遺構図の縮尺は、以下を基本とし、各国に縮尺を示した。
堅穴建物跡 : 1/40, 1/60
掘立柱建物跡 : 1/80
土坑 : 1/20, 1/40
溝状遺構 : 1/50, 1/80
土器溜 : 1/20, 1/40
石垣 : 1/80
石列遺構 : 1/20, 1/30
礫敷遺構 : 1/125, 1/20
- 20 遺物の縮尺は、以下を基本とし、各国にも縮尺を示した。
土器 : 1/3 土師器 : 1/3
土製品 : 1/3 陶磁器 : 1/3
金属製品 : 1/2 古銭 : 1/1
石器 : 1/3, 1/4
- 21 観察表のうち、口径・底径が括弧書きのものは復元径、器高が括弧書きのものは残高である。
- 22 遺構番号については、調査時に付されたものから、報告書掲載順に付け替えた。
- 23 遺物注記等で用いた遺跡記号は「ロク」である。
- 24 本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。
- 25 遺構の時期でない遺物については、包含層の遺物として扱った。（観察表参照）

凡例

【遺構】



【遺物】



目次

巻頭図版	第2節 本調査	16
序文	1 発掘調査の方法	16
報告書抄録	2 遺構の検出方法	18
例言・凡例	第3節 整理・報告書作成作業	18
第I章 発掘調査の経過	1 整理作業の方法と内容（令和元年度）	18
第1節 調査に至るまでの経緯	2 報告書作成作業の方法と内容（令和2年度）	19
第2節 調査の組織	3 報告書作成作業の方法と内容（令和3年度）	19
1 分布調査	第4節 層序	19
2 試掘調査	第IV章 調査の成果	26
3 本調査	第1節 概要	26
第3節 発掘調査の経過	第2節 縄文時代の調査成果	27
第4節 整理作業の経過	第3節 弥生時代の調査成果	27
第II章 遺跡の位置と環境	第4節 古墳時代の調査成果	30
第1節 地理的環境	第5節 古代の調査成果	135
第2節 歴史的環境	第6節 中世の調査成果	156
第3節 鹿見鳥と熊本の県境～野田I C間の遺跡	第7節 近世・近代の調査成果	158
.....	第8節 ビット	182
第III章 調査の方法と層序	第9節 その他の出土遺物	182
第1節 確認調査	第V章 自然科学分析	213
1 確認調査の方法	第VI章 総括	235
2 確認調査の結果	写真図版	259

挿図目次

第1図 六反ヶ丸遺跡 周辺地形図	8
第2図 六反ヶ丸遺跡 周辺遺跡位置図（1：25,000）	13
第3図 南九州西回り自動車道関係遺跡位置図	15
第4図 六反ヶ丸遺跡 確認トレンチ配置図	16
第5図 六反ヶ丸遺跡 全体図及び年度別調査範囲	17
第6図 六反ヶ丸遺跡 C・D地点グリッド配置図	18
第7図 土層断面図1	20
第8図 土層断面図2	21
第9図 土層断面図3	22
第10図 土層断面図4	23
第11図 土層断面図5	24
第12図 土層断面図6	25
第13図 II c層の地形図	26
第14図 縄文時代の土器・石製品	27
第15図 弥生時代の土器（1）	28
第16図 弥生時代の土器（2）・石製品	29
第17図 古墳時代の遺構配置図	30
第18図 竪穴建物跡3号の平面図・断面図	31
第19図 竪穴建物跡3号のビット断面図	32
第20図 竪穴建物跡3号の土器出土状況・断面図	33
第21図 竪穴建物跡3号・土器溜3出土の土器（1）	34
第22図 土器溜3出土の土器（1）	35
第23図 竪穴建物跡3号・土器溜3出土の土器（2）	37
第24図 土器溜3出土の土器（2）	38
第25図 土器溜3出土の土器（3）	39
第26図 土器溜3出土の土器（4）・石製品	40
第27図 竪穴建物跡4号の平面図・断面図	41
第28図 竪穴建物跡4号出土の土器	42
第29図 竪穴建物跡5号の平面図・断面図	43
第30図 竪穴建物跡5号出土の土器（1）	44
第31図 竪穴建物跡5号出土の土器（2）	46
第32図 竪穴建物跡5号出土の土器（3）・石製品	47

第33回	竪穴建物跡6号の平面図・断面図	48	第75回	土坑41号と出土の土器	90
第34回	竪穴建物跡6号の土器出土状況・断面図	49	第76回	土坑42号(1)	90
第35回	竪穴建物跡6号出土の土器(1)	50	第77回	土坑42号(2)・43号	91
第36回	竪穴建物跡6号出土の土器(2)	51	第78回	土坑42号・43号出土の土器	92
第37回	竪穴建物跡6号出土の土器(3)	52	第79回	土坑44号・45号と45号出土の土器	93
第38回	竪穴建物跡6号出土の土器(4)	53	第80回	土坑46号～50号と50号出土の土器	94
第39回	竪穴建物跡6号出土の土器(5)	54	第81回	埴輪造構出土の小型仿製鏡	96
第40回	竪穴建物跡6号出土の土器(6)	55	第82回	土器溜3	96
第41回	竪穴建物跡6号出土の土器(7)	56	第83回	土器溜4(1)	97
第42回	竪穴建物跡6号出土の土器(8)と石製品	57	第84回	土器溜4(2)	98
第43回	竪穴建物跡7号の平面図・断面図と出土の土器	59	第85回	土器溜4出土の土器(1)	99
第44回	竪穴建物跡8号の平面図・断面図	60	第86回	土器溜4出土の土器(2)	100
第45回	竪穴建物跡8号出土の土器	61	第87回	土器溜4出土の土器(3)	101
第46回	竪穴建物跡9号の平面図・断面図	61	第88回	土器溜5(1)	102
第47回	竪穴建物跡10号の平面図・断面図	62	第89回	土器溜5(2)と出土の石製品	103
第48回	竪穴建物跡10号のピット配置図・断面図	63	第90回	土器溜5出土の土器(1)	104
第49回	竪穴建物跡10号出土の土器(1)	64	第91回	土器溜5出土の土器(2)	105
第50回	竪穴建物跡10号出土の土器(2)	65	第92回	土器溜5出土の土器(3)	106
第51回	竪穴建物跡10号出土の土器(3)	67	第93回	土器溜5出土の土器(4)	107
第52回	竪穴建物跡10号出土の土器(4)	68	第94回	土器溜7	108
第53回	竪穴建物跡10号出土の土器(5)	69	第95回	土器溜7出土の土器(1)	109
第54回	竪穴建物跡11号の平面図・断面図	70	第96回	土器溜7出土の土器(2)	110
第55回	竪穴建物跡11号出土の土器	71	第97回	土器溜7出土の土器(3)	111
第56回	竪穴建物跡12号の平面図・断面図	72	第98回	土器溜7出土の土器(4)	112
第57回	竪穴建物跡12号出土の土器(1)	73	第99回	土器溜7出土の土器(5)	114
第58回	竪穴建物跡12号出土の土器(2)と鉄製品・玉	74	第100回	土器溜7出土の土器(6)と土製品・鉄製品	115
第59回	竪穴状遺構の平面図・断面図	75	第101回	土器溜8出土の土器(1)	116
第60回	竪穴状遺構出土の土器(1)	76	第102回	土器溜8出土の土器(2)と鉄製品	117
第61回	竪穴状遺構出土の土器(2)	77	第103回	包含層出土の古墳時代の土師器(1)	118
第62回	竪穴状遺構出土の土器(3)	78	第104回	包含層出土の古墳時代の土師器(2)	121
第63回	竪穴状遺構出土の土器(4)	79	第105回	包含層出土の古墳時代の土師器(3)	122
第64回	竪穴状遺構出土の土器(5)	80	第106回	包含層出土の古墳時代の土師器(4)	123
第65回	竪穴状遺構出土の土器(6)と石製品・鉄製品	81	第107回	包含層出土の古墳時代の土師器(5)	125
第66回	土坑18号～20号	82	第108回	包含層出土の古墳時代の土師器(6)と土製品	126
第67回	土坑20号出土の土器と土坑21号～24号	83	第109回	包含層出土の石製品(1)	127
第68回	土坑25号～27号	84	第110回	包含層出土の石製品(2)	128
第69回	土坑28号～31号と土坑28号(422・423)・30号(424)出土の土器	85	第111回	礫敷遺構出土の古墳時代の土師器(1)	129
第70回	土坑32号～38号	86	第112回	礫敷遺構出土の古墳時代の土師器(2)	131
第71回	土坑39号	87	第113回	礫敷遺構出土の古墳時代の土師器(3)	132
第72回	土坑39号のピット配置図	88	第114回	礫敷遺構出土の古墳時代の土師器(4)	133
第73回	土坑39号出土の土器	89	第115回	古代の遺構配置図	135
第74回	土坑40号	89	第116回	掘立柱建物5号	136
			第117回	土坑51号の土器出土状況	137

第118回	土坑51号の焼土範囲・断面図	138	第158回	包含層出土の近世・近代の陶磁器(4)	180
第119回	土坑51号のビット配置図と出土の土器(1)	139	第159回	包含層出土の近世・近代の石製品・鉄製品・古銭	181
第120回	土坑51号出土の土器(2)と土坑52号の平面図・断面図	140	第160回	その他の出土遺物	182
第121回	土坑53号~56号	141	第161回	炭化材・木材	215
第122回	土坑57号	142	第162回	暦年校正結果	216
第123回	土坑58号と出土の土器	143	第163回	暦年校正年代グラフ(参考)	220
第124回	土坑58号のビット配置図と土坑59号及び出土の土器	144	第164回	炭化材	222
第125回	竪敷遺構	146	第165回	小型仿製鏡(青丸:微小部観察箇所,赤丸:試料採取箇所)	226
第126回	竪敷遺構 入口(1)	147	第166回	試料採取状況(小型仿製鏡)	226
第127回	竪敷遺構 入口(2)	148	第167回	銅鈴(赤丸:試料採取箇所)	226
第128回	竪敷遺構出土の遺物	149	第168回	試料採取状況(銅鈴)	226
第129回	包含層出土の土師器	150	第169回	蛍光X線スペクトル(小型仿製鏡)	227
第130回	包含層出土の内黒土師器・土鏃・青磁・硯など	151	第170回	蛍光X線スペクトル(銅鈴)	227
第131回	包含層出土の須恵器(1)	153	第171回	鉛同位体比を用いた産地推定の概念図(A式図)	227
第132回	包含層出土の須恵器(2)	154	第172回	鉛同位体比を用いた産地推定の概念図(B式図)	227
第133回	包含層出土の須恵器(3)	155	第173回	鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した資料の鉛同位体比(A式図)	227
第134回	中世の出土遺物(1)	156	第174回	鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した資料の鉛同位体比(B式図)	227
第135回	中世の出土遺物(2)	157	第175回	弥生時代・古墳時代の小型仿製鏡が示す鉛同位体分布(A式図)	228
第136回	近世・近代の遺構配置図	158	第176回	弥生時代・古墳時代の小型仿製鏡が示す鉛同位体分布(B式図)	228
第137回	掘立柱建物跡6号	159	第177回	銅鈴と平安時代資料との比較(A式図)	228
第138回	掘立柱建物跡6号出土の磁器と青銅・鉄製品・古銭	160	第178回	銅鈴と平安時代資料との比較(B式図)	228
第139回	掘立柱建物跡7号	161	第179回	釘穴の微小部観察像	228
第140回	掘立柱建物跡8号	162	第180回	IRSL感度変化法による被熱温度推定の測定手順	230
第141回	土坑60号と出土の鈴	163	第181回	No.1のTLグローカーブ(ac)と生長曲線(b,d)	230
第142回	土坑61号~63号	164	第182回	No.2のTLグローカーブ(ac)と生長曲線(b,d)	231
第143回	土坑64号	165	第183回	各資料における段階加熱によるIRSL強度の感度変化	231
第144回	祭祀遺構	166	第184回	No.3のTLグローカーブ(左)と生長曲線(右)	232
第145回	石列遺構1号	167	第185回	No.4のTLグローカーブ(左)と生長曲線(右)	232
第146回	石列遺構2号	168	第186回	スペクトルチャート	233
第147回	石列遺構3号と出土の石製品	169	第187回	形状観察結果(双眼実体顕微鏡)	233
第148回	石列遺構4号	170	第188回	形状観察結果(双眼実体顕微鏡)	234
第149回	石列遺構5号	171	第189回	X線撮影結果(X線透過装置)	234
第150回	祭祀遺構出土の遺物と青銅製品・古銭	172	第190回	六反ヶ丸遺跡 土器分類	238
第151回	溝状遺構3号・4号の平面図・断面図	173	第191回	六反ヶ丸遺跡 古墳時代土器編年(変形土器)	238
第152回	溝状遺構4号の出土の陶磁器	174	第192回	六反ヶ丸遺跡周辺における古代官道想定図	256
第153回	溝状遺構4号の出土の遺物	175	第193回	九州および南九州の古代官道関係図	257
第154回	石垣出土の陶磁器等	176	第194回	竪敷遺構断面模式図	258
第155回	包含層出土の近世・近代の陶磁器(1)	177			
第156回	包含層出土の近世・近代の陶磁器(2)	178			
第157回	包含層出土の近世・近代の陶磁器(3)	179			

表 目 次

第1表	周辺道路一覧表1	11	第35表	土器・土師器・須恵器観察表	207
第2表	周辺道路一覧表2	12	第36表	土器・土師器・須恵器観察表	208
第3表	鹿見島と熊本の県境～野田I Cの間の遺跡	14	第37表	土器・土師器・須恵器観察表	209
第4表	C調査区層序	20	第38表	陶磁器観察表	210
第5表	D調査区層序	23	第39表	陶磁器観察表	211
第6表	古墳時代竪穴建物跡・竪穴状遺構番号新旧対応表	32	第40表	石器観察表	212
第7表	古墳時代土器溜遺構番号新旧対応表	134	第41表	鉄器観察表	212
第8表	古墳時代土坑遺構番号新旧対応表	134	第42表	樹種同定結果	214
第9表	古代遺構番号新旧対応表	136	第43表	放射性炭素年代測定結果	216
第10表	近世・近代遺構番号新旧対応表	161	第44表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	218
第11表	土器・土師器・須恵器観察表	183	第45表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未方正値, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)	219
第12表	土器・土師器・須恵器観察表	184	第46表	樹種同定結果	222
第13表	土器・土師器・須恵器観察表	185	第47表	蛍光X線分析による検出元素及び検出元素のピーク強度	225
第14表	土器・土師器・須恵器観察表	186	第48表	鹿見島県出水市六反ヶ丸遺跡から出土した試料の鉛同位体比	225
第15表	土器・土師器・須恵器観察表	187	第49表	FPM定量結果	233
第16表	土器・土師器・須恵器観察表	188	第50表	竪穴遺構構成礎及び遺物数一覧(1)	240
第17表	土器・土師器・須恵器観察表	189	第51表	竪穴遺構構成礎及び遺物数一覧(2)	241
第18表	土器・土師器・須恵器観察表	190	第52表	竪穴遺構構成礎及び遺物数一覧(3)	242
第19表	土器・土師器・須恵器観察表	191	第53表	竪穴遺構構成礎及び遺物数一覧(4)	243
第20表	土器・土師器・須恵器観察表	192	第54表	竪穴遺構構成礎及び遺物数一覧(5)	244
第21表	土器・土師器・須恵器観察表	193	第55表	竪穴遺構構成礎及び遺物数一覧(6)	245
第22表	土器・土師器・須恵器観察表	194	第56表	竪穴遺構構成礎及び遺物の総数	246
第23表	土器・土師器・須恵器観察表	195	第57表	竪穴遺構構成礎及び遺物の重量	247
第24表	土器・土師器・須恵器観察表	196	第58表	竪穴遺構構成礎及び遺物の体積	248
第25表	土器・土師器・須恵器観察表	197	第59表	竪穴遺構構成礎数1	249
第26表	土器・土師器・須恵器観察表	198	第60表	竪穴遺構構成礎数2	250
第27表	土器・土師器・須恵器観察表	199	第61表	竪穴遺構出土遺物総数	251
第28表	土器・土師器・須恵器観察表	200	第62表	竪穴遺構出土土器数	252
第29表	土器・土師器・須恵器観察表	201	第63表	竪穴遺構出土須恵器数	253
第30表	土器・土師器・須恵器観察表	202	第64表	竪穴遺構出土土師器数	254
第31表	土器・土師器・須恵器観察表	203	第65表	自然層序(竪穴遺構下位)の礎数	255
第32表	土器・土師器・須恵器観察表	204			
第33表	土器・土師器・須恵器観察表	205			
第34表	土器・土師器・須恵器観察表	206			

図版目次

図版1	C・D調査区	259	図版4	古墳時代 竪穴建物跡	262
図版2	調査区	260	図版5	古墳時代 竪穴建物跡	263
図版3	土層断面	261	図版6	古墳時代 竪穴建物跡	264

國版7	古墳時代 竪穴建物跡	265	國版47	古墳時代 竪穴建物跡10号 出土遺物	305
國版8	古墳時代 竪穴建物跡	266	國版48	古墳時代 竪穴建物跡11号・12号、竪穴狀遺構 出土遺物	306
國版9	古墳時代 小型仿製鏡	267	國版49	古墳時代 竪穴狀遺構 出土遺物	307
國版10	古墳時代 竪穴建物跡	268	國版50	古墳時代 竪穴狀遺構 出土遺物	308
國版11	古墳時代 竪穴建物跡	269	國版51	古墳時代 土坑28号・30号・39号・42号・43号 出土遺物	309
國版12	古墳時代 竪穴建物跡	270	國版52	古墳時代 土器溜4 出土遺物	310
國版13	古墳時代 竪穴狀遺構	271	國版53	古墳時代 土器溜4・5 出土遺物	311
國版14	古墳時代 土坑	272	國版54	古墳時代 土器溜5 出土遺物	312
國版15	古墳時代 土坑	273	國版55	古墳時代 土器溜7 出土遺物	313
國版16	古墳時代 土坑	274	國版56	古墳時代 土器溜7 出土遺物	314
國版17	古墳時代 土坑・土器溜	275	國版57	古墳時代 土器溜7 出土遺物	315
國版18	古墳時代 土器溜	276	國版58	古墳時代 土器溜8 出土遺物	316
國版19	古墳時代 土器溜	277	國版59	古墳時代 包含層 出土遺物	317
國版20	古墳時代 土器溜・古代 土坑51号	278	國版60	古墳時代 包含層 出土遺物	318
國版21	古代 土坑51号	279	國版61	古墳時代 釋教遺構・包含層 出土遺物	319
國版22	古代 土坑	280	國版62	古代 土坑51号 出土遺物	320
國版23	古代 土坑58号	281	國版63	古代 土坑58号・釋教遺構 出土遺物	321
國版24	古代 土坑58号	282	國版64	古代 包含層 出土遺物	322
國版25	古代 釋教遺構	283	國版65	古代 包含層 出土遺物	323
國版26	古代 釋教遺構	284	國版66	中世 出土遺物	324
國版27	古代 釋教遺構	285	國版67	近世・近代 掘立柱建物跡6号・祭祀遺構・石列遺構 3号 出土遺物	325
國版28	古代 釋教遺構	286	國版68	近世・近代 溝狀遺構4号 出土遺物	326
國版29	古代 釋教遺構	287	國版69	近世・近代 溝狀遺構4号・石垣 出土遺物	327
國版30	古代 釋教遺構	288	國版70	近世・近代 包含層 出土遺物	328
國版31	近世・近代 掘立柱建物跡	289	國版71	古墳時代 埋納遺構・土坑60号	
國版32	近世・近代 掘立柱建物跡・土坑	290		近世・近代 祭祀遺構・包含層 出土遺物	329
國版33	近世・近代 土坑・溝狀遺構・石垣	291	國版72	近世・近代 包含層 出土遺物	330
國版34	近世・近代 祭祀遺構・石列遺構	292			
國版35	繩文時代・弥生時代 出土遺物	293			
國版36	古墳時代 竪穴建物跡3号・土器溜3 出土遺物	294			
國版37	古墳時代 土器溜3 出土遺物	295			
國版38	古墳時代 竪穴建物跡3号・土器溜3 出土遺物	296			
國版39	古墳時代 竪穴建物跡4号・5号・6号・土器溜3 出土遺物	297			
國版40	古墳時代 竪穴建物跡5号 出土遺物	298			
國版41	古墳時代 竪穴建物跡6号 出土遺物	299			
國版42	古墳時代 竪穴建物跡6号 出土遺物	300			
國版43	古墳時代 竪穴建物跡6号 出土遺物	301			
國版44	古墳時代 竪穴建物跡6号 出土遺物	302			
國版45	古墳時代 竪穴建物跡7号・8号 出土遺物	303			
國版46	古墳時代 竪穴建物跡10号 出土遺物	304			

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各関係機関等との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき、鹿児島国道事務所は、南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設の施工計画に基づき、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「県文化財課」という。）に照会した。

これを受けて鹿児島県立埋蔵文化財センター以下「埋文センター」が、平成26年度に計画路線（芦北出水道路のうち、県境～出水IC間）の分布調査を実施した結果、事業区内には周知の遺跡を含め10か所の遺物散布地の存在が判明した。このうち六反ヶ丸遺跡は周知の遺跡にあたる。分布調査の結果をもとに事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについて、鹿児島国道事務所、県文化財課、埋文センターの三者で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため、事業着手前に発掘調査を実施することとした。

なお、平成21年度まで当該事業の確認調査は、事業の円滑な推進を図る観点から本調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが、平成23年度からは文化庁の国庫補助事業を導入し、「県内遺跡事前調査事業」として県文化財課が実施している。

これを受けて、遺跡の残存状況をより詳細に把握するため、県文化財課が平成28年12月21日に試掘調査、埋文センターが平成29年5月8日から5月28日にかけて確認調査をそれぞれ行ったところ、事業区域内の表面積7,000㎡の範囲に遺物包蔵地が存在することが判明した。

試掘調査、確認調査の結果、本調査は、県文化財課からの委託を受けて鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター以下「調査センター」が担当することとなった。平成21年度に埋文センターは、出水阿久根道路建設に伴う中郡遺跡群の発掘調査を「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要項」に基づき、民間調査組織と支援業務委託契約を締結して実施した実績があった。また、平成25年度に設立された調査センターは東九州自動車道建設に伴う発掘調査において、増大する事業量に伴う発掘調査の円滑かつ効率的な実施と事業推進の調整を図るため、民間組織と支援業務委託契約を結んで実施してきた実績があった。このような経緯のもと、鹿児島国道事務所からの要望を受け、平成29年6月に鹿児島国道事務所と県文化財課、調査センターの三者で協議を行った結果、六反ヶ丸遺跡の本調査においても民間支援

組織を導入し、支援業務委託契約を締結して実施することとなった。

本調査が必要と判断された総表面積7,000㎡（延面積14,000㎡）のうち、平成29年度は、調査着手のための条件が整った範囲（A地点+B地点の一部）、表面積1,609㎡（延面積4,747㎡）の調査を行い、終了した。調査期間は、平成29年9月1日（金）から平成30年1月30日（火）（実働85日間）である。

平成30年度は、B・C地点及び一部D地点の本調査を行い、表面積2,849㎡（延面積4,131㎡）の調査を終了した。調査期間は、平成30年5月7日（月）から平成31年1月30日（水）（実働146日間）まで、C地点の調査表面積は567㎡（延面積2,285㎡）である。

令和元年度は、B・C地点の未調査部分とD地点の調査を行い、表面積1,776㎡（延面積2,124㎡）の調査を終了した。調査期間は、令和元年5月7日（火）から11月28日（木）（実働81日間）である。その中で、C・D地点の調査表面積は1,632㎡（延面積1,980㎡）である。

令和2年度は、C・D地点の現道下の調査を行い、表面積230㎡（延面積458㎡）の調査を終了した。調査期間は、令和2年10月1日（木）から令和2年11月26日（木）（実働33日間）である。ただし、迂回路建設に必要な接続部の2か所については、本調査前9月末に各一日ずつ先行調査を行った。

第2節 調査の組織

1 分布調査（平成26年度）

事業主体	国土交通省
	九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課
調査者	鹿児島県教育庁文化財課 文化財主事 黒川 忠広 県立埋蔵文化財センター 調査課第一調査係長 大久保浩二 文化財研究員 眞邊 彩
立会者	出水市教育委員会生涯学習課 主査 岩崎 新輔 国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所 企画係長 井久保和博 技官 下平 恭平 南九州西回り自動車道（出水～阿久根） プロジェクト推進室

建設専門官 原田 修

(実地検査)

平成31年3月1日(金)

(成果物検査)

2 試掘調査(平成28年度)

事業主体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査企画 鹿児島県教育庁文化財課
調査者 *
文化財主事 黒川 忠広
立会者 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
計画課専門職 西森 功
調査協力 出水市教育委員会生涯学習課
主査 岩崎 新輔

令和元年度

事業主体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 中原 一成
調査企画 総務課長兼総務係長 中島 治
調査課長 寺原 徹
調査第二係長 有馬 孝一
調査担当 文化財専門員 眞邊 彩
調査事務 主査 有川 剛弘

3 本調査

平成30年度

事業主体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 前迫 亮一
調査企画 総務課長兼総務係長 中村伸一郎
調査課長 中原 一成
調査第二係長 福永 修一
調査担当 文化財専門員 平木場秀男
調査事務 主査 小牧 智子

発掘調査の実施にあたり、調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、株式会社島田組へ山ノ段遺跡と併せて本調査(記録保存調査)等の支援業務委託を実施した。

なお、調査センター職員1名が常駐し、調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

委託先 株式会社 島田組

調査体制 *
主任技術者 岩佐 篤志
主任調査支援員 宮下 貴浩
(~5月)
土居 和幸
(5~7月)
堀井 泰樹
(7月~)
調査支援員 丹生 泰雪
* 三ツ股正明
(5~6月)
井上 素裕
(6月~)

発掘調査の実施にあたり、調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、株式会社島田組へ本調査(記録保存調査)等の支援業務委託を実施した。

なお、調査センター職員1名が常駐し、調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

委託先 株式会社 島田組

調査体制 *
主任技術者 山本 瞬
主任調査支援員 宮下 貴浩
調査支援員 高見澤太基
丹生 泰雪

委託期間 平成31年4月5日~令和2年3月6日
(六反ヶ丸遺跡調査期間は令和元年5月9日~10月31日)

委託内容 記録保存調査 1式
測量業務 1式
土工業務 1式

委託期間 平成30年4月8日~平成31年3月13日

委託内容 記録保存調査 1式
測量業務 1式
土工業務 1式

検査 中間検査 令和元年11月15日(金)
完成検査 令和2年2月25日(火)
(実地検査)
令和2年2月28日(金)

検査 中間検査 平成30年10月16日(火)
完成検査 平成31年2月25日(月)

(成果物検査)

令和2年度

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター センター長		
調査企画	総務課長兼総務係長	中原 一成	中島 治
	調査課長	寺原 徹	
	調査第二係長	有馬 孝一	
調査担当	文化財専門員	浦 博司	
		百枝 勇一	
調査事務	主事	上園 慶子	

第3節 発掘調査の経過

発掘調査の経過については、日誌抄を年度ごと及び月ごとに集約して記載する。

調査の過程（日誌抄 C・D地点関係のみ記載）

平成30年度（5月～1月までC地点、一部1月D地点）

30年5月

- D-23～26区
- 表土剥ぎ（重機使用）、Ⅱa～Ⅱb層掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ、遺構検出先行トレンチ設定掘り下げ（北壁）
- D・E-27・28区
- 石列遺構部分の人力による表土剥ぎ、遺構検出、調査方法の検討、樹根除去作業、一部実測
- 16日 調査区幅杭打ち直し作業

6月

- D-23～26区
- Ⅱb～Ⅱc層掘り下げ、遺構検出写真撮影、遺物取り上げ、写真撮影
- C-23～27区
- 表土剥ぎ（重機使用）、Ⅱa～Ⅱb層掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、土器溜実測
- C・D-26区 西壁土層断面実測
- D・E-27・28区
- 人力による精査、樹根除去作業、写真撮影、実測準備
- 23日 安全パトロール
- 26日 監理業務 堂込秀人埋文センター所長

7月

C-23区

- 堅穴建物跡3号検出、写真撮影、遺物取り上げ、実測
- C～E-24・25区 礎敷遺構検出、遺物取り上げ
- C・D-25～27区
- 掘立柱建物跡6号検出、実測・掘り下げ、土器溜4・5号実測
- D・E-27・28区 石列遺構1・2号検出、実測
- 23日 監理業務 平美典宗文化財課文化財主事

8月

- C-23区 堅穴建物跡3号実測・遺物取り上げ
- C～E-24・25区 礎敷遺構検出・写真撮影
- C～E-26・27区
- 掘立柱建物跡6号写真撮影、堅穴建物跡6号・掘立柱建物跡6号・土器焼成土坑検出・掘り下げ・写真撮影
- D・E-27・28区 石列遺構1・2号検出・実測
- 2日 現地指導 成尾仁仁氏（伊集院高教諭）
- 16日 現地指導 近江俊秀調査官（文化庁）
- 監理業務 森幸一郎県文化財課文化財主事
- 21日 現地指導 永山修一氏（ラ・サール学園教諭）
- 23日 産業医夏期現場視察 安全パトロール

9月

- C-23区 堅穴建物跡3号掘り下げ・実測
- C～E-24・25区 礎敷遺構トレンチ設定掘り下げ
- C～E-26・27区
- 堅穴建物跡6号掘り下げ・遺物取り上げ、掘立柱建物跡7号実測・写真撮影、土器焼成土坑検出・掘り下げ、土坑18号検出・掘り下げ・写真撮影
- D・E-27・28区
- 石列遺構1・2号検出、樹根の除去、実測・写真撮影
- 19日 監理業務 中村和美理文センター係長

10月

- C-23区 堅穴建物跡3号掘り下げ・実測
- C～E-24・25区
- 礎敷遺構一部掘り下げ・実測・写真撮影
- C～E-26・27区
- 堅穴建物跡6号実測・写真撮影、土器焼成土坑掘り下げ・遺物取り上げ、堅穴建物跡4・5号検出・掘り下げ・写真撮影
- D・E-27・28区
- 石列遺構1・2号検出、樹根の除去、実測・写真撮影、表土剥ぎ、Ⅱc層掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、堅穴建物跡8号、土坑52・64号検出・写真撮影、小型仿製鏡出土
- 24日 監理業務 堂込秀人埋文センター所長
- 安全パトロール

31日 遺物指導 小田裕樹氏(奈良文化財研究所)

11月

C-23区 竪穴建物跡3号掘り下げ・実測

C~E-24・25区

竪穴遺構清掃、一部竪面測り、一部断面図作成・写真撮影

C~E-26・27区

竪穴建物跡4・5号掘り下げ・実測・写真撮影。土器
焼成土坑小ピット検出・掘り下げ・写真撮影。遺物取
り上げ

D・E-27・28区

石列遺構1号検出。石列遺構2号実測・写真撮影。竪
穴建物跡8号。土坑52・64号掘り下げ・遺物取り上
げ・写真撮影。小型仿製鏡検出・現地保存処理実施

1日 現地指導 深野信之氏(奈良市教育委員会)

小田裕樹氏(奈良文化財研究所)

8日 現地指導 森脇 広氏(鹿児島大学名誉教授)

中村直子氏(鹿児島大学埋蔵文化財
調査センターセンター
長)

空中写真撮影

10日 現地説明会

12月

C-23区 竪穴建物跡3号掘り下げ・実測

C~E-24・25区

竪穴遺構清掃、一部竪面測り、一部断面図作成・写真
撮影

C~E-26・27区

竪穴建物跡4・5号掘り下げ・実測・写真撮影。土器
焼成土坑小ピット検出・掘り下げ・写真撮影。遺物取
り上げ

D・E-27・28区

石列遺構1号検出。石列遺構2号 実測・写真撮影。

竪穴建物跡8号。土坑52・64号掘り下げ・遺物取り上
げ・写真撮影。小型仿製鏡検出・現地保存処理実施

12日 安全パトロール

14日 現地指導 小鹿野 亮氏

(筑紫野市教育委員会)

1月

C~E-24・25区

竪穴遺構路面測り取り、路盤掘り下げ。遺物取り上
げ。下層一部掘り下げ(青灰色土)。Ⅲ層地形図測
量。竪面3D用写真撮影。路盤面高度測定。下層確
認・埋め戻し(重機使用)

D・E-27・28区

竪穴建物跡8号北側部分のみ実測・写真撮影。調査終
了。竪穴建物跡9・10号検出。遺物取り上げ。実測・
写真撮影。調査終了。土坑64号掘り下げ。遺物取り上
げ。実測・写真撮影。調査終了。土坑54・67・55~57
号検出。遺物取り上げ。実測・写真撮影。調査終了

D地点

一部重機による表土測り、遺構検出。遺物取り上げ。
実測・写真撮影。埋め戻し(重機使用)

9日 現地指導 北村良介氏(鹿児島大名誉教授)

24日 遺跡検討会

県文化財課 係長

県埋文センター 所長他3名

埋文調査センター センター長他3名

令和元年度

5月

【C地点】

C~E-25~27区

復旧作業・排水作業及び環境整備。南壁沿いのトレン
チ掘り下げ。竪穴遺構テラス状残部外周トレンチの復
旧作業。竪穴遺構グリッド設定

D・E-26~28区 竪穴建物跡8号精査・土層確認

【D地点】

B~F-28~35区

整地作業。東端北壁沿いのトレンチ掘り下げ・表土測
り(重機使用)。壁面整形及び精査。調査区境の土壌
設置。地形測量。散水及びシート養生

E-30区 表土測り(重機使用)

E-31区

人力による赤褐色層(水田床土)の掘り下げ

6月

【C地点】

D・E-26~28区

南壁断面掘り下げ。壁面精査。竪穴住居跡8号検出

C~E-25~27区

竪穴遺構東部掘り下げ・遺物取り上げ・下面の精査お
よび写真撮影。土坑20・21・63号検出・掘り下げ・実
測・写真撮影・遺物取り上げ。排水及び環境整備

【D地点】

B~F-28~35区

表土測り、排水。西端部の遺構(竪穴状遺構・土坑
42・43・44・45号・ピット他)検出。調査区壁際養
生。排土搬出。グリッド杭設置。ベルト東側のトレン
チ掘り下げ・精査。人力による赤褐色層(水田床土)
の掘り下げ。竪穴建物跡17・18号・掘立柱建物跡4
号・土坑40・41・46~50号・58・59号・ピット他精査
及び検出・写真撮影

7月

【C地点】

- D・E-26～28区 調査区東壁を復旧及び精査
C～E-25～27区
裸敷遺構テラス状下部実測・確認り上げ・下層確認、埋め戻し、南壁Ⅱc層以下遺物取り上げ、調査区北壁トレンチ掘り下げ、北壁の精査及び分層

【D地点】

- B～F-28～35区
排土搬出、南北ベルト壁面整形、竪穴建物跡11・12号・掘立柱建物跡4号・土坑40～42号・46～50号・58・59号・ビット他検出・掘り下げ・写真撮影・実測・遺物取り上げ、壁面整形、調査区西壁の精査、土坑48号の獣骨検出・写真撮影、D-Ⅳ層範囲確認掘り下げ、南壁トレンチ掘り下げ、竪穴建物跡12号掘り下げ、土坑43・44・45号・ビット他検出
D・E-34・35区
表土剥ぎ（重機使用）、溝状遺構4号・土器溜8号・石垣検出
C・D-31～33区 表土剥ぎ（重機使用）、排土搬出
16日 産業医夏期現場視察
17日 監理業務 宗岡克美理文センター係長

8月

【C地点】

- D・E-26～28区
台風養生、竪穴建物跡8号掘り下げ
C～E-25～27区
調査区北壁土層断面図作成、台風養生、埋め戻し、調査終了

【D地点】

- B～F-28～35区
竪穴状遺構・溝状遺構4号掘り下げ、竪穴建物跡11・12号・土坑42・43・44・46・48・58号・石垣・ビット・土器溜7号検出・掘り下げ・写真撮影・実測・遺物取り上げ、調査区西側裸露掘り下げ、台風養生、南北トレンチ掘り下げ
20日 監理業務 三垣恵一理文センター係長
21日 安全パトロール

9月

【C地点】

- D・E-26～28区
竪穴建物跡8号掘り下げ・実測・写真撮影、環境整備

【D地点】

- B～F-28～35区
竪穴状遺構掘り下げ、竪穴建物跡11・12号・土坑42・

43・47・48・58号・土器溜7号・石垣・溝状遺構4号掘り下げ・精査・実測・遺物取り上げ・写真撮影、ビット8基掘り下げ・写真撮影、Ⅰ～Ⅲ層・D-Ⅳ層掘り下げ・検出・写真撮影、D-Ⅲ層掘り下げ、東側南北ベルト実測・写真撮影、表土剥ぎ及びび人力によるD-Ⅱb層掘り下げ、Ⅲ層検出、地形測量、環境整備
C・D-28区 ビット群精査・写真撮影・実測
26日 空中写真撮影

10月

【C地点】

- D・E-26～28区
竪穴建物跡8号掘り下げ・写真撮影・実測、地形測量、埋め戻し、調査終了
C-27・28区
表土剥ぎ（重機使用）、環境整備、土坑63号・ビット3基検出・写真撮影・掘り下げ・実測、埋め戻し、調査終了

【D地点】

- B～F-28～35区
土坑40～46号・50・58・59号・ビット・土器溜7号掘り下げ・写真撮影・実測、竪穴建物跡10・11号、竪穴状遺構掘り下げ・遺物取り上げ・写真撮影・実測、土器溜8号掘り下げ・検出・遺物取り上げ・写真撮影、石垣周辺土器溜り・小ビット掘り下げ・写真撮影、表土剥ぎ・D-Ⅱb層掘り下げ（重機使用）、Ⅰ層断面作成、壁面整形、地形測量、調査終了
C・D-28区 ビット掘り下げ
調査終了
9日 安全パトロール
15・16日 現地指導 趙 哲済氏
(一般財団法人大阪市文化財協会)
23日 監理業務 前迫亮一理文センター所長

令和2年度

9月

【現道下】

- B・C-29・30区
先行調査（写真撮影・遺物回収）及び現状復旧
D・E-26・27区
先行調査（写真撮影・遺物回収）及び現状復旧

10月

【現道下】

- D・E-28・29区
表土剥ぎ及びⅡb層・Ⅱc層掘り下げ
C-28区
ビット4基検出・掘り下げ・実測・写真撮影

- D-27区 堅穴建物跡7号検出・掘り下げ
 D-28区 東側拡張、堅穴状遺構・土坑28・29号・ピット3基検出・掘り下げ・実測・写真撮影
 D・E-28区 西壁土層断面写真撮影及び実測、西側拡張部掘り下げ
 E-28区 土坑31・33～36号検出・掘り下げ・実測・写真撮影
 E-29区 東側拡張、土坑37～39号検出・掘り下げ・実測・写真撮影
 E-28・29区 埋め戻し・道路復旧
 C-28・29区 表土剥ぎ・Ⅱb層掘り下げ
 D-26・27区 表土剥ぎ
 D-27・28区 Ⅱb層掘り下げ、台風養生、遺構配置図作成
 5日 国土交通省協議 重黒木幸英監督官・立神倫史文化財主事・有馬孝一理文センター係長
 自主安全衛生点検
 13日 監理業務 前迫亮一理文センター所長
 27日 監理業務 中村和美理文センター課長

11月

【現道下】

- D-26～28区
 Ⅱb層・Ⅱc層掘り下げ及び遺物取り上げ
 D-27区
 堅穴建物跡6号（ピット4基を含む）検出・掘り下げ・遺物取り上げ・実測・写真撮影、堅穴建物跡7号（ピット2基を含む）掘り下げ・遺物取り上げ・実測・写真撮影、土坑19・22・25・26号・ピット7基検出・掘り下げ・実測・写真撮影
 D-28区
 堅穴状遺構・掘り下げ・遺物取り上げ・実測・写真撮影、土坑32・30号検出・掘り下げ・実測・写真撮影
 C-28区 土坑27号検出・掘り下げ・実測・写真撮影
 E-26区 Ⅱb層掘り下げ、ピット1基検出・掘り下げ・実測・写真撮影
 D・E-28区 西側拡張及び表土剥ぎ
 C-28・29区及びD・E-28区 東側調査終了写真撮影
 B・C-28・29区及びD・E-28区 埋め戻し
 D-27・E-26区 埋め戻し
 遺構配置図作成、調査範囲図作成
 11日 監理業務 三垣恵一理文センター係長
 16日 国土交通省協議 重黒木幸英監督官・立神倫史文化財主事・有馬孝一係長
 17日 安全衛生パトロール
 24日 監理業務 前迫亮一理文センター所長
 調査終了

第4節 整理事業の経過

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、調査センターで行った。

平成30年度～令和元年度は、出土遺物の水洗い、注記、遺物の仕分けなどの基礎的作業を行った。

令和2年度は、注記、遺物の仕分けなどの基礎的作業、遺物の実測及び拓本、トレース、遺構のトレース、レイアウト、写真撮影、原稿執筆等の報告書作成業務及び遺物収納を行った。

整理・報告書作成作業に関する調査組織及び整理事業の経過は以下のとおりである。

平成30年度

調査組織

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター	
	センター長	前迫 亮一
調査企画	総務課長兼総務係長	中村伸一郎
	調査課長	中原 一成
	調査第二係長	福永 修一
調査担当	文化財専門員	有馬 孝一
事務担当	主査	小牧 智子
	事業推進員	川崎 麻衣

作業の経過

- 水洗い、注記
 遺構………図面チェック、一部遺物実測、トレース
 遺構配置図作成
 遺物………土器分類、接合、実測、拓本、トレース
 石器実測、一部トレース
 土層断面・下図面作成、トレース
 原稿執筆

令和元年度

調査組織

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター	
	センター長	中原 一成
調査企画	総務課長兼総務係長	中島 治
	調査課長	寺原 徹
	調査第二係長	有馬 孝一
調査担当	文化財専門員	平木場秀男

＊
 事務担当 主査 倉元 良文
 事業推進員 有川 剛弘
 事業推進員 川崎 麻衣

作業の経過

遺構……トレースチェック、修正、レイアウト
 遺物……土器トレースチェック、レイアウト
 石器一部トレース、トレースチェック
 遺物レイアウト、遺物観察表作成
 土層断面…トレースチェック、レイアウト
 図版……レイアウト（現場・遺物）、遺物写真撮影
 原稿執筆
 自然科学分析委託……実測分析1件、
 鉛同位体比分析1件、
 樹種同定分析1件、
 年代測定分析1件
 遺物指導 久住猛雄氏（福岡市経済観光文化局）
 石田智子氏（鹿児島大学）

報告書作成指導委員会 調査課長他5名
 6月11日・8月7日・10月3日
 報告書作成検討委員会 センター長他5名
 6月17日・8月22日・10月9日・10月31日

令和2年度

調査組織
 事業主体 国土交通省
 九州地方整備局鹿児島国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 センター長 中原 一成
 調査企画 総務課長兼総務係長 中島 治
 調査課長 寺原 徹
 調査第二係長 有馬 孝一
 調査担当 文化財専門員 眞邊 彩
 ＊ 浦 博司
 ＊ 小田 裕人
 ＊ 百枝 勇一
 事務担当 主査 有川 剛弘
 事業推進員 塩屋奈緒美

作業の経過

遺構……図面チェック、トレース、トレースチェック、
 レイアウト、遺構配置図作成
 遺物……土器分類、接合、実測、拓本、復元、ト
 レース、トレースチェック、レイアウト、
 遺物観察表作成

土層断面…図面チェック、トレースチェック、レイアウト

図版……レイアウト（現場・遺物）
原稿執筆

自然科学分析委託……樹種同定分析1件、
年代測定分析1件

遺物指導 中村直子氏
（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）
檀 佳克氏（八女市教育委員会）

報告書作成指導委員会 調査課長他8名
6月2日・8月5日・10月7日・11月4日
2月1日

報告書作成検討委員会 センター長他5名
6月11日・8月11日・10月13日・11月10日
11月19日・2月9日

令和3年度

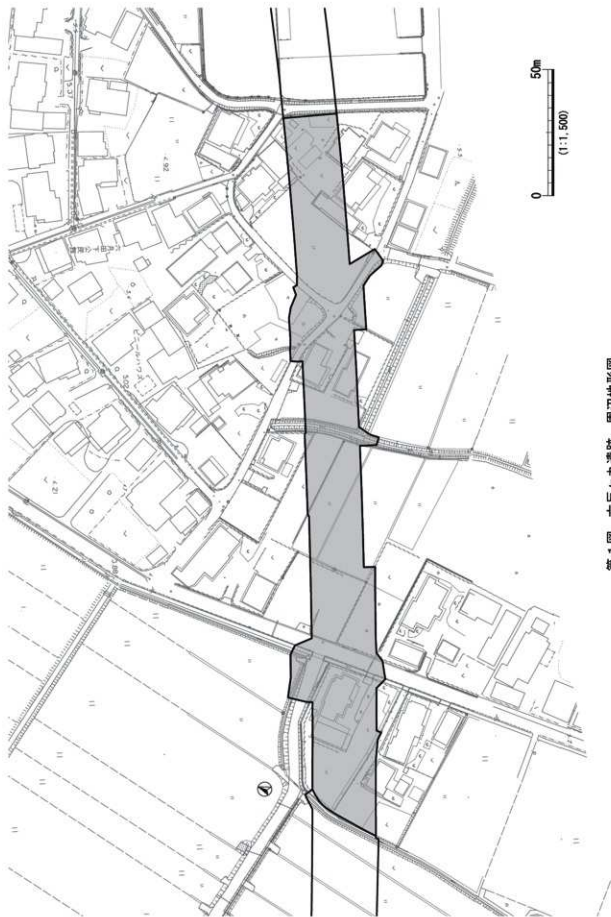
調査組織

事業主体 国土交通省
 九州地方整備局鹿児島国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 センター長 中村 和美
 調査企画 総務課長兼総務係長 中島 治
 調査課長 福永 修一
 調査第二係長 有馬 孝一
 調査担当 文化財専門員 小田 裕人
 事務担当 主事 上園 慶子
 事業推進員 市成 英加

作業の経過

遺構……レイアウト、遺構配置図作成
 遺物……実測、拓本、復元、トレース、トレース
 チェック、レイアウト、遺物観察表作成
 土層断面…図面チェック、トレースチェック、レイ
 アウト
 図版……レイアウト（現場・遺物）、遺物写真撮影
 原稿執筆・校正
 遺物・写真・図面等の整理及び取納

報告書作成指導委員会 調査課長他8名
 6月2日・8月6日・10月5日
 報告書作成検討委員会 センター長他5名
 6月10日・8月11日・10月13日



第1図 大反ヶ丸遺跡 周辺地形図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

六反ヶ丸遺跡は、鹿児島県出水市六月田町六月田下に所在する。本遺跡の所在する出水市は、1954（昭和29）年に出水町と米ノ津町が合併し、誕生した。その後、2006（平成18）年には出水市と野田町・高尾野町が合併し、現在の出水市となった。市域は東西約27km、南北約23kmで面積は329.98km²ある。令和3年4月時点で世帯数25,504世帯、人口152,765人である。

出水市の北東部には矢筈岳を主峰とする肥薩山塊があり、北は熊本県水俣市に、東は伊佐市に接する。南部には北薩の一の高峰である紫尾山を中心とする紫尾山地が横たわり、薩摩川内市、さつま町と接する。西は阿久根市と接し、北西側には八代海（不知火海）が広がって、長島や天草諸島を望む。紫尾山地の北側では、南九州で広く見られるシラス台地がわずかしこ存在せず、これに代わって標高100m以下には出水扇状地・高尾野扇状地・野田扇状地・米ノ津扇状地が形成され、出水平野の大半を占める。扇状地の周辺には知識面と呼ばれる河岸段丘が細長く形成される。六反ヶ丸遺跡は米ノ津川（広瀬川）の中流域の右岸に位置するが、この付近は米ノ津面と呼ばれる沖積地が発達している。下流域では氾濫原により沖積低地が発達し、県内でも有数の穀倉地帯となっている。さらに、河口付近には三角州や海岸平野も見られ、遠浅な海岸部は江戸時代から干拓が行われ、現在の水田地帯となっている。なかでも、荒崎地区は国の特別天然記念物として指定されているツルの越冬地として有名である。また、紫尾山地と扇状地の間には、熊本県水俣市から出水市野田町へと延びる出水層層がある。その長さは約20kmで、ほぼ北東-南西方向に延びる。六反ヶ丸遺跡においても、平成29年度及び令和元年度の調査で噴霧跡が確認されている。

米ノ津川は出水市上天川内朝日録に源を発し、その大半は山地である。途中、出水市広瀬で平良川と合流し、下流部は扇状地の出水平野となる。出水平野を八代海へ北流する間、沖田と六月田付近で2度西側へ蛇行する。本遺跡は六月田付近で蛇行する米ノ津川の自然堤防上に形成された遺跡で、周辺の標高は6m前後となる。遺跡の所在する「六月田」という字について『出水郷土誌』では柳田國男「地名の研究」によると「信仰上の用途に指定された耕地の名」といわれ、「毎年其日に祭を営む社があって其日の費用を弁ずる為に設けられた田の所在である」とすれば、六月田付近に「社」があったことが予想され、その歴史が古くなる可能性を指摘している。また、石田三成の文祿検地によるものと思われる慶長4

（1599）年の『御知行目録』の中には当時の村落名と石高が記されているが、出水関係では36ヶ村の記載があり、うち六月田村は約604石と最も石高が高く、穀倉地帯であったことが分かる。遺跡周辺には沖田溝・下知識溝・六月田溝と呼ばれる灌漑用水路が17-18世紀に整備されている。

現在、遺跡周辺は集落が形成され、遺跡の東側には米ノ津川と並行するように国道447号が走り、大型店舗が立ち並んでいる。

第2節 歴史的環境

出水市の東部、標高約500mの上場高原一帯は、上場遺跡を核に半径4km圏に狸山遺跡、大久保遺跡、郷田遺跡、池ノ段遺跡等の旧石器・縄文時代を主とする40か所以上の遺跡が集中する。上場遺跡は県内で初めて旧石器時代の発掘調査が実施された遺跡である。調査の結果、爪形文土器と細石器の共伴やナイフ形石器、台形石器・細石器等を包含する7時期の文化層の存在が明らかになった。大久保遺跡では、細石器時代の逆茂木痕をもつ落とし穴が検出された。カラン遺跡ではナイフ形石器・台形石器が出土している。上場高原の伊佐市日東及び下青木一帯には黒曜石原産地が所在する。

縄文時代の遺跡は河岸段丘や山麓緑地・裾部に集中している。早期の遺跡は上場高原の狸山遺跡で燃糸土器や寒ノ神式土器などが出土しているが、河岸段丘でも牟田尻遺跡・カラン遺跡・出水貝塚・尾崎A遺跡・前原遺跡で押型文土器が出土している。前期になると莊貝塚で葬式土器期の貝塚が形成され、貝とともに獣骨なども出土している。石鏃や石匙などの石器も出土しているが、多く出土している双角状石器は貝の採取具と考えられており、有明海地域との関連を示す特徴的な石器である。中期では前原遺跡で上水流タイプの土器とともに船元Ⅱ式や北裏CⅡ式が、沖田岩戸・牟田尻遺跡では並木式土器が出土している。後期前半の出水式土器の標式遺跡である出水貝塚は大正時代に発見され、数回の調査が行われている。マガキ・ハマグリなどの貝殻やイノシシ、シカなどの獣骨とともに埋葬構構から人骨6体も出土している。人骨は中期末のものと考えられている。他に牟田尻や出水貝塚・沖田岩戸などの遺跡で南福寺式・出水式・西平式・松山式土器などが出土している。戦後後半から晩期にかけて米ノ津川流域には大規模な外畠遺跡が出現してくる。外畠遺跡は市来式・北久根山式・磨消縄文土器などの土器と、石鏃・石匙・磨製石斧・磨石などが出土しているが、土坑26基・配石状遺構4基も検出さ

れている。土坑の中には石皿や台石を立位に置いたり、完形の小型壺が石皿・台石とともに出土しており、その配置から祭祀的遺跡とも考えられている。沖田岩戸遺跡に隣接する大坪遺跡では上加世田式・入佐式・黒川式土器が主体となり、底部に穿孔のある深鉢を埋設した遺構が37基発見されている。このなかには浅鉢を蓋としたものもある。この遺跡では多くの玉類も出土しており、その中には未製品とともに、原石・薄片などもあることから玉製作遺跡だろうといわれている。上加世田式土器と入佐式土器の分布が分かれ、石材や仕上げの状況に差がみられることから長期にわたる製作地と考えられている。前原・外島・中尾遺跡では入佐式・黒川式土器が、出土している。

弥生時代になると遺跡数は減少し、土器の出土数も少ない。六反ヶ丸遺跡では尖帯文土器や板付式土器など早・前期の土器や、打製石斧が出土している。牟田尻遺跡では中期の黒髪式土器と磨製石鎌5・砥石2点のいった土坑が検出されている。外島遺跡では入来式土器・黒髪式土器など、前原遺跡では入来式、六反ヶ丸・尾崎A・尾崎B遺跡で黒髪式など中期の土器が出土している。他に市来・山ノ田・野添・安原鉾・正八幡・成願寺・田中などの遺跡で土器が散布している。

古墳時代の集落も米ノ津川周辺の河岸段丘などで多く発見されている。堅穴建物跡が六反ヶ丸遺跡で12軒、老神遺跡で2軒、溝下古墳群・芝引a遺跡・下部遺跡・下部川遺跡で各1軒検出されている。これらの遺跡では成川式土器だけでなく畿内系の土器も多く含まれている。墓では米ノ津川左岸台地に短甲や金環・銀環・鉄剣等の副葬品が出土した板石積石棺墓が群集した溝下古墳群がある。円形が多いが、方形・楕円形のものもある。海岸沿いには箱式石棺が検出された切通古墳群が知られている。前原遺跡では前期の土坑が2基検出され、他にも後期までの小型土器などが出土している。

古代には薩摩国出水郡に所属しているが、役所的遺跡は未発見である。外島遺跡では掘立柱建物跡1棟と溝状遺構1条、土坑6基が検出され、土坑の中には完形の土師壺と刀子・青銅製品が出土したものや土師壺・坏・皿などの入ったものもあり、火葬墓群の可能性も指摘されている。ここでは黒書土器・焼塩土器・鉄鉢車・縦耳石鍋なども出土している。大坪遺跡では堅穴建物跡1軒、掘立柱建物跡9棟、土師器焼成土坑3基、土坑75基、溝状遺構34条などが検出されている。尾崎B遺跡では多くの土師器・須恵器とともに焼塩土器や4点の黒書土器がある。黒書土器の中には古代役所で出土する「厨」に似たものもあり注目されている。古代官道は確定されていないが、出水郡には市来駅・莫羅駅がある。出水市にあると想定される市来駅の位置も確定でないが、六反ヶ丸遺跡では道の可能性も考えられている環状遺構がある。

式内社である加紫久利神社が六反ヶ丸遺跡の北1.8kmの所にある。市来駅と字名が同じであり、所在が注目されている市来遺跡では8世紀中葉から9世紀前半の土師器・須恵器などが出土しているが、遺構は検出されていない。隣接する老神遺跡でも同時期の遺物が出土しており、その中には焼塩土器も含まれている。大坪遺跡では波板状凹凸面や糸里型地割も検出されている。

出水の地名が文献資料に明記されるのは、『続日本紀』である。奈良時代後期の宝亀9(778)年11月の条に、遣唐使船が出水海岸に漂着したとされている。その後『和名類聚抄』に「伊豆美」とあり、『薩摩国建久園田帳』に「和泉郡」として登場する。平安時代には山門院が設置され、和泉郡から独立し荘園となる。12世紀には、鎌倉幕府により島津氏が成立し山門院は消滅する。文治元(1185)年に、惟宗忠久が島津荘下司職に補任され、初代島津氏になる。忠久は木牟礼城に守護被官本田貞親を入部させ、木牟礼城は五代貞久まで薩摩国守護所として守護勢力の拠点となる。中世になると島津氏が木牟礼城に進出してくる。この隣接地にあたる中部遺跡群では中世前半期の掘立柱建物跡や堅穴建物跡などが検出され、同時期の貿易陶磁器の中には全国的にも出土例の少ない龍首水注が出土している。外島遺跡では掘立柱建物跡4棟、方形堅穴建物跡1基、土坑3基、土師器埋納柱穴1基と土坑墓2基が検出されている。前原遺跡では土師器皿を副葬した土坑墓1基が検出されている。出水貝塚では徳之島で焼かれたカムイヤギが出土している。

近世になると、外島遺跡では寛永通宝の副葬された土坑墓15基が検出されている。

明徳3(1392)年に南北朝の統一後、島津氏は薩摩総州家と大隅奥州家の間で内部抗争が起き、永享2(1430)年に総州家の久林を殺害した忠国は、弟の用久に薩州家を興させ出水地方を支配させる。それと共に荘園は崩壊する。その後、戦国期を通して、出水地方では豊臣秀吉による薩州家改易まで薩州島津家の支配が続くこととなる。秀吉の死後、出水は島津本家の領地となり、藩政期には、島津家の外域制度の下に藩地としての政治的要所の性格を強め、藩内外から派遣された郷士が居を構える県内でも最大規模の武家屋敷等の集中地である「麓」を形成するに至った。麓を構成する武家集落は現在も受け継がれ、平成7年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、令和元年には「薩摩の武士が生きた町」として日本遺産に認定された。

明治10(1877)年2月に西南戦争が勃発すると、出水地方でも激戦が繰り広げられた。陸軍が矢野山系と米ノ津の二方面から進出し、海軍が米ノ津・阿久根に入港し砲撃、上陸したため、薩軍は出水郷の青壮年士族を主とする郷土部隊と強制徴募された在郷士族らが戦った。6月には麓で攻防戦が行われたが敗れ、出水兵児の名を

もって賑わった薩摩藩最強の出水外城もついで去り、この地域は政府軍の支配下となる。大坪遺跡では、このとき使用されたと考えられる箭の球形弾が出土している。

昭和に入ると、旧海軍は水田地帯を収容し、昭和15年に出水基地飛行場を建設した。昭和18年に練習航空隊の出水海軍航空隊が設置され、昭和20年には戦況の悪化で特攻隊基地となるも度重なる空襲により基地は壊滅する。当時の遺構として滑走路跡の一部や司令部壕、掩体壕等が現在も残り、平成25年出水市が掩体壕の調査・実測を行い、これら戦争遺跡の保存活用を開始している。

戦後は、復興と共に経済成長と農地の圃場整備や工場誘致も行われ、地元の雇用拡大につながった。行政区画の変遷として、昭和29年出水町・米ノ津町が出水市に、平成18年出水市・高尾野町・野田町が合併して新しい出水市となり、現在に至る。

第3図は、南九州西回り自動車道（出水・芦北道路）建設関係の遺跡位置図である。これに係る発掘調査として本道路の近隣に中尾遺跡、前原遺跡がある。中尾遺

跡は平成25年度に発掘調査が実施され、縄文時代晩期の土坑1基が検出され、土器片及び黒曜石の剥片が確認された。また、前原遺跡は平成25・26年度に調査が実施され、縄文時代晩期と考えられる集石2基、土坑1基等と縄文時代中期から晩期にかけての遺物が主に出土した。

－引用参考文献－

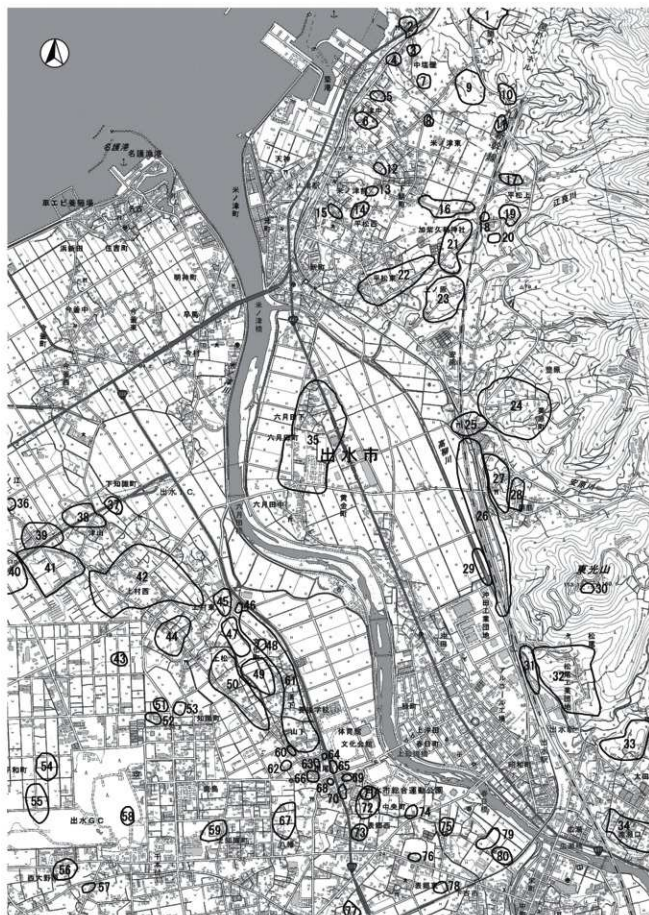
- 出水市郷土誌編集委員会『出水郷土誌』1968
- 出水市郷土誌編集委員会『出水の歴史と物語』1984
- 山川出版社『県史46 鹿児島県の歴史』1999
- 出水市教育委員会『出水貝塚』2000
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター『大坪遺跡』2005
- 鹿児島県教育委員会『先史・古代の鹿児島』2006
- 出水市教育委員会『出水麓遺跡』2010
- 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター『中郡遺跡群』2014
- 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター『中郡遺跡群Ⅱ・中尾遺跡・前原遺跡』2016

第1表 周辺遺跡一覧表1

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	種別	主な時代
1	208 203	坂元A	鹿児島県出水市境町間外	散布地	縄文時代、近世
2	208 205	中塩原	鹿児島県出水市境町中塩原	散布地	縄文時代、古代、中世
3	208 206	供養元	鹿児島県出水市境町中塩原	散布地	縄文時代
4	208 207	外間	鹿児島県出水市境町中塩原	散布地	縄文時代、古代
5	208 213	野間	鹿児島県出水市境町中塩原	散布地	縄文時代
6	208 214	坪ノ後	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津中	散布地	縄文時代
7	208 208	上窪	鹿児島県出水市境町中塩原	散布地	縄文時代、近世
8	208 117	野間の間跡	鹿児島県出水市下輪町堀之内	その他	安土桃山、近世
9	208 209	水坂下元段	鹿児島県出水市境町間外	散布地	縄文時代、近世
10	208 210	孫山	鹿児島県出水市境町間外	散布地	縄文時代
11	208 211	水坂	鹿児島県出水市境町間外	散布地	縄文時代
12	208 215	坪ノ前	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	古墳時代
13	208 216	野畑A	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	縄文時代、近世
14	208 217	野畑B	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	縄文時代、中世、近世
15	208 218	野畑C	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	縄文時代、中世、近世
16	208 219	加紫久利山	鹿児島県出水市下輪町平松西	散布地	縄文時代、近世
17	208 212	野間原	鹿児島県出水市下輪町平松上	散布地	縄文時代、近世
18	208 221	狩集	鹿児島県出水市下輪町平松上	散布地	縄文時代
19	208 222	山ノ田A	鹿児島県出水市下輪町上ノ原・平松上	散布地	縄文時代
20	208 223	山ノ田B	鹿児島県出水市下輪町上ノ原・平松上	散布地	旧石器時代、縄文時代、近世
21	208 220	山ノ段	鹿児島県出水市下輪町平松上	散布地	縄文時代、近世
22	208 83	平松	鹿児島県出水市下輪町平松東	散布地	縄文時代、古墳時代、古代、古代(奈良・平安)
23	208 224	美原上ノ原	鹿児島県出水市美原町上ノ原	散布地	縄文時代
24	208 31	安原城跡	鹿児島県出水市美原町上ノ原	城館跡	中世
25	208 39	安原館	鹿児島県出水市美原町安原	散布地	縄文時代、弥生時代、古墳時代
26	208 51	大坪	鹿児島県出水市黄金町・美原町	散布地	縄文(晩期)、古代(奈良・平安)
27	208 23	朝熊城跡	鹿児島県出水市美原町朝熊	城館跡	中世
28	208 84	諏訪後	鹿児島県出水市美原町朝熊	散布地	縄文時代、古代
29	208 8	沖田岩戸	鹿児島県出水市黄金町・美原町	散布地	縄文(晩期)、古代(奈良・平安)

第2表 周辺遺跡一覧表2

番号	道路台帳番号	道路名	所在地	種別	主な時代
30	208 122	牛→道東平	鹿児島県出水市上船瀬山頂	散布地	中世
31	208 47	宮ノ脇	鹿児島県出水市上船瀬松尾	散布地	弥生時代
32	208 30	松尾城跡	鹿児島県出水市上船瀬松尾	城館跡	中世
33	208 26	太田城跡	鹿児島県出水市上船瀬太田	城館跡	中世
34	208 85	井手ノ原	鹿児島県出水市上船瀬渡瀬口	散布地	縄文時代、古墳時代
35	208 73	六反ヶ丸	鹿児島県出水市六月町野六月田下	散布地	古墳時代、古代
36	208 89	長松寺	鹿児島県出水市福ノ江町福ノ江	散布地	縄文時代
37	208 90	西宮ノ脇	鹿児島県出水市下知識町津山	散布地	古墳時代
38	208 360	野添	鹿児島県出水市下知識町	散布地	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代
39	208 361	前原	鹿児島県出水市下知識町	散布地	弥生時代、古墳時代、古代
40	208 362	中尾	鹿児島県出水市福ノ江町	散布地	古墳時代、古代、中世
41	208 258	穴水	鹿児島県出水市下知識町津山	散布地	縄文時代
42	208 92	御堂	鹿児島県出水市下知識町上村西	散布地	古墳時代、中世
43	208 252	袂六	鹿児島県出水市平和町上村	散布地	縄文時代、近世
44	208 93	庵木園	鹿児島県出水市知識町上村東	散布地	縄文時代、古墳時代
45	208 28	谷城跡	鹿児島県出水市下知識町上村西	城館跡	中世
46	208 69	川除	鹿児島県出水市文化町上村東	散布地	古墳時代、古代
47	208 257	坪松	鹿児島県出水市下知識町上村	散布地	古墳時代
48	208 11	溝下古墳群	鹿児島県出水市文化町399	板石積石室墳墓	古墳時代
49	208 256	下春川	鹿児島県出水市文化町溝下	散布地	古墳時代
50	208 94	上松	鹿児島県出水市文化町上松	散布地	縄文時代
51	208 251	堤原	鹿児島県出水市知識町鹿島	散布地	中世
52	208 250	北吉子	鹿児島県出水市平和町鹿島	散布地	縄文時代、古代
53	208 249	瀬込	鹿児島県出水市知識町鹿島	散布地	縄文時代、古代
54	208 253	下大野原下	鹿児島県出水市浦田町掛懸	散布地	近世
55	208 115	金松	鹿児島県出水市平和町ゴルフ場北	散布地	古墳時代
56	208 246	会所	鹿児島県出水市大野原町東大野原	散布地	古代、近世
57	208 247	会所前	鹿児島県出水市大野原町東大野原	散布地	縄文時代
58	208 124	高見下	鹿児島県出水市平和町ゴルフ場内	散布地	縄文時代
59	208 248	西茶園堀	鹿児島県出水市知識町茶園堀	散布地	古代
60	208 55	正八幡	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代
61	208 95	下郡山	鹿児島県出水市文化町溝下	散布地	縄文時代、古墳時代
62	208 56	再瀬	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	古代
63	208 57	山下	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	古代、中世
64	208 58	野中田	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	古代
65	208 68	尾崎B	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	縄文(後期・晩期)、古代(奈良・平安)、中世、近世
66	208 59	鹿頭原	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	古代
67	208 102	八幡	鹿児島県出水市知識町八幡	散布地	古墳時代、中世
68	208 60	新村A	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	古代
69	208 61	新村B	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	古代
70	208 67	尾崎A	鹿児島県出水市中央町表郷西	散布地	縄文(後期・晩期)、古代(奈良・平安)、中世、近世
71	208 1	出水貝塚	鹿児島県出水市中央町尾崎	貝塚	縄文(早期・中期・後期)、中世
72	208 27	尾崎城跡	鹿児島県出水市中央町尾崎	城館跡	中世
73	208 123	表郷東	鹿児島県出水市中央町表郷東	散布地	中世
74	208 103	一丁堀	鹿児島県出水市中央町八坊	散布地	古墳時代
75	208 9	成願寺	鹿児島県出水市中央町八坊	散布地	弥生時代、古墳時代、安土桃山、近世
76	208 104	天神原	鹿児島県出水市中央町表郷東	散布地	古墳時代
77	208 106	塚込	鹿児島県出水市中央町西町	散布地	古墳時代
78	208 105	並松	鹿児島県出水市中央町表郷東	散布地	古墳時代、古代
79	208 10	田中	鹿児島県出水市中央町八坊	散布地	弥生時代
80	208 32	内城跡	鹿児島県出水市中央町八坊	城館跡	中世



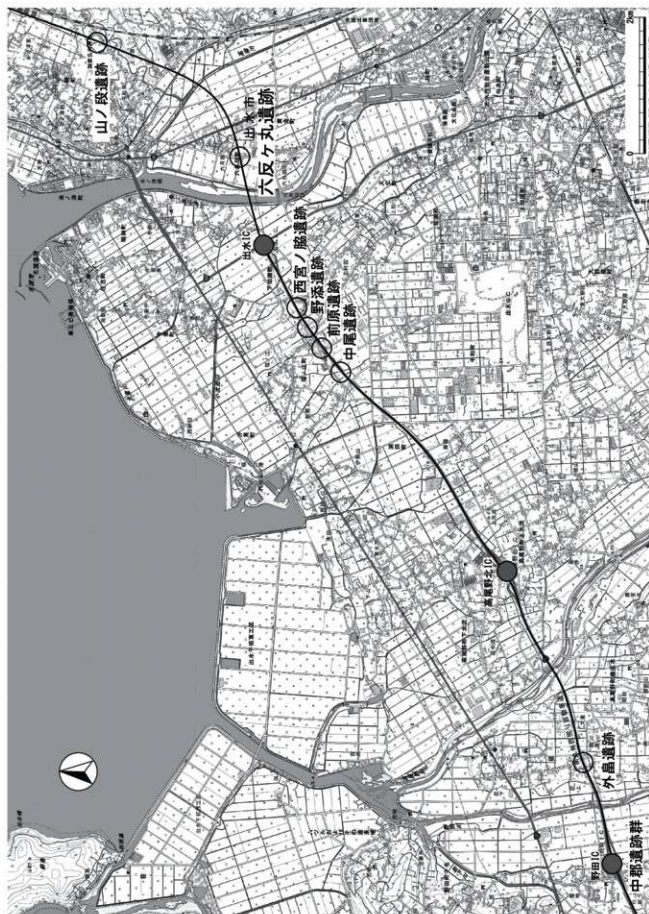
第2図 六反ヶ丸遺跡 周辺遺跡位置図 (1:25,000)

第3節 鹿児島と熊本の県境～野田IC間の遺跡

南九州西回り自動車道の県境～野田IC間には、第3表に示すとおり8か所の遺跡が存在する。ここでは、その遺跡の概要を記載する。

第3表 鹿児島と熊本の県境～野田IC間の遺跡

遺跡名	所在地・立地	調査種類 調査面積	整理・報告 作成年度	時代・時期	主な遺構	遺跡の概要	主な遺物	
1 山の根	出水市下船町 平松上 敷布地	4215㎡	整理 2020年 報告書発行2021 (公報)埋文調査センター-36	旧石器時代 縄文時代 早期-中期	-	土坑石器時代 中石器・加賀式、吉田式、石炭式、板石式、中石器、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃	磨石刀、磨石、中石器・加賀式、吉田式、石炭式、板石式、中石器、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃	
		確認調査 2019.05.07～05.29 本調査 2019.11～2020.01.30	整理 2018年～2021年	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石	阿久志式、加賀式、吉田式、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃	土坑石器時代 中石器・加賀式、吉田式、石炭式、板石式、中石器、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃
2 六又ノ丸	出水市六甲町 六甲下 集落	7000㎡ (見14000㎡)	整理 2018年～2021年	縄文時代 早期-中期	土坑	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石
		確認調査 2017.06～2018.03.30 2018.05.07～2019.01.30 本調査 2019.05.08～10.31 2020.10.10～11.26	報告書発行 A地点320 (公報)埋文調査センター-29 B地点2021 (公報)埋文調査センター-42 C・D地点 本報告書	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石	阿久志式、加賀式、吉田式、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃	土坑石器時代 中石器・加賀式、吉田式、石炭式、板石式、中石器、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃
3 鹿ノ下 集落	出水市下加瀬町 津山 敷布地	試観調査	-	古墳時代	-	-	-	-
		4 野添	出水市下加瀬町 敷布地	試観調査	-	縄文時代 後半時代 古墳時代 古代	-	-
5 出水	出水市下加瀬町 敷布地	5000㎡	整理・報告書発行 2016 (公報)埋文調査センター-10	縄文時代 早期-中期	土坑4基、礫石2基 中世土坑墓1基 古墳時代 古墳群1棟 遺跡遺構6基	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石
		確認調査 2013.07.01～09.13 2014.05.12～10.10 本調査 2013.05.01～09.13 2014.05.12～10.10	報告書発行 2016 (公報)埋文調査センター-10	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石	阿久志式、加賀式、吉田式、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃	土坑石器時代 中石器・加賀式、吉田式、石炭式、板石式、中石器、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃
6 中尾	出水市川口町 敷布地	3000㎡	整理 2016	縄文時代 早期-中期	土坑1基	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石
		確認調査 135.5㎡ 本調査 1060㎡	報告書発行 2016 (公報)埋文調査センター-10	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石	阿久志式、加賀式、吉田式、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃	土坑石器時代 中石器・加賀式、吉田式、石炭式、板石式、中石器、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃
7 外島	出水市地町野間 敷布地	試観調査 300㎡ 本調査 1060㎡	報告書発行 2012 報告書発行 2016 埋文調査報告書 125	縄文時代 早期-中期	土坑26基 配石遺構4基	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石
		確認調査 2010.05.06～05.11 本調査 2010.05.10～2011.01.28	報告書発行 2012 報告書発行 2016 埋文調査報告書 125	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石	阿久志式、加賀式、吉田式、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃	土坑石器時代 中石器・加賀式、吉田式、石炭式、板石式、中石器、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃
8 中尾 遺跡	出水市野田町 下名 集落 敷布地	300㎡	報告書発行 2016 (公報)埋文調査センター-10	縄文時代 早期-中期	土坑6基、礫石1基 配石遺構4基	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石
		確認調査 85.0㎡	報告書発行 2016 (公報)埋文調査センター-10	縄文時代 早期-中期	変化物集中 機土集中	砥石、凹石、砥石	阿久志式、加賀式、吉田式、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃	土坑石器時代 中石器・加賀式、吉田式、石炭式、板石式、中石器、中石器式、壱ノ丸式、壱ノ丸式、無文、無文、凹溝式、深溝式、松山式土器類物作製痕跡、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、磨製石錐、磨製石鏃、石斧、打製・磨製、炭灰石片、磨製石片、石鏃



第3図 南九州西回り自動車道関係遺跡位置図

第三章 調査の方法と層序

本章では、確認調査の方法と結果、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理・報告書作成作業、C・D地点の層序について簡潔に述べる。

第1節 確認調査

1 確認調査の方法

遺跡の確認調査は、平成29年5月8日から28日までの10日間、本調査が必要とされた総表面積7,000㎡のうち4,900㎡を対象として行った。調査対象区を市道や用水路を挟んで3つのエリアに分け、B～E-12～15区を南北に縦断する市道を境に、西側をA地点、中央をB地点、東側をC地点として、A地点に2か所、B地点に3か所、C地点に2か所の計7か所にトレンチを設定した。いずれも現況は住宅地跡や耕作地であり、トレンチの大きさは2×5mを基本とし、必要に応じて拡張を行った。トレンチの表面積合計は80㎡である。調査は、トレンチ部分の表土を重機により剥いだ後、人力掘削を基本として遺構・遺物の検出を行った。

2 確認調査の結果

確認調査の結果は以下のとおりである。

A地点（1T・2T）

1Tでは、縄文時代晩期、弥生時代から古墳時代の土器片や時期不明の土器片が多数出土した。2Tは、削平により表土が薄かったが、包含層が安定して堆積し遺物の残存も見られた。下層には流れ込みによる自然堆積の砂礫層が厚く堆積していた。

B地点（3T～5T）

3Tは、宅地造成のため削平・盛土が行われており、古代～近代までの遺物が混在して出土した。4Tは旧水田地であり、遺物の出土はわずかであったが、中世以降と思われる柱穴を確認した。5Tでは、弥生時代～古墳時代の土器片が多数出土した。

C地点（6T・7T）

他のトレンチと異なり住宅地に隣接し、造成土の層が厚く堆積していた。6Tでは、砂礫層から摩耗の激しい遺物が多く出土する事が確認された。7Tは、住宅地のため大きく削平を受け、遺物は確認されなかった。

確認調査の結果、調査対象とした全体を本調査が必要と判断した。

第2節 本調査

1 発掘調査の方法

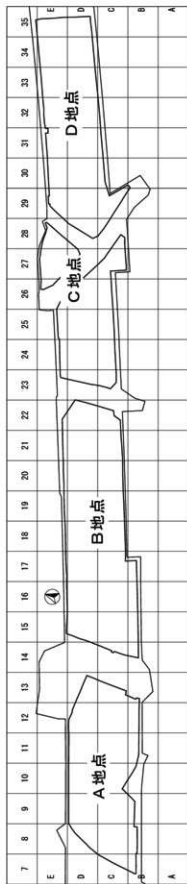
調査に先立ち、鹿児島国道事務所が打設した道路建設用センター杭「STANo345（-98828.424・-62292.445）」と「STANo346（-98835.044・-62311.326）」を結ぶ線を基準に、調査区内に10m間隔の区画（以下グリッドという）を設定し、この延長線を中心に南側から北側に向かってA、B、C・・・列、西側から東側に向かって1、2、3・・・列と設定し呼称することとした。

調査は、確認調査の結果に基づき、重機で表土（耕作土・造成土）を遺物包含層上面まで除去した後、遺物包含層については人力で掘り下げ（山鉤、扇鏝、ねじり鎌、手鉤等の発掘道具）を行った。出土した遺物については、必要に応じて出土状況の記録写真撮影を行った後、A地点のみ5m間隔のグリッドを再設定し、実測が必要なものを除き、原則として層ごとを一括で取り上げた。さらに、遺物包含層の調査と並行して、下層確認用の先行トレンチを設定し、掘り下げを行った。検出遺構については、移植こて等の遺構に適した道具を用いて慎重に調査し、調査の進捗に応じて、検出状況、半截状況、完掘状況等の写真撮影を行い、図化作業等の記録保存を行った。さらに、無遺物層の一部を重機及び人力で除去し、基盤層が無遺物の砂礫層であることを確認し調査を終了した。

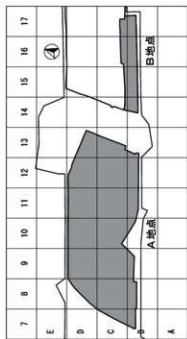
調査が終了した調査区については、重機及び人力による埋め戻しを行った。



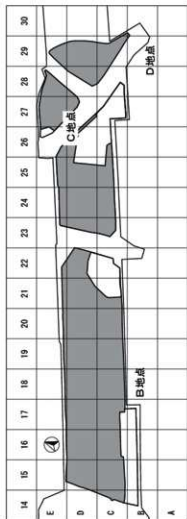
第4図 六反ヶ丸遺跡 確認トレンチ配置図



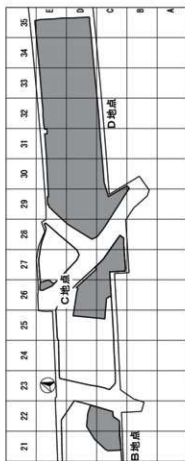
全体図



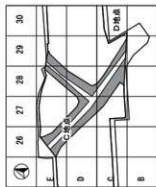
H. 29年度



H. 30年度



R. 元年度



R. 2年度



第5図 六反ヶ丸遺跡 全体図及び年度別調査範囲図

2 遺構の検出方法

遺構の検出については、調査方法として当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、全体として宅地造成や耕作地整備のための削平や造成が大規模に行われており、包含層が良好に残存する場所が部分的なものであったため困難であった。また、沖積地特有の河川の氾濫による土砂の流入が頻繁に繰り返されていたため、遺構上位にも遺物がたまるような状況であった。そこで、上位に堆積した遺物を取り上げながら慎重に検出を行い、確実な遺構面を記録した後で、再度ベルト断面の再検討を行い、遺構の全体像を確定させた。沖積地における調査は、大量の遺物や地層の乱れなどを考慮した遺構検出が求められることから、これまで以上に調査のあり方を再検討し、その後の調査に生かした。

遺構の認定は、検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、担当職員で検討したうえで行った。竪穴建物跡は、埋土や形状、床面の有無や構造、遺物の出土状況など総合的に判断した。土坑及びピットは、ほぼ円形で径50cm程度のものをピット、それ以上のものを土坑とした。溝は、筋状に細長く掘り込まれたものとした。掘立柱建物は、埋土ごとに分類したピットの配置等から、範囲を確定した。

第3節 整理・報告書作成作業

C・D地点の整理・報告書作成作業は、令和元～3年度の3年にわたり、調査センター第一整理作業所で実施した。

1 整理作業の方法と内容（令和元年度）

図面整理は、遺構実測図、遺物出土分布図、土層断面図、地形図等に仕分けし、台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは、未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。

注記は、水洗いと並行して未注記のものに対して順次

行った。遺物量が多いため、手注記の他にジェットマーカーを使用し効率を高めた。薬品を使用したため換気に注意しながら進めた。その際、包含層遺物の摩擦が激しいものや小片のものは注記対象から外し、小グリッドごとに一括で重量測定のみ実施し記録した。記号については、これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している市の縄文調査室に確認をとり、遺跡名を表す記号を「ロク」とした。

土器の分類・接合は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、遺構内遺物を中心に行い、包含層出土土器については、土器の胎土や器種、文様等で分類し接合した。その後、掲載遺物の抽出を行った。石器については、種類ごとに分類した。その後、掲載遺物の抽出を行った。脆弱な資料については、接合前段階で薬剤浸透による強化を行った。

当初は機械計測による一点取り上げを行っていたが、流れ込みと思われる遺物が大量に出土し、遺構または小グリッドごと一括取り上げに変更していたため、遺物出土状況図は、重量による分布状況とした。

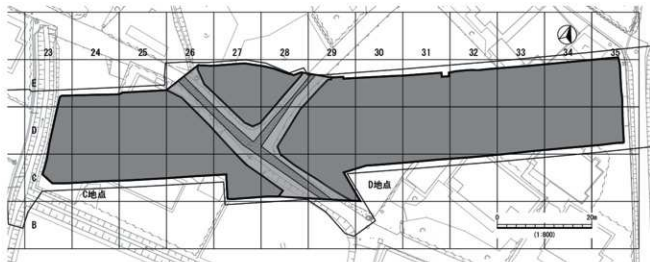
遺構の認定・分類は、実測図や写真等を用いて再検討し確定した。掲載スケール決定後、それにあつた下図面を鉛筆トレスで作成し、点検・修正後、ベントレースまたはデジタルトレスを行った。基本的にベントレースで行ったが、一部の遺構ではデジタルトレスで行った。

遺構配置図、土層断面図、地形図は、鉛筆トレスで下図を作り、点検・修正後、トレスを行った。

写真図版については、現場写真の抽出を行った。

本編の報告書作成作業も同時に行い、一部原稿執筆も開始した。

なお、整理作業の方法や遺物については、鹿児島大学埋蔵文化財センター長中村直子氏、鹿児島大学法文学部石田智子氏、福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課久住猛雄氏に指導を受けた。



第6図 六反ヶ丸遺跡 C・D地点グリッド配置図

2 報告書作成作業の方法と内容（令和2年度）

遺構図については、図面チェックを行い、検討を重ねた上で、トレースを行った。

掲載遺物については、土器・陶磁器・石器の実測・トレースを行った。必要に応じて修正・再トレースを行った。

遺構内出土遺物については、埋土と出土位置を精査し、遺構ごとに掲載した。また、出土位置が確定できるものについては、遺構図内に明示した。

包含層出土の掲載土器については、時代別、器種別、部位別、特徴別の順番で分類した後、レイアウトを行った。土器ごとに残存状況が異なるので、特徴を考慮しながら1個体や接合資料を優先的に配置した。

石器については、上流からの流れ込みの可能性も高いことから、時期判定が困難なものが多かった。器種別に分類した後、実測・トレース、レイアウトを行い、遺構に伴う石器は、検討を行い掲載した。

鉄製品については、調査区内から数点出土しているが、石器同様時期判定が困難であった。時期不明遺物として一部掲載した。

写真図版については、現場写真のレイアウト、遺物写真のレイアウト・写真撮影を行った。その際、接合資料については、写真撮影用の復元を部分的に行った。

原稿執筆、観察表作成、写真撮影等終了後、B地点に関しては印刷・製本を行った。

なお、整理作業の方法や遺物については、中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）や楢佳克氏（八女市教育委員会）に指導を受けた。

3 報告書作成作業の方法と内容（令和3年度）

昨年度実施した現道部分出土の遺物について、再度隣接部分出土の遺物との接合・復元をやり直した。その後遺物の実測・トレースを行い、レイアウトの修正をした。

原稿執筆、観察表作成、写真撮影等の作業を実施後、原稿の修正等を行い、C・D地点についての報告書作成作業、校正・印刷・製本を行った。

第4節 層序

本遺跡は、出水市北部を南から北へ流下する米ノ津川右岸の微高地に立地する。このため遺跡を構成する地層は米ノ津川が運んできた砂礫及びシルトからなり、礫層遺跡といえる。現在は耕作地、または住宅地として使用されている。近世・近代及び昭和40年代以降の圃場整備や耕作、宅地造成、攪乱刮平を受けた箇所が広範囲に認められたため、地層の堆積・残存状況が好ましくない。

また、六反ヶ丸遺跡の調査対象区は東西に長く、A・B調査区のある西側へ向かって低くなり、C・D調査区のある東側へ向かって高くなる傾斜地である。

なお、本調査着手後、確認調査の結果を補充するため、先行トレンチを設定し、地層の堆積状況と層序の確認を行った。その結果、遺跡の西側を流れる米ノ津川に近い調査区において、運搬・堆積作用によるシルト質の堆積層が複数枚観察された。以前は米ノ津川の氾濫により、土砂が流されたり、逆に流れ込んだ土砂が堆積したりを繰り返していたと想定される。

C調査区とD調査区では地形が安定していないため、A調査区やB調査区のように基本層序を明確に分けることができなかった。そこで、C調査区とD調査区について、それぞれ層序を記載することにした。

C調査区、D調査区の層序は大きく3つに分けることができる。表土、砂質シルト質土、砂礫土の3つである。

基盤となる砂礫層は、広い範囲で堆積している。礫層は四万十累層群由来の砂岩・頁岩及びホルンフェルス化したものを主体とし、それ以外に花崗岩や安山岩・石英片である。礫はいずれも円摩され角がとれたものであり、最大径15cm程度のものである。全般的には径2～3cm程度のものが多く、それらの間に10～15cmの礫が散在している。調査区によっては礫層と砂層が互層することもある。

砂礫層の上面は、遺物包含層で、砂質シルト土である。マンガン粒を含む。古墳時代の遺物を含む層である。調査区によっては細かく分層される。色調は、灰黄色、灰黄褐色、黒褐色などである。

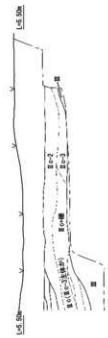
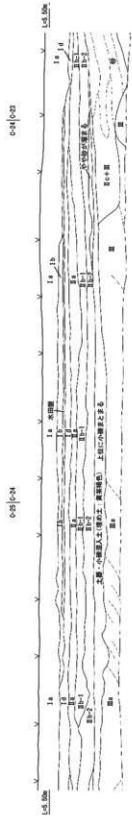
その上面は表土である。表土は宅地造成や盛土などの攪乱土であり、水田層も含む。色調は、灰黄褐色、灰褐色などである。

河川堆積の特性上、一部にしか存在しない層が観察されるため、それらについては基本層序には記載せず、土層断面中に枝番を設け記載するの留めた。また、基盤の地形が不安定なため、層厚も一定ではない。

表土・水田層は、西側C調査区が厚く堆積し、D調査区東側は薄く堆積している。また、C調査区からD調査区にかけて、砂礫層が厚く堆積している。

C調査区は、24・25区が凹地となり、26区から東へ向かって丘陵上が上がっていく。26区から27区にかけて古墳時代の多くの遺物を伴う建物跡が多数検出され、近世～近代にかけての遺構も検出された。また、24・25区の凹地部分で古代の礫が敷き詰められた平坦面が確認された。古代の遺物は、礫が敷き詰められた平坦面から東側で確認されている。

E27区からE28区にかけては、東側に向かって一旦下降し、D調査区の29区からは平坦となる。地形は安定せず凹凸を繰り返している。また、堆積状況を見ると、砂礫土が厚く堆積している。そのため、29区から34区にかけては、遺構が確認されていない。

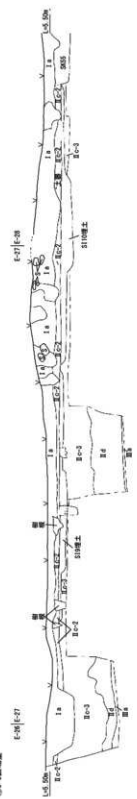


第8図 土層断面図2

330 グリッド西部ベルト

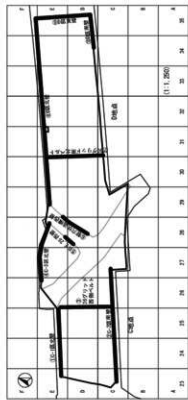
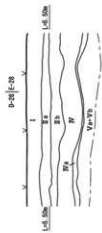


40-30E2区

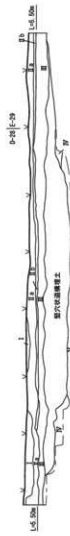


第9図 土層断面図3

⑤0. E-20西壁



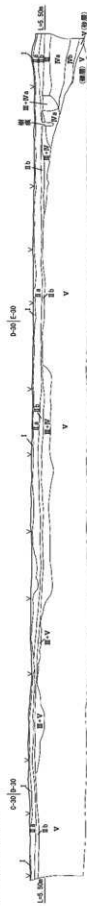
⑥部穴体遺蹟西壁



第5表 D調査区層序

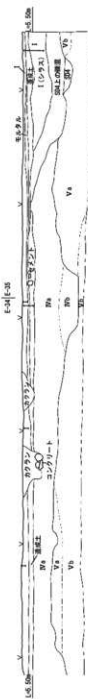
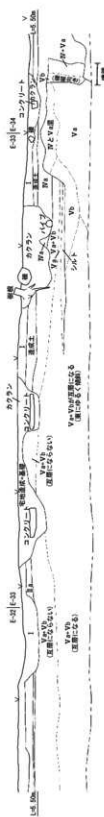
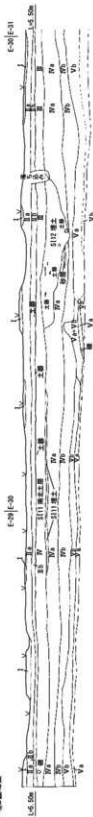
D調査区 層名	色別・土質等	特 徴	厚薄 (平均)
I層	埋設土(砂質)	赤土(砂中土・凝灰土)	20cm
II層	埋設土(シルト質)	埋設土	10cm
III層	埋設赤土(砂質)	埋設土	5cm
IV層	埋設褐色土(シルト質)	近代～中期を越えて遺物を含む	10cm
V層	埋設褐色土(シルト質)	近代～中期を越えて遺物を含む	15cm
VI層	埋設褐色土(シルト質)	近隣跡体主体の埋設物を含む	20cm
VII層	埋設赤土(砂質)	近隣跡体主体の埋設物を含む	20cm
VIII層	砂中赤土	河川堆積層	—

⑦200グリッド南壁～ノルト



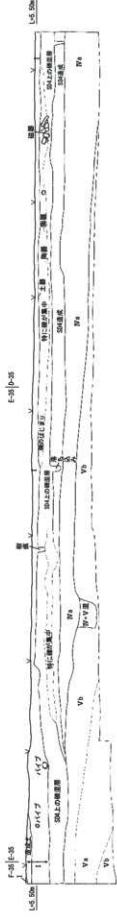
第10図 土層断面図4

⑤の位置

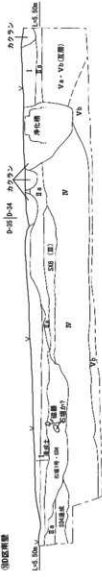


第11図 土層断面図 5

①01区断面



①02区断面



第12図 土層断面図 6

第四章 調査の成果

第1節 概要

C地点とD地点は標高6mほどの平坦地であるが、26区から29区にかけて交差する生活道が通っているため、道路を境として西側をC地点、東側をD地点とした。弥生～古墳時代の遺構検出をしたⅡc層での地形はほぼ平坦であるが、西側に向かってやや下降している。28・29区にはやや窪んだ部分がある。

C・D地点における各時代の遺構や遺物は西側のA・B地点と比べると、遺構数も出土量も多い。

縄文時代から近代まで連続と遺物は出土しているが、主体となる時期は古墳時代前期と古代・近代である。縄文時代から弥生時代の出土遺物は少なく、縄文時代と弥生時代、中世に比定される遺構は検出されなかった。

縄文時代から弥生時代の遺物は、他の層に混ざって出土したが、ほとんどの遺物は土器片である。出土量は少なく、摩滅したものが多いため、河川の堆積作用により運ばれた可能性がある。

縄文時代の遺物は、主に後期中葉の土器や石器と想定される。弥生時代の遺物は、早期から後期にかけての遺物が出土しているが、黒髪式土器の甕形土器が主体で、突帯を有するものやスズ痕が付着しているものである。他に石器もあるが、数は少ない。

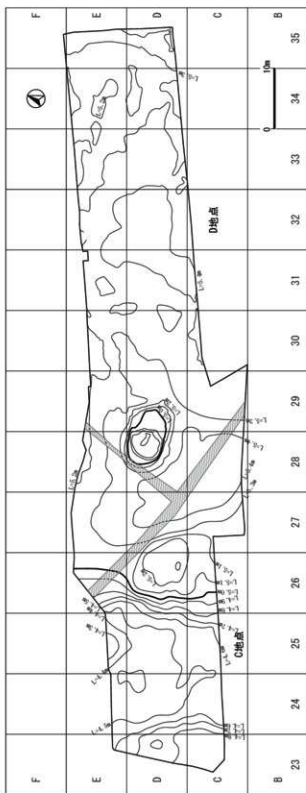
古墳時代前期の集落はA地点から続いているが、26区から30区に集中して存在する。竪穴建物跡10軒、竪穴状遺構1基、土坑33基が検出され、6か所で土器溜が確認された。出土遺物も多く、甕形土器・甕形土器・高坏形土器などが主体的で、他に蓋形土器や円盤形土製品、石器、小型仿製鏡、鉄製品などもある。これらは南九州在地のものもあるが、畿内系のものも多く、製法を真似た在地土器もある。

古代の遺構は、24区～29区の限られた範囲に掘立柱建物跡1棟、土坑9基、礎敷遺構1か所が検出された。土坑の中には土器焼成土坑が含まれている。古代の出土遺物は多くが土師器・須恵器だが、他に越州窯系青磁・緑釉陶器・土錘などもある。須恵器坏蓋や甕のなかには転用硯もある。

中世の出土遺物には土師器の他に青磁・備前焼・瓦質土器があるが、数は少ない。

近世～近代も26区～30区付近に多く存在しているが、35区にも溝状遺構がある。E～27～29区には石列遺構が5基ある。遺構は掘立柱建物3棟、土坑5基、溝状遺構2条、石列遺構5基、石垣1か所がある。

遺物掲載については、遺構、包含層ごとに総出土点数を数え、実測対象遺物を選別し図示した。各遺物の出土



第13図 Ⅱc層の地形図

地点及び層位については第11～41表を参照されたい。

第2節 縄文時代の調査成果

縄文時代の遺構は検出されず、遺物も縄文土器2点と石器1点が出土したのみであった。

1は後期の南福寺式土器深鉢の突起部である。口唇部には三つ編み状の粘土紐で突起が作出され、そこから二条の凹線文様が左右に展開するモチーフである。口縁部の下に突帯が貼り付けられ肥厚し、文様帯を2段構成している。突帯の下に端部を押さえる凹線が横あるいは縦の凹線文がある。表面は橙色を呈し、焼成良好である。表面は摩滅が目立つ。D-28区で検出された竅穴状遺構で出土した。

2は口縁部が内側に屈曲し、口縁外面には横方向と波状の沈線文が施される。内外とも丁寧にナデられている。表が黄橙色、裏が灰黄褐色を呈し、茶色石や白色石などを含む胎土である。D-33区で出土しており、後期中葉の西平式土器に比定される。

3は長さ8.4cm、幅2.3cm、厚さ1.4cmの緑泥片岩製両刃の定角式磨製石斧で、重さは48gである。敲打によって形を整え、全面を丁寧に研磨している。刃部は鋭く、一部に刃こぼれがみられる。E-27区にあった近世の掘立柱建物跡7号の柱穴で出土した。周辺で出土している土器や、石斧の形状から後期のものと思われる。

第3節 弥生時代の調査成果

遺構は検出されなかったが、早期から後期までの弥生土器63点と石器3点が出土している。出土した土器のほとんどは中期中葉のものである。このうち弥生土器45点と石器3点を図化した。

4は早期の突帯文土器で、口唇部直下に1条の刻目突帯が貼り付けられている。口唇部はナデ調整により、中央が筋状に凹んでいる。分厚い作りで、内外面とも工具

横ナデ調整である。橙色を呈しており、白色石を多く含む。灰色石・茶色石もある胎土である。

5は前期の板付式土器小型壺形土器である。5は長頸壺の可能性のある胴部上半の破片で、横位の数条の沈線と重弧文の一部が残存する。薄い作りで、沈線は細い。外面は黄灰色、内面は浅黄褐色を呈している。

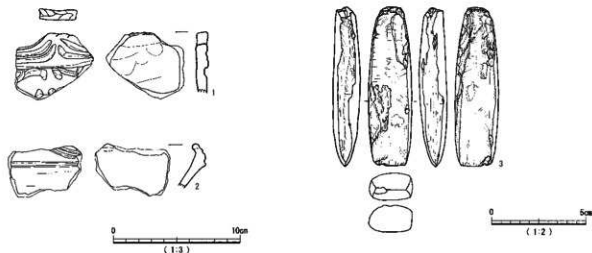
6は弥生時代の壺と考えられる。胴部の破片で重弧文の一部が残存する。外面側の屈曲部跡が明瞭で内面にハケ目が残る。古墳時代になる可能性も考えられるが、詳細は不明である。内面、外面ともに明赤褐色を呈している。

7・8は口縁端に分厚い粘土紐を貼り付け、玉縁状に肥厚させる菱形土器の口縁部で、中期に比定できる。霧島山地周辺に多く出るといわれている。7は全体に摩滅しており、口縁部の厚さに対し頸部の器壁は非常に薄い。外面にはぶい黄褐色、内面は浅黄褐色を呈している。8は全体的に厚手で縁は織く、やや内に張り出している。灰黄褐色を呈し、胎土は砂質で粗い。

9～39は口縁端が丸みをおびた中期の黒髪式土器に属する菱形土器である。

9は口径27.2cmで、L字状口縁だが、内側が下がっている。内外面ともナデ整形である。口唇部上面外側にスス痕がみられる。また、胎土に粒子の大きい角閃石が目立つ。10は口径27cmの厚い作りで、口唇部が内傾し、ナデ調整によって内面側が細く張り出す。また、胎土に3mm大の長石を疎らに含む。外面がぶい橙色、内面が浅黄褐色である。11は丁寧な作りで、内外に粘土を貼り付け、内面への張り出しが広く、口縁側面はT字形を呈する。胴部は直に立ち上がっている。口径23cmで、接合面も明瞭である。外面は縦ハケナデのあとヘラナデを施している。

12～21は内面がやや下がる逆L字形の口縁部で、内面にやや張り出しがみられる。頸部の器壁が特に薄い。13

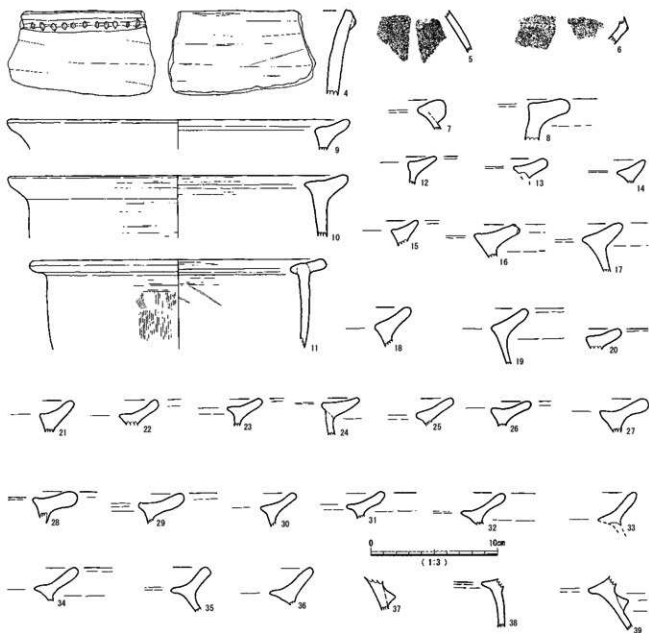


第14図 縄文時代の土器・石製品

は内外面とも摩滅している。また、接合面で剥落しており、胎土には大粒の角閃石を多量に含む。14は全面ナデ調整で、上面のへこみは弱い。15は内外とも摩滅している。16はナデ調整で断面方形に近く成形した口縁端部の上下に、連続した浅い刻みが施されている。胎土には、3mm大の石英をまばらに含む。にぶい橙色を呈する。17はやや分厚い作りで、丸みをおびている。18は、口縁部上面にスズ痕がみられる。19は頸部の器壁が特に薄く、胎土に大粒の角閃石を多く含む。口縁部は貼り付けている。20は、上面端部に帯状にスズ痕がみられる。21は表面が摩滅しており、浅黄橙色を呈している。

22~36は内面に強く張り出した筋形を呈する口縁部である。22~31がやや水平に近く張り出すのに対し、32

~36は内面が下に深く張り出す。22は上面がしゃくれあがっており、内外面とも丁寧な横ナデである。3mm大の長石をまばらに含む。23は外面が褐色、内面が黄橙色である。24は頸部の器壁が特に薄く、口縁を外に貼り付けている。胎土に大粒の角閃石を多く含む。25は口縁も薄い作りで、胎土に粒子の大きい角閃石をまばらに含む。また、口唇部に帯状にスズ痕がみられる。26・30は口縁部の厚さが薄い。27・28は分厚い。31は口唇部が内傾し、ナデ調整によって内面側が張り出す。口唇部内外面に帯状のスズ痕がみられる。32・33は強くしゃくれあがった口縁である。33の接合面は横方向にナデしている。ヘラ横ナデ調整で、浅黄橙色を呈している。角閃石・白色石などを含む。34は口唇部が長く内面側への張



第15図 弥生時代の土器（1）

り出しも大きい。内外とも摩滅している。35・36はスマートな作りである。

37～39は口縁部の外側など一部を欠いた破片で、37も内面側の上部部が屈曲するため、内面側に口唇部が張り出すものと想定される。37・39は口縁部下の肩部に三角形状の突帯を貼り付けている。

40～43は口縁部幅が短く薄手のもので、口縁部が内側に下がり、屈曲部は鋭いものとゆるやかなものがある。40は口縁直径が22.4cmで、内面側が下がっているが、稜は鋭く屈曲している。41は横方向へラナデで、浅黄橙色を呈する。黒色石・角閃石・石英などを含む。42は全体的に摩滅し、胎土に角閃石を多量に含む。

44は、口縁直径が26.4cmの外へ強く外反する甕形土器で、端部は丸みを帯びている。45は、「く」字状に屈曲する甕形土器で、端部は丸く収まる。

46・47は、三角突帯の付された胴部である。46は本来2条突帯であったと考えられるが、下側の1条が剥落している。断面は角が丸い三角形で刻みはみられない。47は、幅広い突帯にユビナデにより凹線を巡らし、断面三角形の3条突帯を呈している。突帯の上が細く

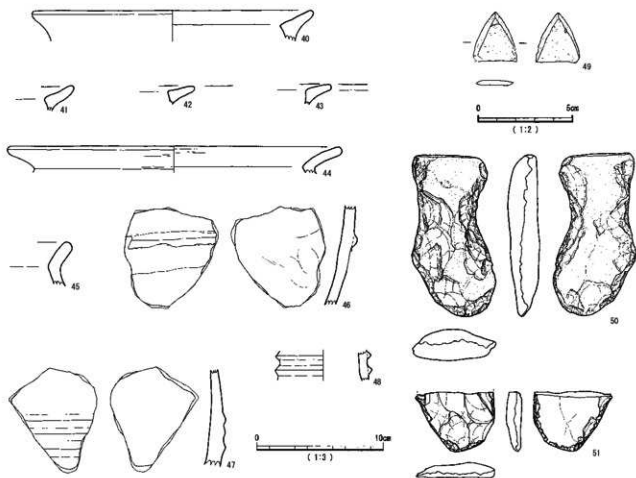
なっている。胎土は砂粒が細かく、軟質である。弥生前期頃の甕形土器と考えられる。

48は、袋状口縁となる甕形土器の頭部で、2条の三角突帯がある。直径7.6cmと細い。

49は長さ2.6cm、基部幅2.3cmの正三角形を呈する頁岩製無茎の磨製石鏃である。厚さは3mm、重さ1.9gで、全体を丁寧に磨いて扁平にしたあと、両側辺を表裏から研磨し鋭く作っている。D-26区のⅡc層で出土している。

50と51は打製石斧である。50は長さ12.8cm、幅6.2cm、厚さ2.5cmで基部は直線的となる。中央よりやや上が両方からくびれており、全体的にくつ形を呈している。表裏から端部を細かく打ち欠いて形を整えているが、中央付近には自然面を残している部分もある。刃部には縦方向の擦痕がみられる。安山岩製で、E-35区の溝状遺構4号の西側から出土している。51は基部が欠損した刃部のみの破片で、長さが4.7cm、幅6.3cm、厚さ1.2cmである。側縁部を両面から細かく打ち欠いて、形を整えている。安山岩製で片面には一部自然面を残している。C-29区のⅢ層で出土している。

磨製石鏃は中期、打製石斧は早期のものと思われる。



第16図 弥生時代の土器(2)・石製品

第4節 古墳時代の調査成果

1 概要

古墳時代の遺構は、Ⅱc層（C調査区）、Ⅳ層（D調査区）で検出された。

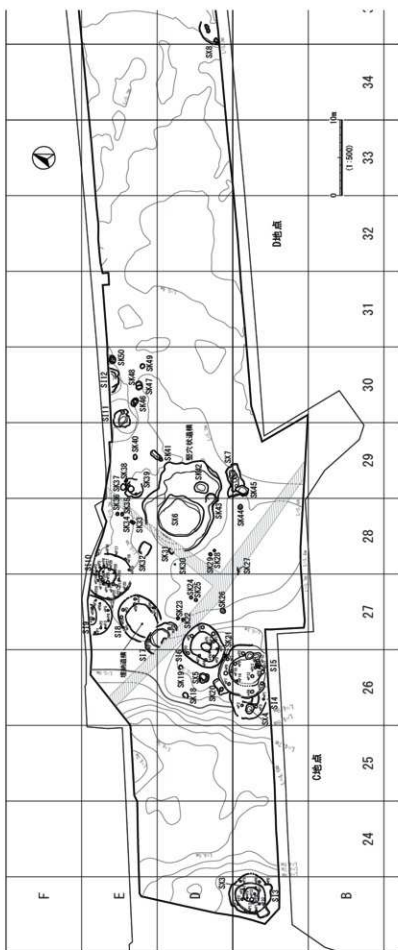
遺構は、堅穴建物跡が10軒、土坑が33基、土器溜が6か所、多くのピット（杭痕状の小土坑）が検出された。堅穴建物跡は4～10mの略円形を呈する。土器溜3と土器溜6は堅穴建物跡3号と堅穴状遺構の上面で検出された。3号以外の堅穴建物跡や土坑、土器溜6以外の土器溜は、D調査区の西側C～Eの26区～30区の間集中して位置しており、東側では遺構は確認されなかった。

A・B調査区の調査結果を踏まれば、遺構の検出される範囲は自然堤防状のやや標高が高い範囲と対応しており、地形としても安定した場所であったと考えられる。また、調査範囲より北側の現集落が最も標高が高いことから、調査区外の範囲にも遺構が広がっていると想定される。また、堅穴建物跡3号と土器溜3については、堅穴建物跡との関連性を考慮し、遺物は堅穴建物跡と共に記載した。なお、土器溜内での出土位置や接合状況は第4節第20図に記載した。

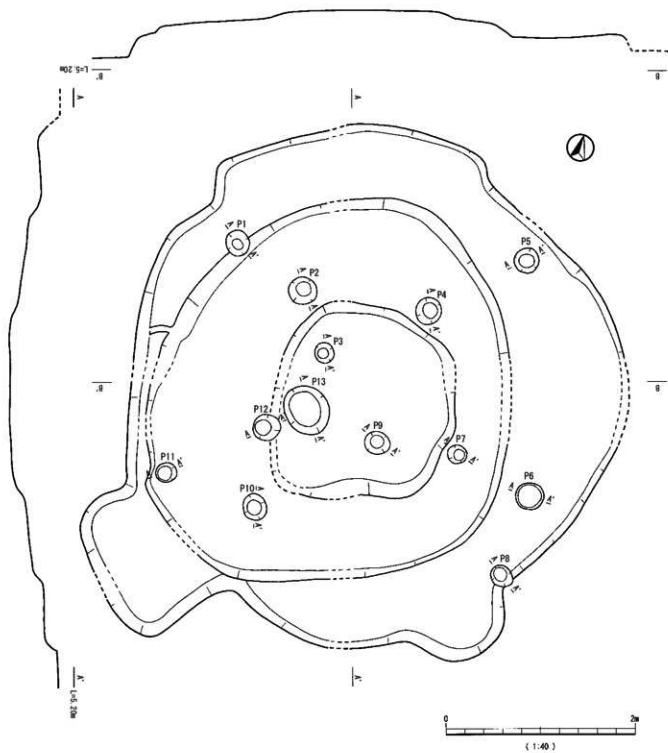
さらに、堅穴状遺構と土器溜6についても、堅穴状遺構との関連性を考慮し、遺物は堅穴状遺構と共に記載した。なお、出土状況については図版19を参照されたい。また、接合状況は4節第59図に記載した。

例言にも記載したが、遺構内出土物の中には、遺構の時期とは異なる時代の資料も出土しており、その遺物については、包含層出土の遺物として扱った。詳細は観察表を参照されたい。

土器は寛形土器を主体に、甍形土器、高坏形土器といった古墳時代で一般的な器種組成に、小型器種や精製器種も出土している。主体的な時期は古墳時代前期で、成川式土器（中津野・東原段階主体）をはじめ古式土師器や島原・天草系土器など、在地系土器と外来系土器の双方が出土している。土器は、器種ごとに形態的特徴からさらに細分できる。詳細な分類は、第Ⅵ章総括に記載した。



第17図 古墳時代の遺構配置図



第18図 竪穴建物跡3号の平面図・断面図

2 遺構

1) 竪穴建物跡

①竪穴建物跡3号 (第18図～第26図)

C・D-23・24区のC地点で最も西側で検出された。長軸約6m、短軸約5mの略円形を呈する。3段の構造を持ち、検出面から約10cm下がった2段目は4.0m×3.8mの略円形を呈し、さらに10cm下がった3段目は一辺2mの略方形を呈している。検出面からの深さ約50cmである。南側に2か所、北側に1か所張り出し部がある。南西側は幅約150cm、奥行110cmの方形を呈する。南東側は幅約100cm、奥行約50cmの丸みを帯びた形を呈する。北側は幅約2.8m、奥行約70cmの横に長い方形を呈する。方位から考えると南側張り出し部が出入口の可能性が高い。内部にピットが13基検出された。ピットの直径は約20cm～50cmの円形を呈し、深さは約10cm～30cmであった。3段目のピット13のみが径55cmと大きく、深さも10cmほどであった。主柱穴は判断できなかった。埋土はシルト質土ではほぼ水平に堆積している。上から暗灰黄色、黄灰色、褐色、灰褐色の順である。上面に焼土も検出されたが、建物埋没後のものと考えられる。

出土遺物の大半は検出面で出土し、床面で確認できたのは3点のみである。北側隅付近に52と87の礎と竈などの土器が集中して出土したが、1段目、2段目が埋まる前に廃棄された可能性がある。

竪穴建物跡3号のプラン検出面とはほぼ同じで遺物が平面的にまとまって出土した。そのため、建物跡が埋没してから遺物が廃棄または周辺から流れ込んで堆積したと想定され、土器溜3として扱った。

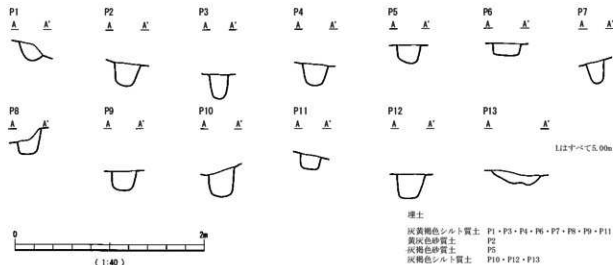
遺物は、タタキ調整の変形土器が主体をなす。また、二重口縁帯のバリエーションが豊富である点も特筆される。特に82や87は他の資料と色調や胎土が異なっており搬入品の可能性が高い。

変形土器 (52～81)

52～57は器形が在地の成川式土器に近い。

52は胴部外面に左上がりのタタキ痕を残す。胴部下位はケズリ調整で、タタキ痕が明瞭なのは胴部中位までである。屈曲部を起点に幅広いハケ調整を縦位に施し、カキアゲ口縁状を呈している。また、口唇部外面には横位の条痕状のタタキが巡る。口縁部内面はユビナデ調整で凹凸があり、口唇部は緩やかに波打つ。口縁端部は、平坦に仕上げられている。内面は全体的に丁寧なナデ調整で、タタキ調整の当て具により緩やかな凹凸をなす。

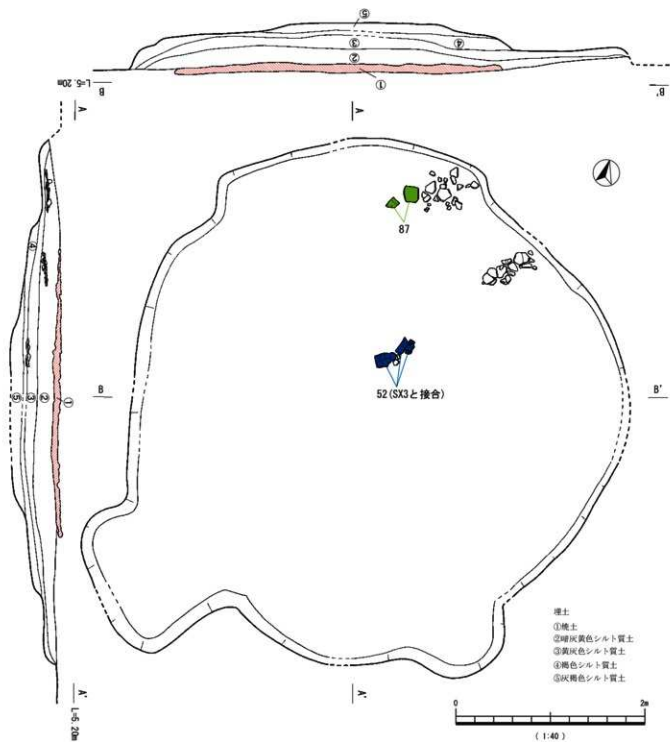
53は、胴部に水平方向のタタキ痕を有し、口縁部にもわずかに残る。口唇部はナデ調整により平坦面をなし、外面側に張り出す。胴部は、タタキ調整の上からナデ調整が加えられ、部分的にタタキ痕が不明瞭である。内面は丁寧なナデ調整であり、屈曲部下はユビナデ調整で肩部の張りが作出されている。口縁部から胴部最大径あた



第19図 竪穴建物跡3号のピット断面図

第6表 古墳時代竪穴建物跡・竪穴状遺構番号新旧対応表

新番号	旧番号	出土数	新番号	旧番号	出土数	新番号	旧番号	出土数	新番号	旧番号	出土数
3号	SI4	5909	6号	SI2	1616	9号	SI10	34	12号	SI18	553
4号	SI9	600	7号	SI19	54	10号	SI11	2001	竪穴状	SI12	6457
5号	SI6	7357	8号	SI8	1176	11号	SI17	1331	-	-	-



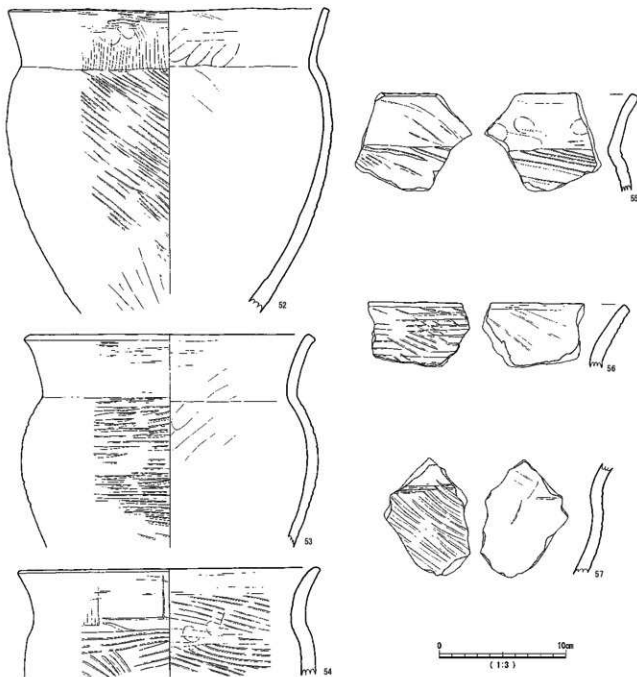
第20図 竪穴建物跡3号の土器出土状況・断面図

りまでは比較的厚手であるが、下半は薄手である。52に対し、53は屈曲の張り出しが強く、色調が暗い。

54は幅広のタタキが外面に施され、部分的に条痕状を呈する。また、内面も幅広のハケナデ調整が明瞭で、器面に条痕状の凹凸が生じている。口縁部周辺は横位のナデ調整で、端部にわずかに平坦面が作出されている。全体的に厚手で、他のタタキ調整の資料とはタタキの幅や器面調整が異なる。55は、頸部から外傾し、胴部には太い筋状の調整痕が明瞭に残る。ナデ消されているが、部分的に左上がりのタタキ痕もみられる。内面も条痕状の

工具ナデが明瞭で、器面に凹凸がある。口縁部付近はナデ調整であり、外面は斜位のカキアゲ状を呈している。56は、外面に左上がり後、水平方向のタタキ調整が施される。口縁部は内外面ともナデ調整で、口唇部には平坦面が作出されている。内面は摩滅しているが、砂粒の動きからケズリ調整と考えられる。57は、外面に左上がりの幅広のタタキが明瞭に残る。頸部の屈曲部のみ水平方向のタタキが加えられ、頸部より上は横位のナデ調整である。

58~60は、いわゆるカキアゲ口縁の一群である。いず

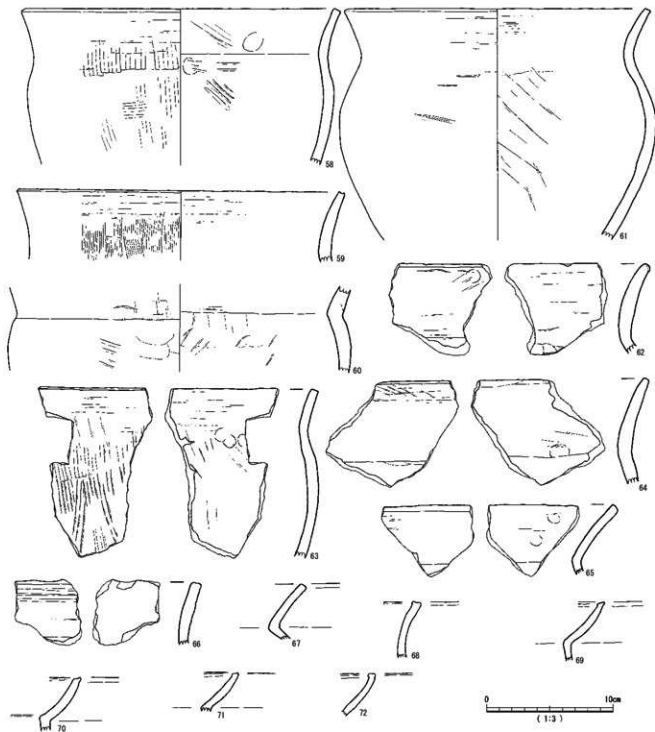


第21図 竪穴建物跡3号・土器溜3出土の土器(1)

れも口唇部付近は、横位のナデ調整である。58は頸部から緩やかに外傾し、頸部外面には幅広のハケによる連続した縦位のナデ調整が施されている。また、口唇部には平坦面が作出されている。胴部外面も縦位のナデ調整を基本とするが、部分的に水平方向のタタキ痕が残存する。また、内面も外面と同様の幅広のハケナデ調整である。59は口縁部がわずかに反外し、口唇部は強めのナデ調整により筋状に凹む。外面は縦位のハケナデ調整で、

口縁部付近は内外面とも横位のナデ調整である。胎土には、金雲母粒が目立つ。60は、頸部～胴部片である。全体的に器壁は厚いが、内外面とも調整は丁寧である。頸部外面にはカキアゲ状のハケナデ痕がみられ、胴部にはタタキ痕が部分的に残存する。また、胴部内面には筋状の工具痕がみられる。

61～65はナデ調整を主体とするもので、器形はタタキやカキアゲ調整を有するものと同様である。61は、頸部



第22図 土器溜3出土の土器(1)

で緩く屈曲し直線的に開く器形で、口唇部は平坦に仕上げられており、カキアゲに近い調整後、横位のナデ調整が加えられたと考えられる。62は内外面とも横位のナデ調整で、緩く屈曲して外反する。また、頸部には稜状の小段がある。色調が明るく、2～3mm大の赤褐色粒をまばらに含む。63は、口縁部が短くやや外傾し、胴部の張りも弱い。胴部は、幅広の粗い縦位のハケナデ調整である。64は内外面とも丁寧なナデ調整であり、頸部外面は工具を押し当てて緩い稜を作出している。口縁部外面にはわずかに左上がりの数条の筋が残っており、タタキ痕と考えられる。65は器壁の薄い口縁部で、胎土に3mm大の白色の角礫をまばらに含む。

66はわずかに外傾し、口唇部はいびつだがわずかに平坦面を作出している。外面には水平方向の浅い凹線状の条痕が施されている。

67・68は器壁の薄い口縁部である。67は、屈曲部から直線的に外傾する口縁部で、端部は方形に仕上げられている。屈曲部からの立ち上がりの形態から、器形はなで肩または球状に胴部が膨らむものと想定される。68は、頸部が直線的に立ち上がり、端部でわずかに内湾するタイプである。口唇部はナデ調整により中央が凹む。

69～72は口縁部が内湾する。口唇部がナデ調整により内面側あるいは外面側に張り出す。

70は厚手で、屈曲部は内面側に張り出し、わずかに段状をなしている。

73は胴部片で、胴部との接合部で剥落している。外面下半はケズリのちナデ調整で成形され、上半にはハケ目と部分的にタタキ調整と思われる細かい凹凸がみられる。

74～80は脚台である。74は内外面とも横位のナデ調整で、胴部との接合部で複数面で剥落している。75・78は器高が高く、直線的に広がるもの、76・77・79は外反して開く。80は器高が低く直線的である。75・77・78・80は胴部との接合面で剥落しており、73のような胴部との接合関係であると想定される。75は端部が明晰な面をなしており、全体的に丁寧な作りである。また、外面は縦位のユビナデ調整で成形されており、成形時の粘土のシワが明瞭である。76は薄手で、端部が細く舌状をなし、外反するタイプである。端部付近が被熱しており、外面は特に摩滅が激しい。内面には、わずかにミガキ調整が確認できる。胴部との接合面で剥落している。77は、器高が低く反りが弱い。端部は強い横位のナデ調整により、筋状に凹む。内面調整は丁寧なナデ調整を主体とし、上部には部分的にミガキ調整が施されている。78は、端部付近に横位のナデ調整が施されている。ナデ調整の境界部分に小さな段が生じている。79は器高が低く、外面は指頭押圧による凹凸がある。端部は横位のナデ調整によって隅丸方形を呈している。80の胎土は、白色礫を主とした細かい砂粒を多量に含む。

81は小型の甕形土器である。内外面ともユビナデ及び指頭押圧により、器面にゆるやかな凹凸が生じている。

壺形土器 (82～102)

図化できた残りの良い資料は、二重口縁壺がほとんどであった。

82は口縁が外傾する大型の二重口縁壺である。色調が暗く、胎土に3～5mm大の長石を多量に含む。口縁部の屈曲部には浅い刻みが回り、頸部には突帯を1条巡らし交差する×印状の刻みが施されている。刻みは、器面調整のハケと同一工具で付されたと考えられる。焼成は良好で比較的硬質であり、外面のハケ目調整も丁寧である。

83は口縁がわずかに内傾し、全体的に器壁が厚く、口唇部は明瞭な平坦面をなす。口縁部の屈曲部に浅い押圧状の刻みが施されている。口縁部屈曲部及び頸部には、接合痕が明瞭にみられる。84は83に近い内傾する口縁で、全体的に厚手で屈曲部に接合痕がみられる。口唇部はナデ調整により隅丸方形に仕上げられており、外面側がわずかに凹む。85は緩やかに屈曲して内湾するもので、口唇部外端がわずかに欠損している。頸部内面はケズリ調整であるが、全体的に器壁は厚い。頸部と肩部の境界付近に、弧状のヘラ書きの沈線が巡る。内外面とも、部分的にハケ目調整がみられる。

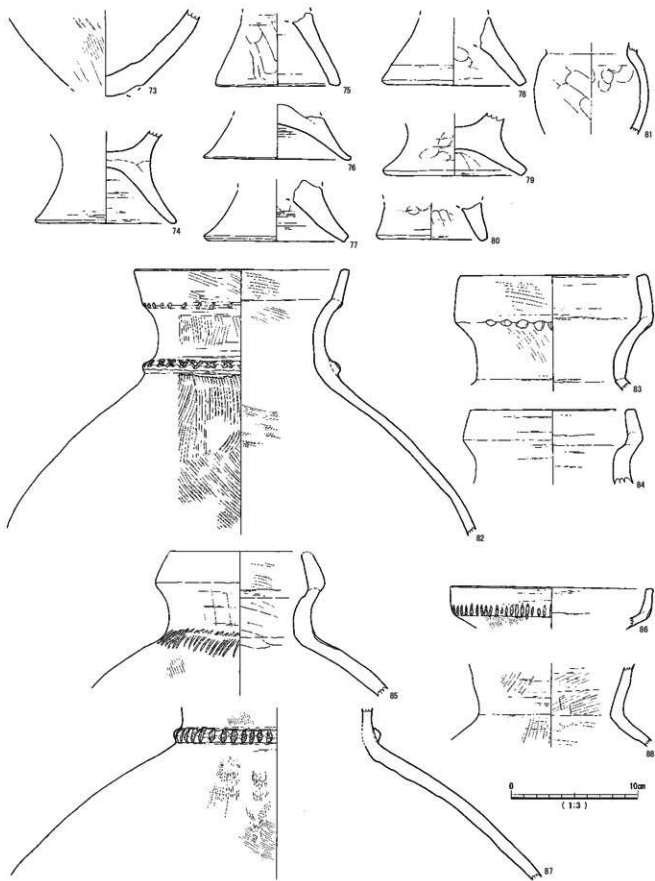
86は、屈曲部からほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は平坦面を有し、屈曲部外面にはヘラ状工具で連続した刻みが施されている。内外面ともナデ調整を主とするが、外面の大型壺以下は細かいハケナデ調整である。

87も大型壺と考えられ、頸部に1条の突帯が回り、布目刻みが施されている。色調は浅黄褐色と明るく、胎土は軟質で3mm大の白色及び赤褐色の礫をまばらに含む。焼成が悪く器面も摩滅しており、内面の器表面は欠損している。外面には、部分的にハケ目が残存する。他の資料と比較しても胎土が異なるため、輸入品と考えられ、色調や胎土は宮崎方面に近い。

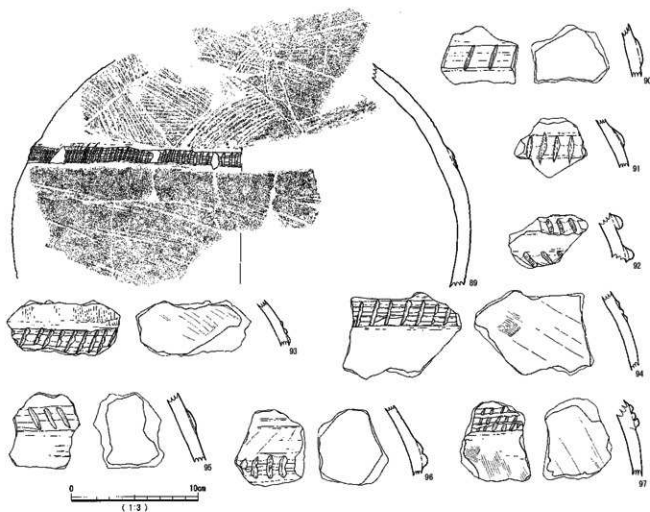
88は頸部である。内外面ともハケ調整の後、ナデ調整が施されており、胴部内面はケズリ調整である。胎土には、5mm大の赤褐色及び灰色の円礫をまばらに含む。

89は大型壺の胴部で、上半に弧文を組み合わせた文様が沈線で描かれている。文様は、左半分ははっきりとした深い沈線であるが、右半分は沈線が浅く、文様もはっきりとしない。突帯部は、横位の2条の沈線を巡らし、その上から連続した細かい刻みを加えている。突帯以下は、浅い条痕状の斜位の沈線が施されている。文様の特徴から、免田式土器を模倣したと考えられる。胎土には、3mm大の白色の円礫を多く含む。

90～97は突帯である。90は薄く幅広に貼り付けた突帯にヘラ状工具で刻みを施している。突帯をナデ調整で平坦に仕上げている。91は断面かまぼこ状に貼り付けた突帯の上に、ヘラ状工具で深い刻みを施している。92は



第23図 竪穴建物跡3号・土器溜3出土の土器(2)



第24図 土器溜3出土の土器(2)

粘土紐を2条貼り付け、その上から布目刻みを施している。胎土には金雲母が目立つ。93は薄く幅広い突帯に凹線を2条巡らせ、斜位の刻みを施している。内外面ともハケ目が残し、内面はやや幅広である。94は、幅広く薄く貼り付けた突帯に横位の2条の沈線を巡らせ、ヘラ状工具で刻みを施している。突帯は沈線により、見かけ上は3条突帯状をなす。内外面ともナデ調整を主とするが、内面には部分的にハケ目が残存する。95は薄く幅広く貼り付けた突帯にヘラ状工具で刻みを施している。外面には、わずかにタタキ痕がみられる。96は幅広く貼り付けた突帯に横位の沈線を1条巡らし、2条突帯状をなしている。その上から、押圧に近い深い刻みを施している。外面はタタキの後、複数方向からナデ調整が加えられている。97は幅広い突帯に深い横位の沈線を2条巡らし、その上から刻みを施している。沈線が深いため、見かけ上は3条突帯状をなす。

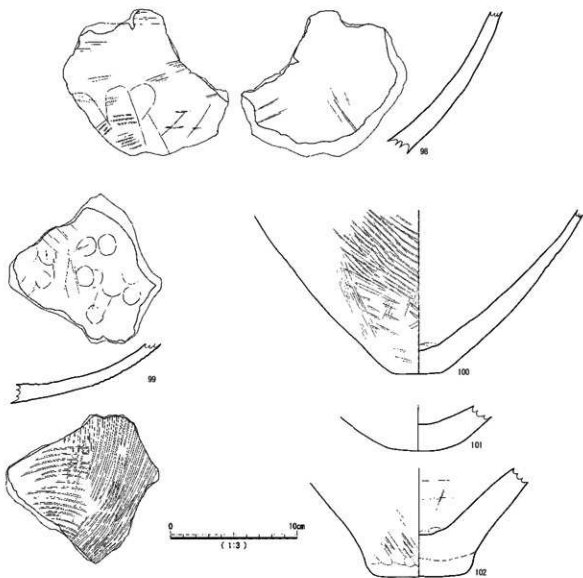
98・99は底部付近の胴部片である。98はケズリにより平坦面を作出した後、細かいタタキを加え、さらにナデ調整が施されている。内面は丁寧なナデ調整により平

滑である。99は丸底甕の可能性もあるが、本遺跡で出土しているものに比べて器壁が厚いため、壺形土器に含めた。外面には細かいタタキが複数切り合っており、底面付近は縦位になる。内面は連続した浅い指頭押圧で成形されている。

100～102は底部で、100・102は平底、101は丸底である。100は外面にはタタキ痕が明瞭に残っている。外面のタタキ調整は左上がりを主体として複数回の切り合いがあり、タタキの単位は幅広である。また、底部付近はタタキの後にハケナデ調整が加えられている。内面は摩滅しているが、内底面は指頭押圧が残る。101は底部がレンズ状になる。胎土は砂粒が多く、器壁も厚い。102は厚手で重く、底面は面状をなすが細かい凹凸があるため安定しない。底面付近は強めの縦位のユビナデで成形され、その上からタタキ調整が加えられている。

高坏形土器 (103～105)

103は坏部片である。屈曲部から緩やかに外反し、口唇部は細く舌状を呈する。内外面とも摩滅しており、胎土に含まれる2～3mm大の長石及び白色礫が露出してい



第25図 土器溜3出土の土器(3)

る。口縁部が屈曲部から直線的に立ち上がる。

104は小型の脚部で、器壁は薄い。坏部との接合部分で、剥落している。接合面には、放射状の細かい刻みが施されており、坏部との接合のしやすさを意識したものと考えられる。全体的に摩滅しており調整は不明であるが、色調は赤みが強く、赤褐色の微細な砂粒を多く含む。105は脚部が長く中実のタイプで、重量がある。坏部の接合部及び屈曲部境界で上下とも剥落している。外面は縦位のナデ調整により面状をなしており、上端付近は横位のナデ調整である。

蓋形土器(106・107)

106は端部にスス痕が残る蓋である。製作技法は高坏と同様であるが、端部の反りが弱い点や、胴部のケズリが粗い点などから、蓋として機能したと考えられる。接合痕が明瞭で、段状をなしている。107は口縁部片である。外面には横位の粗いケズリ調整が連続して加えられてい

る。内面は丁寧なナデ調整で、上部の屈曲部から器壁が薄くなる。口縁端部にはスス痕がわずかに残っている。

小型土器(108~110)

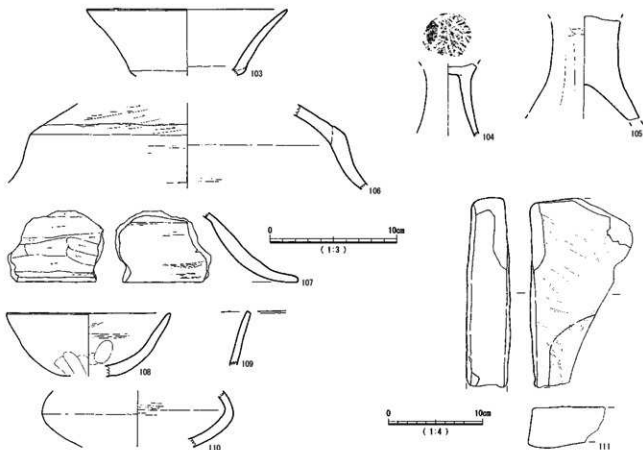
108は小型の鉢の口縁部~底部付近である。内面には部分的に条痕状のハケ目が残存し、底部付近は内外面ともユビナデ調整である。

109・110は小型丸底甕である。109は薄手の口縁部で、口縁端部はナデ調整により方形に仕上げられている。110は胴部片である。扁平な形状で、内面にわずかにミガキ調整が残存する。器壁は厚手である。

石製品(111)

111は砂岩製砥石である。最大長20.0cm、最大幅10.7cm、厚さ4.3cm、重さ1288gで、表・裏と側面の3面をそれぞれ一部を使用している。頂部の一部は磨石としても利用している。

図化していないが、他に石皿1点、砥石1点、自



第26図 土器溜3出土の土器(4)・石製品

然石と思われるが摩石風のもの8点が出土している。石皿は1/3位の欠損したもので、一面を平らに使用している。安山岩製である。砥石は砂岩製の欠損したもので、一面を相当に研ぎ込んでいる。仕上げ紙である。

②竪穴建物跡4号(第27回・第28回)

C・D・26区で検出された。東側の大部分が、竪穴建物跡5号によって削平されていることから、竪穴建物跡5号より古い時代の遺構と考えられる。残存範囲で長径約5m、短径約4.8mの円形を呈する。深さは、最大でも20cm程度と浅く、西側は床面10cm程度しかない。3段構造で中央部は方形を呈していると思われるが、攪乱等により消失していることから詳細は不明である。西側に短い張り出し部がある。中央部全体に炭化物が広がっており、一部焼土が残る。内部でピットが3基検出された。直径約30cmの円形を呈し、深さ約20~30cmである。主柱穴としては判断できなかった。

出土遺物は少なく、径が復元できたものもあるが、破片資料がほとんどであった。

壺形土器(112~119)

112~116・119は、口縁部~肩部片である。

112・113はタタキ痕が明瞭である。いずれも口唇部は

ナデ調整で、平坦面が作出されている。

また、両者は器形や調整が類似するが、112は口縁部が若干短く肩部が張り、113は口縁部でわずかに外反し肩部の張りは弱い。口縁部外面から頸部まで、水平方向の幅広のタタキ調整で、条痕状をなしている。また、胴部内面はいずれも細かいハケナデ調整、頸部付近はユビナデ調整である。

114は頸部から直線的に外傾するもので、器壁は薄い。口唇部がわずかに欠損するが、細い舌状を呈している。外面は縦位及び斜位、内面は横位及び斜位を主体とする細かいハケナデ調整である。頸部内面は、丁寧な横位のナデ調整である。

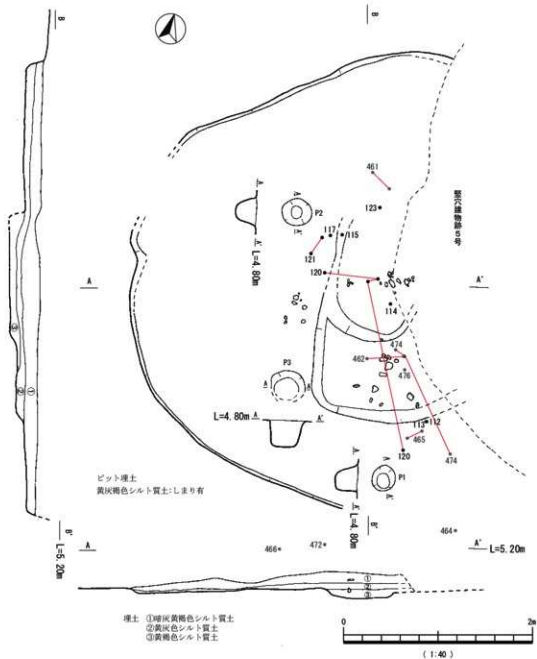
115・116・119は、口縁部がやや内湾する薄手のものである。内外面とも摩滅しているが、他の遺構の資料との比較から、長胴形になると想定される。

117・118は脚台である。117は脚台との接合部で剥落している。118は、指頭押圧による成形で、胎土に3~5mm大の灰色・灰白色礫を多く含む。

壺形土器(120~123)

120・121は、土器溜4出土の破片と接合している。

120は胴部片で、球状の器形を呈する大型壺と考えられる。外面に水平方向のタタキ痕が残り、さらにその上か



第27図 竪穴建物跡4号の平面図・断面図

らハケナデ調整が加えられている。内面は摩滅により、薄膜状に剥落している。

121は幅広で薄い突帯が付き、その上面に浅く斜位の刻みが施されている。胴部外面は左上がりのタタキ調整で、その後ナデ調整が加えられている。内面は摩滅しているが、突帯周辺にはユビナデ調整の痕跡と思われる凹凸がある。

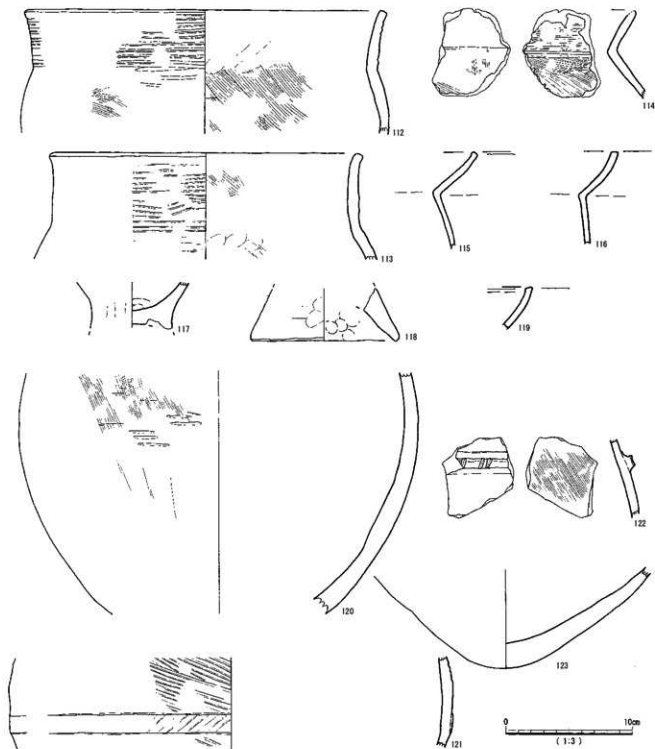
122は断面台形状を呈し、2点一組の浅い刻みを施している突帯である。

123は底部で、尖底に近い丸底である。内外面とも摩滅している。胎土には、3～5mm大の白色礫を多く含む。

120～123は、いずれも赤みが強い色調である。

③竪穴建物跡5号（第29図～第32図）

C・D-26・27区で検出された。北側に竪穴建物跡6号が近接し、西側に竪穴建物跡4号を切っていることから竪穴建物跡4号より新しい遺構と考えられる。南東側は調査区域外へ延びているため全体形は不明であるが、残存範囲で長径約7mほどの円形を呈する。中央部が4.3m×5mほど下がって2段のテラス状の構造を持つ。深さは、上段床面までが約40cm、下段床面までが約60cm程度である。上段には土器片がまとまって出土し、小礫を



第28図 竪穴建物跡4号出土の土器

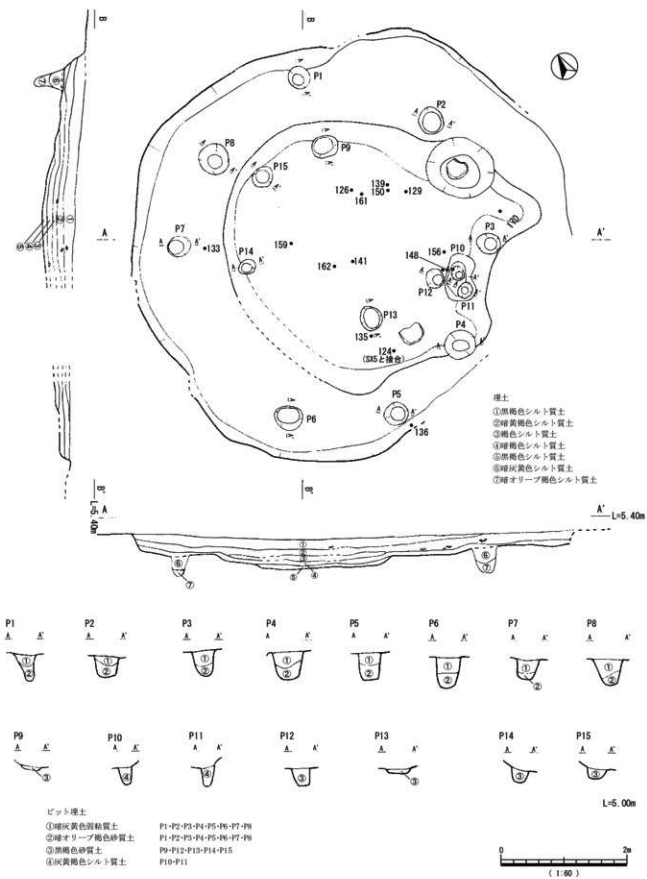
含む土砂が建物跡全体を覆っていた。ピットは、上段と下段に15基確認された。直径約40cm～50cmの円形を呈し、深さ約10cm～50cmであった。上段テラスの8個のピットはほぼ等間隔に配置され、直径約50cm前後と大きめである。主柱穴の可能性もある。張り出し部は、検出できなかった。下段の中央部付近には、土器片・炭・焼却灰の集中域が見られた。位置的に竪の可能性も考えら

れるが、竪の掘り込みラインは不明瞭であった。

遺物は、いずれも破片資料であった。

菱形土器 (124～140)

124は土器溜5出土の破片と接合した。肩部があまり張らず、長胴になると考えられる。胴部に左上がりの幅広のタタキ調整が連続し、条痕状をなしている。頸部から続く外反し、口唇部付近はナデ調整によって内面側がや



第29図 竪穴建物跡5号の平面図・断面図

や凹む。器面は摩滅しているが、頸部内面はユビナデ、胴部はケズリのちナデ調整が施されている。胎土には1~3mm大の長石及び白色礫を多く含み、やや赤みを帯びた明るい色調である。

125~131は口縁部片である。

125・126は、屈曲部から直線的に外傾し、口唇部はわずかに平坦面を有する。126は、内外面とも斜位のハケナデのち横位のナデ調整が加えられている。両者とも、2~3mm大の胎土中の長石粒が多く露出する。127は直線的に外傾し、口唇部は強い横位のナデ調整によって断面が二又状を呈する。内外面とも摩滅しているが、内面にわずかにハケ目が確認できる。

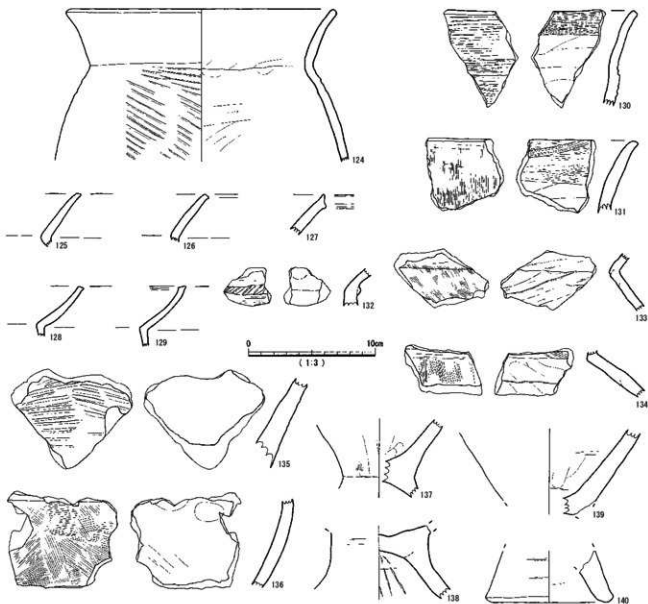
128・129は、口縁が内弯するものである。129は、口唇部がナデ調整により内外面とも張り出す。内外面とも摩

滅し、薄膜状に器面がはがれている。

130は水平方向の細かいタタキが明瞭である。頸部に段を有し、口唇部付近までタタキ調整が連続して施されている。口唇部はナデ調整により、平坦面を有する。また、口縁部付近の内面側は、細かい横位のハケで、下位はユビナデ調整である。131は比較的厚手で、口縁部が緩やかに外反する。外面はいわゆるカキアゲ口縁で、口唇部付近に横位のナデ調整が加えられる。内面上半は、細かいハケナデ調整が斜位に加えられている。胎土に、3~5mm大の暗褐色の円礫をまばらに含む。

132~134は頸部から肩部である。

132は在地土器の中ではやや新しい様相の突帯付き亮形土器と考えられる。屈曲部分に断面三角形の突帯を1条巡らせる。



第30図 竪穴建物跡5号出土の土器(1)

133・134は胴部が張り出す器形である。

133は外面の細かいハケ目が明瞭で、屈曲部上位まで及んでいる。内面側は接合痕が残り、粗いケズリ調整のち、ナデ調整が加えられている。胎土に5mm大の長石の角礫をまばらに含む。断面に露出する。134の外面は縦位のハケナデ調整で、屈曲部付近のみ横位のナデ調整である。内面の屈曲部上位はハケ目がみられ、屈曲部下位は接合痕付近を中心にユビナデ調整が施されている。

135は胴部片である。器壁は厚く、外面には幅広いタタキ調整が施される。タタキは水平方向を基本に、若干左右に傾く。土器溜7等で出土している。平底で厚手の壺形土器の可能性が高い。

136は、頸部の屈曲がわずかに残り、外面に斜位を主体とした複数のハケナデ調整を施す。内面も丁寧なナデ調整で、頸部付近は幅広い指頭押圧で成形されている。厚手である。

137～140は胴部～脚台である。

137は径がやや小さい脚台で、外面の屈曲部には成形時の縦位のナデ調整により小段が生じている。138は胴部への立ち上がり付近で剥落している。内面には、成形時の工具痕が縦筋状に複数残存する。胎土には砂粒を多く含む。139は脚台との接合部で剥落している。外面は摩滅し、膜状に剥落しているが、内面には縦位のユビナデ調整がみられる。胎土に砂粒を多く含む。140は、器壁が厚く低いタイプである。胴部との接合部で剥落しており、139のような胴部と接合すると考えられる。内外面とも横位のナデ調整で、端部は丸く、やや外側に反る。胎土には、金雲母及び暗灰色の円礫をまばらに含む。

壺形土器 (141～156)

141は口縁部が大きく内弯し、袋状口縁の二重口縁壺である。口唇部は平坦でやや内傾し、頸部外面の屈曲部付近には縦位のハケ目がみられる。

142・143は、口縁部が断面三角形に肥厚している。142は胎土に砂粒をほとんど含まず軟質であるが、143は砂粒を多く含む。143は突帯状に粘土を貼り付けて成形されており、二又状口縁に近い。

144・145は頸部である。いずれも胴部との境界の屈曲部に突帯が1条巡り、斜位の刻みが施されている。144の形状から、二重口縁壺の頸部と考えられる。また、突帯が付される前に縦位のハケナデ調整が施されている。

146～154は突帯である。形状から、壺形土器に伴うものと判断した。146・148・150は幅広い薄い粘土帯を1条巡らせるもので、146は格子状の、150は斜位の浅い刻みが施されている。いずれも、突帯裏の内面には指頭押圧やユビナデ調整が施されている。また、146は突帯の上下は調整がほとんど加えられず、波打っている。147は断面カマボコ状の1条の突帯に押圧による刻みが施される。151～153は幅広い突帯に横位の沈線数を数珠巡らせ、多条

突帯状を呈するものである。149・151は複数に分割した突帯に同時に押圧状の刻み、153・154は沈線状の刻みが施されている。また、152は胴部にハケ目が歯歯状に施される。

141・144・145・148・150・156は、いずれも胎土に2～3mm大の白色礫を多量に含む、赤みの強い色調を呈している。また、148・156は特に砂粒が大きく、胎土が粗い。

155・156は底部で、155は平底、156は尖底に近い丸底である。155は小型の壺と考えられるが器壁は厚く、ユビナデ調整である。

高坏形土器 (157～164)

157・158は屈曲部から緩く塊状に立ち上がるタイプである。157は屈曲部の稜が緩く、全体的に厚手である。また、胎土はマーブル状を呈し、3～5mm大の灰褐色円礫をまばらに含む。158は器壁が薄く、屈曲部の稜線が明瞭で、口縁部は外反する。

159～164は脚部である。

159は坏部との接合部で剥落しており、下半は緩やかに開く器形である。外面の器面調整は、上部は横位のミガキ調整、その下部は縦位のハケナデ調整、屈曲部以下は横位または斜位のミガキ調整と、部位により異なる。内面側は数段の接合痕が明瞭で、筒状に成形した際の縦シワが数条みられるなど、外面に対して調整が粗い。160・162は屈曲部から広がる器形で、内面の稜は明瞭である。160の外面は縦位のミガキ調整を主とし、その後横位のナデ調整が加えられている。内面はケズリ様の強いナデ調整で、屈曲部の稜も明瞭である。161・163はやや小型のものである。161は中空かつ長脚で、内面上部に粘土を充填した際の張り出しがみられる。胎土は軟質で、マーブル状を呈する。163は器壁が厚く、162の形態に近いと考えられる。胎土は157に類似する。162は内外面とも摩滅により調整は不明瞭であるが、坏部との接合部分に刻みが施されている。胎土には、3～5mm大の灰色の円礫をまばらに含む。164は内面が強いユビナデ調整によって成形されており、器面に凹凸が生じている。端部には、穿孔が部分的に残存する。

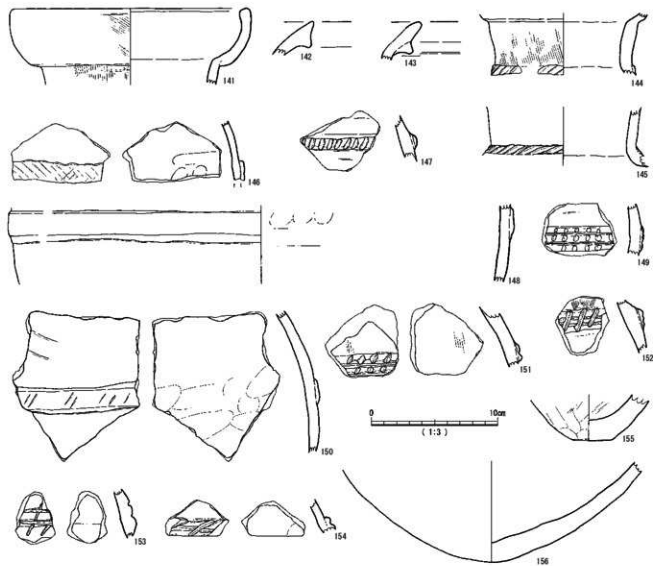
小型丸底壺 (165～168)

165は口縁部片である。器壁は薄く、屈曲部から直線状に口縁部は延び、口唇部は細い舌状を呈する。胎土は軟質で、砂粒をほとんど含まない。

166～168は胴部・底部と考えられる。いずれも外面は摩滅しているが、内面にユビナデ調整が残っている。167は肩が張り、肩部がほぼ最大径となる。外面は摩滅しているが、内面はユビナデ調整である。168の器壁は厚手で、完全な丸底である。内面にわずかに屈曲部分が残存する。

蓋形土器 (169)

169は蓋のつまみ部分と考えられる。上部は平坦で厚み



第31図 竪穴建物跡5号出土の土器(2)

があるが、胴部の器壁は薄手で、外面にわずかに縦位の幅広のハケ目が残存している。被熱により、外面は赤変している。また、胎土には3mm大の石英、灰白色・褐色の円礫を含む。

免田式土器(170)

170は免田式土器の長頸壺と考えられる胴部片である。屈曲部に横位の沈線数条と、屈曲部上位に重弧文が描かれている。胎土は軟質で、砂粒をほとんど含まない。

石製品(171・172)

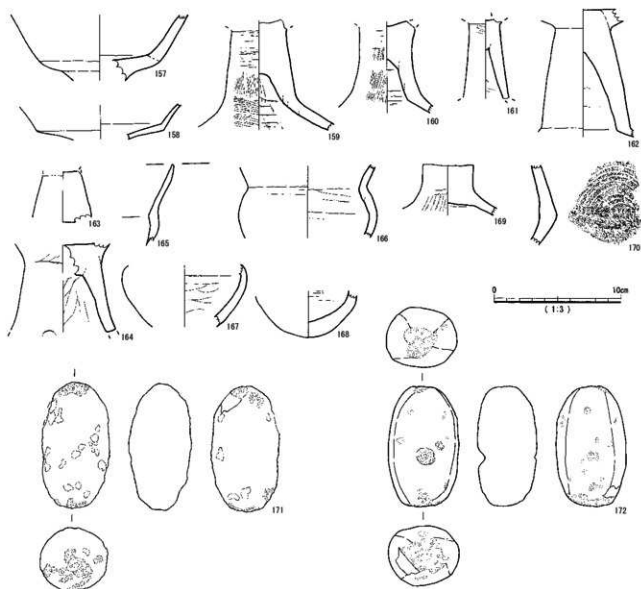
171と172は礫石である。171は花崗岩製で、楕円形を呈し、最大長10.0cm、最大幅5.3cm、最大厚5.0cm、重さ352gである。石材のため表面の剥落が目立ち、長軸の両端に打痕が残っている。172は砂岩製で、楕円形を呈し、最大長9.5cm、最大幅5.6cm、最大厚4.7cm、重さ296gである。側面は磨石として用い、平坦面の両面にはくぼみが見られることから、くぼみ石としても使用している。長

軸の両端に打痕が残っている。

図化していないが、他に石皿1点と台石1点が出土している。石皿は隅丸長方形の周辺を整えたもので長辺が半分ほど欠けている。残存長23cm、幅34cm、厚さ8cmほどの安山岩製である。台石は径32cmほどの円形をしたもので、一部が欠けている。紡錘形をしており、厚さ9cmほどである。安山岩製である。

④竪穴建物跡6号(第33図～第42図)

D-26・27区で検出された。長径約5.8m、短径約5mの楕円形を呈す。張り出し部はない。南側に竪穴建物跡5号、北側に竪穴建物跡7号が隣接する。3段のテラス構造であり、1段目・2段目とも深さは約10cmで、明瞭な貼床は見られなかった。2段目は3.9m×3.2mの、3段目は1.4m×1.1mの不整楕円形を呈している。中央部付近の窪地状の範囲に土器片と礫が混ざり合ってまとまり、



第32図 竪穴建物跡5号出土の土器(3)・石製品

北側と南側に面的に広がっている。中央付近の埋土は、周辺のIIc-2層の腐植土であり、河川作用により流れ出た土砂とともに運ばれてきた遺物が堆積した可能性がある。1段目と2段目で、ピットが11基検出された。ピットは直径20~40cmの円形を呈し、深さは20~50cmである。主柱穴ははっきりしない。

中央部分の土器集中部分の下から炭化材が出土したため、そのうち3点の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した。年代値は、弥生時代後期頃に相当する結果となった。樹種同定結果は、クリ近似種と広葉樹であった。

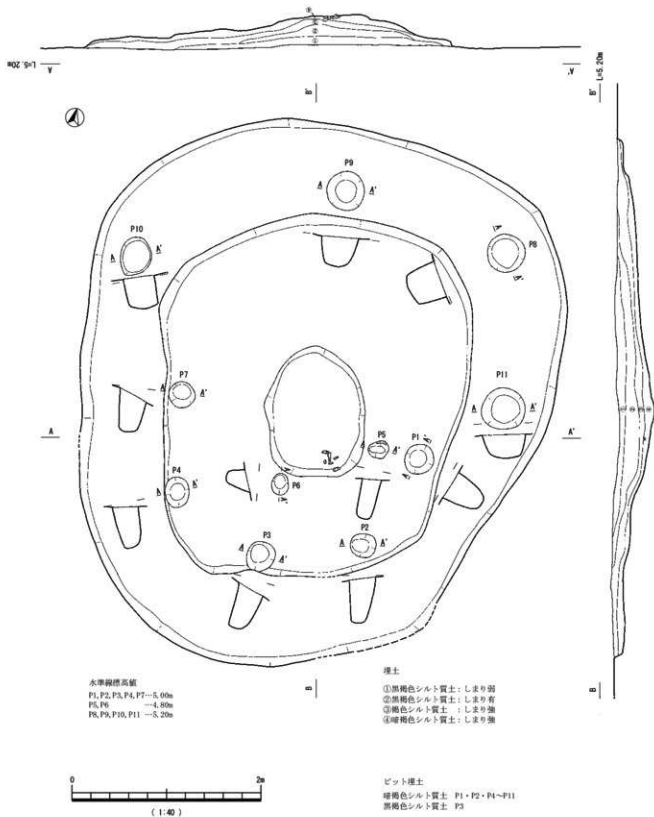
遺物は壺形土器の良好な資料が得られた。特に、216は欠損部位がない完形資料である。また、いずれも胴部最大径が17cm前後、器高が30cm前後と壺形土器の中でも中・小型であり、他の遺構ではあまり類例がない資料である。

貝殻が狭い範囲にまとまって出土した。すべて白く変色し、完形のものもあるが、欠損したものも多い。正確な点数は不明だが100点足らずである。貝種はアサリが3点あるほかは多くが巻貝である。特に多いのはオオコシダカガンガラヤマガキなどで、それぞれ30点ほどずつあり、他にニシキサザエ・リシケナサバイ・タマガイ・マキギスなど岩礫性海岸で採取できる貝がある。

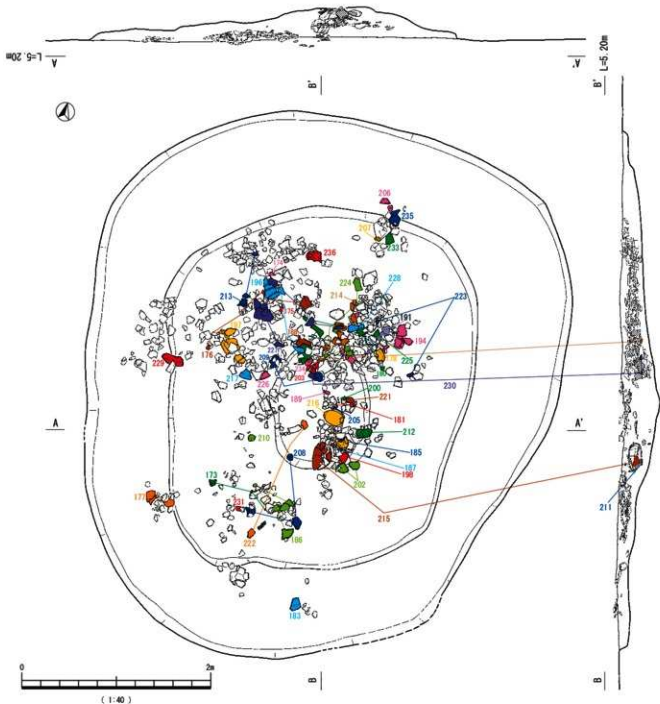
壺形土器 (173~214)

丸底甕と脚台付甕とがあるが、丸底甕が多い。丸底甕は器形が長胴のものと、丸みをもつものに分かれる。雑な作りの小型のものもある。

173~185は比較的薄い作りで、長胴形の器形をし、丸底となるものと思われる。比較的口縁部が短く、外反する度合いが強い。173~181は口縁部がまっすぐ外へ開くか、やや内湾し、胴部が緩やかに膨らむ長胴形を呈す



第33図 竪穴建物跡6号の平面図・断面図

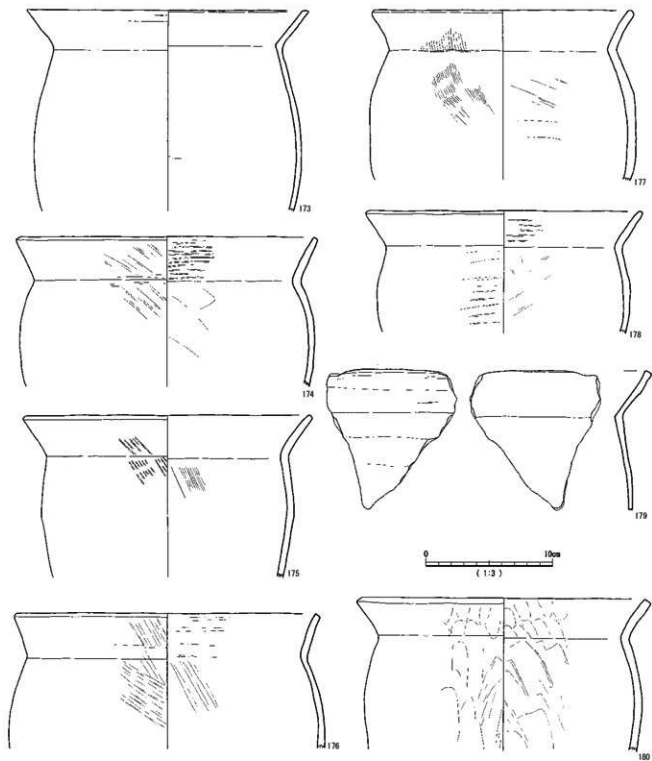


第34図 竪穴建物跡6号の土器出土状況・断面図

る。器壁は薄く、薄膜が剥がれるように摩滅する点が共通する。いずれも、口縁端部は平坦面が作出されており、外面側にわずかに張り出す。頸部の稜は、内外面とも比較的明瞭である。また、頸部直上と口唇部下が横位のナデ調整によってわずかに凹んでいる。口縁直径は20.8cm～24.2cmである。

173～178は口縁部がほぼまっすぐ外へ延びているが、176が傾きが弱いのに対し、他はやや強く傾いている。

173は薄い作りだが、177は厚く、いくらか丸みをおびている。179は薄い作りで、口縁部がやや内湾みである。頸部の屈曲は鋭い。横位のナデ調整が部分的に残っている。180も口縁部から胴部までやや分厚い作りである。181は摩滅が目立つが、調整痕が部分的に残っており、胴部外面に帯状の横位のナデ調整がみられる。また、内面は指頭押圧状のユビナデ調整により細かい凹凸が生じている。182は口縁部が直口する。タタキ調整がみられる。

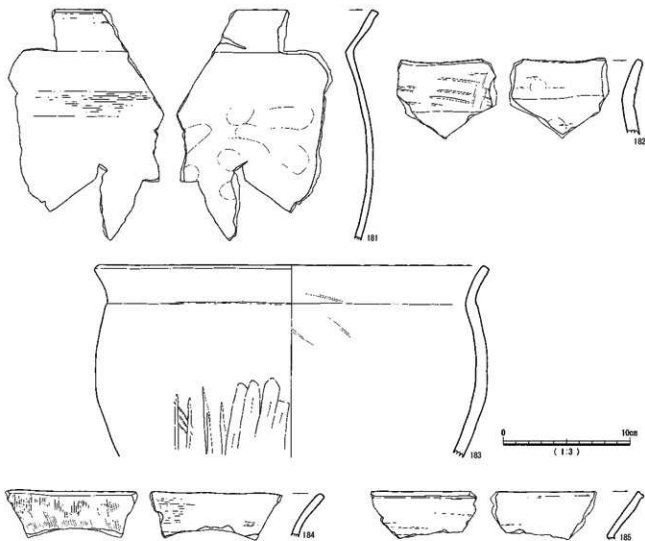


第35図 竪穴建物跡6号出土の土器(1)

183は口縁部が短く、頸部にはハケ状工具の押圧により細かい段が生じている。胴部下半は下から上へのケズリ調整が施され、部分的に幅広の面状をなしている。また、部分的にタタキ痕が残存しており、成形はタタキ調整と考えられる。184は、外面は縦位、内面は横位のハケナデ調整である。指頭押圧による成形のため、厚みが一定で

はなくやや凹凸がある。185は口縁端部が外傾するもので、181に類似する。

186~189は丸みをおびた器形をしている。186は口径27.8cmで、頸部内面は稜をなして口縁へ外反し、丸みをおびた胴部である。外面は斜方向タタキ整形のあと、ケズリヤナデで仕上げ、薄い作りとなる。かきあげ口縁



第36図 竪穴建物跡6号出土の土器(2)

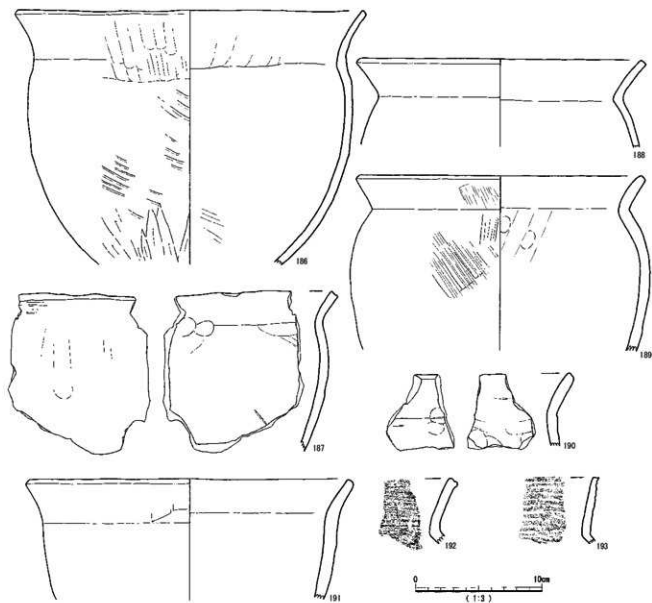
で、内面は丁寧なナデ仕上げである。187は短い口縁で端部のゆがみが大きい。頸部内面の屈曲は弱い。188の口径は23cmで、頸部内面の屈曲は強い。189は口径23.0cmで、頸部内面の屈曲は弱い。口縁部は短い。端部も丸みをおびている。胴内面には部分的に当て具痕がみられる。

190・191はゆるやかに外反する器形で、肩部は張らず、分厚い。191の口径は26.0cmで、かきあげ口縁である。192・193は口縁部がコの字状となるもので、192は浅い凹線もある。192の調整は外面が丁寧な縦ナデ、内面が横ナデである。193の外面には横方向のタタキ痕が残っている。

194～196は分厚い作りで、底には舞台の付くものである。194は口径30cmで、分厚い器形のまま胴部から口縁部へ移っている。頸部から口縁部へゆるやかに移り、口縁部は短い。口唇部はコの字状となり、口縁外面は下から上へかきあげハケナデである。内外とも縦方向のヘラナデで仕上げ、外面にはススが付着し、内面底近くはオコ

ゲの痕跡とみられる黒色化がみられる。195の口縁直径は25.5cmで、底部近くは分厚く作っているが、胴部は薄く作ろうとする意図が伺え、頸部内面が鋭く曲がるほど口縁は外反している。口唇部はコの字状となり、口縁外面はかきあげのハケ縦ナデである。胴外面は縦方向のヘラケズリで、内面は粗いハケナデ痕が部分的に残っているが、あと縦方向のヘラナデで仕上げている。196の胴部も195と似た作りで、内外とも粗いハケナデのあと、ヘラナデで仕上げている。

197～201は胴部が丸みをおびていると思われるものである。197は口径14.4cm、高さ17.3cmの小さな丸底甕である。上半部に最大径があるが、丸みのある胴部で、頸部でゆるやかに外反し、口縁部は外傾してまっすぐ延びている。198は口径21.5cm、残存高11.7cmの低い器形をし、最大径は肩部にある。頸部からゆるやかに外反して口縁端へ至る。199は頸部で強く屈曲し、口縁端は丸くまとまる。内外面とも摩滅しているが、外面にはススが付着し



第37図 竪穴建物跡6号出土の土器(3)

ている。200は口径16.6cmと小型で、頸部で強く外反している。口縁部は上へ少し立ち上がっている。201の口縁部はやや丸みを帯びてゆるやかに内反し、頸部は強く屈曲している。薄い作りで、内外面ともヘラの縦ナデである。

202は小型の甕形土器の胴部片で、頸部で屈曲して胴部が膨らむ。胴部外面の下半はケズリ調整である。内面の頸部付近には、ナデ調整の工具痕が筋状にみられる。

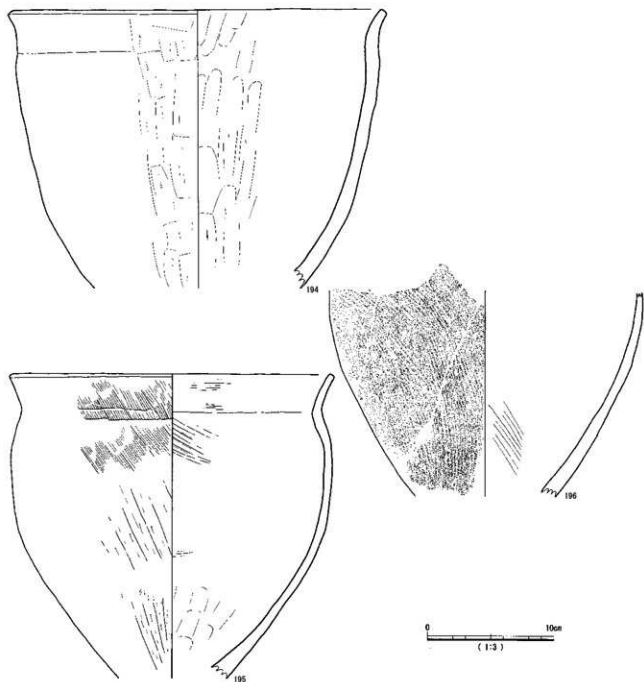
203は口径17cmとやや小型だが、肩部の張りがほとんどなく長胴形を呈する。外面はタタキのあと縦方向のヘラナデで仕上げている。内面はナデ整形だが、口縁付近はハケナデである。

204~207は分厚い作りで、成形が雑である。口縁部は短い。204は小型土器で、粗いヘラナデ調整をし、胴部が

分厚いの比べ口縁部は薄くしている。205は肩部の張りがほとんどなくまっすぐ立ち上がる筒形を呈している。口径は15.4cmしかない。206は口縁部がわずかに外反しており、直径が18cmで、そこから細くなって底へ至る。207は脚台端を欠いているが、口径15.3cm、残存高12.5cmの口縁端も不整形の手づくね風となる分厚い小型土器である。内外ともヘラナデで仕上げる。

208~214は、胴部~脚台部片である。

208は端部に向かって緩く外反する器形であり、端部付近は横位のナデ調整によって舌状に仕上げられている。脚台外面は、縦位のナデ調整が連続して加えられている。また、胴部と脚台の境界部分には、部分的に水平方向のタタキ痕が残っており、タタキ成形であったことが



第38図 竪穴建物跡6号出土の土器(4)

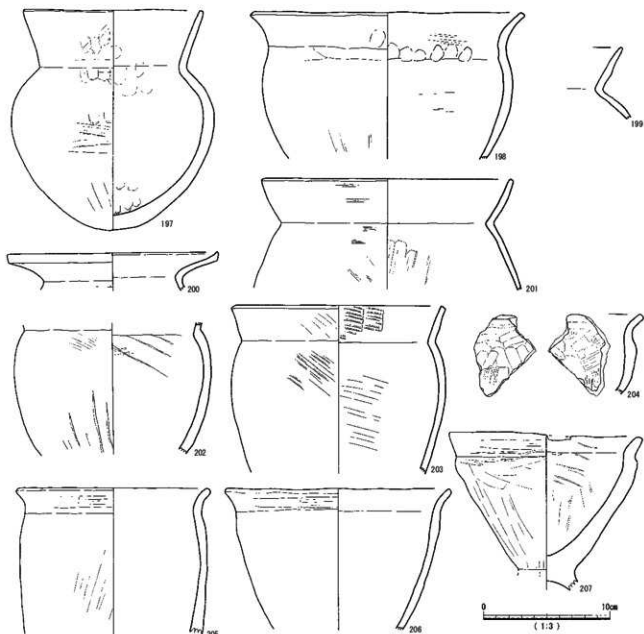
分かる。胴部上半は細かい斜位または縦位のハケナデ調整を主とし、部分的にケズリ調整が加えられている。胴部内面は、当て具による平坦面が連続してみられ、器壁も薄い。209の脚台端径は9.8cmで、高い脚台である。内外とも縦方向のヘラナデだが、内面はケズリに近い。210も高い脚台である。ほぼ直線的に端部に向かって開き、端部は丸く取られている。内外面とも摩滅しているが、内面に部分的にハケ目が残っている。胴部の内底面が一部残っており、器壁が薄いことが分かる。211・212は脚台との接合部分で剥落しており、208の接合痕の位置

とも一致する。211は、脚台との境界部分は縦位のユビナデ調整が明瞭である。213は脚台が外に強く開いている。214は脚台端が摩滅等によって欠損しているが、径9cmほどである。胴部と脚台は別々に作り、接合したあと、内面と外面に粘土を補填している。内面調整はヘラナデだが、外面調整はヘラケズリである。

壺形土器 (215~224)

口縁部が外反するものと、二重口縁のものがあり、底部は丸底と平底とがある。

215は口縁部がわずかに外反し、頸部から胴部最大径

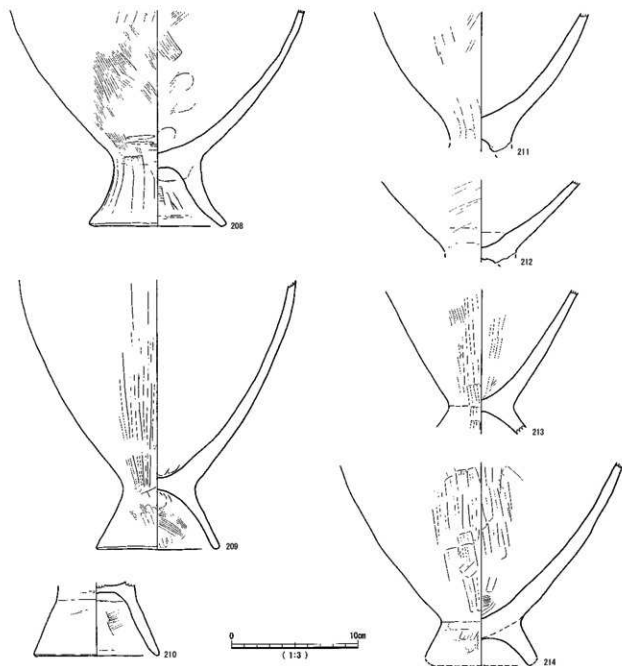


第39図 竪穴建物跡6号出土の土器(5)

まで緩やかに膨らみ、底部へすはまる器形の中型の壺形土器である。ややゆがみがあり、胴部～底部と口縁部の中心軸はずれている。底部は丸底である。外面は摩滅しているが、縦位のタタキ調整が部分的に残存する。内面は、頸部以下に複数の接合痕がみられ、接合部周辺は指頭押圧やユビナデ調整が連続して加えられている。また、胴部内面のユビナデ成形に伴って、爪痕と思われる小さな半月形の凹みがみられる。また、底部周辺は指頭押圧で成形され、器面に凹凸が生じている。全体的に器壁に厚みがあるため、大きさに対し重量感がある。

216は、頸部から口縁部がラッパ状に広く開く小型の壺である。頸部で上下に割れて出土したが、それぞれは

割れておらず、口唇部の欠損を除いてほぼ完全な状態である。胴部と口縁部は頸部を境に歪みがあり、口唇部も傾いている。外面は、頸部からカキアゲ状にハケ目が加えられ、口縁部中ほどから口唇部までは横位のナデ調整が施されている。また、口縁部は中ほどまで厚く、口唇端部は舌状を呈している。口縁部は、横位のナデ調整が明瞭で、壺形土器の口縁部というよりは、甕形土器の脚部の作り方に近い印象である。胴部外面は丁寧なナデ調整で、帯状に平坦面が巡っており、タタキ成形であったと考えられる。また、胴部下位はケズリ調整である。底部は接合痕が残りやや調整も粗く、いびつな形状である。内面は、接合痕は不明瞭であるが数箇所で見頭押圧とユ



第40図 竪穴建物跡6号出土の土器(6)

ビナデ調整が横位に施される部分があり、接合部分の調整と考えられる。また、最大径付近は幅広のミガキに近い工具ナデであり、表面が平滑である。内面も胴部下半はケズリ調整のちナデ調整で、内底面には条痕状の波打った工具痕がみられる。焼成も良好で硬質であり、器壁が厚いため小型だが重量がある。

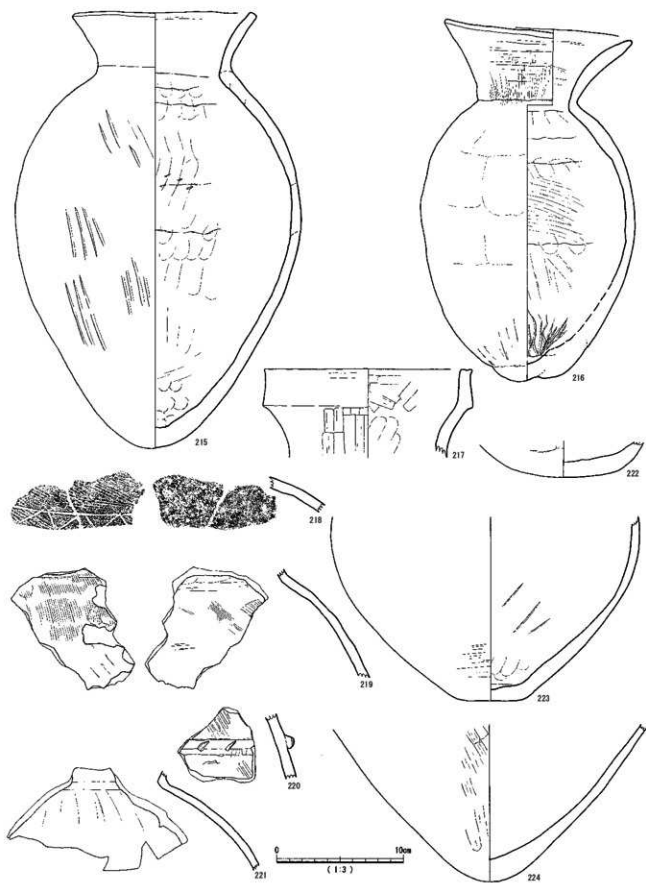
217は外反して端部が直立する二重口縁である。口縁直径16.4cmで、口唇部はコの字状を呈する。内外ともヘラの縦ナデである。

218～221は肩部付近の破片で、ともに胴部が丸みをおびている。218の外面はハケの横ナデのあと細いヘラ沈

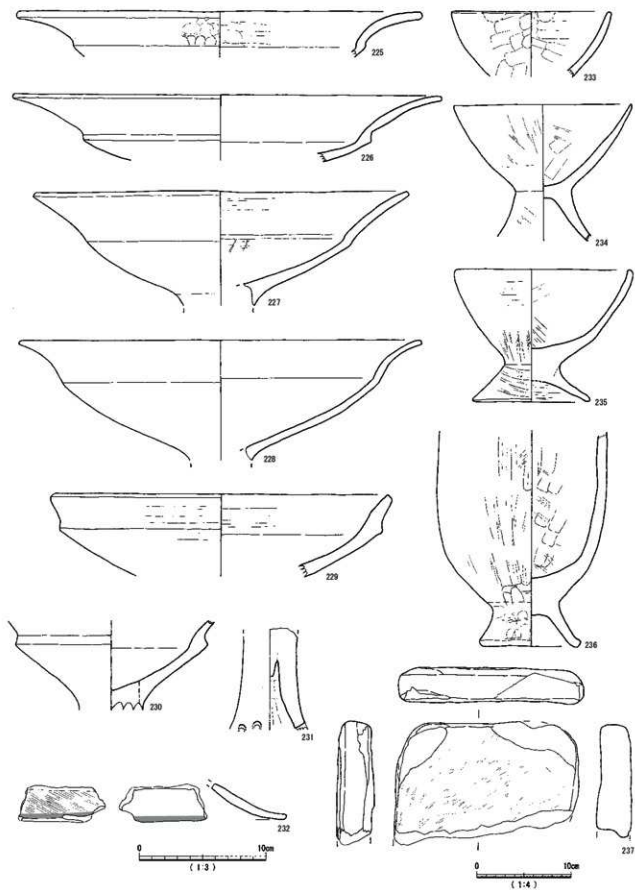
線が走り、その間に銀歯文が描かれている。219・221も肩部で、219は内外面の胴部上半は細かいハケナデ調整後に、ナデ調整が施されており、下半はケズリ調整後、ナデ調整である。また、頸部内面付近は横位のナデ調整である。外面は219がハケナデのあとヘラナデ、221はヘラナデである。220は紐状の突起を張り付け、浅く刻みを施している。外面には幅広の斜位のハケ目が残っている。221は、内面に頸部の屈曲部から下位へのユビナデ調整が残っている。外面は摩滅している。

222～224は胴下半から底部である。

222は底部である。緩やかな丸底で、左右の立ち上がり



第41図 竪穴建物跡6号出土の土器(7)



第42図 竪穴建物跡6号出土の土器(8)と石製品

の角度が異なり、歪みがある。外面には部分的にハケの端部と思われる工具痕がみられる。223は平底で、胴部が広く膨らみ、下半が最大径となる器形である。器壁が薄く、胎土も軟質で摩滅している。底部付近にナデ調整、内底面に指頭押圧が部分的に残存している。外面は表面がただれたような部分もあり、被熱による可能性もある。また、外面には黒斑が明瞭にみられる。胎土は軟質で、粒子の細かい角閃石や白堊を多く含む。

224は尖底に近い丸底である。内外とも縦方向のヘラナデ調整だが、摩滅が目立つ。

高環形土器 (225～231)

高環形土器の坏部は口縁部と底部境の屈曲部から外へ広く開き、口縁部付近はほぼ水平になるものもある。坏部は概して浅く、口縁部直径は広い。口縁直径は225が32.2cm、226が34cm、227が30cm、228が32cmである。225の口唇部はナデ調整により、断面形が隅丸方形に仕上げられている。外面は連続した指頭押圧とユビナデ調整であり、細かい凹凸がある。226の坏部は口縁部と底部の境がはっきりした段を呈しているが、227・228はゆるやかに移っている。227と228の底部端は接合部を残しており、脚部との接合がはめ込み式であることがわかる。229は口縁直径が27cmと小さく、分厚い作りとなっている。口縁部の外反度は弱く、ゆるく立ち上がっている。230も229と同様、小さく分厚いもので、やや深い作りだが、脚部との接合はさし込み式である。

231は、脚部である。坏部との接合部で剥落している。筒部に下半が欠損する穿孔が2か所並んでおり、対で計4か所穿たれていた可能性がある。内面上部は、棒状に粘土が張り出している。

蓋形土器 (232)

232は口縁部片であり、上端は積み上げの接合面で剥落している。

鉢形土器 (233～235)

いずれも脚台の付くものである。233は口径が12.6cmと小さく、内反ぎみに立ち上がっている。内外とも横方向ヘラナデで仕上げている。234は口径14cm、深さ7.5cmと深い鉢部で、脚台も端部を欠いているが高い。鉢内面の調整は丁寧である。235はややゆがんだ作りで、口径14cm、脚台端径9.4cm、高さ10.5cmである。口縁端はやや内弯し、脚台は低い。調整はヘラナデである。

小型土器 (236)

脚台の付く蓋形土器の小型品かと思われる。ほとんど直に立ち上がっており、全形は不明である。口縁部を欠いているため口縁の形状が不明だが、残存部上端の直径は12cmである。脚台径は8cmで、脚台高は3.5cmほどである。内外とも縦方向のヘラナデである。

石製品 (237)

砂岩製の砥石である。隅丸方形を呈しているが、長辺

部が欠けている。残存長12cm、幅19cm、厚さ3.7cmほどで、残存重量は14945gである。砥石裏面2面を使用している。

図化していないが、砥石の他に石皿1点と磨石・砥石・台石様の自然石4点が出土している。石皿は長方形風を呈し、長軸が4損している。残存長22cm、幅26cm、厚さ8cmほどの安山岩製で、中央がややへこんでいる。

⑤ 竪穴建物跡7号 (第43図)

D・E-26・27区で検出された。竪穴建物跡8号と北側で近接するが、切り合い関係は確認できなかった。道路や上下水道埋設などのため、南側の約半分と北側の一部が消失しているが、東西方向を主軸とする約5m×3mの楕円形を呈すると考えられる。3段構造をもち、約14cm下がった中段は2.6m×2mのややいびつな円形を呈し、中央部には長径約1m、深さ15cmの楕円形状の焼土エリアがある。

遺物は中段エリアの埋土①と②内がほとんどを占め、上段エリアでは数点しか出土しなかった。ピットは、上段内部の東西方向に対をなすように2基検出された。ともに、径が約30cmの円形を呈し、深さも約20cmと似る。

出土した遺物数は少ない。図化できたのは蓋形土器2点と蓋形土器2点である。

蓋形土器 (238・239)

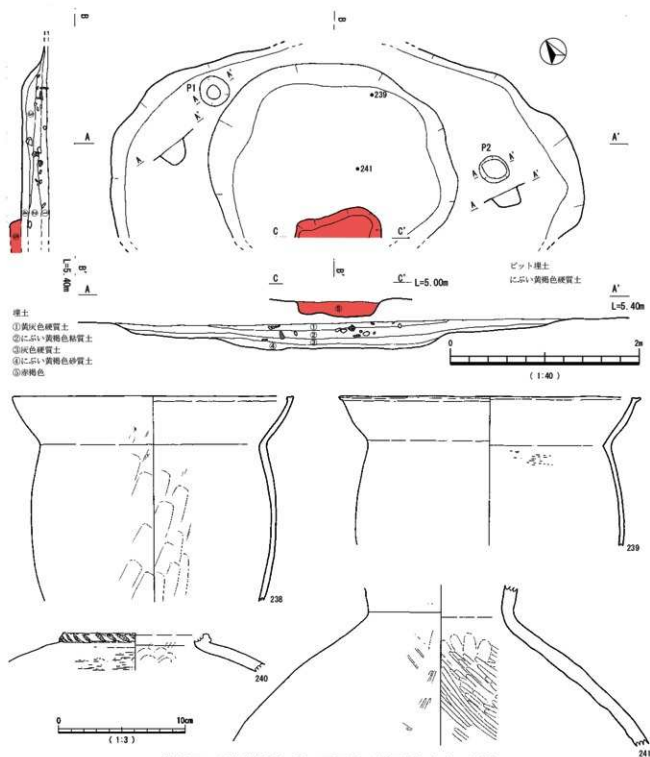
238・239は頸部内面が稜となるほど、「く」字状に屈曲する口縁部と、肩の張りがほとんどない胴部から成る薄い作りである。238は口縁部直径が22.3cmで、頸部がやや内弯ぎみに立ち上がる。口唇部は直に伸び、やや内側に突き出している。内外ともヘラの縦ナデ調整で仕上げられる。内面が橙色、外面が明褐色を呈するが、外面の一部は橙色を呈する。239も238と同じような器形をしているが、口唇部が238と違い外へ「く」字に伸びている。口縁部直径は24.0cmである。

蓋形土器 (240・241)

240・241は頸部から肩部の破片である。240は肩が外へ大きく広がる器形をし、頸部に突帯が張り付けられ、突帯上には右が下の板目の押圧刻みがみられる。241は頸部が直径11.4cmと細くくびれ、口縁部は直に近く外反する。胴部は肩が張らず、まっすぐ伸びる丸みのある器形をしている。内外ともヘラナデ仕上げだが、外面には斜方向のタタキ痕が浅く残っている。

⑥ 竪穴建物跡8号 (第44図・第45図)

D・E-27区で検出された。南側は7号と接しているが前後関係は不明であった。2段の構造になっており、1段下は検出面より20cm下がり、2段目はさらに15cm下がっている。中央よりやや北側にあたる1段目の境の2段目の部分に焼土塊が径50cmの範囲に広がっている。2段目をやや掘り込んでいる。そのまわりには焼土や炭な



第43図 竪穴建物跡7号の平面図・断面図と出土の土器

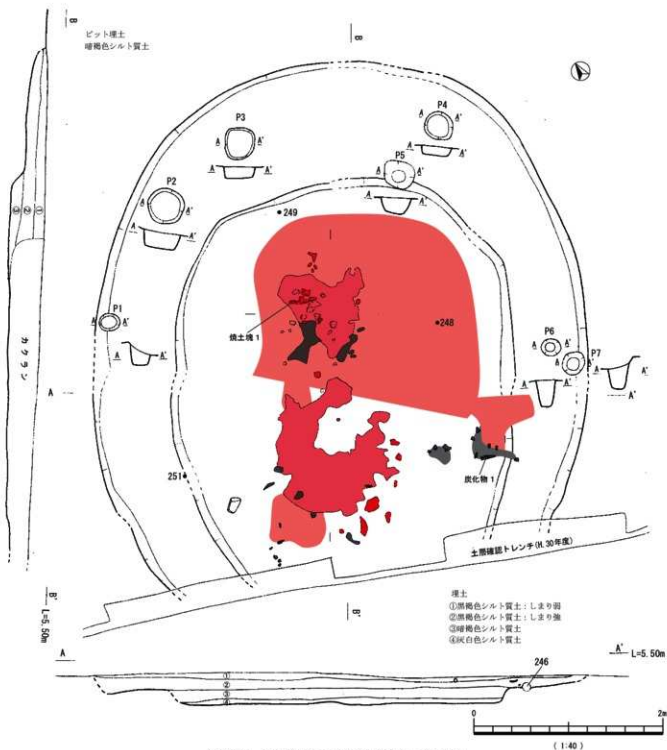
どもあり、さらに南側へ床面の近くに炭化物や焼土が幅1mほどの範囲に広がっている。④層は粘床と思われる硬くしまっており、この中央付近に炭化物が集中している。この上の③層にも焼土や炭化物が多く混ざっている。中央付近の③層中で小型仿製鏡が出土した。(埋納遺構として95ページで詳述)

炭化材のうち3点の放射性年代測定と樹種同定を実施

した。年代値は弥生時代後期から古代初頭まで幅広い結果が出ている。樹種同定結果は、ツバキ属だった。

内部で検出されたビットは、直径約15cm～約40cmの円形を呈し、深さ約10cm～約30cmである。主柱穴ははっきりしなかった。

出土遺物は少なく、破片資料がほとんどである。磨石様自然礫1点が出土している。



第44図 竪穴建物跡8号の平面図・断面図

菱形土器 (242～246)

242は口縁部片である。口唇部は丸く取められており、成形時の横位のナデ調整によって内面側が浅く凹む。内外面とも摩滅しており詳細な調整痕は確認できないが、内面の頸部の屈曲下は砂粒が動いており、ケズリ調整と考えられる。器壁は薄い。243は肩部片である。頸部は内面側に張り出し、直下に接合痕がみられる。内外面と

も、斜位の細かいハケナデ調整である。

244～249は、脚台である。244はほぼ直線的に開き、端部はナデ調整により断面方形を呈している。外面は、縦位の幅広い条痕状のハケナデ調整が切りあっている。胎土に2～3mm大の灰白色の円礫を多量に含む。245・246は端部がわずかに外反するものである。245は横位のナデ調整により、端部が方形に仕上がっている。外面は縦位

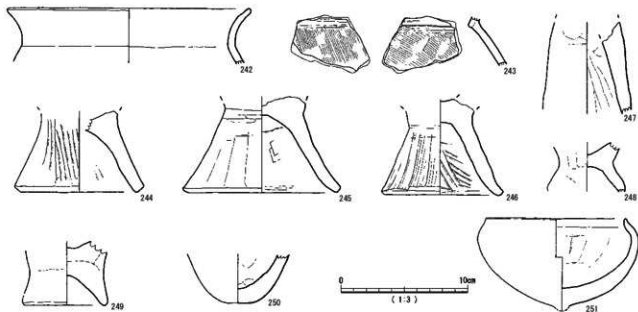
のユビナデ調整で、胴部との境界の屈曲部付近は横位のミガキ調整である。摩滅しているが、焼成は良好で作りも丁寧である。246の外側はカキアゲ状を呈する明瞭な縦位のハケナデ調整で、内側側は幅広の条痕状のハケ目が連続して加えられている。端部は器面の凹凸があり、部分的に外反の度合いが強い。

高坏形土器 (247)

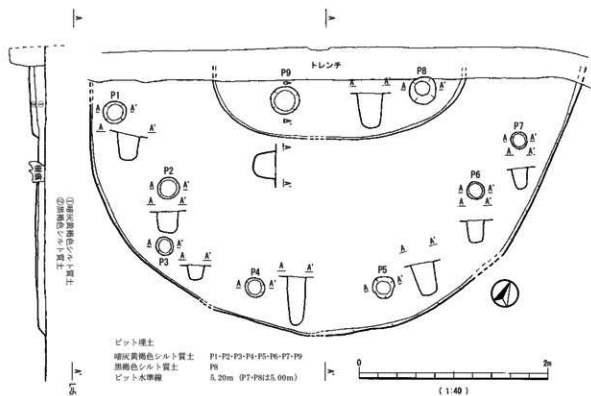
247は脚部片である。上部は剥落しており、残存状態はあまり良くない。外面上部は幅広の指頭押圧により表面に凹凸がある。内面には、筒状に成形した際の縦シワが数条みられる。

小型土器 (248~250)

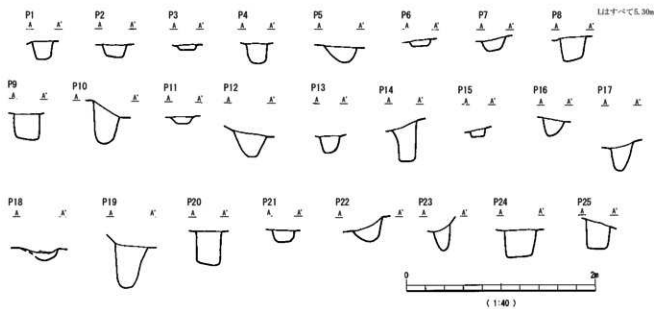
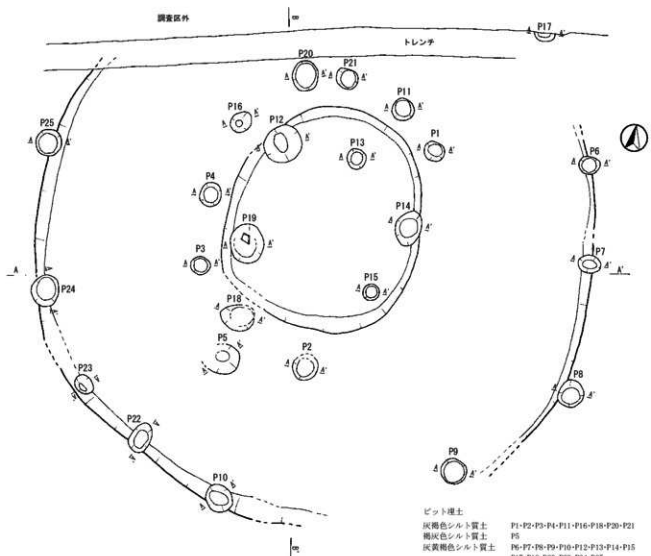
248・249は甕形土器の脚台である。248は、全体的にユビナデ調整で手握ね状を呈する。摩滅が激しく、胎土も



第45図 竪穴建物跡8号出土の土器



第46図 竪穴建物跡9号の平面図・断面図



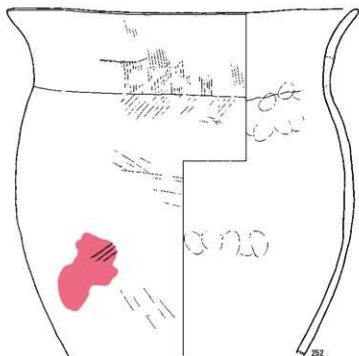
第48図 竪穴建物跡10号のビット配置図・断面図

粗い。249はわずかに括れるがさほど間かず、端部は丸い。

250は鉢形土器あるいは甕形土器で、平底となる。レンズ状の平底で、径は小さい。内外面は摩滅しており、内底面を中心に部分的に指頭押圧がみられる。

鉢形土器 (251)

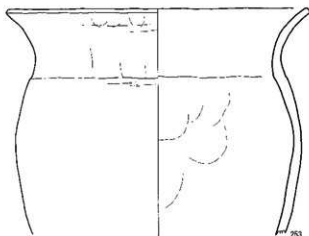
小型の鉢形土器である。肩部に最大径をもち、口縁部が内弯して短く立ち上がる。口径11.1cm、高さ6.8cmである。口唇部は丸く取められており、細い舌状を呈する。底面には、円形の突起が部分的に残存する。外面は摩滅しているが、内面は横位のミガキに近い丁寧なナデ調整である。



⑦竪穴建物跡9号 (第46図)

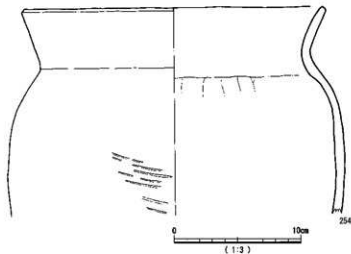
E-27区で検出された。竪穴建物跡10号が東側に隣接している。北側は用地外となり、検出されたのが全体の約半分程度である。上位が削平された平坦面で床面付近のみの検出である。残存範囲で長軸約5.2m、短軸約3mである。直径は約5mの円形を呈する。2段構造で1段目の深さは、約10cmで、長さ2.7mで、2段目の深さは約5cm程度である。ビットは、上段をめぐるように7基、下段に2基検出された。直径約15cm~30cmの円形を呈し、深さは約15cm~50cmである。主柱穴ははっきりしないが、下段の2本と、上段の回りをまわる構造も考えられる。P8とP9の間は1.5mである。張り出し部は、検出できなかった。

建物内から遺物はほとんど出土していない。



⑧竪穴建物跡10号 (第47図~第53図)

E-27・28区で検出された。北側は用地外へ延び、西側に竪穴建物跡9号が隣接している。残存範囲で長軸約6.0m、短軸約5.2mである。中央付近に直径2m程度の段を伴った2段構造である。深さは、1段目が約10cm、2段目が約20cmである。ビットは、内外周をめぐるように上段、下段に分かれて検出され、検出面で10基、1段目と2段目境付近で10基、2段目で5基検出された。径は10~30cmの円形を呈し、深さは10~50cmである。主柱穴ははっきりしないが、9号と同じように下段にある14・19の2本とまわりを円形にまわる構造も考えられる。14・19は径が28cmと38cm、深さが40cmと44cmあり、その間隔は1.8mである。



第49図 竪穴建物跡10号出土の土器 (1)

下段付近には、252～254、257、261、270などの甕形土器や甗形土器が集中して出土した。甕形土器を中心に比較的器形が復元できたものがあったが、いずれも胴部まで接合できたものはなく、全形はとられなかった。本遺構では、頸部で屈曲して胴部が膨らみ、底部に向かってすぼまる器形にバリエーションがみられる点と、広口甕が出土している点が特筆される。

甕形土器 (252～269)

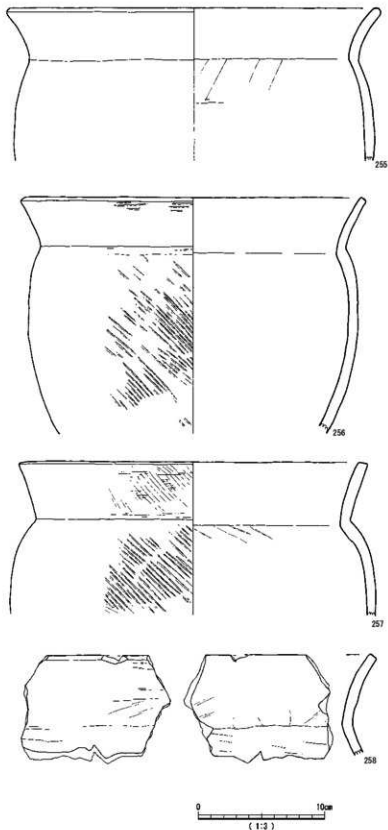
252～255は、頸部で緩やかに屈曲して口縁部が外反し、口唇端部が丸く収まるものである。肩部はあまり張らず、胴上半が最大径となっている。また、252・253は頸部から口縁部が長いのが特徴である。

252は全体的に器壁が薄く、口縁部が長く伸びる。頸部から口縁部にかけての屈曲度合い及び長さが一定ではないため、口唇部もゆがんでいる。頸部には粗いハケ目でカキアゲ状のナデ調整が施され、頸部にわずかな段が生じている。胴部は摩滅しているが、器面に掌手の平坦面が連続するため、タタキ成形と考えられ、部分的にタタキ痕と思われる筋状の凹みが4か所確認できる。また、頸部付近にはやや幅広の斜位のハケ目がみられる。内面は、頸部および胴部中に指頭押圧が連続しており、器壁が薄くなっている。胴部下半を中心に被熱痕がみられ、表面がただれたように剥離している。胎土には茶褐色の円礫が多量に露出し、金雲母が疎らに含まれる。

253は口唇部付近に指頭押圧が加えられ、つまみ上げるように口唇部が作り出されている。そのため、口唇部では屈曲の度合いが強くなる。内外面とも摩滅しており調整痕は不明瞭であるが、外面頸部はカキアゲ口縁状をなし、工具による細かい段が生じている。また、内面には楕円形の凹凸が複数切りあってみられ、タタキ成形の当て具痕と考えられる。また、胴部下半は被熱で赤変し、表面が剥離している。

254は頸部の屈曲内面にユビナデ調整が施されており、他の資料より肩部の張り出しが強い。口唇部はナデ調整により平坦面をもって外傾する。また、部分的に筋状に凹みが生じており、やや歪みがある。胴部外面には左上がりのタタキ痕が残存する。

255は、頸部内面に斜位のケズリ状の強めのナデ調整が施されている。内外面とも摩滅



第50図 竪穴建物跡10号出土の土器(2)

しているが、頸部内面の稜は明瞭である。

256～260は、頸部の屈曲が明瞭で、口縁部が直線的に外傾するものである。口唇端部はナデ調整により、平坦面を有する。

256は外面が細い左上がりのタタキ調整で、口縁部は水平方向のタタキ調整である。頸部は横位のナデ調整が通り、わずかに凹んでいる。内面は摩滅しているが、硬質で焼成は良好である。257は256と口径や調整、色調等は類似するが、257は肩が張る。口縁部のタタキ痕は、斜位のハケナデ調整によって部分的にしか残存しない。また、頸部内面にはナデ調整の工具痕が筋状にみられる。

258の口唇部はコの字形を呈し、頸部の屈曲は緩やかである。259は胴部外面に左上がり、口縁部に水平方向及び右上がりのやや幅広のタタキ痕が部分的に残存する。口縁部外面はナデ調整により、タタキ痕が不明瞭である。また、胴部内面には、水平方向に近いナデ調整の工具痕が筋状にみられる。260は、摩滅のた調整痕がほとんど残っておらず、口縁部外面に部分的に横位のタタキ痕がみられる。胎土や色調は、257や259に近い資料と考えられる。

261は口縁部が短く、わずかに外傾する。胴部の張りも弱く、胴部中位までほぼ最大径であり、底部付近ですぼまる器形である。口唇部付近は内外面ともナデ調整であるが、ゆがみがあり、厚みも一定しない。頸部は幅広のハケを押し当てるような強い縦位のハケナデ調整でカキアゲ口縁状をなしている。胴部外面はタタキ様の筋が縦方向に細長く入り、その上からケズリに近い強いナデ調整が加えられている。

262は緩やかに屈曲し、外反するものである。口唇部がナデ調整により外面側に張り出す。263は緩やかに外反するもので、258・262と同様の器形と考えられるが、頸部から口縁部までが比較的長い。口唇部はナデ調整により明瞭な平坦面が作出されている。

264は内弯する薄手の口縁部である。内外面とも摩滅により、調整は不明である。265は、外面にタタキ痕を有する胴部片である。屈曲は緩く、口縁部は直線状に外傾するものと考えられる。

266～269は脚台である。266は底部に向かって緩やかに開くタイプで、胴部との接合部分で剥落している。全体的に器面が赤く発色しており、被熱による可能性がある。胴部との接合面に沈線状の刻みが施されている。胴部との圧着を良くするためと考えられる。267・268は直線的に端部に開くもので、267は端部が明瞭な平坦面をなす。また、長石及び白色礫を多量に含む粗い胎土である。269は脚部が外膨らみになるもので、ユビナデ調整によるゆがみが大きい。胎土は軟質で、色調は明るい。

壺形土器 (270～287)

270・271は口縁部がラッパ状となる広口壺である。

270は色調が暗く厚手で、271は色調が赤みを帯び薄手である。270は、胴部が球状に張る大型の資料である。頸部に幅広の突帯が1条通り、斜位の押し状の刻みが施される。頸部からの立ち上がりは直線的で、口縁部が大きく外反する。口唇部はナデ調整により断面方形に仕上げられ、わずかに中央が凹む。器面が部分的に平坦面をなすためタタキ成形の可能性があるが、器面の摩滅によりタタキ痕は確認できない。頸部の突帯下には接合痕があり、内面側にユビナデ調整が集中している。焼成は良好で、丁寧な作りである。271は頸部から口縁部が広く、口唇部はナデ調整により平坦面をなし、筋状の凹みがある。外面には縦位のハケナデ調整が密に施され、頸部に小段が生じている。内面は、ほぼ摩滅している。271は事実確認しており、レイアウト確認後、遺構外で検出されたことが判明した。

272・273は断面が三角形に肥厚する口縁部で、272は頂点に浅い刻みを有する。胎土は、273は軟質だが、272は砂粒が目立ちやや粗い。

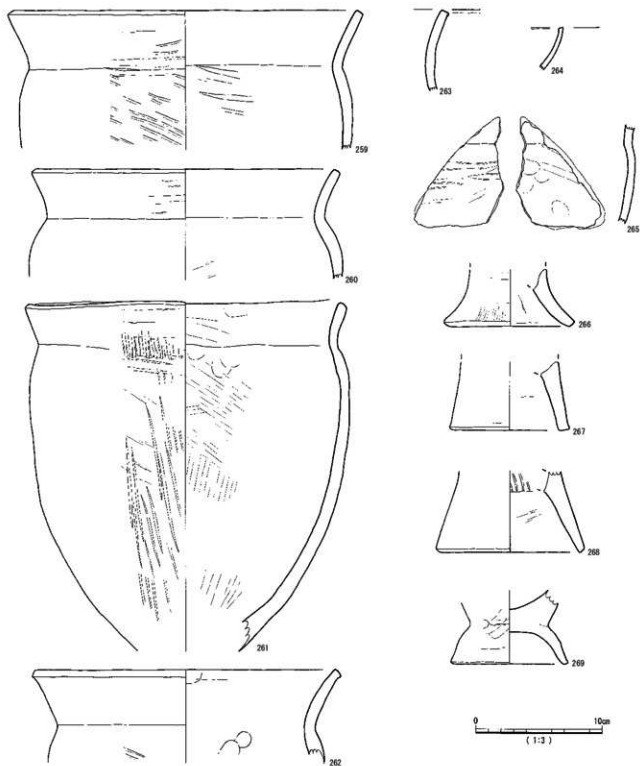
274・287は二重口縁壺で、口唇部はナデ調整で平坦面が作出されている。274は袋状口縁に近く、頸部は内外面ともユビナデ調整で成形され、屈曲はゆるく稜も弱い。287は屈曲部から直線的に内傾し、外面に浅い刻みが施されている。

275は頸部と考えられ、断面三角形突帯が1条通る。

276～282は突帯である。器形や厚みなどから、壺形土器に伴うものと考えられる。276～279は、断面カマボコ状の突帯にヘラ状の工具で刻みを施すものである。276は突帯上部に縦位のナデ調整、内面は部分的に指頭押圧が残る。胎土には、1～3mm大の赤褐色色粒を多く含む。277は幅広の粘土紐を貼り付け、斜位の沈線状の刻みを連続して施している。278は、厚みのある幅広の突帯を貼り付け、横位の沈線を2条施すことで3条突帯状をなし、位の沈線を2条施すことで3条突帯状をなし、さらに斜位の刻みを加えている。突帯上部に縦位のナデ調整、内面は部分的に指頭押圧が残る。胎土には、1～3mm大の赤褐色色粒を多く含む。279は丸みを持った突帯に右下がり刻みが施される。280は、刻みの深さと長さが一定ではなく、やや粗い。281は縦方向の刻みがある。282は断面が緩い三角形の突帯を貼り付け、押し状の刻みを施している。縦位のハケナデ調整後、突帯周辺は横位のナデ調整が施されている。胎土は白色・赤褐色の砂粒を多く含む、やや粗い。

283は胴部片であり、下端は接合面で剥落している。内外面とも摩滅しており調整は不明であるが、球状の胴部の成形方法が分かる資料である。また、胎土には角四石を多量に含む。

284～286は底部片である。284は丸底、285は尖底、286は平底である。284の外面には、わずかに右上がりのタ



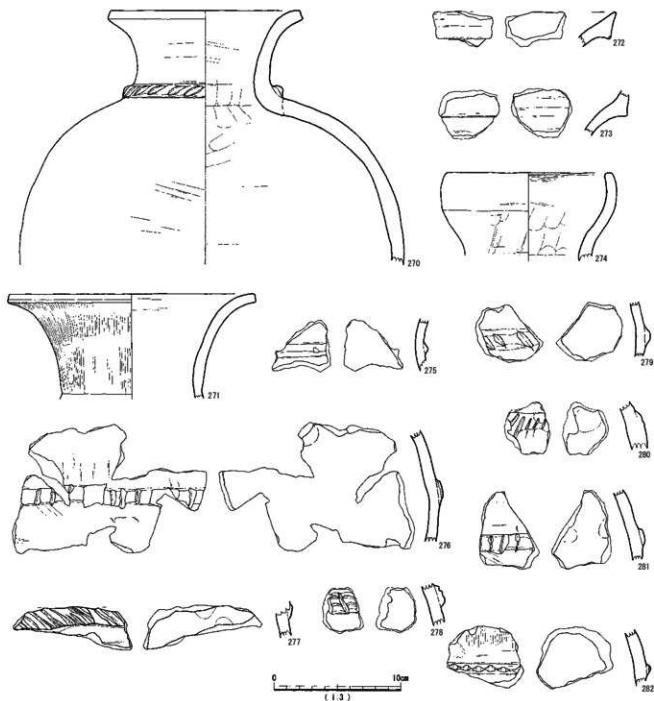
第51図 竪穴建物跡10号出土の土器(3)

キ痕が残存する。285は先端がこぶい尖底で、左右非対称である。胎土に白色の砂粒を多量に含む。286は底径は小さいが、厚みのため重量がある。

高环形土器(288・289)

288は坏部と脚部の接合部分の破片で、器壁は厚手だが

胎土は軟質である。脚部の内底面は、成形が粗く凹凸がある。289は上半が柱状に中実で、緩く底部に向かって開く。坏部との接合部で剥落しており、中実の部分はわずかにエンタシス状を呈する。内面の屈曲部下は、ハケ目が残存する。



第52図 竪穴建物跡10号出土の土器(4)

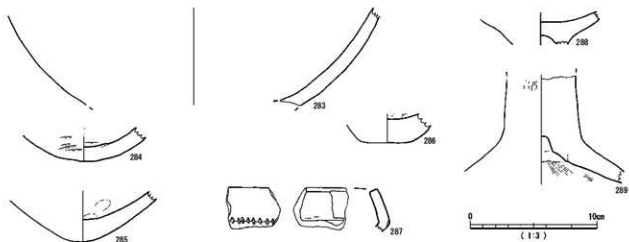
石製品(753)

砂岩製台石が出土している。厚さ7cm余りの表面が摩滅した大きい転石を使用しているが、三方が欠損している。上面に敲打痕が見られる。残存長21cm、幅17cmで、約5kgある。編集の都合で第110図にある。

台石の他に固化していないが、磨石様の自然礫2点と砂岩製砥石2点が出土している。砥石はともに不定形で1面を使用している。

⑨竪穴建物跡11号(第54図・第55図)

E-29・30区で検出された。北側は用地外へ延び、東側に竪穴建物跡12号が隣接している。長径約5.5m、短径約3.5mの円形を呈する。上面を削平されており、範囲の絞り込みをしようとする数cm下げたところ、上段の埋土が消失してしまった。破線で示したラインは、当初検出した際に略測していたものである。床面と柱穴と思われるようなピット・張り出し部は検出されなかった。中央は



第53図 竪穴建物跡10号出土の土器(5)

浅い土坑状に一段下がっており、土器や礫が集中していた。また、中央よりやや南東に略円形で焼土がブロック状にたまった範囲が見られた。埋土②(5mm大の焼土粒が多く混ざる。混ざり方は多少濃淡がある)に由来すると考えられる。

出土した土器はいずれも小片であった。

壺形土器(290~295)

290・291は、口縁部である。290は頸部に明瞭な稜をもち、口縁部が外傾する。口唇部はナデ調整で端部に平坦面を有し、内面側にわずかに肥厚する。口縁部は内外面ともハケナデ調整を主体とし、胴部外面は水平方向の幅広のタタキ痕が残る。厚みは異なるが、土器溜5出土の482に近い印象である。291は口縁部が長く、頸部の屈曲も緩い。外面は斜位のち横位のハケナデ調整で仕上げられているが、器面に緩やかな凹凸が生じているためタタキ成形の可能性もある。口唇部は平坦で、器壁も薄く丁寧な作りである。

292~295は脚台である。292は器壁が厚く、器形もゆがんでいる。外面は粗いユビナデ調整で、脚台内面は幅広のハケ目が複数切り合っている。293も器形にゆがみがあり、接合面も粗く残っている。294は底部が外反して開くタイプで、内底面の断面は台形状を呈する。底径に対し器高が低く、器壁は薄い。295は器壁が薄く、緩やかに底部に広がるタイプである。内外面とも摩滅しており内底面にわずかに横位のナデ調整が残存する。

壺形土器(296~299)

296~298は胴部突帯である。296は胴部最大径と思われる部分に横位の4条の沈線を施し、その後斜位の沈線を加えて突帯様の文様を描いている。土坑42号出土の440に類する。297はハケナデ調整を施した胴部最大径部分に、幅広で薄い突帯を巡らせている。内面は大ぶりの指頭押圧で器面に凹凸がみられる。298は胴部最大径よりやや上

位に幅広の粘土紐を貼り付け、その上位に横位及び縦位の沈線を施して多重突帯状にしている。外面には、斜位の細かいハケナデ調整が部分的に残っている。

299は底部である。丸底で、内面は摩滅している。

高坏形土器(300・301)

300は坏部で、坏の深さが低く口径が大きいものと考えられる。器壁は薄く、胎土は軟質で精製されており、砂粒をほとんど含まない。内外面とも摩滅し、器面が剥落している。301は薄手で小型の脚部で、穿孔が1か所残存する。外面は縦位及び斜位のハケナデ調整である。

小型丸底壺(302)

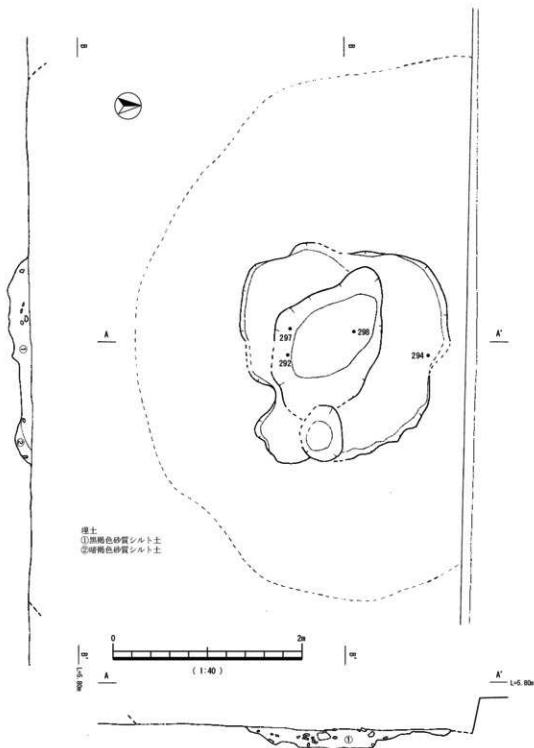
口縁部~胴部である。口唇部は細く舌状を呈し、頸部で屈曲し緩く膨らむ。胎土は軟質で精製されている。

免田式土器(303)

免田式土器の長頸壺の頸部付近と考えられる。上半は縦位及び斜位のミガキ調整で、屈曲部以下は横位の沈線に縦位の細かい刻み状の沈線が描かれている。沈線は、重弧文の端部の可能性もある。

④竪穴建物跡12号(第56図~第58図)

E-30区で検出された。北側は用地外へ延びている。残存部分で長軸3.2m、短軸約1.4mある円形の平面を呈する。南東側に幅約60cm、奥行約30cmの丸みを帯びた張り出し部がある。2段になっており1段目の深さは24cm、2段目は、16cmである。2段目の径は約210cmである。当初、北壁の壁面に半分かかる不整形プランを検出した。中央の落ち込みには楕円形に炭層やシルト層が広がる範囲があったが、通常の床のような硬化した状況が見られなかった。また、落ち込みの南壁には、おおよそ埋土④のシルト層の範囲に樹根がからんでおり、軟質で明確に立ち上がりをつかむことはできず、柱穴等も検出できなかった。北壁の状況からみて、当初埋土③・④を床とす

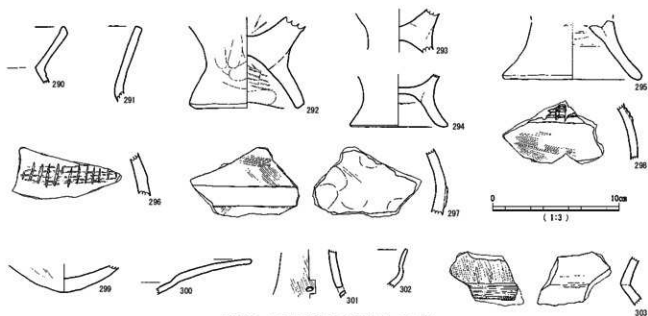


第54図 竪穴建物跡11号の平面図・断面図

る遺構があり、②が間層として埋まり、埋土①が掘り込まれたと想定される。段落ちした部分は床面が安定しておらず、中央に舌状の高まりがある。遺物は、検出時の輪郭ラインから北壁に向かって1段下がっている範囲から、菱形土器を中心としたやや大型の土器片が出土した。舌状の高まりを挟んで、西側に口縁～胴、東側に脚がまとまっている。

菱形土器 (304～320)

304～307は口縁部がわずかに内湾する。いずれも、口唇部内面が筋状に凹む。304は頸部内面の稜は比較的緩く、口唇部外面も丸みを帯びている。また、外面は被熱により黒変し、内外面とも器面はただれたように荒れている。305は口唇部が外傾し、内面側がやや張り出す。頸部は横位のナデ調整により、明瞭な稜が作出されている。



第55図 竪穴建物跡11号出土の土器

る。内面調整が良好に観察でき、口縁部～頸部は横位のナデ調整、胴部は斜位のハケナデ調整で、部分的に指頭押圧が横位に連続して施されている。306・307は口唇部がナデ調整により外面側にやや張り出し、口唇部下は横位のナデ調整により帯状に凹む。306は摩滅しているが調整が観察でき、外面は斜位のハケナデ調整後、口縁部から屈曲部下まで横位のナデ調整である。内面も同様に頸部は横位のナデ調整で、胴部は傾きの異なる斜位のハケナデ調整が連続して加えられている。307は頸部内面の稜がやや張り出し、段状になるもので、内外面の調整は他の資料に類似する。

308～313は口縁部片で、308・311・312は外傾、309は内湾、310・313は外反する。309は器形や器壁が薄い。稜線が緩く全体的に粗雑である。310は口唇部が平坦で外傾し、外面はカキアゲ状のハケナデ調整の後、頸部付近に横位のナデ調整が加えられている。311は口唇端部が丸く後も鋭いが、308・312は口唇部にわずかに平坦面があり、頸部の稜が明瞭である。313は内外面とも摩滅しており詳細な比較はできない。外面を中心に指頭押圧状の凹凸があり、口唇部にはゆがみがある。309・312は、胎土に赤褐色および灰色の砂粒を多く含む。

314は頸部に付された突帯である。断面かまほこ状の粘土紐を貼り付け、押圧状の刻みを施す。

315・316は体部と脚部の接合部である。315は胴部から底部へまっすぐ伸びて小さい平底の脇に脚台を貼り付ける形状で、底部近くは貼り付け易くはまっている。316は315と逆に厚い体部に薄い脚台を貼り付け、底部はやや大きい。

317～320は底部から脚台である。317の接合部は内側を補強して厚くしているが胴部は薄い。318の脚台端はコの字状となっている。319は高い脚台だが、薄い作りであ

る。320は低くて薄く、外へ広がっている。体部が外へ開きながら立ち上がっていることから、鉢形土器の可能性もある。

壺形土器 (321～324)

321は頸部に断面三角形の突帯が1条巡るもので、器壁は薄く、外面には水平及び右上がりのタタキ痕が残る。胴部が球胴状に膨らむ器形である。ただし、色調が黄褐色を呈する点や、頸部突帯が付く点が他の資料と異なり、搬入品の可能性がある。322は大型で長胴の壺形土器で、下部に緩い三角形の突帯が1条巡る。内外面とも摩滅しているが、外面に水平方向のタタキ痕が部分的に残存しており、器壁も薄い。胎土にやや大粒の砂粒が目立ち、3mm大の赤褐色粒が多く含まれる。また、2mm大の黒曜石様の黒色をしたガラス質礫を疎らに含む。323・324は小さな丸底である。内外ともヘラナデ仕上げである。

高坏形土器 (325)

325は坏部と脚部の境界を充填するソケット状の部分で、上面は坏部内面にあたる。

小型壺形土器 (326)

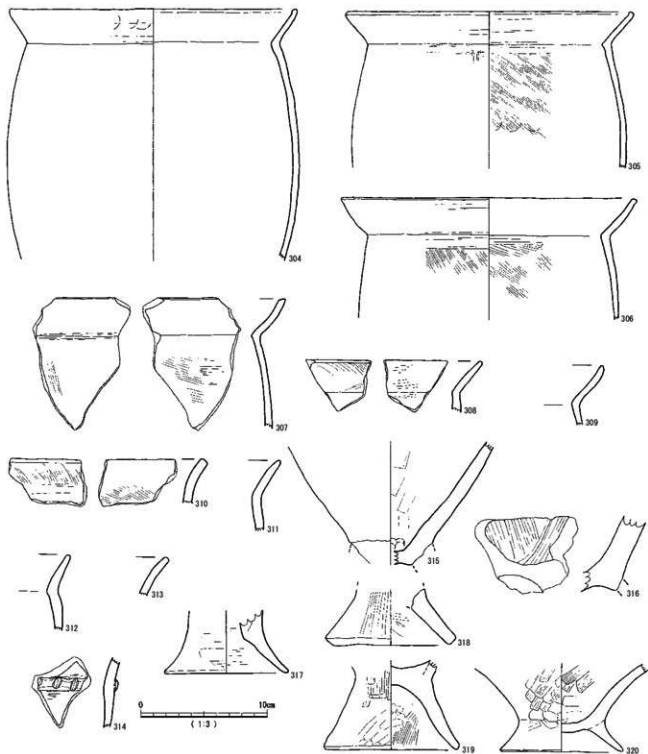
肩部から底部までが残存しており、底部は不安定な平底である。最大径は胴中央にある。外面・内面ともヘラ縦ナデを主とするが、外面にはハケナデがみえる。

鉄製品 (327・328)

327は扁平な無蓋鉄鏝で、六角形を呈している。長さ3.2cm、幅2.7cm、厚さ0.6cmである。328は扁平な棒状鉄製品で上下を欠いている。幅1.1cm、厚さ0.9cmである。

ガラス玉 (329)

青色を呈するガラス玉で、径0.4cmの球形を呈し、孔径は0.2cmである。



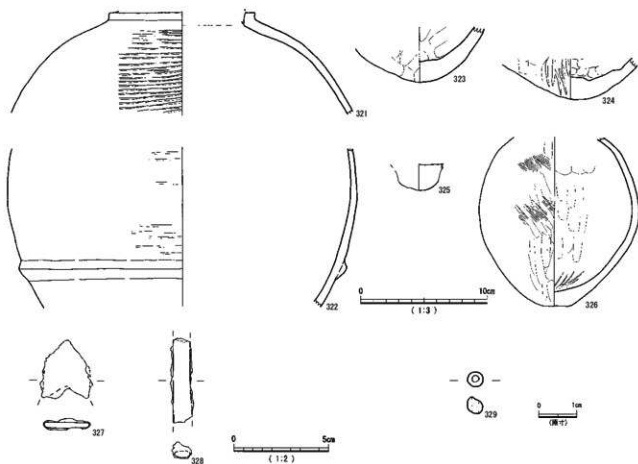
第57図 竪穴建物跡12号出土の土器(1)

で、粗いユビナデ調整で端部を成形している。器壁が厚手である。346は全体的に器壁も薄く、端部が舌状を呈する。また、胴部境界の屈曲部の径に対して底部が広く、台付鉢の台部の可能性もある。347は胴部との接合面で剥落しており、端部の内面は被熱により器面が荒れている。349はやや外膨らみになる器形で、器高は低い。胴部

との接合面で剥落しており、端部はわずかに丸みを帯びる。350は直線的に端部に広がり、底径はさほど大きくない。351は外面に屈曲部から掻き上げるようなハケナデ調整がわずかに残る。

壺形土器(352~390)

352・353はやや外反する短頸壺である。



第58図 竪穴建物跡12号出土の土器（2）と鉄製品・玉

352の外側は、頸部付近は縦位、口縁部付近は斜位のハケナデ調整が連続して加えられている。色調は明るく、長石や白色粒を多く含む。353は内外面とも摩滅しているが、赤みの強い色調でスリップ掛けしたような質感である。いずれも、口唇部は丸みを帯び、平坦面は明瞭ではない。

354～356・358は二重口縁壺である。いずれも屈曲部に刻みを有し、全体的に稜が緩く作りも粗雑である。354は屈曲部から口縁部までが短く、外面に水平方向のタキキ痕が残る。355はわずかに屈曲するが稜も緩く、ゆがみも大きい。354・356は浅い押圧状。358はハケ目が明瞭な工具での刻みが施されている。刻みの工具は、頸部のハケナデ調整の工具と同一である。

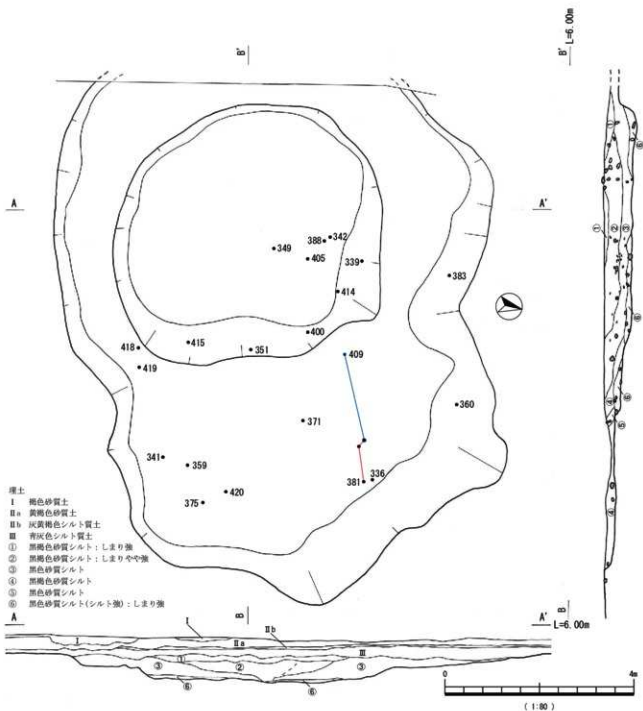
357は口縁部が断面三角形に肥厚しており、胎土は軟質である。

359の上端は擬口縁であり、本来は二重口縁ないしは肥厚する口縁であったと考えられる。外面は摩滅しているが下半にハケナデ調整が残っており、内面はケズリ後ナデ調整を主体としながら接合部を中心に縦位のユビナデ調整が明瞭にみられる。

360～366は頸部から肩部付近の破片である。

360～363は頸部に断面三角形の突帯を1条巡らせるもので、いずれも頸部内面には縦位のユビナデ調整がみられる。器壁は薄く、肩部が張って胴部が影らむ器形である。360は内外面とも摩滅しているが胎土は精製されている。361は肩部が張る器形で、頸部は口縁部への立ち上がり部分で剥落している。潤滑面の向きから、口縁部はほぼまっすぐ立ち上がるものと推定される。内面には緩い横位の凹凸が連続してみられ、ユビナデないしはタキキ調整の当て具痕の可能性はある。表面が361も375と同様に、内面は赤色の粘土膜が剥がれるように摩滅している。362は頸部で、突帯を1条巡らせ斜位の刻みで縄状を呈している。色調は赤みが強く、二重口縁壺の頸部と考えられる。363は、胴部内面に細かいハケナデ調整がみられる。365は肩部に円形浮文が施されている。366の肩部はハケナデのあと2条の横沈線に挟まれた列点文がある。

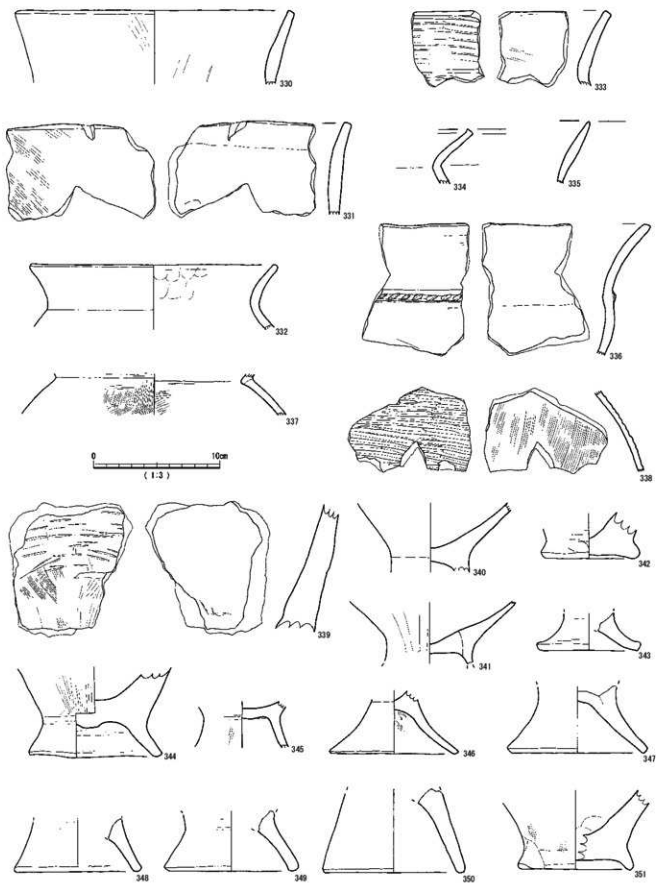
367～373、376～380は、胴部の突帯である。367は、土器跡7出土の566に類似する。368は、688に非常に近い形態である。内面は大ぶりの指頭押圧である。369・377は断面かまぼこ状の粘土紐を巡らせ、377は押圧状の斜位の刻みを施す。370～372は幅広で薄い突帯を貼り付けるも



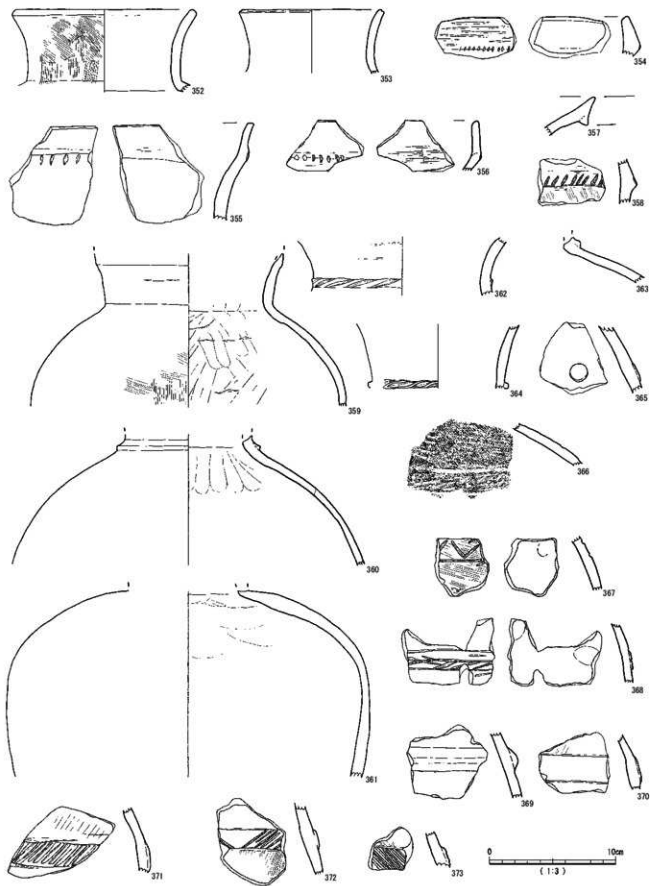
ので、370以外は浅い斜位の刻みを施している。372のように左右に展開するパターンもあり、バリエーションがみられる。374の外側は、ミガキ様の丁寧なナデである。また、内側は縦位のユビナデ及び指頭押圧により、器面に凹凸が生じている。硬質で焼成も良好である。胎土は黒褐色を呈し、表面のみ赤く発色する粘土を重ねたような断面を呈している。375は球胴状を呈する胴部で、底部付近に穿孔がみられる。穿孔は、外面側の剥離が広いた

め、内面側から空けられたと考えられる。内外面とも摩滅しており、内面は赤色の器面が膜状に剥離するようであり、赤色に発色する粘土を内面に使用していた可能性もある。また、下半は被熱により赤変している。二重口縁壺に特徴的な赤い色調で、胎土には長石及び白色礫を多量に含む。

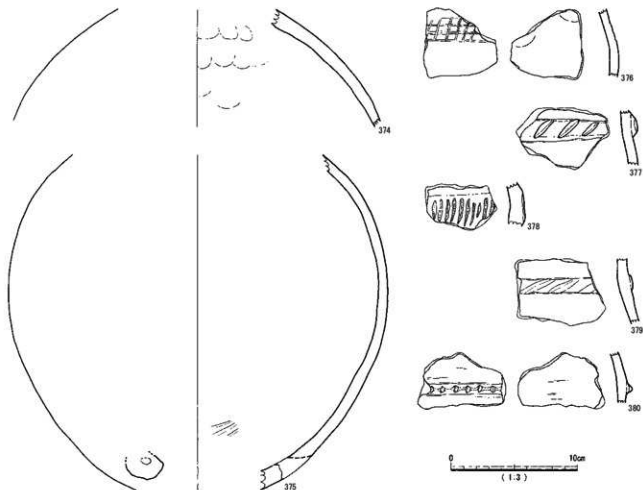
376は沈線で罫歯状ないしは格子状の文様を描き、突帯状を模している。377・379は突帯に左下がり刻みが施さ



第60図 竪穴状遺構出土の土器(1)



第61図 竪穴状遺構出土の土器(2)



第62図 竪穴状遺構出土の土器（3）

れている。378は、肥厚した部分に縦位の沈線状の粗い刻みを施している。380は、幅が狭く断面三角形を呈する突帯の頂部にやや深い刻みを施している。

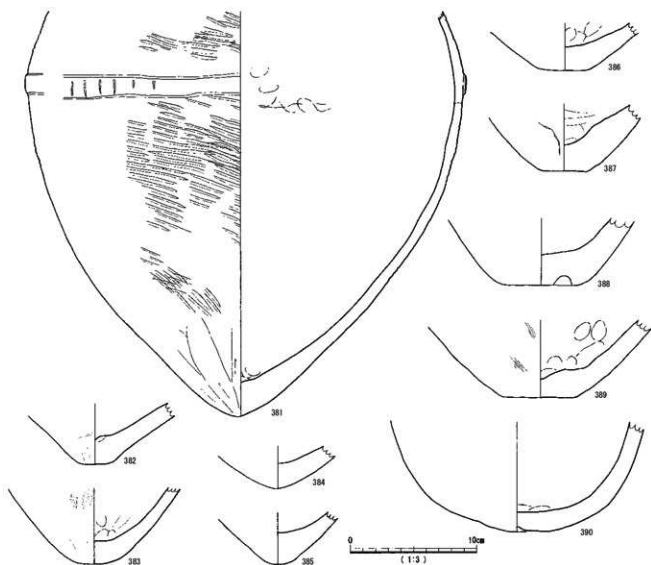
381は、比較的器形が復元できた資料である。胴部最大径に幅で薄い突帯を巡らせ、刻みを施している。突帯上の刻みは、摩滅のため部分的にしか残存しない。胴部外面には左上がりのタタキ調整が連続して加えられ、器壁は薄い。また、底部付近はケズリ後ナデ調整で尖底をなす。内面は突帯裏面に指頭押圧やユビナデ調整が集中し、内底面に指頭押圧が部分的にみられる。下半はスス痕が黒斑状をなし、内外面とも器壁がただれており、被熱によるものと考えられる。大きさに対し、器壁が非常に薄いのが特徴である。

382～390は底部で、382はレンズ状の丸底、383は尖底に近い丸底、384・385は尖底、386～389は平底、390は丸底である。内底面付近は指頭押圧が目立ち、胴部はナデ調整である。特に、389は内底面付近の指頭押圧が深く、明瞭である。383は外面調整が比較的残存しており、ケズりに近い工具ナデの後、ハケナデ調整が加えられてい

る。384・385は色調が赤みを帯び、385は胎土に長石及び白色の角礫を多量に含む。386は胎土が粗く、2～5mm大の白色円礫を多く含む。387・388は器壁が厚く、388は底面に1.5cmほどの略円形の凹みがあり、種実等の圧痕と考えられる。390は底面に凹みがあり、礫などが当たった可能性がある。

高坏形土器（391～407）

391～398は坏部である。391・394は口縁部が広く外反し、口縁端部がほぼ水平になる。屈曲部は段状になり、下部が緩く影らむ。いずれも屈曲部下はケズリ後ナデ調整で、内面には帯状のスス痕があり、蓋として転用されていたことが分かる。調整や器形等が類似しており、同一個体の可能性がある。394は外面にわずかにタタキ痕がみられる。392・393は器壁が薄く丁寧なつくりで、392は口唇部がナデ調整により溝状に凹み、屈曲部の接合面で剥落している。内外面とも摩滅しているが、内面にわずかにハケナデ調整が残っている。393は口唇部が舌状を呈し、内面は細かいハケナデ調整が施される。軟質で、赤色粒を多く含む精製された胎土である。398と同一個体と



第63図 竪穴状遺構出土の土器（4）

考えられる。395・396は坏部の屈曲部片で、396は屈曲部に刻みが施されている。395は丁寧なつくりで、外面の屈曲は横位のナデ調整によってつまみ出されるように作出されている。また、内面上半はミガキ様の丁寧なナデ調整である。397は径に対して器壁は厚く、屈曲部は段状になって口縁部が外反する。

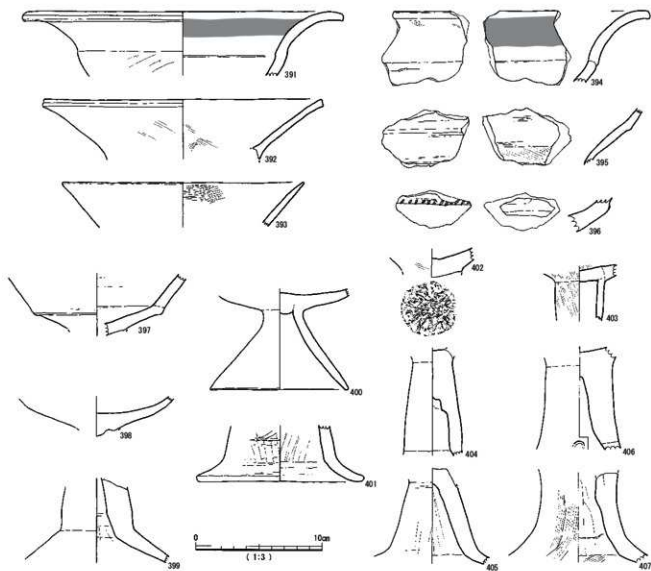
399～407は、脚部である。399・407は坏部との接合面で剥落しており、脚部を筒状に成形していることが分かる。また、器壁は厚手である。400は薄手でスカート状に開き、端部は丸みを帯びる。接合面から、筒状に成形した脚部に粘土を充填し、塊状の坏部と接合していることが分かる。色調が明るく、胎土は軟質で精製されている。401は裾部付近で強く屈曲して開くもので、胴部外面は縦位の工具ナデ、内面はケズリ調整で成形され、横位

のナデ調整により裾部の屈曲部が作出されている。402は坏部と脚部の接合面で剥落しており、脚部側に放射状の刻みが施されている。接着をよくするために施されたものと考えられる。

403は筒形を呈する薄手の脚で、胎土は軟質で精製されている。外面は斜位の細かいナデ調整であり、接合面が特徴的である。また、坏部と脚部との接合面には、刻みが施されている。404はエンタシス形を呈する脚部で、内面上部はヘラ状工具で調整した痕が渦巻状を呈している。下端にわずかに屈曲部が残る。

405～407は裾部が広く開くタイプと考えられる。

406は器壁が厚く、脚部が緩やかに広がるもので、端部に穿孔が部分残存する。407は脚部全体が外反する器形である。407は全体的に調整が粗く、内面は筒状に成形した



第64図 竪穴状遺構出土の土器(5)

際の縦シワと接合痕が明瞭である。外面及び内面端部付近は、ハケナデ調整である。

蓋形土器(408・409)

408は小さいつまみである。409は裾部に向かって直線的に広く開く器形で、端部がわずかに外反する。端部はナデ調整で平坦面を作出し、ややゆがみがある。つまみ状の把手があったと想定されるが、欠損している。外面は調整が部位異っており、上部はケズリに近いナデ、中位以下は斜位のハケナデ調整後ナデ調整である。内面は、把手に近い部分は指頭押圧が連続してみられドーム状を呈する。また、下半は横位・斜位のハケナデ調整後、暗文状にミガキ調整が加えられている。また、内面には幅広く帯状にスス痕がみられる。

鉢形土器(410・414・415)

410は薄手で平底の底部で、マリ形に近い胴張りの器形と想定される。内面には、幅の広いハケナデ調整が施さ

れている。また、胎土に角礫状の長石を多量に含む。

414は粗いユビナデ成形の把手状の底部が付くもので、蓋形土器の可能性も考えられるが、口径に対し器高があり、弯曲するため鉢形土器と判断した。外面が部分的に平坦面状をなし、筋状の調整痕がみられるため、タキキ成形の可能性もある。口径部は舌状を呈し、口縁~胴部にかけては丁寧なつくりである。

415は器壁が厚く、口径、器高に対して脚部径が大きい。接合痕からも、丸底の鉢に短い台状の脚が付くものと想定される。脚部の接合面には、縦位のユビナデ調整が連続して加えられている。口径部は横位のナデ調整により外面側が緩く凹み、口径部は平坦面が作出されている。

免田式土器(411~413)

ソロバン玉状の器形を呈する小型壺形土器の肩部で、それぞれ細点線の文様が描かれている。

411は櫛状施文具で圏線が引かれ、その間に縦方向ヘラ刻みが施されている。412は下に圏線を引いたあと、縦方向のヘラ沈線が施され、その上に下向き重弧文が描かれている。413は細沈線の上向き櫛描波状文が描かれた破片で、中九州などで出土する長胴の大型壺の肩部文様に類似する。胎土に1mm大の細かい赤褐色粒を多く含み、やや軟質である。

円盤形土製品 (416・417)

土器を打ち欠いて円盤形とした土製品で、直径はおおよそ416が5.5cm、417が6.5cmである。

石製品 (418・746 (第109図))

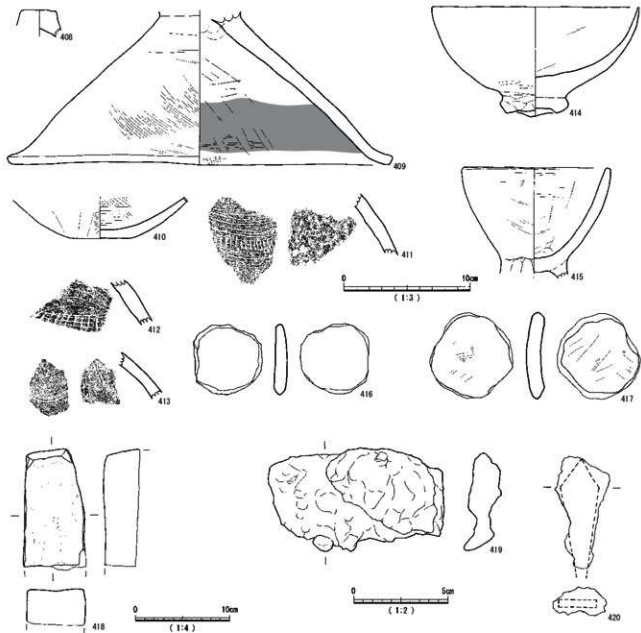
418は砂岩製砥石である。最大長12.4cm、最大幅6.3cm、

厚さ3.9cmの直方体を呈し、表面を使用している。重さが602gある。

746は砂岩製の楕円形をした敲石で、短軸の一面を使用し、その衝撃で一部を欠いている。最大長13.2cm、最大幅7.5cm、最大厚4.6cmで、重さは470gある。

鉄製品 (419・420)

ともに錆化が進んで元の形がわかりにくい。419は両方が欠けており、幅は、4.5cm程度で、厚さ0.7cmほどの薄いものと思われる。420は圭頭鎌と思われるが、先端部がはっきりしない。基部は欠けているが断面は径0.8cmほどの円形をしている。



第65図 竪穴状遺構出土の土器(6)と石製品・鉄製品

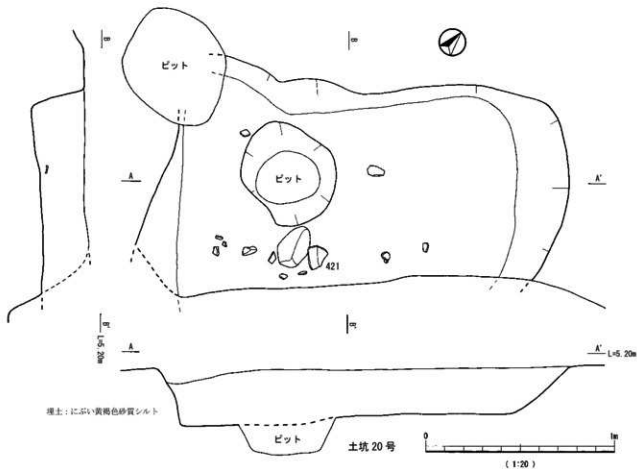
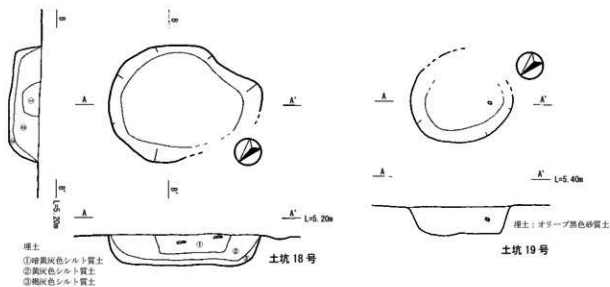
3) 土坑

26区から30区にかけてのⅡc層で33基の土坑が検出されている。小さな円形のものや直径2.5mもある大きなもの、方形のものなど形状・大きさが様々である。多くの土器が入ったものもあるが、小破片しかないものが多い。

当遺跡では、土坑がA地点で5基（古墳時代4基、古代1基）、B地点で12基（古墳時代2基、近世・近代10基）検出されているため、本報告書では番号を連番とし、18号から始める。

①土坑18号（第66図）

D-26区の西側露面から河岸段丘状に上がった面で検



第66図 土坑18号～20号

出された。西側の一部は近世のピットにより削除され消失している。平面は、約80cm×60cmの東西に長い楕円形を呈する。断面形は、深さ約16cmの平底ナベ形を呈する。検出面中央付近に赤橙色の焼土がある。

土器片も混在するが、小片のため詳細は不明である。

②土坑19号(第66図)

D-26区で検出された。南東側に近接して竪穴建物跡6号が位置する。南側は造成土や樹痕により消失しているが、平面は、径50cm程度の円形に近い形を呈すると思われる。断面は、深さ15cm程度の深皿形を呈す。

遺物は、土器小破片1点のみである。

③土坑20号(第66図・第67図)

C・D-26区で検出された。平面形は、東側に隣接している竪穴建物跡5号に切られているため、全体形が不明だが、約1.1m×2.2mの隅丸方形に近い形状を呈する。断面形は、深さ25cmで、平底のナベ形を呈する。

遺物は、床面よりやや上位で土器や礫が出土しているが、量的には少ない。土器片は検出面から小片が点々に入り、床面から5~10cm上のレベルでやや大きめの破片

が出土している。

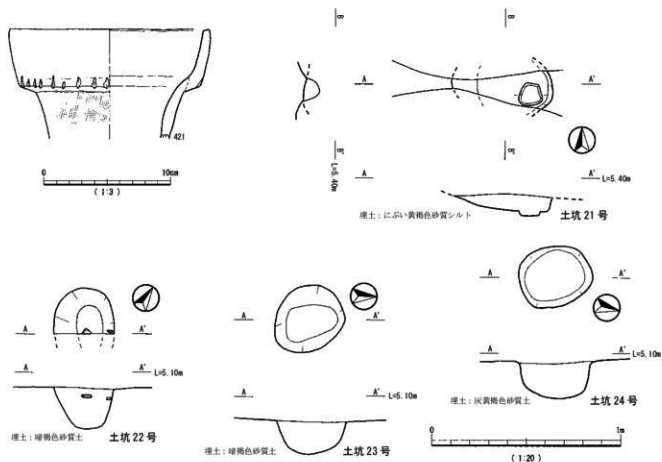
421は口縁直径16cmの二重口縁壺形土器である。細いくびれ部から外へ広がり、やや内反ぎみに立ち上がっている。口唇部は平坦面をもち、やや内傾する。内外面とも摩滅しているが、頸部外面にわずかに縦位のハケナデ調整が残存する。また、屈曲部外面にはへら状工具による鋭い刻みが施される。胎土には、2~3mm大の白色礫を多量に含む。色調は赤みが強く、他の二重口縁壺と共通する。土器溜7出土の550に類似するが、接合できなかった。

④土坑21号(第67図)

D-26区で検出された。南側の竪穴建物跡5号と北側の竪穴建物跡6号の間に位置し切られているため、ごく一部しか残っていない。土手状に残存しており、部分的に色調が異なっていた。平面形は、不明であるが、東側に径12cmの浅いピットがある。断面は、深さ10cmで、平底のナベ形を呈する。

⑤土坑22号(第67図)

D-27区で検出された。上下水道管理設のため、南側



第67図 土坑20号出土の土器と土坑21号~24号

の半分は消失しているが、平面は短径約30cm×長径50cmほどの楕円形を呈すと考えられる。断面形は、深さ20cm程度の丸底である。

遺物は、土器片2点のほかには土器小破片が混在していた。

⑥土坑23号 (第67図)

D-27区で検出された。東側には、土坑22号が隣接する。平面は、径35cm程度の円形に近い形を呈する。断面は深さ約15cmで、ボウル状の丸底を呈する。

遺物は出土していない。

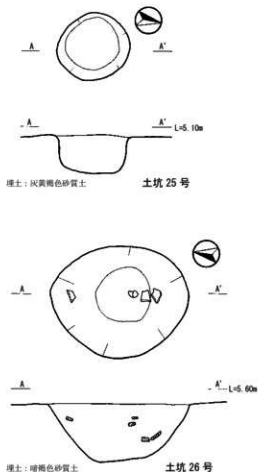
⑦土坑24号 (第67図)

D-27区で検出された。南側に、土坑25号が隣接する。平面は、径約35cm程度の円形に近い形を呈する。断面形は、深さ20cm程度の丸底である。

遺物は出土していない。

⑧土坑25号 (第68図)

D-27区で検出された。土坑22号と土坑24号の間に位置する。平面は、径40cm程度の円形に近い形を呈する。断面は、深さ20cm程度で、浅いナベ形を呈する。



遺物は、土器小破片が含まれていた。

⑨土坑26号 (第68図)

D-27区で検出された。多くの樹痕が近接する。平面は、約75cm×60cmの楕円形を呈する。断面は、深さ30cm弱の深ナベ形を呈する。

遺物は、土器小破片が出土した。

⑩土坑27号 (第68図)

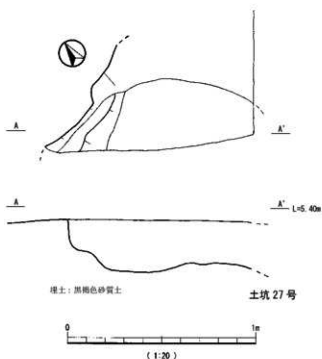
C-28区で検出された。上下水道管埋設により南側・西側など消失している部分が広く、北東側のみの検出のため全体形は不明である。断面は、17cmと27cmの2段階の落ち込みが確認できたが形状は不明である。

遺物は、土器小破片のみである。

⑪土坑28号 (第69図)

D-28区で検出された。北側に近接して竪穴状遺構、西側に土坑29号が位置する。平面は、径30cm程度の円形を呈し、断面は、深さ15cm程度の丸底である。

遺物は、高環形土器の破片が中心部やや上部にまともって2点出土しており、埋設された可能性がある。また、埋土中には、拳大の大きさの自然礫も混在してい



第68図 土坑25号～27号

た。高環形土器はともに脚部の筒部から裾部への破片である。422は下へやや開く筒部で、屈曲して裾部へ広がる。4か所に円形の穿孔があるが、1孔は未貫通で、内側はふくらんでいる。423も422と似た器形だが、筒部はやや直立ぎみである。脚端の直径は13.8cmある。穿孔は3か所で、外から内へ穿っている。422、423ともヘラナデ調整である。

⑫土坑29号（第69図）

D-28区で検出された。南東側には、土坑28号が隣接する。平面は、径40cm程度の円形を呈する。断面は、深さ約35cmの深ナベ形を呈する。

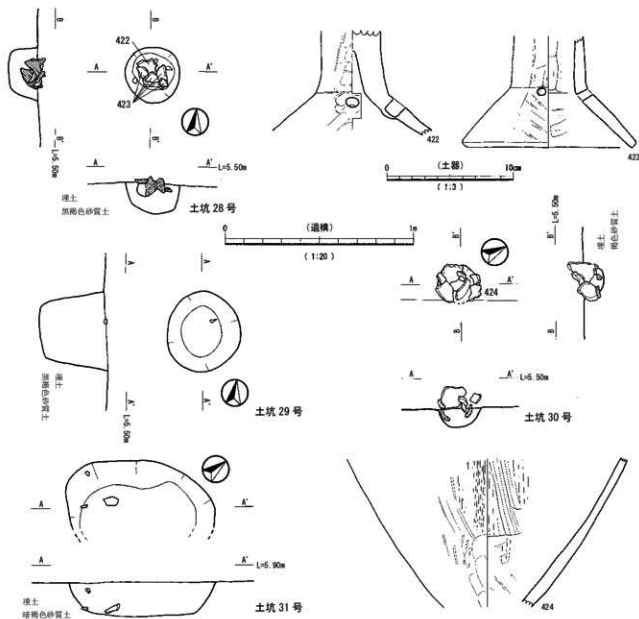
埋土中には、摩滅した土器小破片が混在していた。

⑬土坑30号（第69図）

D-28区で検出された。上下水道管理設のため、東側の一部がわずかに消失しているが、平面は、径20cm程度の円形を呈する。断面形は、深さ約10cmの浅い丸底を呈する。

遺物は、比較的大きい古墳時代の土器が土坑の壁面を覆うように出土した。これらを接合したのが424である。寛形土器の胴部下半部で、硬質に焼けている。脚台が付く器形だと思われる。

外面はハケナデのあと丁寧なヘラの縦ナデ、内面は条痕状の粗いハケ縦ナデで仕上げている。にぶい赤褐色を呈している。



第69図 土坑28号～31号と土坑28号（422・423）・30号（424）出土の土器

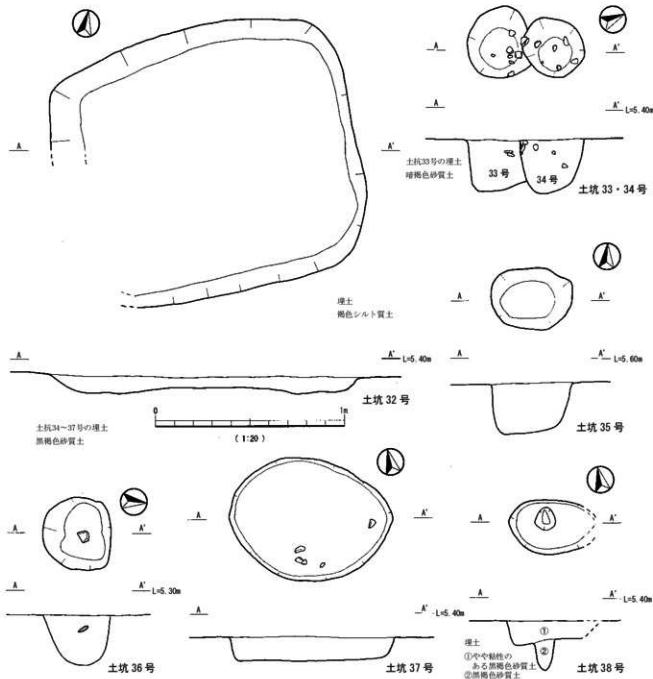
⑭土坑31号 (第69図)

D-28区で検出された。上下水道管理設のため、南東側の半分は消滅しているが、平面は、約80cm×60cmの楕円形を呈すと考えられる。断面は、深さ20cm程度の深皿形を呈す。

埋土中に、小礫等は混在していない。

⑮土坑32号 (第70図)

E-28区で検出された。南西側の一部は攪乱により消失しているが、平面は約1.4m×1.8mで東西方向を主軸とする長方形を呈する。断面は、深さ約10cmで底面がやや凹凸となる平底のナベ形を呈する。



第70図 土坑32号~38号

⑯土坑33号・34号 (第70図)

E-28区で検出された。ともに径が30cm程度の円形を呈し、土坑34号が土坑33号を切っている。断面形ともに丸底で、深さも30cm程度と似る。埋土は、ほぼ同じで、34号がやや濃い。

埋土中には、図化した以外にも摩滅した土器小破片や小礫が混在していた。

⑰土坑35号 (第70図)

E-28区で検出された。平面は、約40cm×30cmのややいびつな楕円形を呈す。断面は、深さ30cm弱で、深ナベ形を呈す。

埋土中には、摩滅した土器小破片や小礫が混在していた。

④土坑36号（第70図）

E-28区で検出された。土坑35号が南側に隣接している。平面は、径約36cmの略円形を呈する。断面は、深さ約26cmの丸底形を呈する。

埋土中には、図化した以外にも小礫・土器小破片が少量含まれている。

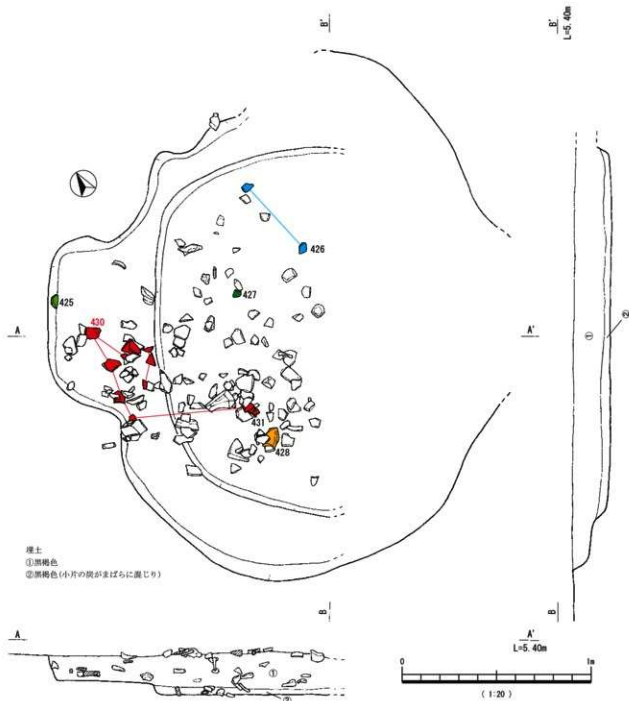
④土坑37号（第70図）

E-29区で検出された。土坑38号と東側で、土坑39号と南側で隣接する。平面は、約90cm×60cmの楕円形を呈する。深さ15cm程度で、底面は平らである。

埋土中には土器小破片があるのみである。

④土坑38号（第70図）

E-29区で検出された。土坑39号と南側で隣接する。東側は覆土により消失しているが、平面は、約50cm×30



第71図 土坑39号

cmの楕円形を呈する。中央付近に径12cm、床面からの深さ約20cmの小ピットがある。

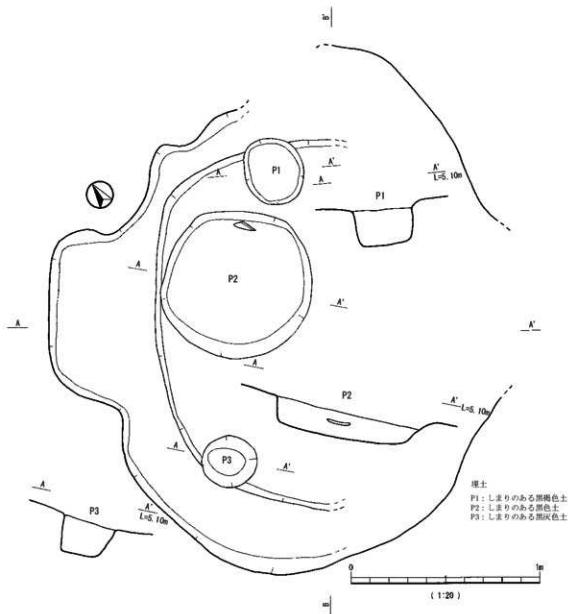
②土坑39号（第71図～第73図）

E-29区で検出された。土坑37・38号と北側で隣接する。東側は道路の緑石等により消失しているが、平面形は、径が約2.8mの円形を呈すと思われる。西側には幅0.9m、奥行0.4mの方形の張り出し部がある。2段構造となり、一辺が0.9mある隅丸方形の下段といびつな円形の上段に分かれ、上段の深さが10cm、下段の深さは上段から4cm程度である。また上段は一部消失しているため、河川堆積等の何らかの作用を受けた可能性が高い。埋土は単層で、上段と下段の境目が検出しづらかったが、下段のみ径が1mm程度の極小の炭化材片がまばらに混ざる

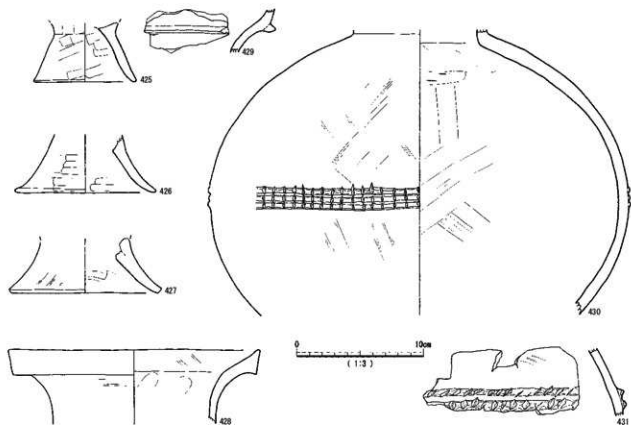
状況がみられた。東側の下段は、河川堆積等の影響のため消失した部分が多く、上段の上場のみしか検出できなかった。完掘時、下段内にピット3基を検出した。いずれも下段の東側にあり、張り出し部近くにある大きなピットは径0.8mほどの円形を呈し、深さが14cmある。その両側にあるピットは直径が30cmほどの円形を呈し、深さは約18cmである。ピットの形状や位置などから、本土坑との関係は不明であるが、埋土から時期差はあまりないと考えられる。張り出し部とピット・大型ピットの配置から竪穴建物の入口構造とも考えられる。

西側には多くの土器破片が散布している。

425～427は壺形土器の脚台である。脚台端の直径は8～12cmで、高さは約4cmである。425・427は胴部との貼り付け部が残っている。

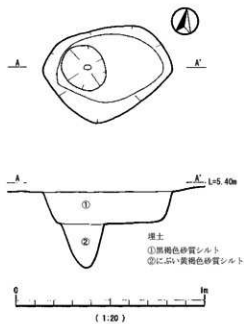


第72図 土坑39号のピット配置図



第73図 土坑39号出土の土器

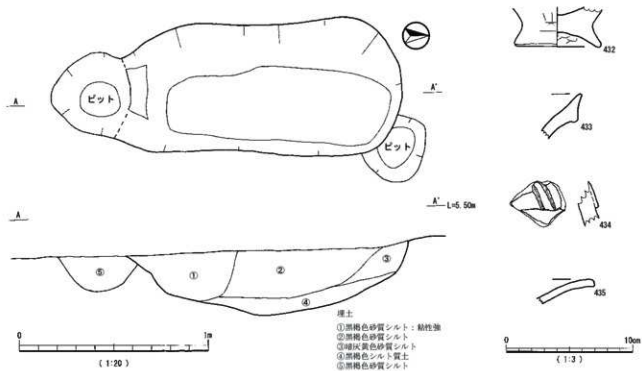
428～431は壺形土器である。428は強く外反し、端部が上下に広がり、幅広くなっている。口縁直径19.8cmである。429は口縁端を欠いているが、口縁下部に舌状の貼り付け突帯のある二又状口縁部である。ともに摩滅が目立つ。430は最大径33.5cmの、頸部から胴部の破片である。丸みをおびた器形をしており、頸部から口縁部へは強く屈曲している。最大径部分に3条の三角突帯があり、その上に縦方向のヘラ刻みがある。幅広突帯を付けたあと、2条の圏線を引き、そのあと刻みを施している。431も左下がり斜め方向のヘラ刻みのある三角突帯がある胴部である。428・430・431は浅黄橙色を呈している。744は、厚さ1.7cmの扁平な川原石を使用した磨石である。最大長8.5cm、最大幅7.5cmのおむすび形をしており、三方のやや突出した部分を中心に使用しており、三方以外の部分にも一部使用痕が見られる。砂岩で、重さは182.5gである。751は、最大長16cm、最大幅9.5cm、最大厚9.25cmの花崗岩（天草石）製砥石である。表裏と側面の三方を深く使い込んでおり、薄くなった部分もある。編集の都合で図は第109・110図にある。



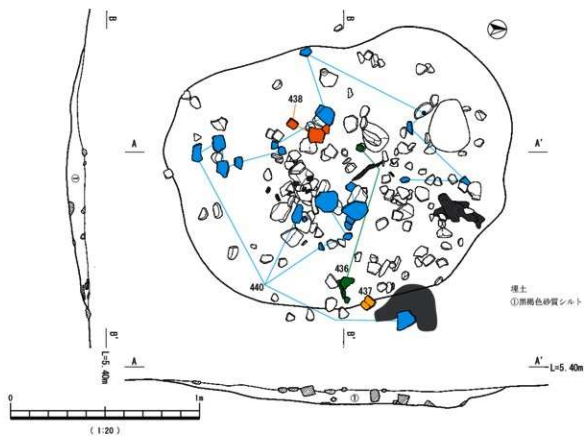
第74図 土坑40号

②土坑40号（第74図）

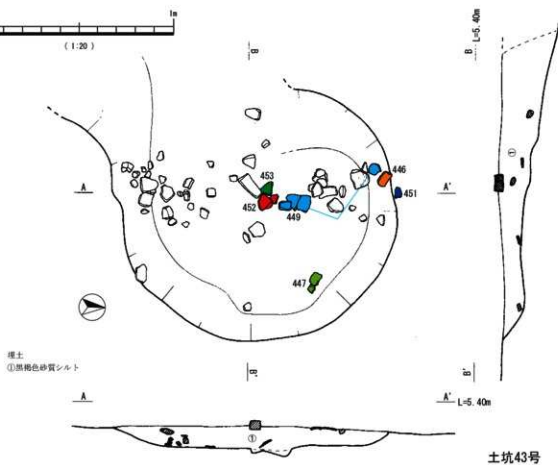
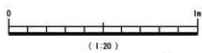
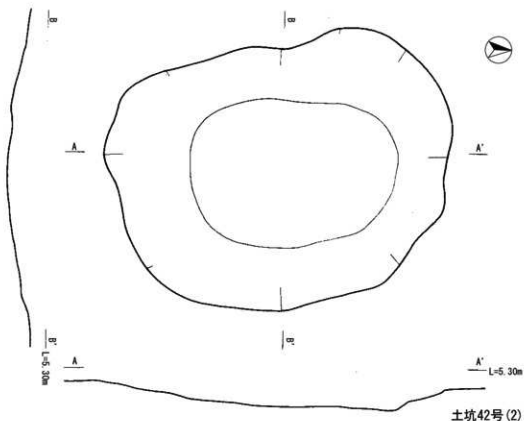
E-29区で検出された。平面は、約70cm×50cmのややいびつな楕円形を呈する。断面は、深さ約16cmの浅い皿状を呈する。床面で径25cm、深さ23cmの円形のピットが



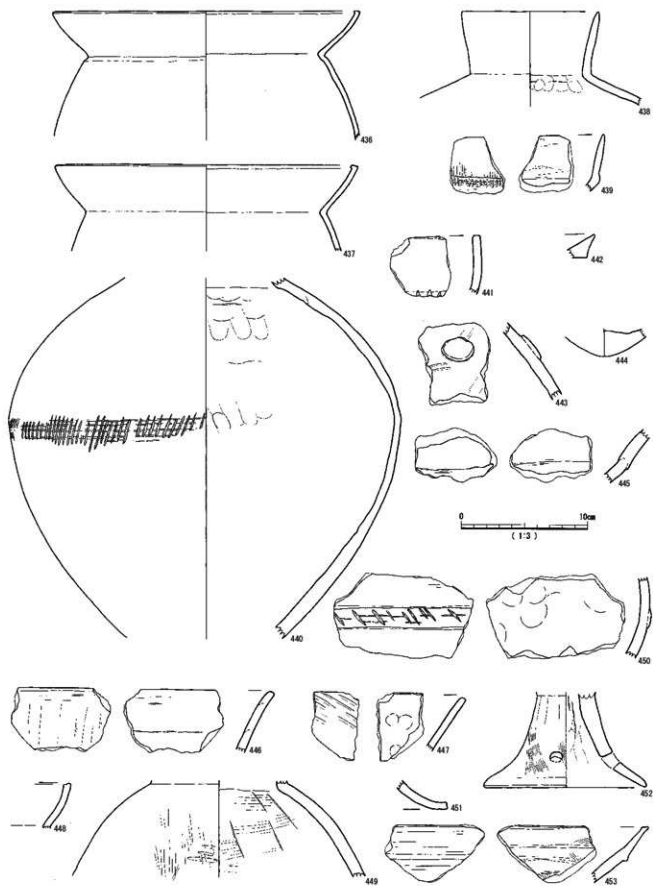
第75図 土坑41号と出土の土器



第76図 土坑42号(1)



第77図 土坑42号(2)・43号



第78図 土坑42号・43号出土の土器

検出され、下位はど色調が明るい。

竈土坑41号 (第75図)

D・E-29区で検出された。平面は、南側のピットと切りあっているため、全体形は不明であるが、約0.7m×1.4mの不定形な長楕円形を呈する。断面形は、検出面からの深さ約35cmで、深皿形を呈する。中から土器の小破片が出土している。

432は径が7cmの甕形土器脚台で、脚台高が2.5cm余りと低い。外面は比較的丁寧な作りであるが、脚台内面は連続したユビナデ調整で器面に凹凸がある。胎土に5mm大の灰白色の角礫を疎らに含む。433は二重口縁壺の口縁部で、軟質で砂礫が少ない精製された胎土である。434は、幅広で薄い突帯に、ヘラ状工具で2条の鋸歯状の刻みを施している。435は、口が広く開くタイプの高坏形土器の口縁部と考えられる。口縁端部はナデ調整により、平坦面を有する。

竈土坑42号 (第76図～第78図)

D-29区で検出された。平面形は、約1.8m×1.4mで、ややいびつな楕円形を呈する。断面形は、深さ約8cmの浅い皿状である。

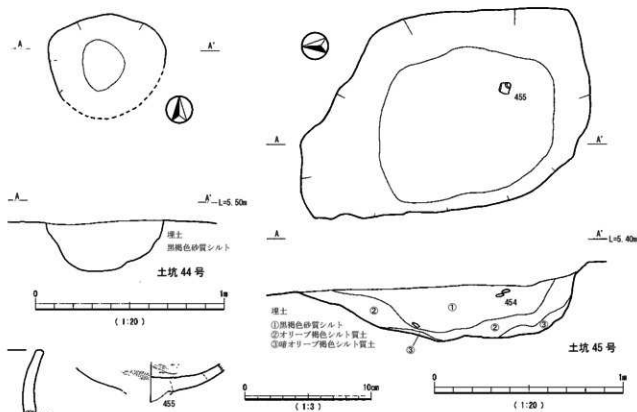
遺物は、古墳時代の土器が比較的大きい破片でまともに出土した。比較的残りの良い炭化材も中心部にま

とまり、土器片も周囲より大きい破片を伴っていた。ただし、埋土中には礫が混ざっており、土器片も一個体にはまともでないため、窪地状の部分に溜まったか、廃棄したものと考えられる。炭化材2点について、放射性炭素年代測定を実施した。年代は、弥生時代後期から古墳時代前期頃とやや時間幅のある結果となった。また、炭2点について、樹種同定を実施した。その結果、タイムンタチバナという広葉樹材であることが分かった。

436・437は、いずれも、口唇部が内面側に張り出す。436は頸部外面に横位のヘラケズリ状の調整が加わり、面をなす。内外面とも摩滅しているが、焼成は良好で、硬質である。

438・440は壺形土器である。438は口縁部が直線的に外傾する短頸壺で、口唇部は舌状を呈する。外面は縦位のナデ調整を主体とし、内面頸部下は接合面を中心に指頭押圧・ユビナデ調整が加えられている。440は、大型壺の頸部～底部付近である。胴部最大径に横位の4～5条の沈線を描き、その上から斜位の沈線を連続して巡らせている。突帯を意識したものと考えられる。内外面とも摩滅しており、頸部内面及び胴部最大径の内面は指頭押圧及びユビナデで器面に凹凸がみられる。器壁は薄く、器面に平坦面を有するため、タタキ調整と考えられる。また、色調は明るく、被熱により器面が荒れている。

439は、小型丸底壺の口縁部～胴部である。口唇部は舌



第79図 土坑44号・45号と45号出土の土器

状を呈し、胴部からカキアゲ状のハケナデ調整が施されている。胴部はやや肥厚した部分に横位の細沈線を2条運らせ、連続した刻みを加えている。

⑤土坑43号(第77図・第78図)

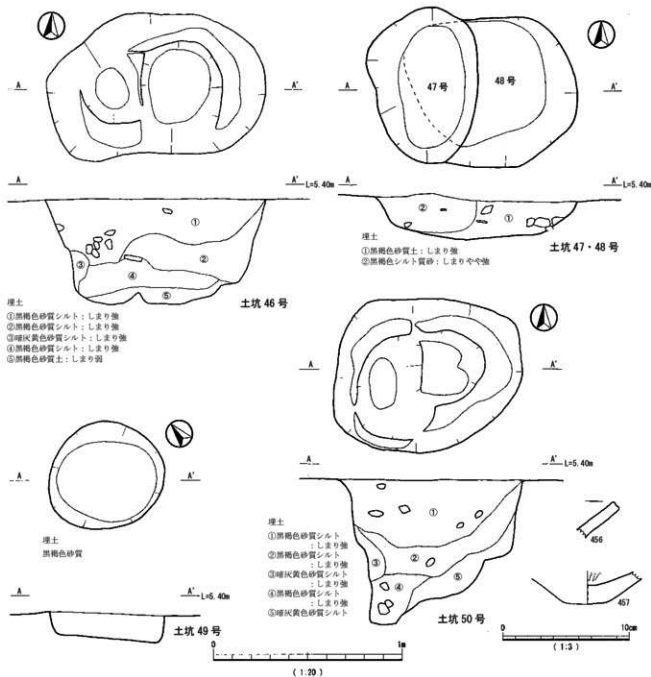
D-28・29区で検出された。堅穴状遺構に隣接している。平面形は、堅穴状遺構と接している南西側の境界が不明瞭であるが、ほぼ円形を呈し、規模は約1.5m×1.3mである。断面は、深さ12~15cm程度で、平底のナベ形を呈する。

遺物は、南北軸に帯状に出土している。

441と442は二重口縁壺の口縁部と考えられる。441は下端に刻みが施されている。器壁は薄く、色調は赤みが強い。442は胎土に、赤褐色砂粒を多く含む。443は壺形土器の肩部と考えられ、ボタン状の扁平な貼り付けである。大型壺の円形浮文と考えられる。444は底部である。

尖底で、内面は指頭押圧による凹凸がある。445は、高環形土器の坏部である。屈曲部外面は接合面で段が生じており、粗いナデ調整で整形されている。内面には帯状にスス痕がみられ、蓋として転用されていたと考えられる。

446~449は、寛形土器である。446~448は口縁部で、446はカキアゲ状の縦位のナデ調整で、447はタタキ調整



第80図 土坑46号~50号と50号出土の土器

である。また、448は内湾する甕形土器に比定でき、細かいハケナデ調整が施されている。449はの頸部～胴部と考えられ、外面は水平方向のタタキ後縦位のナデ、内面はハケナデ調整である。器壁は厚手だが、丁寧な作りである。

450は甕形土器の突帯である。幅広の薄い粘土紐を貼り付け、横位の沈線と斜位の浅い刻みが施されている。器形から、最大径に付されていると考えられる。

451～453は、高坏形土器である。451は高坏形土器の口縁部と考えられ、口唇部は平坦である。内外面とも被熱しており、内面は胴部付近に帯状にススが附着している。452はスカート状に開く脚部で、端部は丸く取められている。穿孔は2か所残存しており、本来は4か所程度と推定される。色調が明るく、胎土も精製されている。

453は屈曲が断面三角形の突帯状をなし、ハケナデ及びミガキ様の丁寧なナデ調整である。口唇部は外面側に張り出し、わずかに中央が凹む。スズ痕がみられる。土坑42号・43号は近接しており、両土坑で接合するものがあった(441～445)。

⑤土坑44号(第79図)

C-28区で検出された。南から南東部は一部攪乱により消失しているが、平面は約60cm×50cmのほぼ円形を呈する。断面の深さは25cmで、皿状を呈する。

遺物は少なく、いずれも古墳時代の小破片である。

⑥土坑45号(第79図)

C-29区で検出された。土器溜7に隣接している。平面は、約1.5m×1mの不整形長方形である。断面は、深さ約30cmで、底が凹凸した深ナベ形を呈する。

遺物は、検出面で高坏形土器の坏部分が出土した。埋土中からも土器片が出土している。

454は甕形土器の口縁部である。外面はわずかに右土がりのタタキ調整後、ナデ調整である。455は高坏形土器の坏部である。脚部との接合部で剥落しており、底面が円形に張り出す。内外面とも摩滅しているが、内外面とも部分的にハケナデ調整が残っており、内底部はミガキ状である。

⑦土坑46号(第80図)

E-30区で検出された。平面は、約0.7×1.2mのややいびつな楕円形を呈する。断面は、深さ約55cmで、床面が中央で盛り上がり、凸凹のある深皿形を呈する。2基の円形土坑のようにも見える。

遺物は破片であり、まとまっていない。

⑧土坑47号(第80図)

E-30区で検出された。竪穴建物跡12号の南側に位置

する。土坑48号より新しい。約60cm×80cmの楕円形に近いいびつな形状を呈する。断面は、深さ約20cmで、深皿形を呈する。

遺物は、土器片が出土している。礫の混入量も多い。

⑨土坑48号(第80図)

E-30区で検出された。竪穴建物跡12号の南側に位置する。平面は、土坑47号に切られているため全体形は不明だが、約1m×0.8mの楕円形を呈する。断面は、深さ約20cmで、深皿形を呈する。

土器片が出土している。

⑩土坑49号(第80図)

E-30区で検出された。平面は、約60cm×55cmの円形を呈する。断面は、深さ約13cmで、南東部にやや下がった浅い皿状を呈する。

摩滅した土器小破片が出土している。

⑪土坑50号(第80図)

E-30区で検出された。D地点で最も東側に位置する。平面は、約0.8×1mのややいびつな円形を呈する。断面形は、深さ約75cmで、数段の段状となるいびつな深ナベ形を呈する。

遺物は破片のみであり、まとまっていない。

456は、甕形土器の口縁部片である。口唇部は横位のナデ調整により、筋状に凹む。外面は幅広の斜位のハケナデ調整と思われ、頸部や内面は横位のナデ調整である。457は甕形土器のレンズ状平底の底部である。全体的に摩滅しているが、内面には筋状の工具ナデ調整が残る。また、胎土に3～5mm大の靑い赤色粒をまばらに含む。

4) 埋納遺構

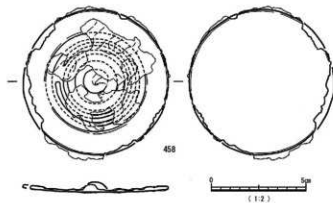
①埋納遺構(第81図)

小型仿製鏡が竪穴建物跡8号で出土した。調査時の所見によると、竪穴建物跡8号を掘り込んで作られた古代の土坑が埋まったあと、この土坑跡を掘り込んだ直径15cm、深さ12cmの円形土坑に埋納されたものとしている。さらに、鏡は円形土坑の底面から5cm上に裏面を上に向けて置かれていたと判断している。

当時撮影された写真を検討した結果、炭などが多く堆積している古代の土坑の底面は建物跡の床面と同じで、さらに土坑の外まで広がっていることから、古代の土坑は存在しないことが分かった。本来は住居埋没時に床面より25cm上に埋納されたものと思われる。

鏡は全形を残しているが、表面の錆化が進み型式がはっきりしない。直径7.7cmで、外縁は幅1.2cm、厚さ0.3cmの広い平縁である。その中の文様ははっきりしないが、レントゲン写真によると1条の圓線が巡っている。

紐はつぶれており、はっきりしないが、直径1.3cmほどで、厚さが0.5cmある。鏡面の厚さは0.2cmである。



第81図 埋納遺構出土の小型仿製鏡

5) 土器溜

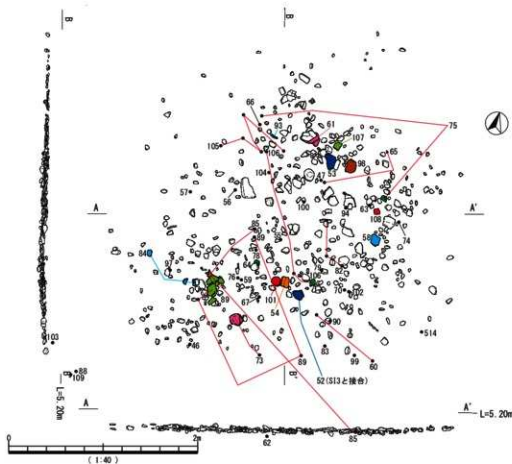
①土器溜3 (第82図)

竖穴建物跡3号の検出面の深い穴を中心として4.3m×4.3mの範囲に多くの土器が広がっていた。土層断面を見ると、15cmぐらいの厚さに上から下までぎっしりと遺物がつまっている。出土した土器・石器は第21図から第26図に掲載している。そのほとんどは土器溜3出土の遺物である。

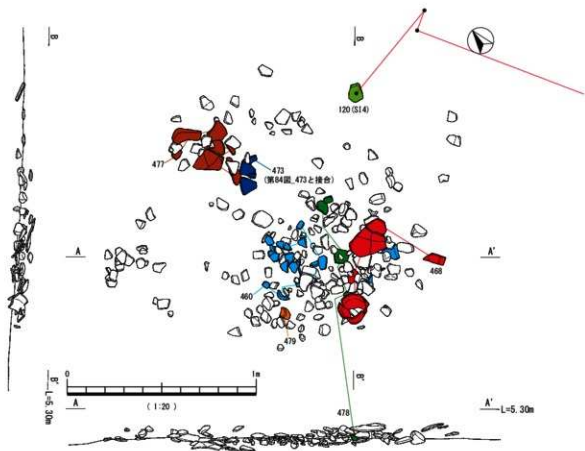
②土器溜4 (第83図～第87図)

C-26区、IIc層で長軸2m、短軸1.5mの範囲に遺物がまどまって検出された。北東方向には、土器溜5が位置している。多くの土器を取りあげたあと直径1m程度の楕円形を呈する掘り込みがあった。断面形は、不定形な深皿形を呈し、土器溜5より浅いが、南東部に重層的な重なりが見られる。

土器溜4と土器溜5は隣接して検出され、平面的に遺物がまどまっている状況であった。土器溜5は莞形土器が主体を占めるのに対し、土器溜4は大型壺が多く出土した点の特徴である。



第82図 土器溜3



第83図 土器溜4 (1)

壘形土器 (459～467)

459は、竪穴建物跡9号出土の破片とも接合している。器壁が薄く、頸部から直線的に口縁部が広く外傾する。ナデ調整により、口唇部内面は筋状に凹む。頸部の屈曲は緩やかに肩部の張りは弱く、球脚状を呈し、最大径は胴部中位となる。外面は縦位及び斜位の細かいハケナデ調整が部分的にみられるが、被熱により器面が荒れている。内面は縦位のケズリ調整後、ナデ調整が施されている。また、内面の下半はコゲにより黒変している。460は頸部から直線的に口縁部が外傾し、端部は丸く収められている。頸部内面は縦位のユビナデ調整で、厚みが部位によって一定ではない。胴部内面は、ケズリ後ナデ調整が施されている。内面のユビナデとケズリ調整の境界は、段が生じている。外面は摩滅が激しいが、部分的にハケ目が残存する。

459・460は頸部の屈曲部からなで肩または球状に胴部が膨らむ器形である。後のシャープさに欠ける。459は、器壁が薄く、胴部下半にスガが付着する。

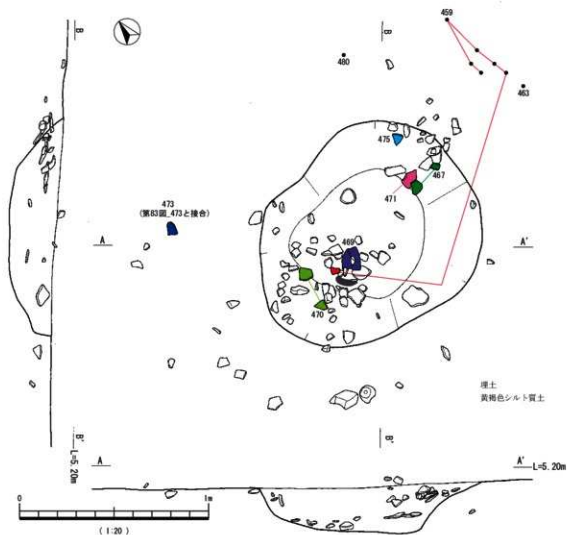
461～463は口縁部が内湾し、器形から長胴形になると想定される。いずれも、口唇部及び外面口唇部下がナデ調整により若干凹み、端部が外面側に張り出す。461は、

調整が良好に観察できる資料で、口縁部外面は斜位のハケナデ調整後横位のナデ調整、胴部は斜位のナデ調整である。また、頸部の屈曲下には帯状に横位のナデ調整が加えられ、器形もナデの範囲が平坦になっている。内面は薄膜状に剥離しているが、部分的に斜位のハケ目が残存している。462・463は、内外面ともほぼ摩滅しており、部分的に461と類似するハケ目が残存している。463は、口唇部がやや外傾する。

464・465は緩やかに外傾する口縁部で、外面にタタキ痕が明瞭に残る。464は水平方向、465はわずかに右上がりのタタキ調整で、その上からナデ調整が加えられる。また、464は口唇部がナデ調整により浅く凹む。

466・467は、胴部～脚台である。466はわずかに外反し、胴部と脚台の境界は縦位のユビナデ調整が連続して加えられている。脚台端部の内外面は横位のナデ調整を主とするが、部分的にタタキ痕が残る平坦状をなしている。また、脚台内面には縦位の工具痕が残る。467は胴部との接合面で剥落しており、被熱により斑状に赤変している。

なお、461・462・464～466については、竪穴建物跡4号の遺物の可能性も考えられる。



第84図 土器溜4(2)

壺形土器 (468~478)

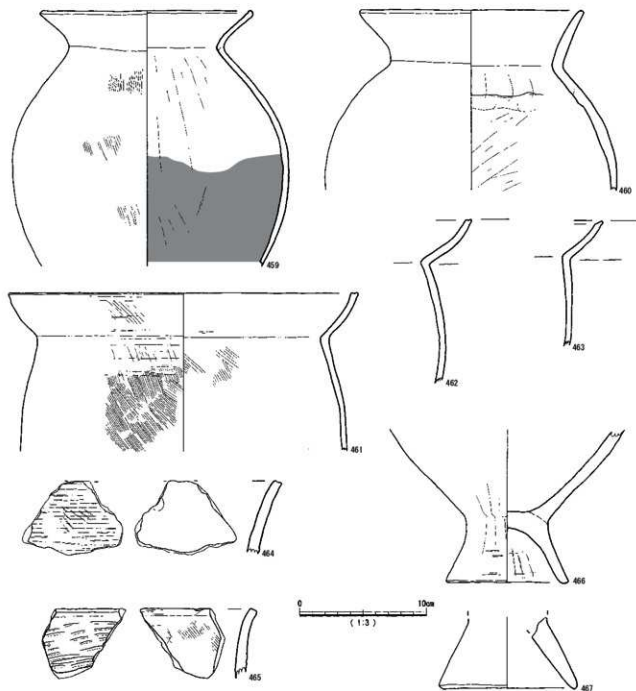
壺形土器は赤みの強い色調のものが多く、長石や白色礫を多量に含む砂質の胎土である。

468・469は二重口縁壺である。468は器壁が薄く、胴部が球状に張り出す大型壺である。口縁部の屈曲は外に広く張り出し、直線的に内傾する。頸部の突帯には、ヘラ状工具で斜位の刻みが施されており、突帯下に接合痕がある。胴部には浅い沈線が横位に2条廻り、突帯を意識したものと考えられる。沈線は水平ではなく、幅も一定ではない。全体的に摩滅しており、器面調整は不明瞭である。469は屈曲部からわずかに外傾する口縁部で、屈曲部に押圧状の刻みを施している。頸部は縦位のハケナデ調整で、屈曲部下は横位のナデ調整が加えられている。

470・471は頸部片である。470の上端は接合面で剥落しており、二重口縁になると考えられる。外面は斜位のハケナデ調整を主体とし、上部に帯状に横位のナデ調整が

加えられている。色調は明るく、胎土に1mm大の白色及び赤褐色粒を多量に含む。471は頸部に突帯が1条廻り、斜位の刻みが施されている。内面は指頭押圧により、表面に凹凸が生じている。

472~478は胴部~底部である。472は468と同様に並行する2条の沈線が施され、突帯状をなしている。内外面とも摩滅しているが、外面に部分的にハケ目が残存する。473は薄く幅広い突帯を貼り付け、上下端はナデ調整を加えているが、ゆがみがある。摩滅のため調整痕は不明瞭であるが、突帯の内面側には指頭押圧、外面にはタキ痕が部分的に残存する。474は、球胴状を呈する。最大径に薄く幅広い粘土紐を不整形に貼り付け、横位の沈線を2~3条廻らせて多条突帯状をなしている。さらに、斜位の沈線を加えている。475・476は、突帯部である。ただし、475は粘土紐を貼り付けるのではなく、4条の横位の沈線と、斜位の沈線を描くことで突帯状の文様を呈している。



第85図 土器溜4出土の土器(1)

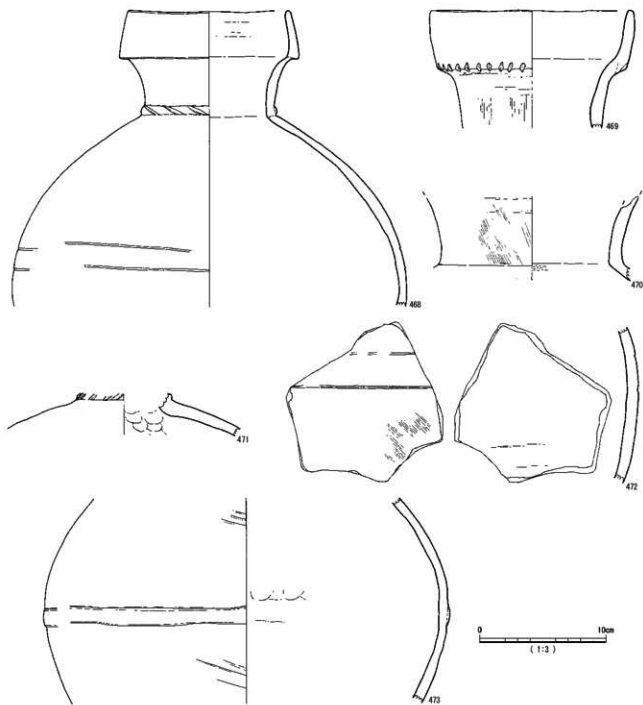
476は幅広い突帯に横位の4条の沈線を施して多条突帯状にし、さらに「ハ」字状の沈線を加えている。477は、頸部付近から底部まで残存する。薄く幅広い粘土紐を突帯として貼り付けている。突帯付近を胴部最大径として底部に向かってすぼまり、尖底となる。底部のみ厚みがあるが、大きさに対して器壁は薄い。内外面とも摩滅が激しく、調整は内面の指頭押圧と突帯裏のナデ状の痕跡のみ確認できる。外面の色調は斑状になっており、被熱によるものと考えられる。478は底部である。丸底で、外面にわずかに縦位及び斜位のハケナデ調整が残存する。

高環形土器(479・480)

高環形土器の脚部片である。479は坏部の立ちあがりの接合部で剥落しており、脚部はやや歪みながら下部が膨らむ。480は坏部との接合部で剥落しており、脚部上半が中実になる。いずれも胎土は粗く、白色及び赤褐色の3mm大の礫を多量に含む。

③土器溜5(第88図～第93図)

D-26区、IIc層で検出された。3.5m×2.5mの範囲に遺物がまとまりをもちながら広がっていた。直径約1.3～



第86図 土器溜4出土の土器（2）

1.5m、深さ23cmの不定形な円状を呈する掘り込みがあり、断面形は深皿形を呈し、北西側に重層的な重なりが見られる。

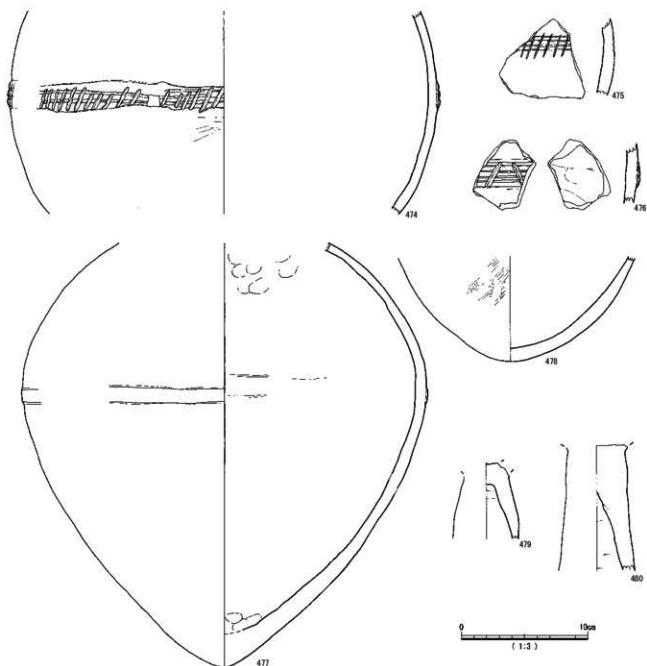
481は大きく破損しているが、厚さ約5.8cmの扁平な石皿あるいは砥石と思われる砂岩製の石製品である。現存の長さ17cm、幅13cm、重量1842gである。片面を使用している。

壘形土器（482～510）

482・483・485・486は、頸部で屈曲し肩部が張る器形

である。

482は頸部で緩く屈曲し、器高が低く径の小さい脚台が付く。器形はゆがみ、口縁部が傾く。全体的に磨滅しており調整痕は不明瞭であるが、胴部外面には左上がりのタキ調整と、胴下半にケズリ調整がみられる。胴部に貼り付けるように脚部は作出されており、接合面が明瞭である。483は器壁が厚手で、口唇部の平坦面が外傾する。胴部の張りは弱く、長胴になると想定される。口縁部は内外面ともナデ調整で、頸部にカキアゲ状の工具痕



第87図 土器溜4出土の土器(3)

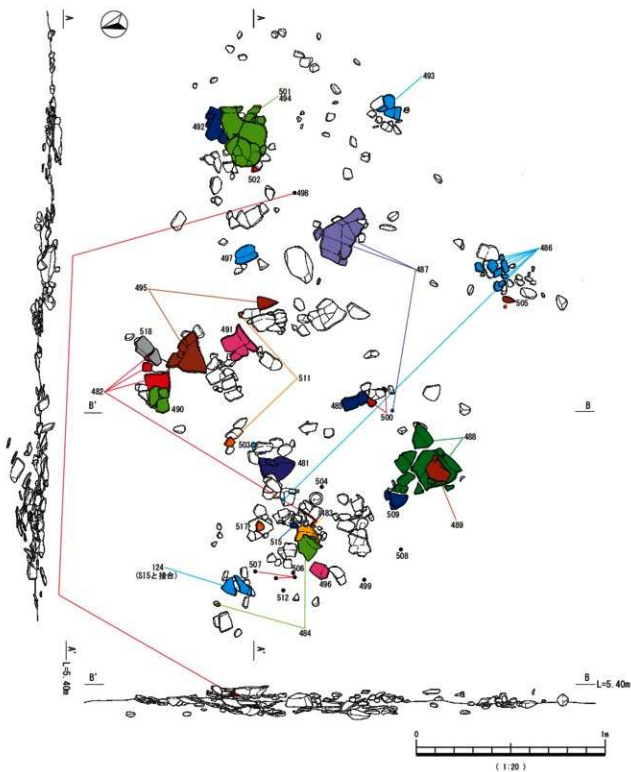
が残る。胴部は水平方向のタタキ調整後、ナデ調整が加えられている。色調が暗く、胎土に2～3mm大の長石を多量に含む。中九州地方で出土する長胴の甕形土器に、器形は近い。485・486は胴部にタタキ痕を有し、頸部で屈曲して口縁部が外傾するものである。485は486と胎土及び調整は類似するが、屈曲部から胴部への張り方が強く、口径が小さい。口縁部外面はカキアゲ口縁状の斜位のハケナデ調整、口縁部内面は横位のナデ調整である。486は胴部外面に左上がりのタタキ調整後ナデ調整が加えられ、屈曲部より上位はカキアゲ口縁状の斜位のハケナデである。口唇部はナデ調整で平坦面が作出されている。内面は摩

滅により不明瞭であるが、横位のハケ目が部分的に残存している。胎土に、白色及び赤褐色の砂粒を多く含む。

484は口縁部が短く直線的に外傾するもので、器壁は薄い。外面は摩滅し、頸部付近に横位のナデ調整がわずかに残存する。内面は頸部付近は横位のハケナデ、胴部は斜位のハケナデ調整で、口縁部側がやや幅広である。

487～503は、長胴形を呈する器形である。いずれも頸部で明瞭に屈曲し、内面側に張り出すものもある。

494～496は、特に内面の張り出しが明瞭である。また、口唇部はナデ調整により外面側に張り出し、口唇部が溝状に凹む等の特徴がある。全体的に器壁が薄く、内

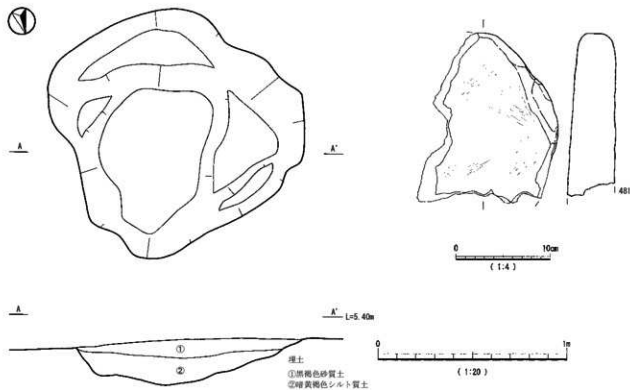


第88図 土器溜5(1)

外面が摩滅したものは胎土中に細かい繊維状の空隙がみられ、混和材等で用いられた有機物の痕跡の可能性がある。

487・488は底部付近まで残存する。487は細かいハケナデ調整が残っており、頸部以下の胴部上半は縦位、胴部中央は内外面とも斜位である。口縁部は横位のナデ調整

で、頸部の屈曲もナデ調整で作出されている。底部付近は、ケズリに近い横位のナデ調整である。器面に緩やかな凹凸があり、部分的に平坦面をなしているため、タタキ成形の可能性がある。488は外面は縦位・横位のハケナデ及び横位のナデ調整で、丁寧な作りである。内面は



第89図 土器溜5(2)と出土の石製品

摩滅により剥落しているが、略円形の凹みが胴部に複数みられ、タタキ成形の痕跡と考えられる。また、胴部下位は被熱により赤変し、器面がただれている。489は外面に部分的に調整が残っており、胴部の斜位のハケナデ調整の後、頸部下に帯状に横位のナデ調整が加えられている。490も489と同様に口縁部から頸部周辺までは横位のナデ調整で、胴部の内外面は斜位のハケナデ調整である。口唇部は内傾する。口縁部はやや厚手である。491は口唇部が内傾し、頸部の張り出しが明瞭である。492は口縁部が直線ぎみに外傾しており、全体的に薄い作りである。493の後はやや屈曲が緩く、内外面とも薄膜が剥がれるように摩滅しており、器壁がその分薄くなっている。

494・495は、口縁部外面に強めの横位のナデ調整が加わることに伴い、凹凸が生じている。494は内面の張り出しが明瞭で、直下に接合痕がみられる。口唇部や屈曲部内面の張り出しは丸みを帯びる。胴部の内外面には細かい斜位のハケナデ調整が施され、口縁部内外面および頸部外面は横位のナデ調整で仕上げられている。胎土には、細かい角四石粒を多量に含む。495は比較的胴部の器壁が厚手であり、頸部内面の張り出し直下に接合痕が明瞭に残る。口唇部及び口縁部外面には強めの横位のナデ調整が加えられ、凹線状を呈している。胎土には、2～3mm大の長石をまばらに含む。496～499は器面が瓢状に剥がれるように摩滅しており、部分的に器面が残っている。

499は口唇部及び外面口唇部下がナデ調整により凹線状に凹んでいる。

500～503は比較的の内弯が弱い。外面は横位のナデ調整により器面に凹凸があり、501は頸部内面側の接合面も明瞭である。502は口唇部が玉縁状を呈し、内外面の張り出しがほとんどない。

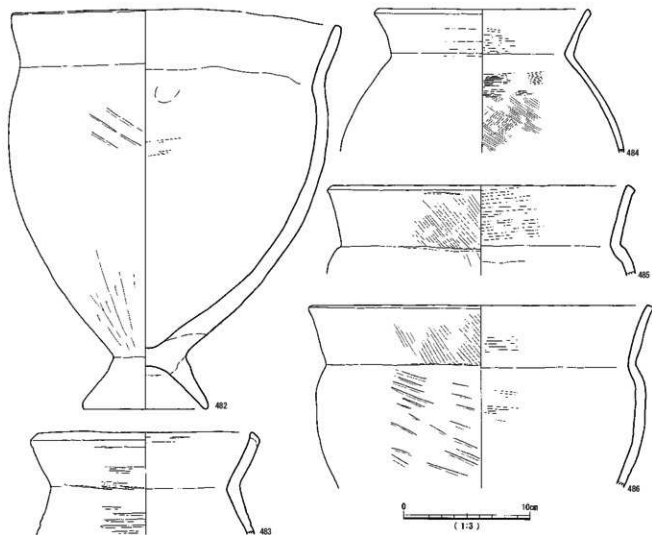
504は屈曲部から口縁部が外傾し、肩部も直線的に膨らむ器形である。内外面ともハケナデ調整で、単位は細かく丁寧である。色調が明るく、赤褐色礫を多く含む点で他と異なる。

505～507は頸部～胴部片である。

505は胴部に水平方向のタタキ調整後、ナデ調整が加えられており、タタキ痕は部分的に残存する。506は断面コマボコ状の突帯を貼り付け、刻みを加えている。器面調整は細かいハケナデで、丁寧な作りである。507は器壁が薄く頸部で屈曲して球脚状を呈すると考えられる。外面は左上がりのタタキ後、ナデ調整である。内面は胴部の細かいハケ目と頸部付近のケズリ調整が部分的に残存する。胎土には、1～3mm大の長石粒を多量に含む。

508～510は、底部～脚台である。

508は脚台の接合面で剥落している。内底面は平坦で高台状を呈し、器壁は薄い。509・510は端部に向かって外反しながら開くもので、510はナデ調整により端部が平坦面をなし、筋状にわずかに凹む。いずれも器壁が薄く丁寧に仕上げられており、509の立ち上がりから長胴形の甕



第90図 土器溜5出土の土器(1)

形土器になると想定される。

壺形土器 (511~515)

511と512は二重口縁壺である。

511は肩部はなで肩で、口縁の肥厚部はナデ調整で、丁寧に仕上げられている。また、肥厚部下は縦位のユビナデ調整によって成形している。胎土は軟質で、砂粒は目立たないが、赤褐色粒をまばらに含む。512は屈曲部から直線的に立ち上がる。口縁部外面にはハケナデと思われる粗い条痕状の筋が残っているが、内外面とも摩滅している。

513は口縁部片で、口唇部が「く」字状に屈曲する。外面の屈曲部は、強めの横位のナデ調整によって作出されている。514も513と同様の器形と考えられ、外面には縦位のミガキ状の調整の上位から横位のハケナデ調整が加えられている。515は幅広で薄い突帯を貼り付け、沈線上の斜位の刻みを加えている。胴部外面は、条痕状の工具ナデ調整である。514は事実誤認しており、レイアウト確

認後、土器溜3で検出されたことが判明した。

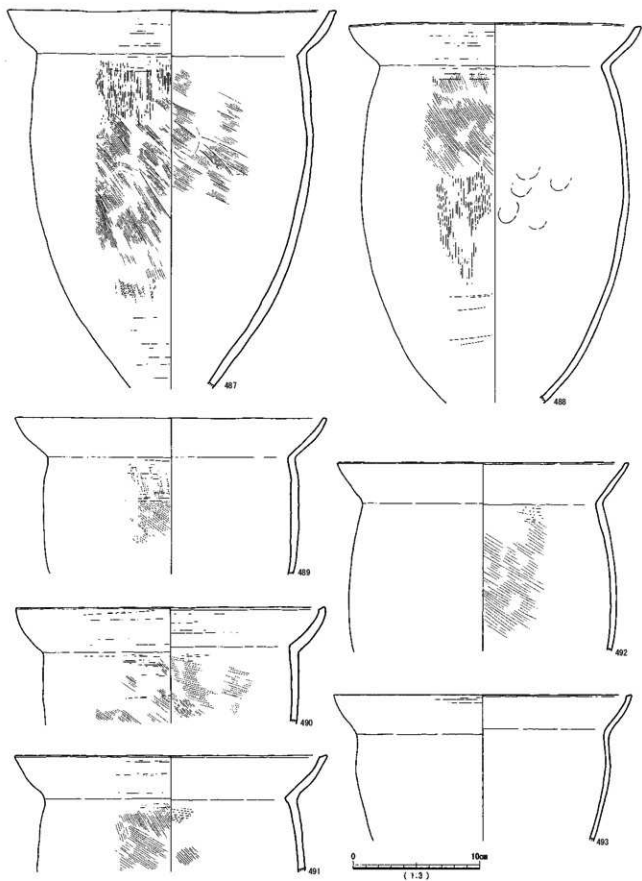
小型土器 (516・517)

516は、長頸の小型丸底壺である。胴部の屈曲部分が、わずかに残存する。口縁部は直線的に緩やかに外傾し、口唇部は舌状を呈する。小型土器の中では、比較的厚手である。

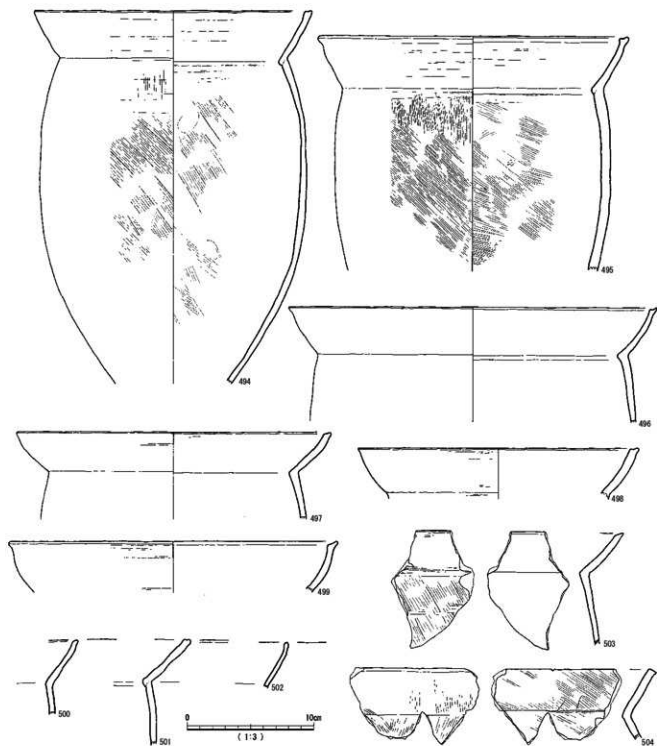
517は、小型の鉢または、小型丸底壺の口縁部と考えられる。口縁部は内湾し、内外面ともナデ調整により口唇部は舌状を呈する。部分的に赤みを帯びる部分があり、顔料が塗布されていた可能性もある。

高坏形土器 (518・519)

518・519は口縁部が広く開く器形である。518は口縁部下半の屈曲部が明瞭で、内面側に段を有する。内外面とも摩滅しているが、外面はカキアゲ状のナデ調整の単位ごとに凹凸がみられる。砂粒が多く粗い胎土で、2~3mm大の長石を多量に含む。519は坏部に明瞭な屈曲部は持たず、わずかに下半が内湾する。外面は縦位の細かいハ



第91図 土器溜5出土の土器(2)



第92図 土器溜5出土の土器(3)

ケナデ調整ののち、横位のナデ調整が加えられ、下部には部分的にミガキ調整がみられる。胎土は軟質で、石英と思われる光沢のある微細な透明砂粒を含む。

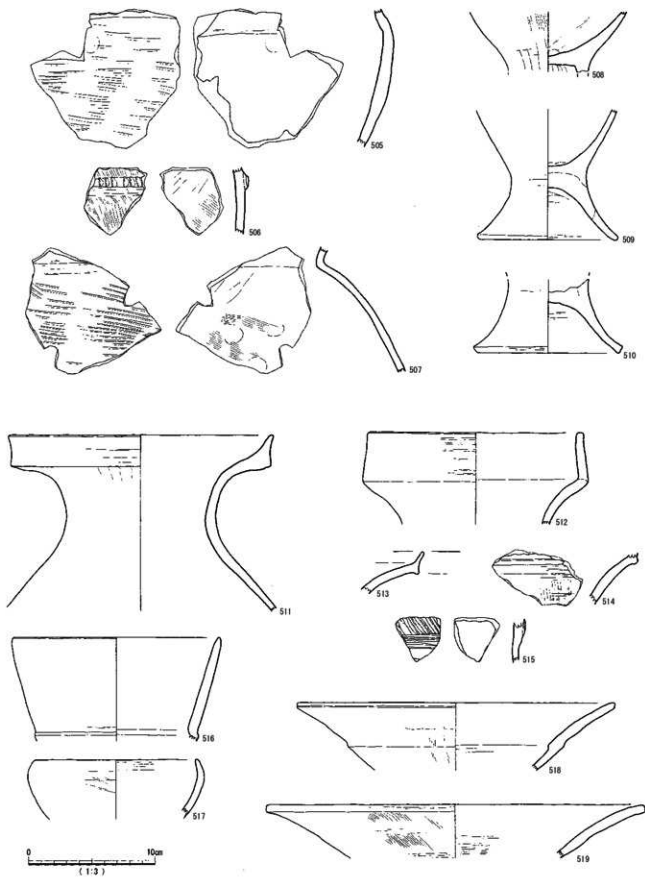
④土器溜6(図版19)

土器溜6は、D-28区で検出され、同じ面に広く分布している。

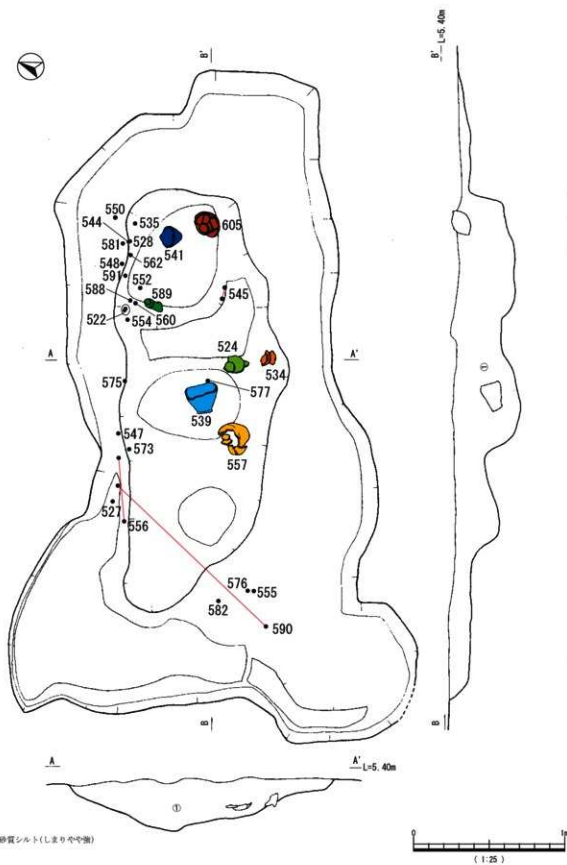
出土状況は図版19のような状態である。その下は堅穴になっており、堅穴状遺構として扱った。遺物は第60～65図にある。

⑤土器溜7(第94図～第100図)

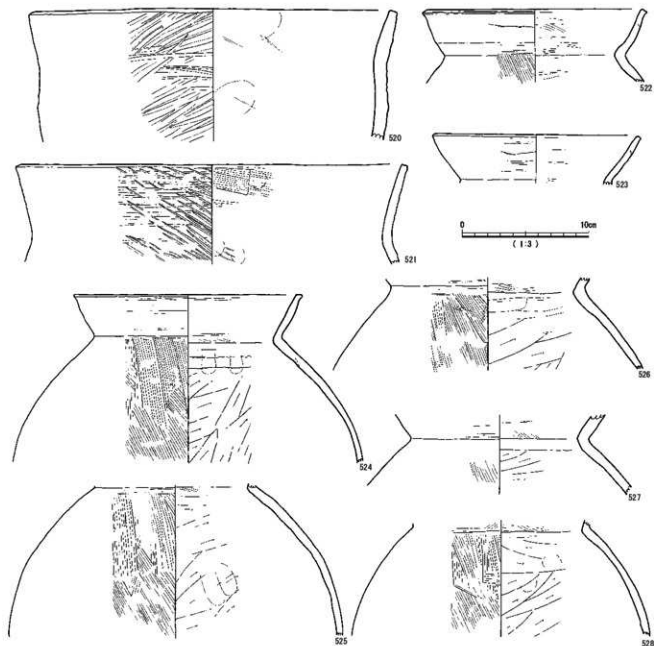
C・D-29区、D-IV層で検出された。広い範囲に土器片と礫が混ざり合う状況で出土した。数点まとまった



第93図 土器溜5出土の土器(4)



第94図 土器溜 7



第95図 土器溜7出土の土器(1)

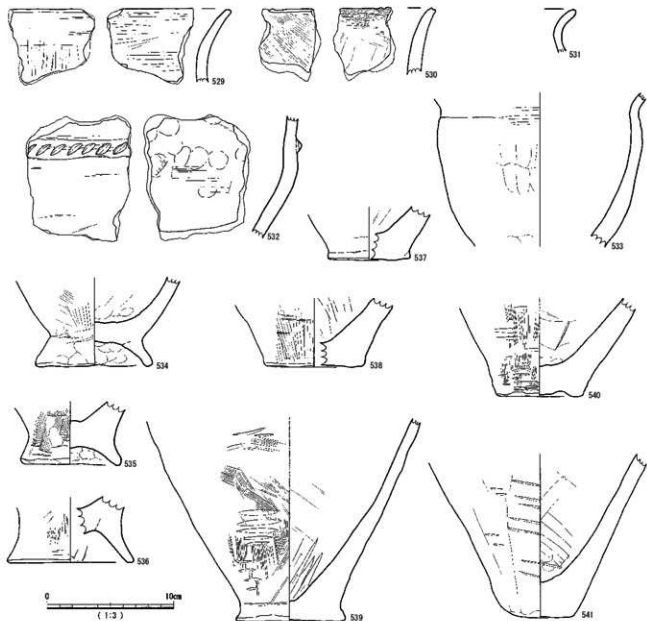
個体が出土している。そのうちの7点の出土状況を図化した。524は甕の口縁部から胴部である。534は甕の脚部である。539は甕か鉢の胴部から底部である。541はやや平底の甕の底部である。557は口縁部が欠損したレンズ状の底をもつ壺である。589は高坏の脚部である。605は、赤色塗彩の小型丸底甕である。

壺形土器 (520~541)

520・521は頸部で緩く屈曲する器形で、外面は密なタタキ痕が残る。いずれも、口唇部はナデ調整により平坦面を有する。520は口縁部が短く、521に比べて厚手である。外面は右上がりのタタキ調整が口縁部まで施され、頸部の屈曲周辺のみ水平方向のタタキ調整が加えられて

いる。内面はナデ調整であるが、器面にはタタキ調整の当て具痕と考えられる緩い凹凸がみられる。521は薄手で、水平方向のタタキ調整後、左上がりのタタキ調整が加えられている。内面は口縁部や頸部に指頭押圧がみられ、その後口縁部は斜位のハケナデ調整が施されている。

522~528は、胴部は緩やかな球胴状を呈し、最大径は胴部中位にくるものと想定される。口唇部は524がほぼ水平、523・524はやや外傾し、522・524は横位のナデ調整により口唇端部が外面側にわずかに張り出す。また、522は口縁部および頸部のナデ調整が顕著で、やや内弯気味となる。いずれも口縁部は横位のナデ調整で、頸部から縦位又は斜位の細いハケナデ調整が施される。また、



第96図 土器溜7出土の土器(2)

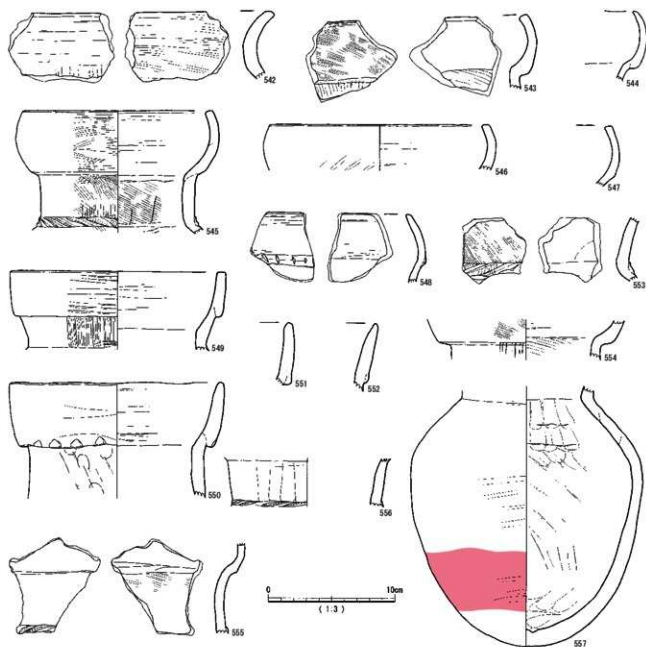
頸部には帯状に横位のナデ調整が加わる。内面は、頸部周辺はナデ調整であるが、胴部は基本的に斜位のケズリ調整が連続して加えられている。

529～531は口縁部が外反するもので、531は屈曲が強い。口唇部は丸く、530のみ端部にナデ調整が加えられて中央が溝状に凹む。529は胴部が縦位のハケナデ調整で、口縁部付近はハケナデ調整後、横位のナデ調整で成形している。530は特にハケ目が細かく、口唇部内面にも斜位のハケナデ調整が施され、厚手である。また、金雲母が目立つ。

532・533は、頸部～胴部片である。532は突帯を1条巡らせ、押圧状の刻みを施している。突帯下で彎曲し、底部に向かってすぼまる器形と想定される。内面は指頭

押圧が顕著で、彎曲部付近は幅広のハケナデ調整がみられる。533は頸部で緩く屈曲して外反するもので、底部に向かってすぼまる器形になると想定される。小型であるが、器壁は厚い。頸部外面に水平方向のタキキ痕が残存し、胴部は縦位のユビナデ調整が連続して加えられている。

534～536は脚台である。534は脚台器高が低く、ハケナデ調整で丁寧に仕上げられている。端部は丸く取られ、比較的器壁は薄い。534・535は脚台というよりも上げ底に近く、指頭押圧による成形で器面にゆがみがある。いずれも胴部外面は、カキアゲ状の粗いハケナデ調整である。535は胎土に白色・灰色・赤褐色礫を多量に含む。536の脚台も小さい。



第97図 土器溜7出土の土器(3)

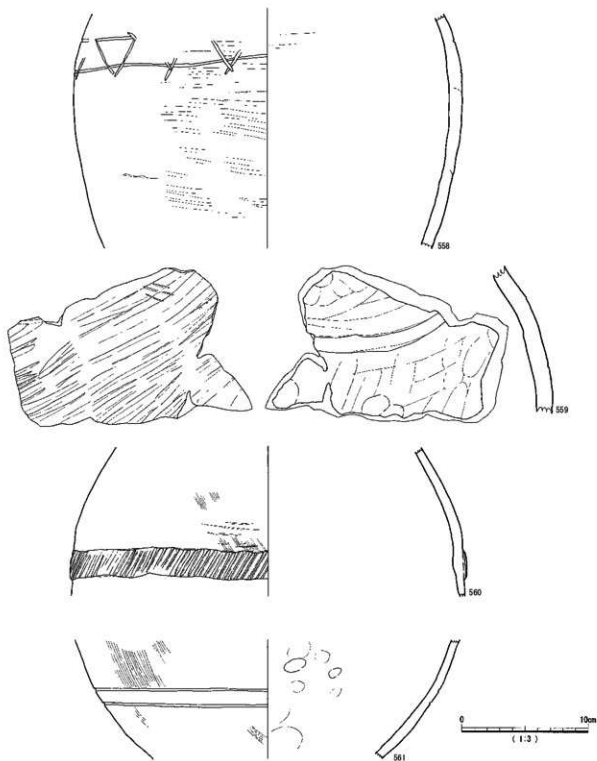
537～541は平底となる一群である。いずれも底部および胴部への立ち上がりは器壁が厚く、重量がある。537～539はやや張り出しをもつ平底で、立ち上がりがわずかにくびれる。539は外面に幅広の水平方向のタタキ調整がみられ、その後縦位・斜位のハケナデ調整が加えられる。内面はナデ調整を基本とするが、内底面付近は縦位のケズリ調整である。538も同様に、外面はタタキ調整後に縦位のハケナデ調整、内面はケズリ調整で、539に比べて丁寧な作りである。540はナデ調整により底面中央にふくらみが残り、高台状を呈する。外面は幅広のタタキ調整が底面付近まで施され、その後縦位のハケナデ調整である。砂粒を多く含むが焼成も良好で、作りも丁寧であ

る。541は平坦面が小さくゆがみがある。外面は幅広のタタキ調整により、平坦面が連続する。内面は帯状の工具ナデで、内底面付近は器面に工具の端部が当たり、凹凸が生じている。器壁が厚く、重量がある。

壘形土器 (542～578)

542は短頸の広口壘の口縁部である。内外面ともハケナデ調整後ナデ調整で、赤褐色・灰白色礫を多量に含む粗い胎土である。

543～552は二重口壘の口縁部である。543～548は袋状口縁に近い内弯、549～552は直口ないしはわずかに外傾する。また、544はゆがみの可能性もあるが、口唇部が緩やかな波状を呈する。内弯するタイプは、口唇部



第98図 土器溜7出土の土器(4)

断面形が方形と舌状を呈するものの2種があり、後者は器壁が薄い。調整は類似し、屈曲部は横位のハケナデ調整及びナデ調整を主体とし、頸部は縦位のハケナデ調整である。また、頸部内面は斜位のハケナデである。いずれも、ハケナデ調整のハケ目は細かいが、553・554の頸部は幅広のハケ目である。545・556は1条粘土紐を巡ら

せ、ハケ調整と同様の工具による斜位の刻みで縄目文様を呈している。548は屈曲部に薄い突帯を貼り付け、浅い刻みを施す。545～548は色調に赤みが強い点や、胎土に長石・白色礫を多く含む点が類似し、器面に赤色の粘土がスリップがけされたような断面を呈する。

549は口縁部が直口し、頸部及び口唇部とも後線が明瞭

である。口縁部外面はタタキ痕が残し、頸部は丁寧なカキアゲ状のハケナデ調整である。胎土には1~2mm大の赤褐色礫を多量に含む。550は作りが粗く厚手で、接合面や肥厚部の端部もゆがみがある。肥厚部の端部には押圧状の幅広の刻みが施され、明瞭なものや、浅く不明瞭なものなど、刻みも安定していない。作りが粗雑なだけでなく色調も明るく、545等の質感とは異なる。内面は上半は粗いユビナデ、下半は摩滅している。552の色調は550と近いが、調整が丁寧である。内外面とも丁寧な横位のナデ調整で、内面の口縁部付近は筋状に凹凸が生じている。549~552は色調が黄褐色を呈し、内湾するタイプの二重口縁とは色調が異なる。

554~556は頸部であり、調整や突帯の特徴から、二重口縁壺の頸部と考えられる。556は外面に縦位のユビナデ調整が明瞭で、縦筋状の面が形成されている。

557は肩部下位に最大径をもち、緩やかに丸底の底部に繋がる。器壁は厚く、小型だが重量がある。外面に幅広のタタキ痕が浅く残存し、器面は部分的に平坦面状をなす。内面は、頸部から肩部にかけて接合痕が見られ、その周辺に縦位のユビナデ調整が連続して加えられている。内底面はユビナデ調整で凹凸があり、胴部はカキアゲ状のケズリ調整である。外面胴下半は被熱によって帯状に赤変しており、火にかけて使用したことが分かる。

558~561は大型壺の胴部で、559を除き、器壁が薄い。558は最大径が胴部上半にあり、胴下半がわずかにすぼまる。最大径に横位の2条の沈線を通らし、さらに鋸歯状の沈線を描いている。施文はゆがみがあり、全体的に右上がりとなる。器面調整は、幅広のタタキ調整後丁寧なナデ調整である。559は器壁から肩部付近と考えられる。外面は幅広いタタキ痕で、内面は横位のユビナデ調整が連続している。色調や外面の器面調整の雰囲気は558と類似するが、器壁が厚い。560は胴部に幅広の薄い突帯を貼り付け、その上に密に浅い斜位の刻みを施している。突帯の上下は貼り付け後にナデ等は加えられず、ややゆがみがある。内外面とも器面は摩滅しているが、わずかに水平方向のタタキ痕やカキアゲ状のハケ目が残存する。561は胴部下半に2条の沈線を描き、突帯状を模していると考えられる。外面には細かいハケナデ調整が部分的にみられ、内面には細かい指頭押圧が連続して施される。また、内面は幅広い円形の凹凸が連続しており、タタキ調整の当て具痕と考えられる。色調は赤みが強く、スリップ状に赤色に発色する粘土を重ねているような断面である。

562~570は突帯である。562~564は幅広く薄い突帯を貼り付け、563は横位のハケナデ、564は斜位の浅い刻みを施している。565~567は粘土紐を貼り付けず、肥厚または胴部最大径と想定される部分に沈線で突帯状の文様を施している。566は、器面調整は細かいハケナデ調整

で、その上から558と類似する横位と鋸歯状の文様を施している。567は、少なくとも4条以上の横位の沈線である。568~569は粘土紐を貼り付け、568は横位と縦位の沈線、569は格子状の斜位の沈線で施文している。570はいわゆる幅広突帯で、ハケナデ調整と同様の工具を押圧して斜位の沈線を施している。

571~577は底部である。571・574・575は平底、573・576はレンズ状でわずかに平底を有するもの、572はほぼ丸底に近い。571・575・576は細かいハケナデ調整、573は左上がりのタタキ調整である。572は金雲母が目立つ。また、575・576は外面に赤色顔料が塗布されている。577は丸底となると考えられ、外面には複数方向に切りあうタタキ痕がみられる。内面は、底面付近が大ぶりな深い指頭押圧、胴部は浅い指頭押圧である。

578は厚手で、肩部に沈線が1条通る。外面は細かいハケナデ調整で、内面は工具ナデである。胎土は粗く、2~3mm大の赤褐色礫を多量に含む。

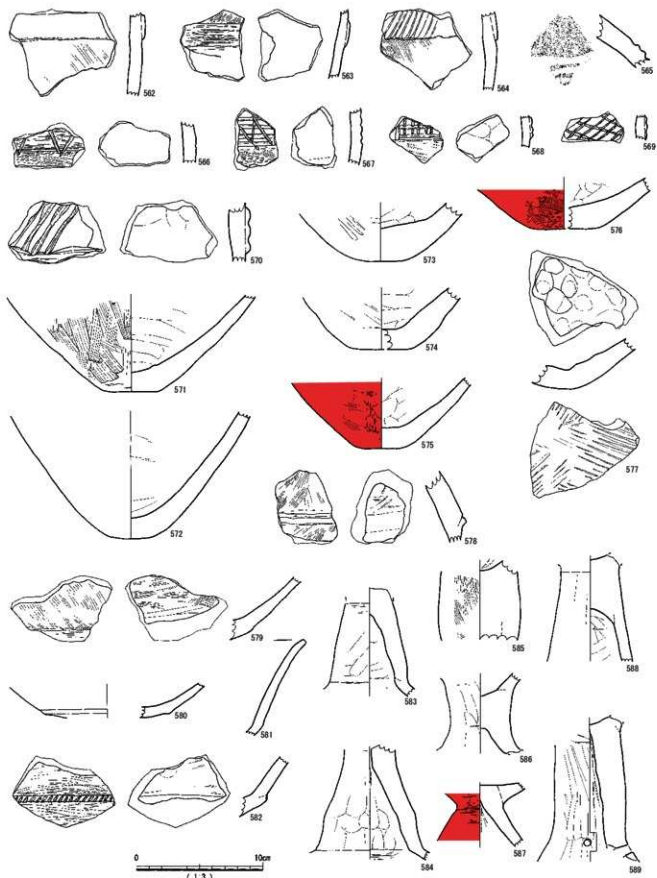
高坏形土器 (579~589)

579~582は、坏部片で、屈曲して広く開くタイプである。579は内外面とも細かいハケナデ調整で、外面は屈曲部から斜位のカキアゲ状を呈する。軟質で精製された胎土に、赤色・灰色の砂粒をまばらに含む。580は細かいハケナデ調整、581は屈曲部から口縁部が長く伸びるタイプで、器高が高くなると考えられる。口唇部内面はナデ調整によりわずかに平坦面状をなす。582は外面は横位・斜位のミガキ調整で、屈曲部にヘラ状の工具による細かい刻みが施される。厚手であるが、外面は丁寧なミガキ調整である。

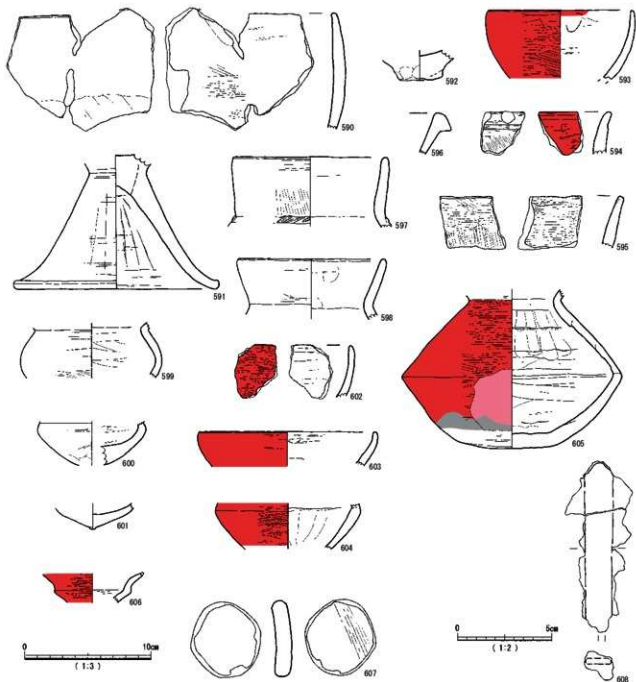
583~589は脚部である。583・584は屈曲部に向かって緩く膨らみ、屈曲部から開くタイプである。外面は連続したユビナデ調整で、584は内外面とも粗い調整により器面に凹凸がある。585はエンタシス状を呈する中実の脚部で、外面は細かい斜位のハケナデ調整である。大型のものとして想定される。586・587は坏部・脚部の接合部から上下に広がるタイプで、586は部分的に中実になる。587は外面の屈曲部付近に細かい横位のミガキ調整が残っており、坏部の内底面はほぼ平坦である。そのため、坏部は広く皿状に開くタイプと考えられる。588は直線的に開くタイプで、内底面は粗いユビナデでドーム状をなす。589は長脚で、屈曲部付近に非対称の4か所の穿孔がみられる。横断面は楕円形で、ゆがみがある。外面は縦位の工具ナデ調整が明瞭で、筋状をなす。また、内面には脚部を筒状に成形した際のシワがみられる。579・587は外面に赤色顔料が部分的に残っており、本来は外面全体に塗布されていたと考えられる。

鉢形土器 (590~596)

590は大型の陶形をした器形をしている。591は、変形土器より器高があり、作りが丁寧であるため、台付鉢と



第99図 土器溜7出土の土器 (5)



第100図 土器溜7出土の土器(6)と土製品・鉄製品

判断した。底部に向かって緩やかに開き、端部付近で反る。内外面とも縦位のナデ調整後横位のナデ調整で、屈曲部は特に強めのナデである。接合面から、脚部を筒状に作り出し、上部から粘土を充填して成形していると考えられる。592はつまみ状の底部で、堅穴状遺構の408に近い器形である。粗いユビナデ調整で成形されており、中央は凹む。593は小型の鉢形土器である。口縁部がわずかに内湾し、埴形に近い鉢になると想定される。口縁内部にも部分的に赤色顔料が塗布されている。口唇部はわずかに平坦面を有するが、ゆがみがある。594・595は器

形や調整が甕形土器と異なるため、鉢形土器に含めた。594は丁寧なハケナデ調整で、外面は一部沈線状を呈している。また、内面は赤色顔料が塗布されている。595は内外面ともハケナデ調整で、口唇部はゆがみがあるが端部は平坦面を有する。596は口縁部が三角突帯状となる鉢形をした土器だが、中期前半の弥生土器甕形土器の可能性はある。

小型土器(597~606)

597・598は比較的器壁が厚く、口唇端部は丸みを帯びる。597は頸部に斜位の刻みを伴う突帯を有する。598は

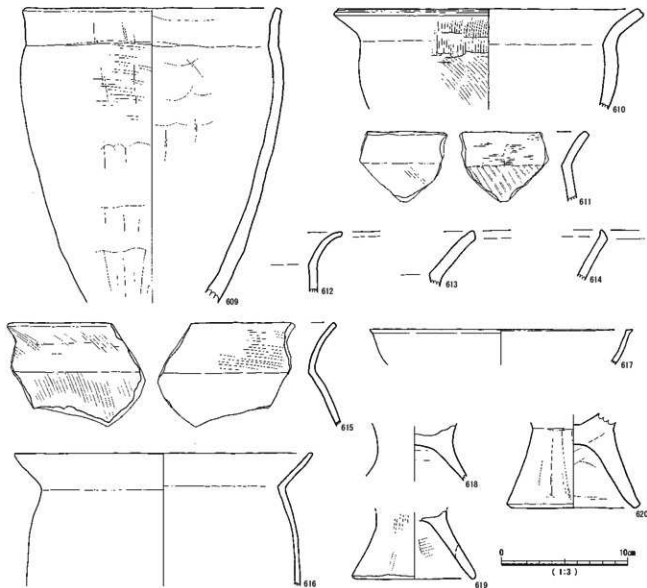
胎土が精製されているが、597は1～2mm大の砂粒を多く含むやや粗い胎土である。

599～601は小型丸底甕で、いずれも内面調整はナデ調整で、599は胴部片で最大径が胴部中位よりもやや下にあり、頸部でくびれて口縁部が広くタイプと考えられる。内外面とも、調整は丁寧である。600は、器形は604に類似するが赤色顔料は塗布されておらず、やや調整が粗い。底部は欠損するが、胴部下半の器壁は厚い。601は、底面に小さな凹形の張り出しがみられる。灰白色に近い明るい色調で、精製された胎土である。他の資料と作りが異なり、布留系の小型甕と考えられる。

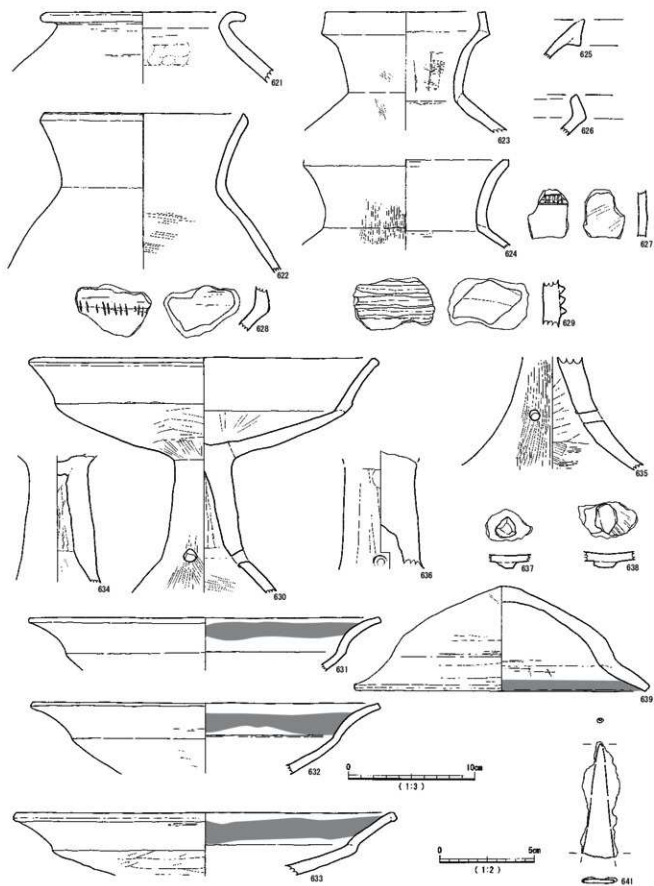
602～606は外面に赤色顔料が塗布されているもので、器壁も薄く作りも丁寧である。外面調整は斜位のミガキ調整を主とし、口唇部付近はナデ調整により成形されて

いる。603は602よりも口径が広く開くタイプで、内面には横位のハケナデ調整及び指頭押圧が加えられている。604は胴部下半の破片で、内面は縦位のユビナデ調整である。

605はそろばん形を呈し、外面は赤色顔料が塗布されている。頸部がわずかに残っており、屈曲して口縁部が広く開くものと考えられる。胴部外面はやや摩滅しているが、横位を主とするミガキ調整で、胴部は部分的にハケナデ調整がみられる。また、底面付近を中心に被熱しており、胴部下半は一部剝離している。また、下面側から観察すると、底面の中心とややずれて帯状にスス痕が残っている。内面は外面に対して調整が粗く、胴部上半は接合面が段として残り、縦位のユビナデ調整が明瞭にみられる。下半はケズリ後ナデ調整で、内底面は指頭押



第101図 土器溜8出土の土器(1)



第102図 土器溜8出土の土器(2)と鉄製品

圧で成形されている。胴部下半は器壁もやや厚手であり、重心は安定している。

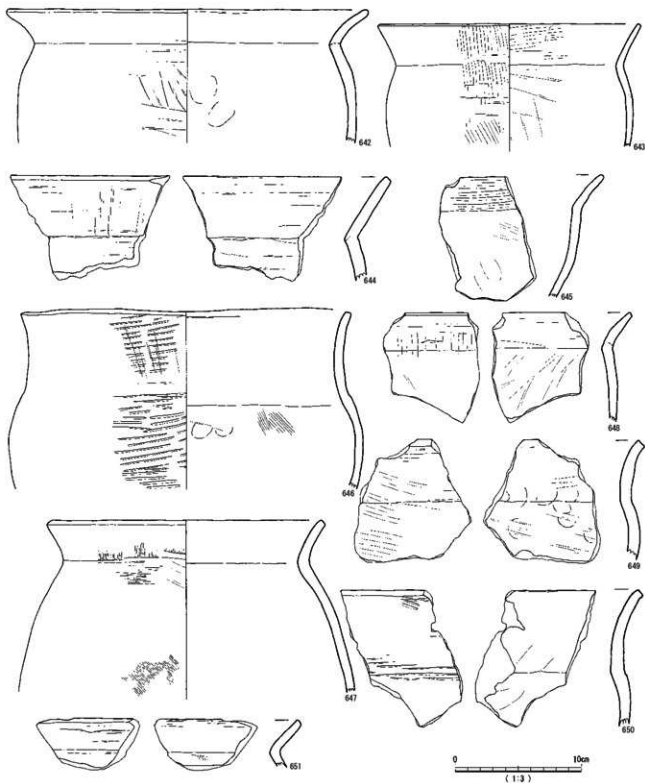
606は小型の高坏形土器である。胴部の後が明瞭で、口縁部が広く外反する器形を呈する。口縁端部がわずかに欠損している。外面は横位のミガキ調整で、赤色顔料が

塗布されている。

円盤形土製品 (607)

古墳時代の土器を転用しており、周囲を擦って円形に成形している。

鉄製品 (608)



第103図 包含層出土の古墳時代の土師器 (1)

錆化が進んでいるため全形がはっきりしないが、茎の端は欠損している。幅1.5cmの扁平なヤスリ状の形をしており、茎のついたものである。

⑥土器溜8（第101図・第102図）

D-35区のN層で検出されたが、南側は用地外へ延びている。長軸390cm、残存部分の短軸185cmの範囲に、甕、壺、高坏などの土器が集中して出土した。

完形品はないが、比較的器形が復元できる資料が多かった。

壺形土器（609～620）

609は口縁部が短く立ち上がり、肩部がわずかに膨らむ器形である。口縁端は横位のナデ調整により、平坦面をなす。また、口縁部外面は工具によるカキアゲ状のナデ調整である。胴部は浅い凹凸が器面に連続しており、肩部付近にタカギ痕が残存する。堅穴建物跡10号出土の261に形態は近い。610は口縁部が短く、頸部で屈曲し外反する器形である。口縁端部はナデ調整により、中央が溝状に凹んでいる。外面は頸部の屈曲部より下位から、下部はやや粗いハケナデである。頸部内面の残は、明瞭である。611は外面は摩滅しているが、口縁部内面は横位のハケナデ、胴部は幅広条痕状の斜位のハケナデ調整である。

612は口縁部を引き延ばすように成形しており、頸部から大きく外反する。胴部内面は、ケズリ調整後ナデ調整で、色調は明るく器壁も比較的薄い。613は直線的に外傾し、口唇部内面はナデ調整により帯状に凹む。内面の残は明瞭で、器壁が厚い。614は器壁が薄く、口唇端部が内側に張り出す。615は薄手の作りをし、頸部で屈曲して外反するもので、端部は丸みを帯びる。内外面とも斜位または横位のハケナデ調整が部分的に残っている。摩滅により、胎土に含まれる長石がまばらに器面に露出している。

617は口唇部の作りが丁寧で、ナデ調整により外面側に張り出しを有する。616は頸部の屈曲部からあまり膨らみを持たない。いずれも摩滅しており器面調整は観察できない。

618～620は脚台であり、618は器壁が薄く軟質である。619は、胴部との接合面で剥落している。内外面ともハケナデ調整が部分的に残存するが、摩滅している。また、胎土には白色及び赤褐色の砂粒を多量に含む。620は外面に縦位の工具ナデが施され、底部の先端付近は横位のナデ調整が加えられている。底部は歪んでおり、部分的に先端が反っている。

壺形土器（621～629）

621は口縁部を強く折り曲げて外反する短頸壺で、口唇端部は丸く取められている。頸部内面は接合部分を中心に、ユビナデ調整が連続して加えられ、器面に凹凸があ

る。砂粒が目立つやや粗い胎土で、1～3mm大の長石を多く含む。本道跡ではあまり例がなく、A地点出土の140にも類似するが屈曲がより強い。水俣市北園上古古墳群（熊本県教委2020）で、1例類例がある。622は、口縁部が外傾する広口壺である。口唇部は外傾し、断面三角形状を呈する。胎土は軟質で摩滅しており、胴部内面に部分的にハケナデが残る。

623～626は二重口縁壺で、623は屈曲して内傾する。「く」字状に短く屈曲し、口唇端部も明瞭な平坦面が作出されている。また、頸部内面は、ハケナデ調整の工具痕が縦筋状に残る。胎土は2～3mm大の長石粒を多量に含む、やや粗い。624は器壁が薄く、口縁部の屈曲部付近で欠損している。頸部にはカキアゲ状の縦位のハケナデ調整が施され、頸部内面及び口縁部の屈曲部付近は横位のユビナデ及びナデ調整が加えられ、屈曲が成形されている。625は断面を三角形状に肥厚する壺で、胎土は軟質で赤褐色を多く含む。

626は623に近い。屈曲が明瞭で口縁部が短いものである。ただし、623に比べて、胎土は軟質で精製されている。627は沈線で突帯を模したものと考えられる。376に類似する。628は、屈曲部に細く鋭い刻みを連続して施している。629は分厚い作りの胴部で、3条の三角突帯を縦に貼り付けてある。にぶい赤褐色を呈している。

高坏形土器（630～636）

630は、器形が比較的復元できた資料である。浅く皿形の坏部で、脚部は筒状に広がり屈曲して開く。坏部下半は粗いケズリ調整後ナデ調整であり、脚部との接合部付近のみカキアゲ状のハケナデ調整である。内底面付近は、ミガキ様の丁寧なナデ調整である。非対称の穿孔が3か所残存しており、本来は4か所であったと考えられる。631～633は坏部の器高が低く、口唇部が外反きみに開くものである。口唇部はいずれも平坦面をなし、633は外面にやや張り出す。また、胴部は粗いケズリ調整後、ナデ調整が加えられている。630～633はいずれも、内面に帯状のスス痕がみられ、蓋として使用されている。

634～636は、脚部である。634は筒状に整形した際の縦シワが明瞭で、坏部側から粘土を充填して成形している。635はスカート状に開く器形である。3か所穿孔が残存するが、本来は4か所であったと考えられる。外面はミガキ様の縦位のナデ調整が連続して施され、内面は上半はケズリ、屈曲部以下はハケナデ調整である。器壁は厚いが、丁寧な作りである。636は上半が中実となるもので、端部に穿孔が部分残存している。外面は縦位のナデ調整で、面状をなしている。

小型丸底壺（637・638）

637・638は、小型丸底壺の底部と考えられる。平坦な底部に、不整形な粘土が貼り付けられている。638は外面にタカギ痕状の筋があり、その上から粘土が貼り付けら

れている。

蓋形土器 (639)

本遺跡では高杯の転用例が多い中で、本例のみは専用の蓋形土器である。断面形は頂部が張り出すドーム状で、屈曲して底部は広く開く。端部は横位のナデ調整により平坦面が作出され、中央が筋状に凹む。内面上部は器面がただれたように荒れており、被熱によるものと考えられる。また、底部付近には幅2cm程、帯状にスズ痕がみられる。

鉄製品 (641)

錆化が進み全形がはっきりしないが、扁平先端がヤス状にとがったものである。

3 包含層出土遺物 (第103図～第108図)

表土から砂質シルト層までの間の地層に遺構内以外に含まれる古墳時代の遺物が多数出土している。ここではその中の主要な遺物を紹介する。

甕形土器 (642～667)

642～645は口縁部から胴部である。在地系の特徴を有するが、口縁部の長さや屈曲度に差があり、多少時期差があると考えられる。

642は頸部から広く口縁部が外反するもので、器面の厚さが不均一で凹凸がある。内面には楕円形の凹凸が連続するため、タタキ調整の可能性がある。外面は粗いユビナデで、その後口縁～頸部に横位のナデ調整が加えられている。胎土には赤褐色粒を多く含む。

643は口縁部が直線的に外傾し、口唇部は平坦面が作出されている。口縁～胴部外面は縦位のハケナデ調整で、下半は部分的に斜位のハケナデ調整である。内面は横位のハケナデ調整を主体とし、頸部以下はケズリのちナデ調整である。全体的に器壁が薄く、丁寧な作りである。胎土には赤褐色及び灰色の小礫を多く含む。

644～648は口唇部に平坦面を有し、外傾する口縁部片である。

644は頸部の屈曲が明瞭な口縁部で、全体的に丁寧なナデ調整で仕上げられている。口唇部は断面方形で、端部は平坦面が作出されている。胎土には、金雲母を多く含む。645はやや小型のものと考えられ、頸部から緩やかに外傾する。外面の胴下半はケズリ調整後、ナデ調整である。口縁部内面は、幅広い横位のハケナデ調整である。646は屈曲の稜が鈍く、胴部が緩やかに影らむ器形で、外面のタタキ調整が明瞭である。タタキ調整は水平方向かやや右上がりで、口唇部付近まで施されている。口縁部は縦位のナデ調整が加えられ、頸部のタタキ調整は部分的に途切れる。胴部はタタキ調整のため部分的に平坦面状をなし、口縁端部は平坦面が作出されているがゆがみがある。器壁は薄手で、焼成も良好である。

647は口縁部が短く外傾し、頸部から胴部が緩やかに

影らむ器形である。摩滅しているが頸部には横位、胴部には斜位の細かいハケナデ調整が部分的に残存する。また、頸部には工具の先端が押し、カキアゲ口縁状の縦位のハケナデ調整が施されている。648は口縁部である。口縁部はいわゆるカキアゲ口縁で、胴部はユビナデ調整である。内面の頸部付近には、工具痕が筋状にみられる。外面には粘土の接合面がみられ、内外面とも屈曲の稜は緩い。

649・650は頸部から緩やかに立ち上がり、口唇部付近で折れ曲がって外反する。649の口唇端部は、ナデ調整により明瞭な平坦面が作出されているが、頸部の屈曲や胴部の張り出しは緩い。外面は、左上がりのタタキ調整の後丁寧なナデ調整で、頸部の工具の押しで段状をなす。650は頸部屈曲部付近に、ヘラ状工具による横位の筋が複数施され、段状をなしている。ナデ調整を基本とするが、部分的にタタキ痕が残存する。口唇部は端部で折れ曲がり、外面側にやや張り出す。胎土に、白色粒を多量に含む。

651は頸部から「く」字状に強く外傾する口縁部で、端部は丸みを帯びている。内面は横方向のハケナデで調整している。

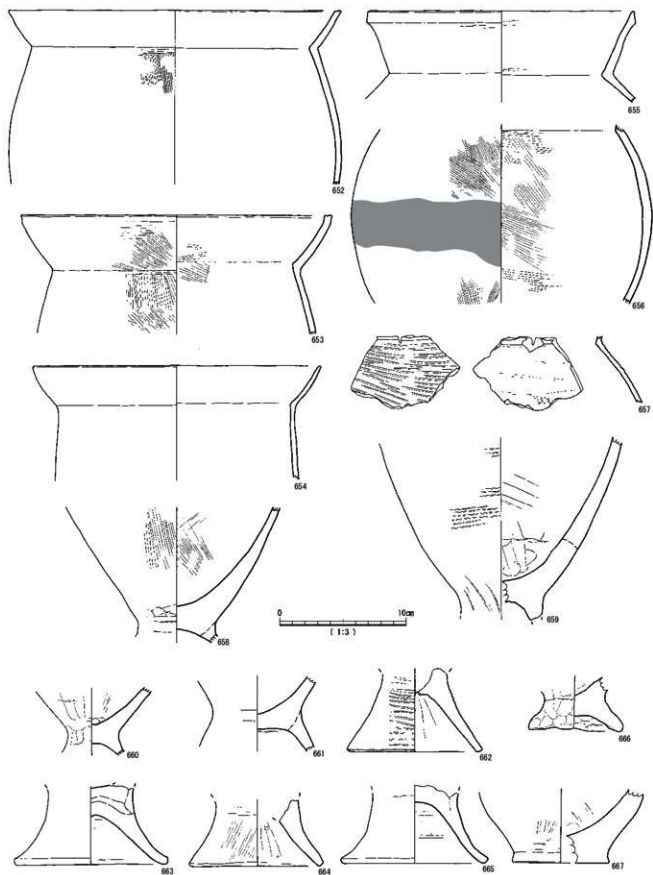
652・653は内湾度が緩いが、口唇部で屈曲して立ち上がる。口唇部は横位のナデ調整で、外面側にやや張り出し、横位・斜位のハケナデ調整で仕上げられている。胴部外面は頸部付近が縦位、胴部は斜位の細かいハケナデ調整が施される。屈曲部は横位のナデ調整で作出され、頸部内面の後縁は明瞭である。654は、口縁部が内湾し、長胴形を呈すると考えられる。

655・656は、薄手である。器形は屈曲部から胴部が球胴状に影らむと想定される。655は口縁部が頸部から直線的に立ち上がって外傾し、口縁部が断面三角形に肥厚する。656は胴部で、頸部の屈曲部がわずかに残存する。内外面とも横位または斜位のハケナデ調整が複数切り合い、外面の最大径部分は被熱により帯状に黒変し、器面が荒れている。器面には緩やかな平坦面が連続しており、タタキ成形であったと考えられる。

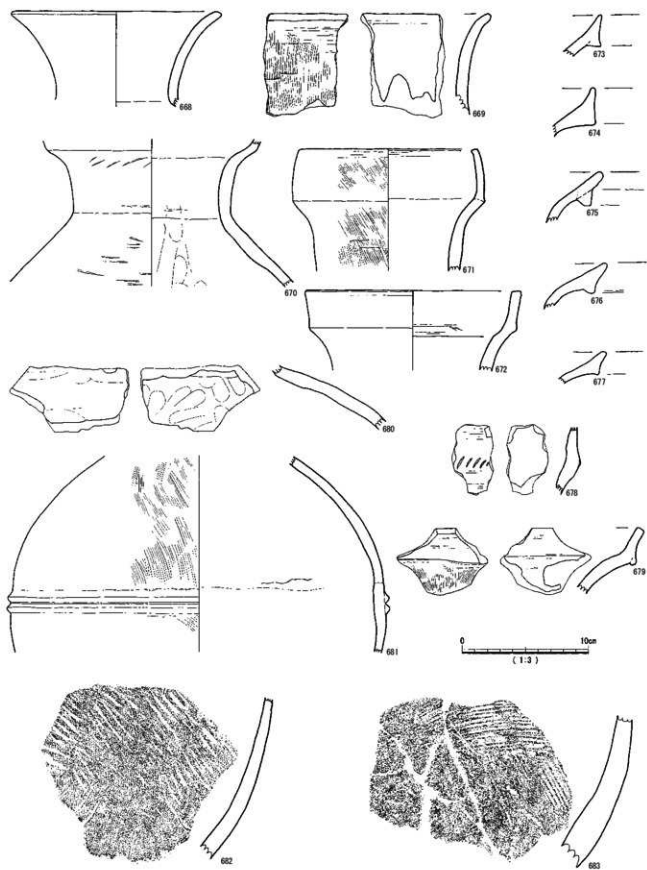
657は、外面に幅広い左上がりのタタキが明瞭で、内面には細かいハケナデ調整が部分的にみられる。

658～659は舞台中心位で欠損するもので、659は、外面に水平方向の細かいタタキ痕が残り、器面が平坦面状をなしている。また、胴部と脚部の境界部分は縦位の粗いユビナデ調整が連続して加えられている。内底面の調整は粗く、ユビナデ調整と指頭押圧により器面に凹凸がみられる。胴部と脚部の境界の調整は、658と類似する。

660～665は舞台である。660の屈曲部は連続した縦位のユビナデ調整で成形され、細かな面が生じている。661は内底面が台形状を呈する。661・664は、舞台を外側から胴部に貼り付けるように作られている。



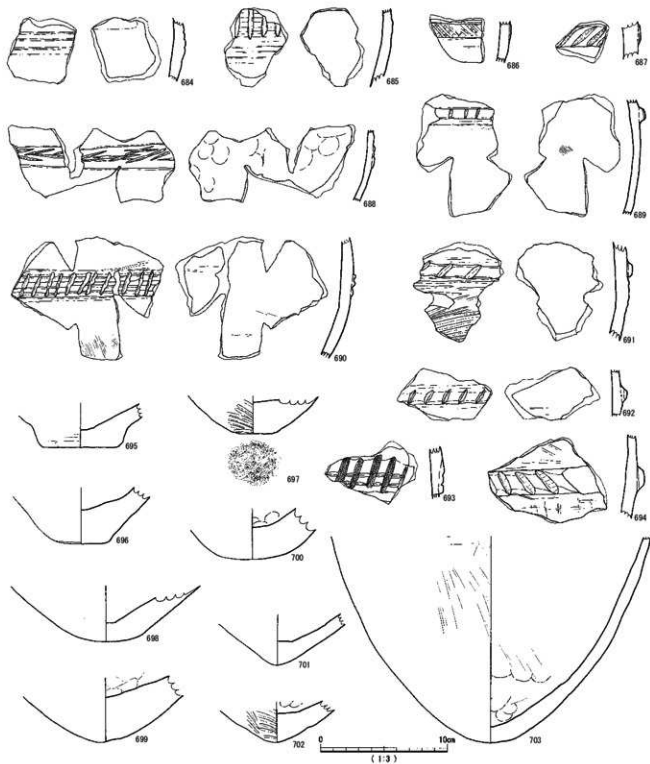
第104図 包含層出土の古墳時代の土師器(2)



第105図 包含層出土の古墳時代の土師器(3)

662は薄手で器高があるタイプで、端部はナデ調整で明瞭な平坦面が作出されている。外面は水平及びやや左上がりのタタキ調整で、内面は工具痕が残る。663は、緩やかに外反するタイプである。内面はミガキ様の丁寧な凹位のナデ調整で、内底面がわずかに突出する。胴部との接合面が特徴的であり、底部側と胴部側の接合面が

離れており、5mm弱の隙間が空いている。元々接合面同士に隙間があったのか、隙間部分の破片が消失したために隙間となっているかは不明である。664はわずかにカーブして開く器形で、端部はナデ調整により平坦面を有する部分と、丸みを帯びる部分がある。内面には工具痕が数条位のハケナデ調整である。665の器壁は薄く、底部に



第106図 包含層出土の古墳時代の土師器(4)

向かって屈曲して広がり、端部はわずかに平坦面を有する。胴部との接合面で剥落しており、接合線も明瞭である。内面は強めの横位のナデ調整で、ドーム状に仕上げられている。

666は小型の底部で、内外面とも指頭押圧が明瞭な手捏ね状の成形である。器形はゆがみ、脚台というよりも上げ底状の作り出しである。内底面に椀痕がある。

667は平底で、底部からの立ち上がりに横位のナデ調整が加わるため、ややくびれる。胎土には、灰白色の3～5mm大の円礫をまばらに含む。

壺形土器 (668～703)

668・669は口縁部が外反し開く広口壺である。668は口縁部が外反して広く開き、頸部の屈曲部がわずかに残存する。口唇部はわずかに平坦面を有するが、内外面とも摩滅しており表面が剥落している。669は口縁部に強めの横位のナデ調整が加えられ、外反する。外面は縦位のハケナデ調整である。広口壺の中では頸部が長く、緩やかに開くタイプと想定される。

670～672・678・679は二重口縁壺である。670は口縁部の屈曲がわずかに残存し、口縁部の屈曲下には斜位のヘラ痕が巡る。頸部の屈曲は緩く、胴部外面には細筋状のタキ痕が部分的に残存する。内面は、胴部を中心に縦位または斜位のユビナデ調整である。色調は褐色で、1～2mm大の長石粒を多く含む。671・672は屈曲部からわずかに外傾して立ち上がり、口唇部はナデ調整で平坦面をもち、屈曲部も明瞭に作出されている。色調が赤く、胎土には5mm大の長石を練りに含む。

673～677は口縁部を断面三角形に肥厚し、二又状口縁を呈するものである。673・674は胎土が軟質で、675は口縁を突帯状に貼り付け、二又状口縁に近い形態である。白色・灰色の礫を多く含むやや砂質の胎土である。

678は半月形の刻みを施す。679は頸部で大きく外反するもので、屈曲部からさらに開く。口縁部は内外面とも強めの横位のナデ調整で、口唇部には平坦面が作出されている。また、屈曲部の調整は粗く、稜線がゆがんでいる。頸部付近は、縦位のハケナデ調整である。胎土に、白色及び褐色礫を多量に含む。

680は壺形土器の肩部の破片で、色調・胎土が大型二重口縁壺の例に近い。外面はタキ整形によると思われる平坦面があり、内面は連続したユビナデ調整により、器面に凹凸がみられる。

681は丸く膨らむ胴部の最大径に2条突帯を巡らせるもので、突帯下は被熱により赤変し器壁も荒れている。外面は突帯からのカキアゲ状のハケナデ後、縦位・斜位のハケ目が連続して加えられている。内面の接合部付近は、ユビナデ調整により器面がやや凹む。

682・683は胴下部である。厚手で、外面には左上がりのタキ調整、及び縦位のハケナデ調整である。682は幅

広の粗いタキであるが、683は面をなす粗い縦位のケズリの上に密なタキ調整が残っている。また、内面は粗いユビナデと条痕状の工具ナデ調整である。これらは、堅穴建物跡3号出土の98・99などに類似すると考えられる。

684～694は、突帯である。684・685は器面を肥厚させ、その上に横位の沈線を3条巡らせ、685はさらに縦位の沈線で刻みを施す。686～688は幅広く薄い突帯を貼り付け、686はヘラ状の工具で格子文、687は斜位の刻み、688は崩れた「く」字状の沈線を施している。また、688は突帯の内面付近に連続した指頭押圧がみられる。689は断面形状の突帯を貼り付け、浅い刻みを施す。器面は薄く摩滅しており、内面にわずかに斜位のハケ目が残っている。690は幅広い粘土帯を貼り付け、横位に2条の凹線を巡らせて3条突帯状をなしている。その後、ヘラ状の工具で斜位の刻みを施している。内外面ともナデ調整を主体とするが、胴部外面には部分的にハケ目がみられる。691は外面に条痕状の水平及び右上がりタキが連続して加えられ、その上に粘土紐を貼り付け、斜位の深い刻みを施している。689～691は、壺形土器の突帯の可能性もある。692は台形状の突帯で、左下がりの鋭い刻みを付けている。内外ともナデ仕上げである。693は低く幅広い突帯に3条の凹線を引き、その上に左下がりの布目のある刻みが付されている。

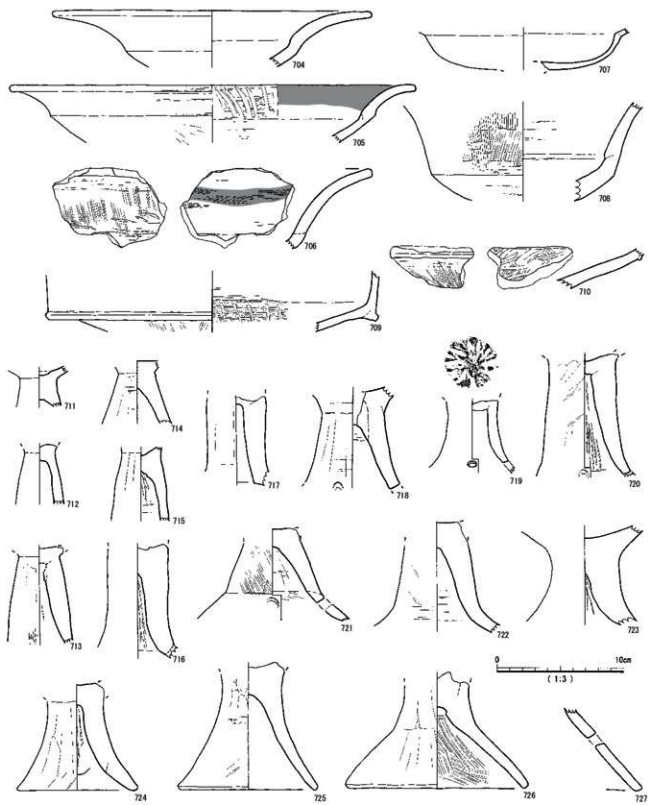
694は、断面かまぼこ形の粘土紐を貼り付け、ヘラ状工具で大ぶりの刻みを施す。外面は左上がりないしは水平のタキ痕が残る、その上からケズリ状のナデ調整が加えられている。

695～703は、底部である。695～697は平底、698・700はレンズ状の丸底、701～703は丸底または尖底である。695は立ち上がりがくびれて広く開く器形で、外面はナデ調整により端部は丸く仕上げられている。696はゆがみがあり、左右の立ち上がりが異なる。697は外面に左上がりのタキ調整が施され、底面ににもかかわらず筋状の痕跡が残っている。699はゆがみが大きく、厚さが不均一な厚手で、底部の厚みが3.6cmを測る。内底面にはユビナデ調整が施されている。700は色調が明るく、器壁もかなり厚手である。703は中型の壺と考えられ、胴部が緩やかに膨らむ器形で、外面は連続した斜位のナデ調整である。また、内底面を中心に指頭押圧が施され、器面に凹凸がみられる。702は外面に複数方向のタキ痕がみられる。701及び702は赤みが強い色調で、断面で見ると器面側と断面内部は色調が異なる、赤色に発色する粘土を表面にかぶせている可能性がある。

高坏形土器 (704～727)

704～710は坏部である。

704～706は、口縁部が広く開くタイプの高坏である。705は外面の屈曲部下はケズリ調整後、ナデ調整が加えら



第107図 包含層出土の古墳時代の土師器（5）

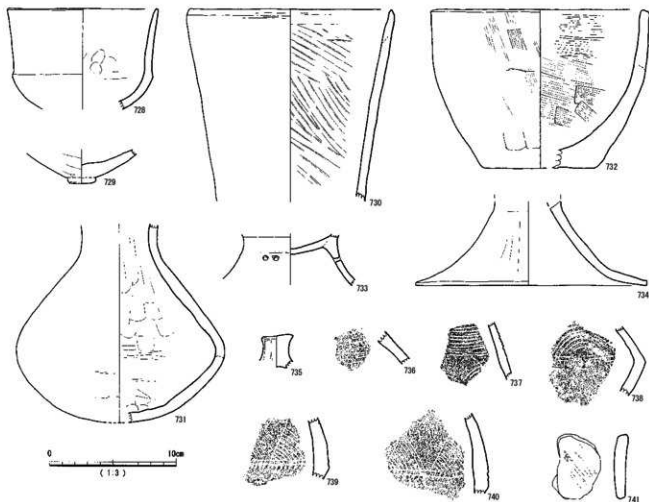
れている。また、口唇部は端部付近で広く屈曲し、口唇端部は平坦面を有する。屈曲部内面は横位のハケナデ調整後、斜位のミガキ調整が暗文状に施されている。内面には口縁部付近に帯状にスス痕が巡っており、蓋として転用されたと考えられる。706は屈曲部上に左上がりのタキ痕が残り、その上位から縦位のハケナデ調整が加えられている。口唇部付近は内外面ともナデ調整で、端部は平坦面が作出されている。内面は斜位のハケナデ調整が部分的に残存し、下半はナデ調整である。また、内面には帯状にスス痕がみられ、蓋として転用していたことが分かる。

704・707は内外面とも摩滅している。704は器高に対し口径が大きく広がり、器壁は厚い。口唇端部はナデ調整により、平坦面が作出されている。

707は塊形を呈し、器壁が薄い。湾曲度合いが強く、あまり類のない形態である。708は厚手で、緩く屈曲して口縁部が外反する器形である。比較的後が明瞭で、内面側は接合面で段をなしている。外面は屈曲部下は横位のナデ調整で、上位は連続した縦位及び斜位のハケナデ調整が加えられている。709は屈曲部が突帯状に張り出し、屈

曲して口縁部が直口する。外面の屈曲部上半は摩滅しており詳細は不明であるが、下半は粗いハケナデ調整後、屈曲部下に横位の強めのミガキ調整が加えられている。内面は、屈曲部を起点とした斜位のハケナデ調整後、横位のミガキ調整、縦のミガキ調整を加え、ミガキ調整が暗文状をなしている。横位のミガキ調整は間隔が空き、幅も不均一であることから、上面視では渦巻き状をなしていた可能性もある。710も709と同様に屈曲部が張り出すタイプで、坏部の器高が低く、口縁部が広く開くタイプと考えられる。外面はカキアゲ状の斜位のハケナデ調整で、屈曲部付近は横位のナデ調整である。内面は、斜位のハケナデ後にミガキ調整が加えられおり、ミガキの方向は斜位を基本とするがランダムで709のような暗文状の規則性はみられない。

711～727は、脚部である。711～713は小型で711・714は脚部が開くもの、712・713はエンタシス状に近く中影らみになるものである。711は軟質で精製された胎土である。712は外面は摩滅しているが焼成は良好で、内底面はドーム状に丸みを帯びる。713は筒状に成形した脚部に環を接合して作られており、内底面に空間が生じている。



第108図 包含層出土の古墳時代の土師器(6)と土製品

また、714は外面に部分的に赤色顔料が残存しており、本来は全面に塗布されていた可能性がある。715はやや作りが粗く、特に内底面に放射状に工具痕が残り、器面に凹凸がみられる。720～722は、中・大型の高杯の脚部と考えられる。716・721は脚部に穿孔を有するもので、721は器高に対し、裾部が屈曲から広く開く。716は部分的に穿孔が2か所残存しており、本来は3～4か所と想定される。717は分厚い柱状部から、外へ大きく屈曲する裾部へ移っている。坏部との間がはがれているが、中央にソケット状の粘土塊をつめ込んでいる。718・719は裾部へゆるやかに広がるが、屈曲部ははっきりせず、その部分に穿孔がある。718は2か所残っている。719の坏部との境には放射状のキザミがある。719の外面は摩滅でまだらになっているが、赤色顔料が塗布されている。両者とも中央につめ込み痕がみられる。

722は内面端部に屈曲部がわずかに残存し、胴部は直線的である。723は大型で器壁が厚く、緩やかに屈曲しながら坏部及び裾部に関く器形である。胎土には2～3mm大の白色礫・長石を多く含む。内面は、脚部を筒形に成形する際の縦シワが明瞭にみられる。727は穿孔を有する脚部と考えられる。内外面とも摩滅しており、穿孔も1か所しか残存しないため詳細は不明であるが、器台の可能性もある。

埴形土器 (728・729)

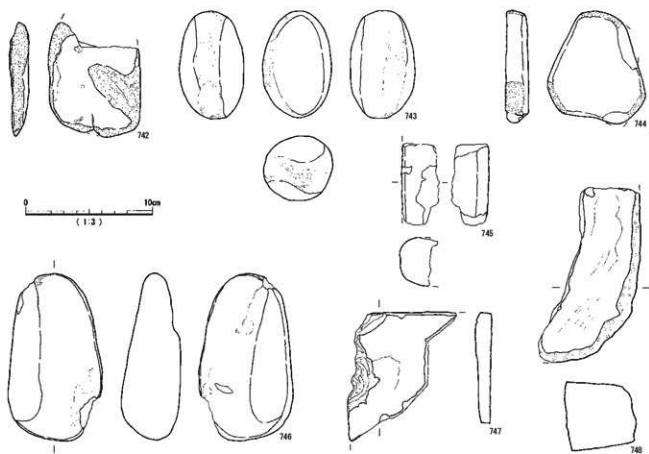
728は器高の低い丸底壺で、外面に緩やかな後を有する。内面は後が不明瞭で、弱い指頭押圧が加えられ、彎曲する器形が作出されている。器壁は薄手であるが、胎土に2mm大の白色礫を多く含む。729は、小型丸底壺の底部で、ボタン状の突起を有する。器壁は厚手である。

小型臺形土器 (730・731)

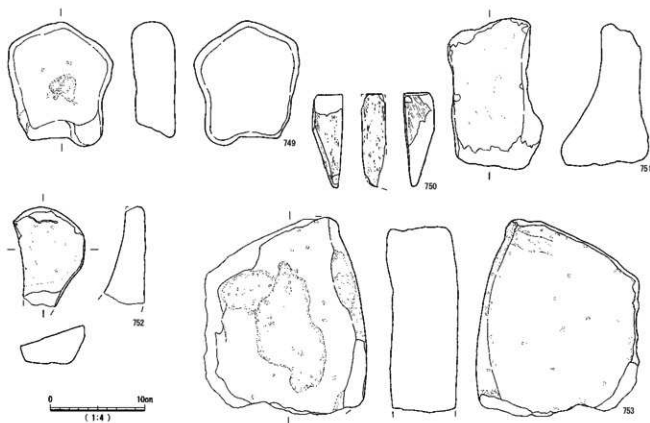
730は長頸の丸底壺と考えられ、直線的に外傾する。口唇部はナデ調整により舌状を呈し、内面には幅広の条痕状の工具ナデがみられる。731は、長頸の丸底壺である。頸部以上は欠損しているが、細長く立ち上がり、胴部下半が緩いそぼん玉状に膨らむ。底部はレンズ状の丸底である。外面の調整は摩滅により不明であるが、内面は連続したユビナデや指頭押圧によって、器面に細かい凹凸をもつ。また、内底面は指頭押圧で成形されている。胎土は精製されて軟質で、色調は明るい。

鉢形土器 (732～734)

732の口唇部はナデ調整により平坦面をなし、わずかに外傾する。器面にはハケナデ調整が残るが、外面は器面に凹凸があるため、粗いユビナデ調整で成形されていると考えられる。内面は、丁寧なハケナデ調整である。胎土に3～5mm大の長石を多量に含み器面、断面、外面下半にも露出する。外面の上半と下半で色調が異なり、上



第109図 包含層出土の石製品 (1)



第110図 包含層出土の石製品(2)

半はスス、下半は被熱による赤変と考えられる。

733・734は台付鉢形土器の脚台部である。733は薄手の鉢部にスマートな脚台が付されている。接着部近くに2孔1対の小さな穿孔があり、3か所に配置されているようである。紐ずれらしき痕跡もみられる。外面は横方向のナデ整形、内面もナデ整形で仕上げている。734は台端の直径が18.3cmと大形の脚台で、端部は矩形を呈している。内外ともナデ整形だが、外面の裾部はミガキ様の丁寧な縦ナデで仕上げている。

蓋形土器(735)

735はつまみである。器壁の薄さや大きさから、小型の蓋と推定される。上面観は楕円形を呈し、手握ね状でゆがみがある。胎土に2mm大の長石を多く含む。

免田式土器(736~740)

いずれも胴部片である。736と737は薄い作りで、737は浅い横位沈線が、その下に上向き重弧文が残っている。長頸壺の頸部付近と考えられる。738は逆「く」字状の屈曲部上部に横位の沈線と重弧刻みが施される。739・740は横位沈線文の上に三角形状歯文の枠内を弧文で充填している。

円盤形土製品(741)

半穴であるが、土器を打ち欠いて円盤形にこしらえている。

石製品(第109図・第110図)

包含層出土の石製品(742~753)

石製品のうち、744・746・748・751・753は堅穴建物跡10号・堅穴状道溝、土坑39号・土坑43号で出土しているため、それぞれの項で説明してある。

742は周辺が摩滅している粘板岩製磨製石斧の下半部で、上半が欠損している。両刃で、刃部に対こぼれがある。最大幅7.3cm、厚さ1.5cm、残存質量131gである。E-28区の表土で出土している。

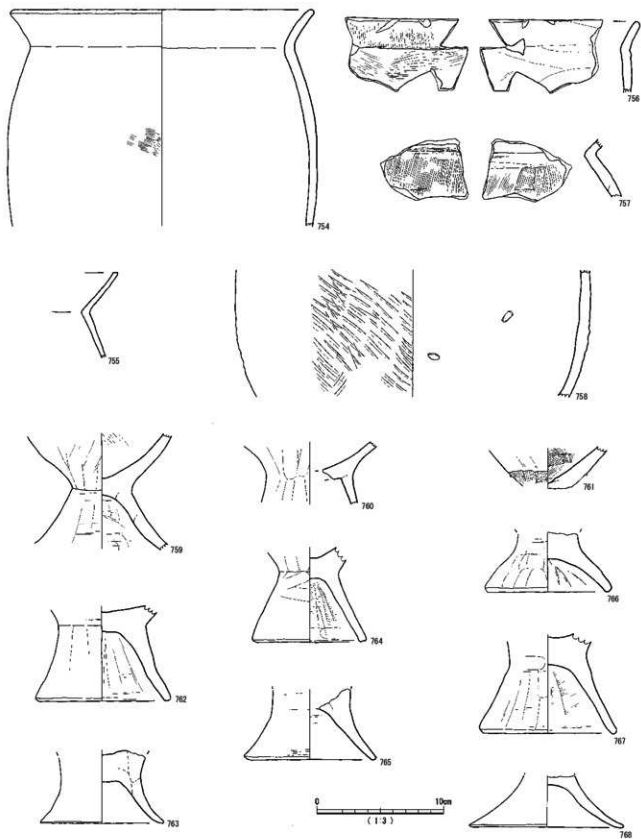
743は楕円形の砂岩河原石を利用した磨石である。筋状に使用した痕跡あり、短軸部分には敲き痕もみられる。最大長8.5cm、最大幅5.5cm、重さ238gである。D・E-31区で出土した。

744は土坑39号で出土している。

745は上下と片方の三方が欠損している厚さ3.7cmの砂岩製台石で、上平坦面に打痕がある。残存長は6.5cm、幅は3.0cmで、重さ107gである。D-28区IIb層で出土している。

746は堅穴状道溝で出土している。

747は表面が剥脱した砂岩製砥石で、表面は細かく研がれた仕上げ砥石である。方形を呈しているが、大きく破損し、コーナー部分も打ち欠かれている。E-29区で出土している。



第111図 磯敷遺構出土の古墳時代の土師器(1)

748は安山岩製の石皿破片で、厚さが7cmある。土坑43号で出土している。

749はD-26区のピットで出土した凹み石である。最大長12.3cm、幅11.1cm、厚さ4.4cmの薄い砂岩礫の中央が打痕によるくぼみがみられる。円化した上側面は磨石として使用している。重さ1001gである。

750は最大長9.9cm、幅3.1cm、厚さ2.5cmの方柱状をした粘板岩を使用した仕上げ砥石である。表と両側面の三面を使用しており、石材のせいか表面がツルツルした良質の仕上げ痕である。E-29区で出土している。

751は土坑39号で出土している。

752は最大厚が4.9cmもある厚い花崗岩(天草石)を使用した砥石である。最大長が10.3cm、幅が7.0cmであり、重さは340gである。表と両側面の三面を使い込んでおり、その稜は鋭くなり、強くくぼんでいる。D-34区で出土している。

753は竪穴建物跡10号で出土している。

磯敷遺構出土遺物

壺形土器 (754~768)

754は頸部が緩く屈曲して外反し、緩やかに胴部が膨らむ。口唇部はわずかに平坦面を有する。全体的に摩滅しているが、外面に斜位のハケナデ調整が残存する。胎土に、5mm大の角礫状の長石をまばらに含む。755は口縁部がわずかに内湾し、長胴形を呈すると想定される。全体的に器面が膜状に剥落している。口唇部は明瞭な平坦面で、わずかに外面側に張り出す。756は屈曲が緩く胴部もほぼ直線的になるもので、口唇部はゆがみがある。頸部から口縁部にかけてはカキアゲ口縁状を呈し、わずかに段がある。また、胴部外面は斜位または横位のハケナデ調整である。胎土は軟質で、マーブル状である。757は、壺形土器の頸部と考えられる。器面は厚手であるが、内外面とも細かく斜位または横位のハケナデ調整で、屈曲部付近のみ横位のナデ調整である。

758は胴部である。外面には左上がりの幅広いタタキ調整で、複数切り合う。下半にはわずかにハケナデ調整がみられ、タタキ後に施されている。内面には、種実状の圧痕が2か所みられる。

759~768は胴部~脚部である。759・760は器壁が薄く、台付鉢にも近い形状である。759は、外面は縦位のユビナデ調整後横位のナデ調整で成形され、屈曲部は特に丁寧なナデ調整である。また、胴部はケズリに近い斜位のナデ調整が加えられている。脚部内面は調整が粗く、横位のナデ調整を主とするが、接合痕が明瞭で、部分的に指頭押圧による凹凸がみられる。760も同様に、外面は縦位のユビナデ調整である。761は小型で、脚部との接合面で剥落している。接合面には細かいハケナデ調整が施され、内面も同様のハケナデ調整である。また、底面の

剥離面には木葉片の圧痕がみられる。

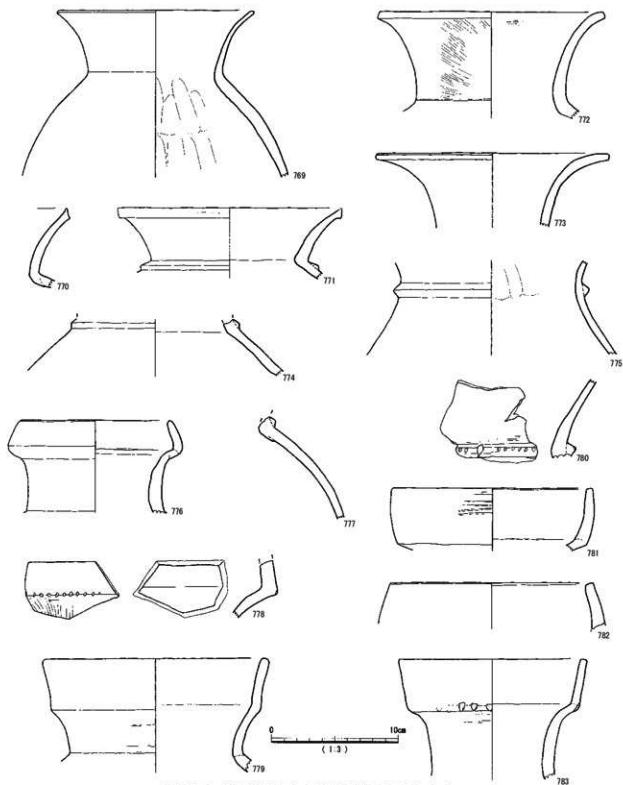
762・764・767は直線的に脚が開くもので、端部には平坦面が作出されている。764・767の内面にはハケナデ調整が明瞭で、工具を止めた際の筋が残る。また、764は丁寧な作りで、径が小さく、器壁も比較的薄い。766は器高が低く外影らみになるタイプで、外面は連続した縦位のユビナデ調整で成形されている。胴部との接合部分で剥落しており、胴部への立ち上がり部分は横位のナデ調整である。内面には、工具ナデの縦筋が残る。762は、内面に放射状に伸びるハケ状の工具痕がみられる。器形はゆがんでおり、屈曲部から胴部への立ち上がりの角度が部位によって異なる。763・765は、薄手で外反するタイプである。763は接合面が複雑で、複数のパーツをつなぎ合わせるようにして成形している。765は摩滅しているが作りが丁寧で、外面端部には横位のミガキ調整がみられる。768は裾部に向かって広く開くタイプで、胴部との接合部分で剥落している。内底面はドーム状を呈する。端部はやや平坦面状になる部分と、細長く舌状になる部分がある。径から壺形土器に含めたが、台付鉢の台部の形態にも類似する。

壺形土器 (769~805)

769・770は口唇部が外反するタイプで、772・773は口唇部がさらに反り、大きく張り出す器形を呈する。769は器壁が薄手で、胴径があまり大きくならず長胴になる中型の壺と考えられる。口唇部は薄く引き伸ばされ、端部にわずかに平坦面を有する。軟質で砂粒をほとんど含まない胎土のため内外面とも摩滅しているが、内面には連続した縦位のユビナデ調整を思われる凹凸がみられる。770は端部がわずかに二又状を呈し、内面側に張り出す。771に類似するが、頸部に突帯を持たない。772・773はいずれも摩滅しており、772は内面に部分的に斜位のハケ目が残存する。また、773はナデ調整により口唇部に筋状の細い凹みがある。

771・774・775・777・780は頸部に三角形の突帯を付けるもので、780のみ刻みがつく。771は表面が薄膜状に器面が剥離しており、調整痕は残っていない。775は胴部があまり張らず、頸部が細長く伸びるタイプで突帯もシャープである。774と777は胎土が類似しており、いずれも白色の砂粒を多く含む。777は頸部内面の接合痕が明瞭で、胴部内面には太めのハケナデと思われる調整が部分的に残っている。780は胎土は軟質で砂粒をほとんど含まず、マーブル状を呈する。

776~784は二重口縁壺である。776・781は内湾、778・782は内傾、779・783は外傾する。776は屈曲が強く「く」字状を呈し、内面には接合痕が明瞭にみられる。胎土は粗く、砂礫を多く含む。781はナデ調整により口唇部に平坦面が作出され、口唇直下の外面がわずかに凹む。また、外面には水平方向のタタキ痕が部分的に残存

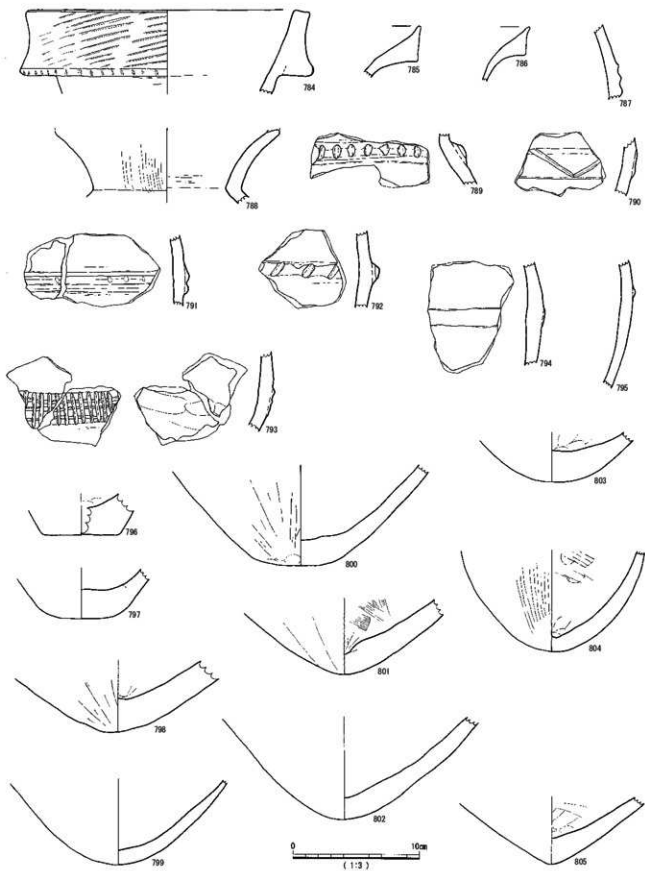


第112図 磯敷遺構出土の古墳時代の土師器（2）

する。胎土に、3mm大の白色礫を疎らに含む。

778は、口唇部が擬口縁状のため、もう少し長さがあると考えられる。屈曲部の稜は明瞭で、端部に浅く刻みが施されている。外面の屈曲部下はカキアゲ状の縦位のハケナデ調整である。782は、屈曲部の接合部で剥落して

いる。口唇端部はナデ調整により平坦面が作出されている。779は屈曲部の稜が緩く、部分的に屈曲度合いにも差異がある。783は屈曲部に浅い刻みを施しているが、欠損により部分的にしか残存しない。胎土は赤みの強い発色で、胎土に3～5mm大の灰白色の角礫を多く含む。



第113図 磯敷遺構出土の古墳時代の土師器 (3)

784は大型の二重口縁壺で、断面が三角形状に大きく肥厚する。口唇端部は平坦面が作出され、外面には沈線状の右上がりの条痕がみられる。また、肥厚部の端部はヘラ状工具で浅い刻みを連続して施している。口縁部は厚く重量があるのに対し、頸部の器壁は薄い。山陰系大型壺の影響があると考えられ、色調は暗い。胎土に2~3mm大の長石を疎らに含む。礫敷遺構とE-28区の石列遺構で出土した破片とが接合している。

785・786は、断面三角形の肥厚口縁である。いずれも胎土は軟質で、砂礫はほとんど含まない。赤褐色の軟質な粒子を疎らに含む。

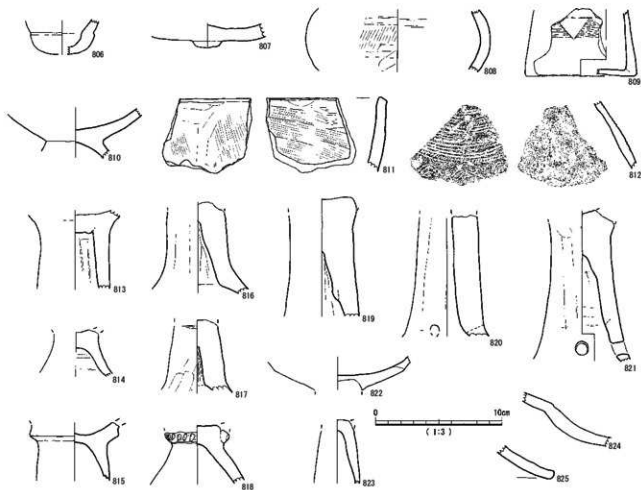
787は3条の三角突帯のある肩部である。

788は二重口縁壺の口縁部で、口縁端近くが欠損している。頸部で強く屈曲して外反し、端近くで直立あるいは内傾する。内外面ともナデ調整だが、一部にハケ目がみえる。灰白色を呈し、赤色粒を多く含む胎土である。

789~795は突帯である。789は屈曲があり、頸部と考えられる。790・794は幅広い突帯を貼り付けるもので、790は鋸歯状の沈線を施す。また、794は胎土に3~5mm大の灰色・赤褐色礫を多く含む。789・792は丸みを帯びた幅

広い粘土紐を1条貼り付け、その上に押圧状の刻みを施している。791は不整形な2条の粘土紐を貼り付け、浅い刻みを施している。793は幅広に粘土帯を貼り付け、その上に横位の4条の沈線を巡らせ多条突帯状にし、さらに縦位の連続した沈線を施している。795は肩部で、低い突帯が貼り付けてある。

796~805は底部である。796・797は平底、800はレンズ状、803~805は丸底ないしは尖底である。796は小片であるが、底面が丁寧なナデ調整により、明瞭な平坦面が作出されている。797は、胎土に3~7mm大の灰色円礫を多く含む。798は厚手で、形状がいびつで外面側と内面側の中心もややずれている。内外面ともやや摩滅しており、胎土に多量に含まれる長石や白色礫が器面に露出する。799は薄手で、胎土に長石・白色礫を多量に含む。800は外面をカキアゲ状の縦位のケズリ調整で成形し、ナデ調整で仕上げている。底面付近は指頭押圧やユビナデがみられる。胎土は赤褐色・灰白色の砂礫を多く含む、やや粗い。801は内底面が凹み、その周辺にナデ調整が集中する。胴部内面はハケナデ調整である。外面は縦位のユビナデ調整により、単位ごとに小さな平坦面をなして



第114図 礫敷遺構出土の古墳時代の土師器(4)

いる。802は胎土が粗く、砂粒を多く含む。803は厚みのある丸底で、内底面はユビナデ・指頭押圧により凹凸がある。804は小型で、胴部が緩く膨らみ器形である。内外面とも幅広いハケによるナデ調整で、内底面は指頭押圧が連続して加えられている。胎土は比較的精製されているが、灰白色の5mm大の円礫を疎らに含む。805は尖底で、内面はユビナデ調整で仕上げられている。胎土は3~5mmの白色の角礫を多く含む、色調の赤みが強い点なども、土器溜4の477等の大型二重口縁壺と類似する。

塔形土器 (806~808)

806~808は小型丸底壺である。806の口縁部は外へ広がりがなごまっすく延びており、底は安定した丸底である。807は、蓋である。器壁は厚く、つまみも粗雑で、全体的に摩滅している。周縁は打ち欠きの可能性もある。808は大型のもので、部分的にハケ目が残っている。

ジョッキ形土器 (809)

809はジョッキ形で、外面に細線による鋸歯文を描き、その内部を横位の沈線で充填している。内底面は、ユビナデによりやや器面に凹凸がある。胎土に角四石粒を非常に多く含む、搬入品の可能性もある。

小型土器 (810)

810は、小型の台付坏ないしは台付鉢と考えられる。脚部が広く開くため、器高は高くないと想定される。内外面とも摩滅しており、胎土に含まれる3~5mm大の角礫状の長石がまばらに器面に露出する。

鉢形土器 (811)

811は、包含層出土の732に類似するが接合しなかった。口唇端部がわずかに外傾し、内外面に細かいハケナデ調整で仕上げられている。色調は暗く、胎土に3mm大の角礫状の長石が疎らに露出する。

免田式土器 (812)

812は、長頸壺の胴部片と考えられる。連続した横位の沈線文の間に2条のみ斜線を加え、端部には3~4条の沈線による重弧文を描いている。

高坏形土器 (813~823)

813は断面台形状を呈し、内底面は坏部との接合部の張り出しに、粗い工具痕が残る。内面には脚部を筒型に成形する際の縦シワが数条みられる。

814~818は脚部である。

814・817・823は小型のもので、814は屈曲部から緩やかに端部に開く。816・817は、器壁が厚く緩やかに膨らんで屈曲部から開くタイプのものである。いずれも、坏部との接合面で剥落している。外面調整は、817は屈曲部周辺が斜位のユビナデ、816は縦位のユビナデである。内面には、筒状に成形した際の縦シワがみられる。823は長脚で、胎土は軟質である。内面は丁寧なナデ調整である。815・818は、脚部の付け根に突帯を有するものである。815は断面三角形状に張り出し、そのまま坏部へとつながる。818は粘土紐を貼り付け、その上に押圧による刻みを施している。いずれも色調が明るく、胎土に白色・赤褐色の砂粒を多く含む。

819・820・821は長脚のタイプで、819は中実部が広く、重量がある。821は、坏部との接合面で剥落している。穿孔が2か所残存し、本来は対で4か所であったと想定される。作りは丁寧で、焼成も良好である。外面は縦位のユビナデ調整で、部分的に面状をなす。820は器壁が厚く筒状になるタイプで、坏部との接合面で剥落している。外面は、部分的に縦位のユビナデ調整によって面状をなす。下半を欠損するが、穿孔が部分残存しており、非対称で4か所施されている。

822は坏部で、脚部との接合面で剥落している。わずかに屈曲部が残っており、坏部が塊状の長脚高坏になると考えられる。内外面とも摩滅しており、胎土に多く含まれる2~3mm大の角礫状の長石が器面に露出している。

蓋形土器 (824・825)

824・825は、スス痕が明瞭で器面調整もケズリが主体となるため、蓋形土器の破片と判断した。本遺跡は高坏を転用した蓋も多く、高坏片の可能性もある。

825は内外面、824は内面のみ帯状のスス痕がみられる。

第7表 古墳時代土器溜遺構番号新旧対応表

新番号	旧番号	新番号	旧番号
SX3	S14	SX6	S112
SX4	土器集中2	SX7	SX2
SX5	土器集中1	SX8	SX3

第8表 古墳時代土坑遺構番号新旧対応表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK18	SK15	SK25	SK115	SK32	SK32	SK39	SK106	SK46	SK50
SK19	SK119	SK26	SK117	SK33	SK100	SK40	SK58	SK47	SK49
SK20	SK44	SK27	SK111	SK34	SK101	SK41	SK56	SK48	SK47
SK21	SK45	SK28	SK109	SK35	SK103	SK42	SK37	SK49	SK54
SK22	SK112	SK29	SK110	SK36	SK107	SK43	SK38	SK50	SK51
SK23	SK113	SK30	SK116	SK37	SK105	SK44	SK52	-	-
SK24	SK114	SK31	SK102	SK38	SK104	SK45	SK53	-	-

第5節 古代の調査成果

1 概要

遺構は24区から29区の範囲に集中しているが、出土している遺物はそれほど多くなく、盛行している集落とはいえない。

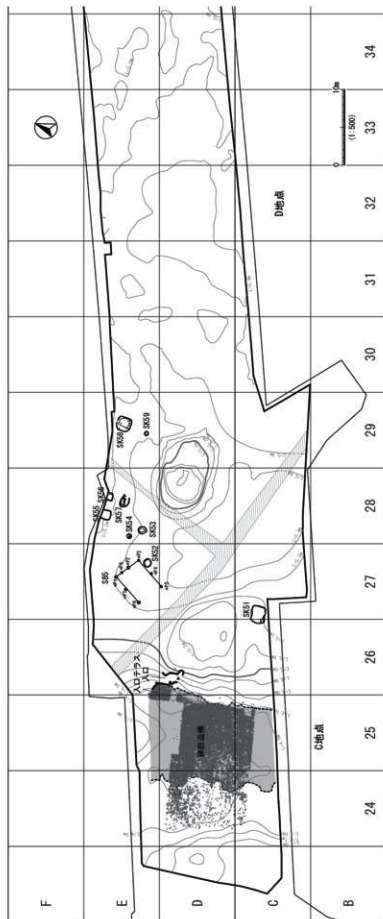
遺構は掘立柱建物跡1棟、土坑9基、竪穴遺構1か所が検出されている。

掘立柱建物跡はB地点では時期不明も含めて4棟検出されており、これを含めて考えるとB地点主体に存在することが想定できる。B地点の掘立柱建物跡は主軸方向が一致しているが、これらとC地点の建物跡とは一致しない。

土坑は26区から29区に9基あるが、そのなかには土器焼成土坑が2基ある。出土品からして土師器の坏・皿を焼いた土坑と、土師器坏・蓋を焼いた土坑がある。残存度は良くないが、燃焼部と炭・灰の掻き出し部が見つかっている。埋土中には大量の土器片と炭・灰・焼け残った炭化材などがあつた。その他の土坑は円形をしたものが多いが、方形のものもある。

性格がはっきりしないが、24区から26区にかけて南北に続く幅10m余りの竪穴遺構が検出された。南側・北側とも用地外へ延びているため全容は不明だが、深さが40cmほどあり、底面はコの字状となっている。敷き込まれた川原石のなかには多くの古墳時代の土師器小片とともに、土師器・須恵器片も入っており、古代の遺構と思われる。竪穴の両側に犬走り溝などはない。D・E-25・26区の東側には台地上に上がる階段状の遺構も見つかっている。

遺物には多くの土師器・内黒土師器・須恵器があり、他に越窯青磁・緑釉陶器・瀬戸焼・土錘などが出土している。土師器には坏・皿・碗・甕などの器種があり、8世紀から9世紀のものである。須恵器には坏身・坏蓋・甕・甕などがあり、土師器と同じく8世紀から9世紀のものである。このなかには須恵器の甕や蓋の破片を利用した転用甕も含まれている。他に棒状のものや刀子などの鉄製品も出土している。



第115図 古代の遺構配置図

2 遺構

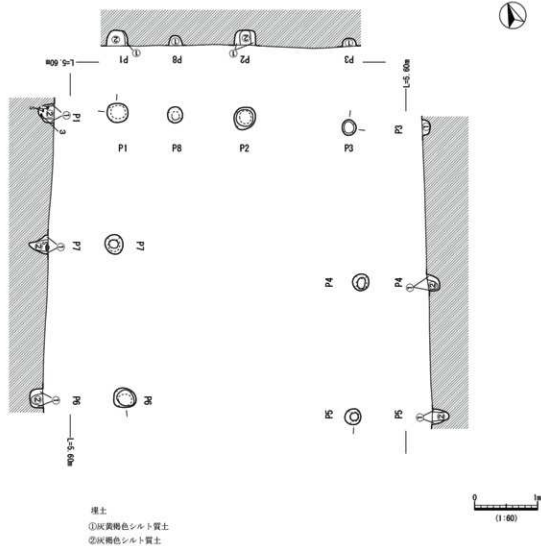
1) 掘立柱建物跡

① 掘立柱建物跡5号 (第116図)

D・E-27区のⅡc層で検出された。南端が不明のためはっきりしないが、2間×3間の建物と思われる。主軸はN18度Eで南北方向に長い。梁行は2.0+1.6の3.6m。

桁行は西側が2.1+2.4=4.5m、東側が2.5+2.1=4.6mある。ピットの形状はほぼ円形を呈し、径30cm前後、深さ20~30cmである。

出土遺物はないが、柱間からみて古代のものと思われる。



第116図 掘立柱建物跡5号

第9表 古代遺構番号新旧対応表

掘立柱建物跡					
新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SB5	SB7	-	-	-	-
土坑					
新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK51	SK12	SK54	SK35	SK57	SK41
SK52	SK16	SK55	SK40	SK58	SK46
SK53	SK31	SK56	SK39	SK59	SK57

2) 土坑

9基の土坑がC-26・27区とE-27～29区で検出されている。

①土坑51号（土器焼成土坑）（第117図～第120図）

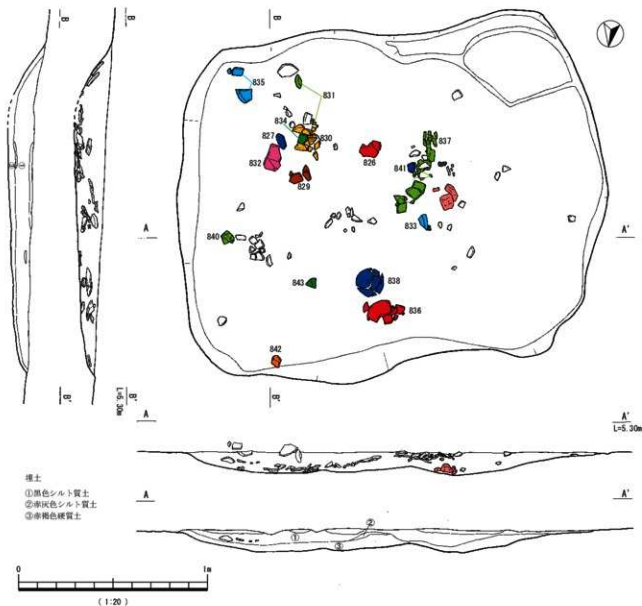
C-26・27区の東へ向かって河岸段丘状に上がる台地の平坦面に検出された。西側に位置する古墳時代の堅穴建物跡5号の東端を切るような位置にある。平面形は、約2.2m×1.8mの隅丸方形を呈する。断面形は、深さ約10cm程で、不定形である。東側が焼成部、西側が燃焼部と思われるが、底付近のみしか残っていないため、上部構造は不明である。焼成部は、約1.5m×1mの隅丸方形を呈する。内壁は、底一面に広がるようにして赤橙色に硬化していた。埋土中に、大量の土器片・炭・灰などが

含まれており、焼け残った炭化材が多く出土した。炭化材1点について樹種同定と放射性炭素年代測定を実施した。その結果、コナラ亜属クスギ節という広葉樹材であることが分かった。また、年代値は、古墳時代終末期から古代初頭頃に相当する結果であった。

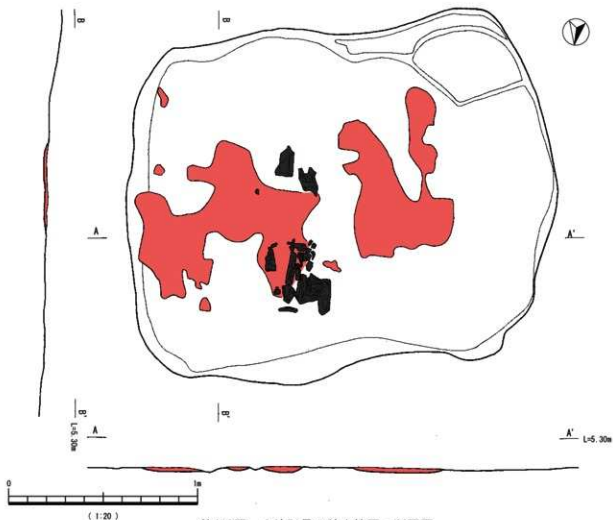
焼土面上で、東側に集中して径が10cm弱の小ピットが確認された。

土師器片は破損したものも多く、器種としては、坏・皿が大部分を占め、甕・壺類の破片は確認されなかった。坏類を中心に、底部からの立ち上がりにケズリ調整が加わるものも多く、8世紀後半が中心と考えられる。

826～835は、皿である。口径は13～17.2cm、高さは1.5～2cmほどである。いずれも口縁端部は丸く、底部から



第117図 土坑51号の土器出土状況



第118図 土坑51号の焼土範囲・断面図

口縁部が短く立ち上がり舌状を呈する。接合面の観察から、円盤状の底部に口縁部を貼り付けていることが分かる。また、底部が残存するものは、いずれもヘラ切りである。橙色あるいは薄い橙色、明褐色などの色調を呈している。826は厚手で重みがあり、831は胎土がマール状である。また、834は内面の破断面に摺痕がある。

836～843は坏で、底面が残存するものはいずれもヘラ切りである。また、837・838は完形資料である。口唇部は舌状で、838はわずかに外反する。いずれも底部からの立ち上がりにケズリ調整が加えられ、平坦面状をなしている。口径は13～16.0cm、高さは3～4cmほどである。胎土はこまかい土で、橙色あるいは浅黄橙色、薄い黄橙色などの色調を呈している。

844は高台の破片で、坏部との接合面で剥落している。この土坑内から出土した遺物の大半は高台を伴わない皿・坏類であるため、混ざり込みと考えられる。

845・846は、遺構埋土中から出土した古墳時代の遺物である。遺構の時期と異なるため、周辺からの流れ込み

と考えられる。

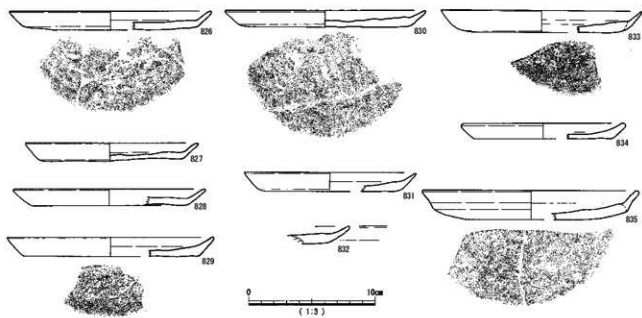
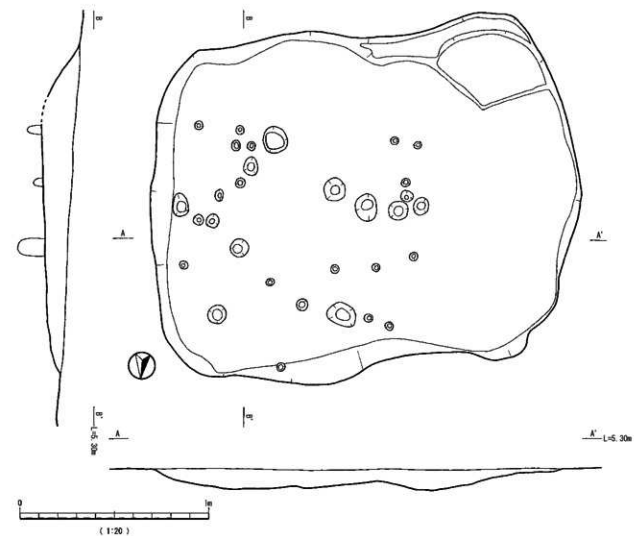
845は甕形土器の底部で、上げ底状を呈する。端部は指でつまみ出すように成形されており、内底面・外面とも粗いユビナデ調整のため、全体的にゆがみがある。胎土は粗く、3～5mm大の灰白色・灰色の円礫・角礫を多く含む。

846は、小型丸底壺の器形であるが、器壁が厚く、胎土も粗い。胴部にくぼみ状の小段が有り、底部は丸底である。内外面とも摩滅し、器面に砂粒が露出する。

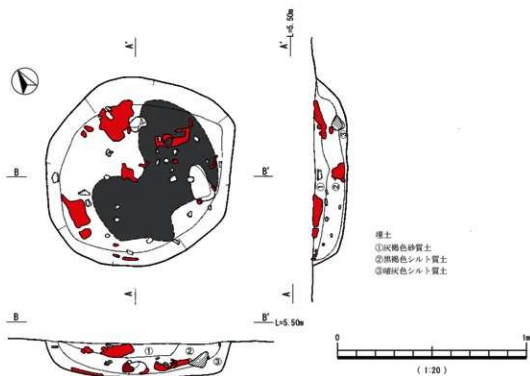
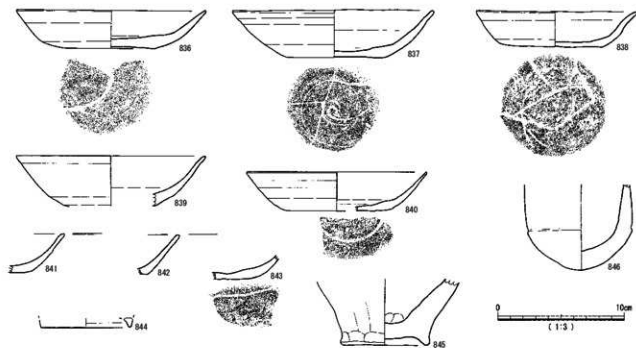
②土坑52号 (第120図)

E-27区のⅡc-2層で検出された。掘立柱建物跡5号に隣接している。平面形は、径90cm程度の円形を呈する。断面形は深さ約16cmで浅鉢形を呈する。部分的に赤橙色に変色した焼土が固まりとなって内壁に張り付いていた。

埋土中に大量の土器片、粘土塊、炭化物が含まれており、径20cm大の礫も含まれる。また、底面の一部に使用時のものと考えられる焼土が残存し、床面全体に遺物と



第119図 土坑51号のピット配置図と出土の土器(1)



第120図 土坑51号出土の土器(2)と土坑52号の平面図・断面図

炭化物交じりの灰色土が厚く堆積していた。

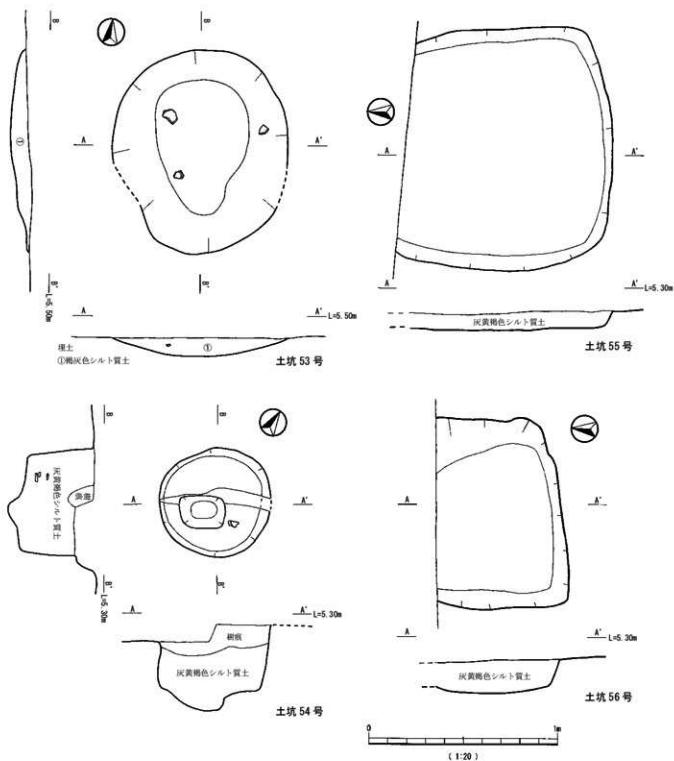
③土坑53号(第121図)

E-28区のIIc-2層で検出された。平面形は0.95×1.1mの略だ円形を呈する。断面形は、深さ10cmと浅く、浅いレンズ状を呈する。

遺物は、土師器と土器の小片が出土した。

④土坑54号(第121図)

E-28区のIIc層で検出された。上部を樹根でこわされているが、平面形は、径60cm程度の円形を呈する。底に17cm×24cmの方形をしたくぼみがある。断面形は、深さ約35cmで、底面が不定形な深ナベ形を呈する。くぼみの深さは約10cmである。



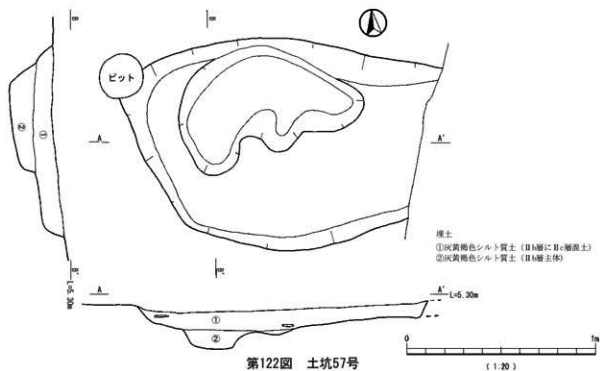
第121図 土坑53号~56号

⑤土坑55号 (第121図)

E-28区のⅡc層で検出された。東側約2mに土坑56号が並ぶように位置する。北側が調査区外へ伸びているため全体形は不明であるが、約1.3m×1.1m (残存) の方形を呈する。断面形は、深さ約10cmで、ナベ形を呈する。

⑥土坑56号 (第121図)

E-28区のⅡc層で検出された。西側約2mに土坑55号が並ぶように位置する。北側が調査区外へ伸びているため全体形は不明であるが、約1.1m×0.7m (残存) の長方形を呈する。断面形は深さ約18cmで、ナベ形を呈する。



第122図 土坑57号

⑦土坑57号（第122図）

E-28区のIIc層で検出された。平面形は、東側が生活道へ延びているため全体形は不明であるが、東西に長い約1.6m（残存部分）×1.1mのやや不定形な円形を呈している。断面形は、深さ10cmで、底面はほぼ平坦だが、北西側には長径1m、短径0.4～0.6m、深さ10cmほどの不定形の落ち込みがある。

⑧土坑58号（土器焼成土坑）（第123図・124図）

E-29区のD-N層で検出された。当初、東壁の焼土部分のみが検出されたため、西側は薄く下げながらプランを認識した。平面形は、隅丸方形を呈し、長軸がほぼ南北に合っている。規模は、約1.8m×約1.9mである。断面形は深さ30cmで、深皿形を呈する。北側に隣接して、弧を描くように礫が配石され、その下面でビットを検出した。土坑58号を切っているため、時期的に土坑58号より新しい時期の可能性が高い。ただし、ビットには被熱や焼土等の痕跡がなく、土坑58号との関連性は不明である。

床面近くには、3～5cm程の炭層が堆積しており、部分的に炭化材が形状をとどめていたが、ほとんどは1cm大の細片になっている。炭層の下は、一面が焼土であり、焼土面を掘り抜いているビットを計10基検出した。いずれも径が小さく、杭状のものと想定される。南側ビットは平面プランに合うように弧状に配置されており、上層や内部で焼成するもの土台を支えるものだった可能性がある。焼土面は、D-N層が被熱したもので、粘土等の貼りはなかった。また焼土面は東側が残りが良く、西側は上部がやや崩れている状況だった。何ら

かの焼成遺構と思われるが、具体的な機能は現状では不明である。

なお、焼土4点について、ルミネッセンス分析を実施した。土坑内部では被熱が不均一であるものの、700℃程度の熱を受けていることが確認できた。4試料のうちの1つ（No.3）では約1.2千年前という数値年代が得られた。

また、炭化材2点の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した。年代値は古墳時代終末期から古代頃に相当する結果となった。また、樹種はコナラアカガシ亜属という広葉樹材と分かった。

遺構内から土器の坏と坏蓋が出土した。847～852は坏である。口径は14.6cmと15.6cm、底径8.0cmあり、底からまっすぐ外へ開きながら立ち上がっている。口縁端は丸みをおび、細くなっている。薄い作りである。底はヘラ切りで、鋭い稜をもって外へ立ち上がっている。

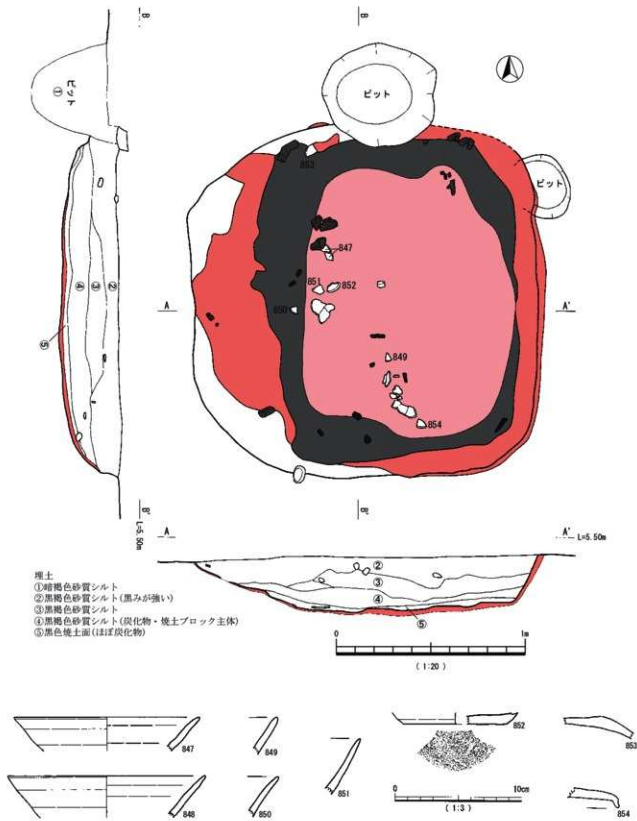
853・854は坏蓋である。天井はヘラ切りで平らになっており、口縁端は薄くなって丸みをおびている。853はやや深いが、854は扁平である。

胎土は密で多くが浅黄橙色を呈しているが、橙色・灰色のものもある。焼成度は普通で、軟質である。

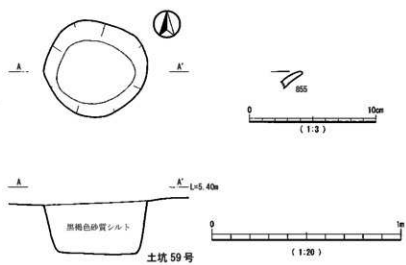
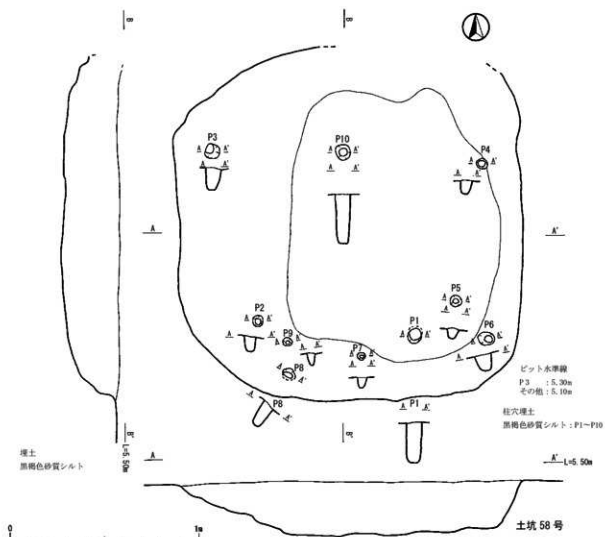
⑨土坑59号（第124図）

E-29区で検出された。平面は55cm×51cmの円形を呈する。断面は、深さ約27cmで、逆台形を呈する。マンガング粒を多く混入し、土器小破片が出土した。

855は、土器器皿の口縁部片である。小片のため、流れ込みの可能性もある。



第123図 土坑58号と出土の土器



第124図 土坑58号のピット配置図と土坑59号及び出土の土器

3) 礫敷遺構 (第125図)

①形状

C-E-24~26区の東西にある丘陵上の高台に挟まれやや低くなった平坦面で、礫が敷き詰められて造られた面を検出した。

西側の台地には竪穴建物跡3号、東側の台地には竪穴建物跡や土器焼成土坑などの遺構群が位置している。

検出された礫の広さは約330㎡で、礫の密度に明確な違いがあり、西側約230㎡は幅10m程度にわたり礫の密度が高く隙間なく敷き詰められたような状態であり、南北方向へ延びるように続いていた。東側約100㎡は、やや北西方向に広がりながら調査区外へ延びており、含まれる礫の量は少ない。

当初は河川のような地形のため、下層の砂礫層が広がっているのだらうと考えて調査を進めたが、礫の大きさがほぼ5~10cm程度と揃っていたこと、隙間なく平坦に敷き詰められていたこと、礫の間には土器片も多く含まれていたこと、直線を意識した平坦面をつくり出していたことなどから、この礫面は自然の堆積によるものではなく、人工的につくられた平坦面ではないかと想定した。

断面構造を確認するために南北の調査区境に沿って確認トレンチを設定した。その結果、下層の自然堆積した砂礫層を切るようにして平坦面を作り出していた。自然流路のような軟弱地盤の大きな凹地には、粘土質の土に大量の土器片や礫を混ぜた造成土で埋め、かさ上げを行い土壌の安定化を図っていた。

基盤の上には、粘土と小形の円礫と土器片を混ぜたものを、厚さ約10~20cm程度道路の路盤のように基盤上の凹凸を埋めながら水平になるように造られていた。さらに、その上には厚さ約5cm程度の路面が敷かれていた。路面は粘土と大量の円礫、土器片を隙間なく敷き詰めており、土造成土より硬く固められていた。

礫敷遺構は、直線にこだわりのように南北方向に延びており、出土した遺物の特徴から古代に造られたと考えられる。

北東側には東側に張り出した礫敷面があり、丘に向かって上がっていく硬化面を伴った一部階段状の通路につながっていた。

砂層について、樹種同定を行った。照葉樹のツバキ亜属であることが分かった。下位の路盤については、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、弥生時代後期頃に相当する結果となった。

②礫敷遺構入口テラス (第126図・127図)

礫敷遺構東端で検出された。ほぼ阿レベルの平坦面で礫敷遺構が東側へ膨らんで広がっている。平坦面が東側の丘へ向かって上っていく境目にあたり、テラス面全体も東側へ向かってわずかに上がっている。

削平や盛り土によって作られた平坦面に、厚めの路盤(15cm)を敷いて、自然礫や土器片を隙間なく敷き詰めている。構造的には礫敷遺構と同じである。

略南北方向に延びる礫敷遺構から影られるような位置にあり、東側の丘に向かって上がっていく硬化面を伴う階段状の通路につながっていることから、出入りするために造られたテラスと想定される。

大型(20~30cm大)の自然礫が、通路の緑石のように2列置かれており、幅は約1mでやや北よりに向かって合流している。

敷かれた礫は5cm前後の自然礫が中心で、特に人の往来があったと推測される大きめの礫の石列に挟まれた部分は隙間なく敷き詰められており、礫敷遺構より丁寧な作りである。

通路の南側の脇に黒曜石の原石が2個置かれていた。取り囲むように大型礫も置かれていたことから、何か祭祀的な儀式を行う場所の可能性も想定される。

土器片も多く含まれており、ほとんどが古墳時代のものであるが、土師器や須恵器も多く混在している。

③出土遺物

礫敷遺構の埋土には多量の土器が含まれているが、その多くは周辺から流れ込んだものと思われる古墳時代の土師器である。その中に古代の土師器・須恵器が少量含まれている。盤面の礫の中にも古墳時代の土師器とともに、古代の土師器・須恵器がある。ここで紹介する古代の土師器・須恵器のほとんどは盤面下のものである。

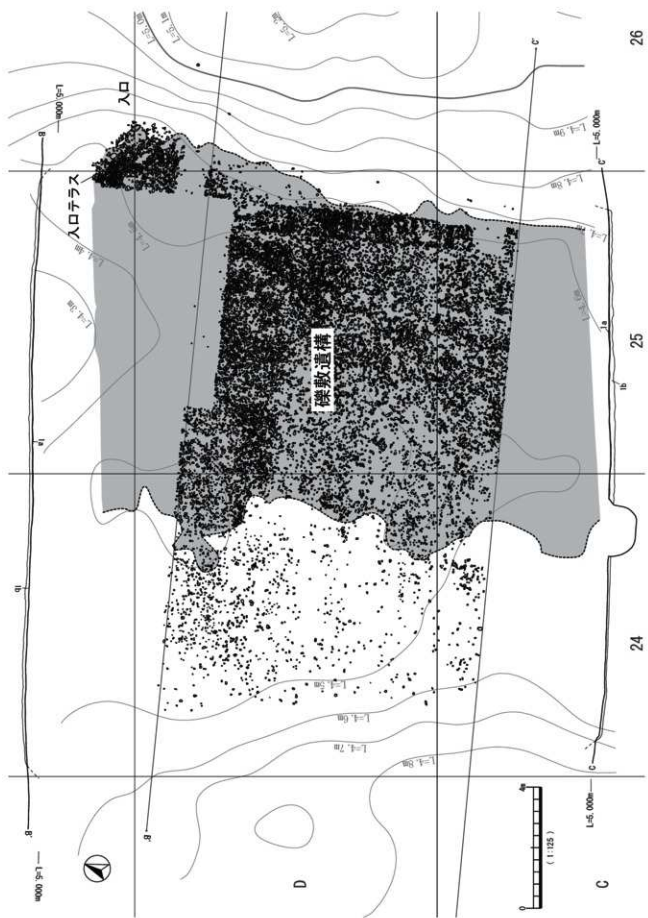
856~864は土師器である。

856~861は坏である。856は口径直径13cm、底径7cmほどの大型で、底が丸みを帯びたものと、底径5~6cmとやや小型で、底から角張って立ち上がるものがある。高さ3.3cmで、底から丸みを帯びて立ち上がる器形をし、浅黄褐色を呈している。口径端へ細くなって向かい、端部には丸みを帯びている。857は底径9cmと大きく、外へ開きながら丸みをもって立ち上がっている。858~861の底径は5~6cmで、底からやや角張って立ち上がっている。いずれもヘラ切り底で浅黄褐色を呈し、胎土は細かい粘土である。

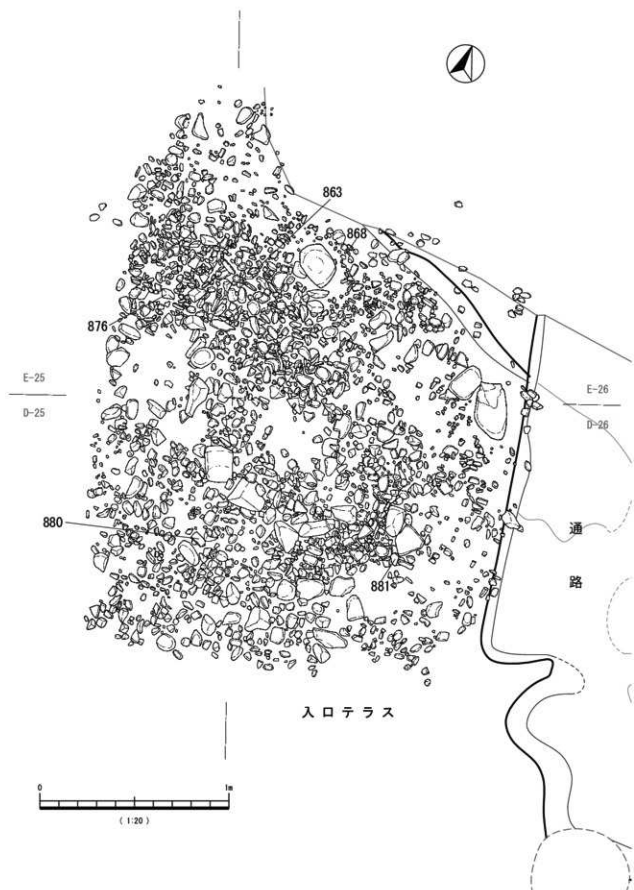
862~864は高台の付く塊である。862は直径6cmの高台で、三角形に近く低い台である。863は直径8cmとやや大型で、外へ開く分厚い高台である。864は直径6cmの直に立ち上がる高台である。863だけが橙色で、あとは浅黄褐色を呈す。

865~873は紡錘形の土錘である。

端部が欠けているものが多い。中には小破片になったものもある。872は片方、873は両方が残っているが、端部はきちんと切断されている。872は残存長4.4cm、最大径1.8cmと細長く重さ10gである。孔径は4mmである。



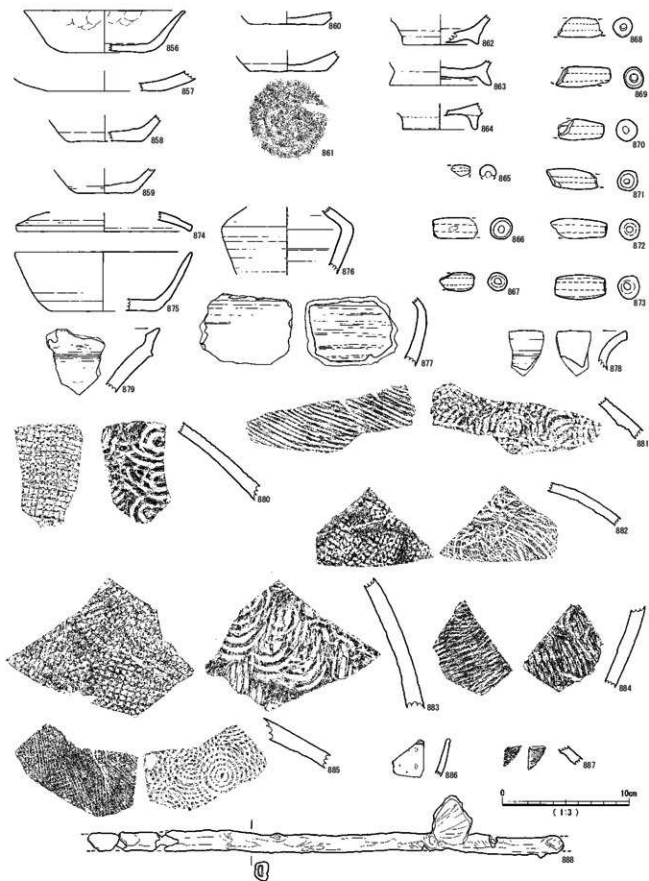
第125図 磯敷遺構



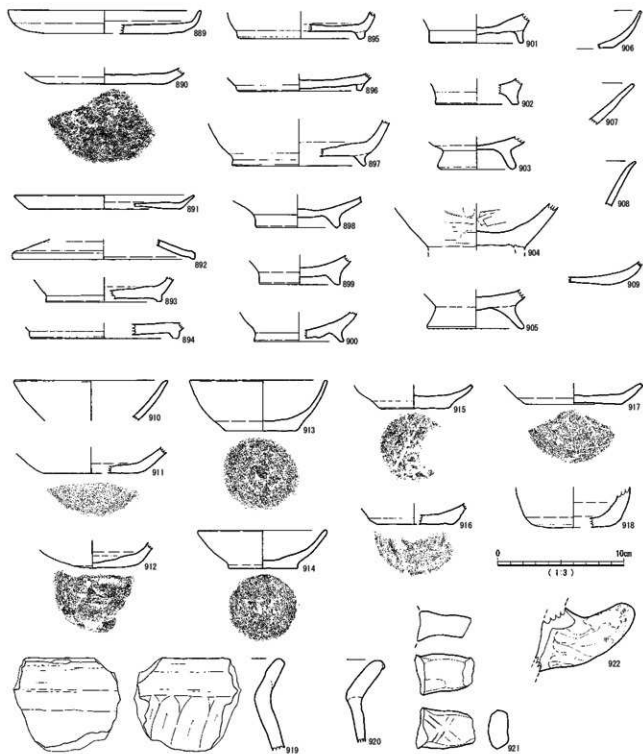
第126図 磯敷遺構 入口(1)



第127図 磯敷遺構 入口(2)



第128図 磯敷遺構出土の遺物



第129図 包含層出土の土師器

873は長さ4.0cm、最大径1.9cm、孔径0.6cm、重さ12gである。866は9g、871は11gである。須恵器は坏蓋・坏身・壺・甕がある。

874は扁平な坏蓋で、口径13.8cmである。口唇部はコの字形をし、天井部の端部がややへこんでいる。875は口径14cm、底径8.4cm、高さ4.7cmの坏身である。安定した平底で、口唇部は細く丸みを帯びている。灰色を呈している。876・877は壺の肩部である。876は肩部と胴部境が稜をもって折れ、肩部径10.4cmと小型である。877は丸みを帯びた肩部である。

878～885は甕である。878は外反する小型の口縁部で、端部は矩形を呈している。879は大型の口縁部で、頸部から外傾し、端部近くで内傾する。屈曲部外面に三角突帯が貼り付けられ、その上には沈線がある。口唇部は矩形だが、中央がへこんでおり、外側は丸みを帯びている。内面は灰色、外面にはぶい赤褐色を呈している。880～882、885は肩部で、880・881・885は外面に条痕タタキ痕、内面に同心円当て具痕が、882は外面に正格子タタキ痕、内面に同心円当て具痕が残っている。883・884は胴部で、883の外面には正格子タタキ痕が、内面には同心円当て具痕が残っている。884の外面には条痕タタキ痕、内面には条痕当て具痕が残っている。

886・887は黒色をした大きな石粒を含む胎土の須恵器破片である。886は口縁端が少し欠けているが、丸みを帯びた端部の坏あるいは壺である。灰白色を呈し、丁寧にナデている。887は壺の肩部で、外面に草花文が描かれている。浅黄橙色を呈している。他の須恵器に比べ良質の胎土を用いているが、同様の胎土を用い緑色の自然釉が付いた壺の破片が他に1点ある。瀬戸焼の可能性があ

る。

888は棒状を呈した鉄製品である。両側が欠け、もう少し長いものと思われるが、現状では長さ37.8cm、最大幅1.5cm、最大厚1.2cmで、断面はかまぼこ形を呈している。下面が長軸に沿ってやや蛇行している。土器片が付着しているが、この付近は少し幅が狭い。芯は長方形の空間となっているが、錆ぶくれの可能性はある。重さ80gである。

3 包含層出土遺物 (第129図～133図)

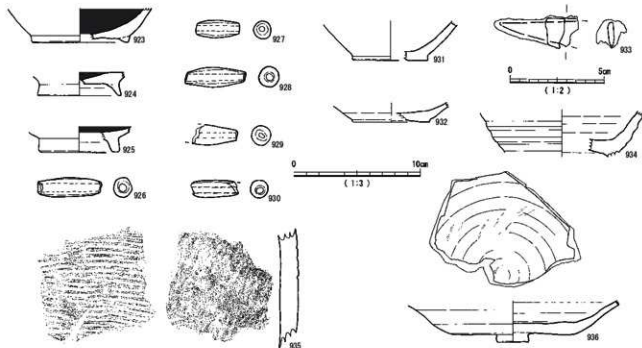
1) 土師器 (889～922)

889～891は皿である。

889・891は器高が低く、口縁部が短く立ち上がる。口唇部は丸く舌状を呈し、底面はへら切りである。土抗51号出土遺物と類似し、8世紀代に比定される。889は丸みをもって立ち上がっているが、891は薄い作りで底から直に立ち上がり、端は細い。890は丸みをもって立ち上がる底部で、底切り離しはへら切りである。

892は蓋である。焼成は不良で、端部が緩やかに膨らむ。8世紀代と考えられる。

893～896は須恵器坏身を模倣した高台付きの坏で、901は高台の接合面が明瞭である。また、902は被熱により、高台が弁変している。893～901は後線が明瞭で、高台断面も方形を呈しており、9世紀代に比定される。898・903は高台断面が丸みを帯びており、10世紀代に比定される。894の高台は丸みを帯びて高さは低い。9世紀代に比定される。895・896は底径10cmで、丁寧にナデ調整をしている。高台は895がやや外向きで、896は内傾きみである。



第130図 包含層出土の内黒土師器・土鍾・青磁・硯など

897は、底径が10.6cmとやや大型埴の胴部～底部である。焼成は不良で摩滅しており、色調も明るい。高台端部は丸みを帯び、立ち上がりの胴部はヘラケズリで面が作出されている。8世紀代と考えられる。

898～903はやや高い高台で、外向きになっている。898～900は高台径が6.2cm～7.0cmと小さく、端部は丸みを帯びている。899は幅広だが、900は小さい高台である。901は体部が分厚い作りで、高台も断面が矩形をした厚い作りである。902も分厚い体部と高台である。903は底部が薄い、体部は厚い。高台は外開きで、端部は丸みをもっている。904は台付鉢の底部で、脚台が欠損している。内外とも丁寧にナデている。

905は高台が高く底部に開くタイプで、端部は丸い。10世紀代に比定される。

906はやや器高のある皿で、胎土はマープル状である。907・910は坏であり、いずれも口縁部がわずかに外反し、断面が舌状を呈する。907は口縁部が広く外傾するもので、柱状高台を伴うものと考えられる。910は比較的胎土も硬質で、胎土に砂粒が多く、古墳時代の土器と胎土も近い。口径は12.2cmである。

908は底からまっすぐ伸び、端部がやや外反して薄くなる埴である。内外面摩滅しており、胎土に白色石粒が多い。

909は摩滅しており調整等が不明だが、ヘラ切り底の皿と思われる。底からは丸みをもって立ち上がっている。

911～918は坏である。いずれも底面はヘラ切りで、底部からの立ち上がりにはヘラケズリによる小さな段が生じている。912は底面がやや膨らみ、安定しない坏で、底部は、粗いヘラ切りである。913・914は底部がやや厚手で、底面はヘラ切りである。いずれも橙色の発色で、作りは丁寧である。口唇端部は、丸みを帯びる。913はやや内湾し、埴状に近い形態である。口径約11cm、底径5.5cm、高さ4cmである。914は底面からの立ち上がりがやや張り出しており、底部の厚さからも充実高台を意識したものと考えられる。口径10.2cm、底径5.4cm、高さ3.0cmである。9世紀後半～10世紀に位置づけられる。915・916は胴部が緩く立ち上がる坏で、底面はヘラ切りである。916は胎土に砂粒が多く、硬質である。917は、素地に1～3mm大の赤褐色礫を多量に含む。8世紀代に比定される。918は筒型に胴部が立ち上がる。器壁が厚く、細かい赤色粒を多く含む。9世紀後半～10世紀代に比定される。

919・920は裏である。口縁部は短く、「く」字状に外反する。外面にはナデ、内面は斜位の粗いケズリ調整が施されている。胎土は古墳時代の土器に類似し、茶色や白色の砂粒を多く含む。

921・922は把手である。921は幅3.2cm、厚さ1.7cmの棒状把手である。横方向に貼り付けている。922はこしきの牛角状把手で、粗い作りと調整で仕上げている。下には

ススが付いている。

2) 内黒土師器 (923～925)

923～925は高台付きの埴である。923は高台内も黒変している。高台が低く丸みを帯びており、11世紀代まで下ると考えられる。924は先端が細くなる外開きの高台で、径は6.5cmである。925は薄い体部に対して、分厚い矩形の高台で、径は6.2cmである。

3) 土鍾 (926～930)

いずれも小型の紡錘状をし、胴部中央が膨らみ、端部は平坦に成形されている。926は表面が赤みを帯びまっすぐ伸びており、長さ5.0cm、径1.5cmで、重さは10.2gである。927は長さ3.5cmと小型で、重さは5.7gしかない。928は灰白色の地に表面は赤褐色を呈し、長さ4.8cm、重さ9.3gである。929は一方が欠けており、残存長3.6cm、最大幅1.6cm、重さ9.2gである。930は摩滅しており、長さ3.7cm、幅1.3cm、重さ5.0gである。

4) 青磁 (931)

オリブ灰色の越州窯系青磁の碗である。底面は蛇の目高台である。越州窯I類に比定される。

5) 緑釉陶器 (932)

摩滅しており、灰白色の表面に淡く緑色釉が残存する。残存状況は良くないが蛇の目高台であり、9世紀後半に比定される。

6) 鉄製品 (933)

刀子の破片で、基部を欠いている。先端は鋭く、残存長4.5cm、最大幅1.7cm、厚さ1.6cmである。

7) 転用硯 (934～936)

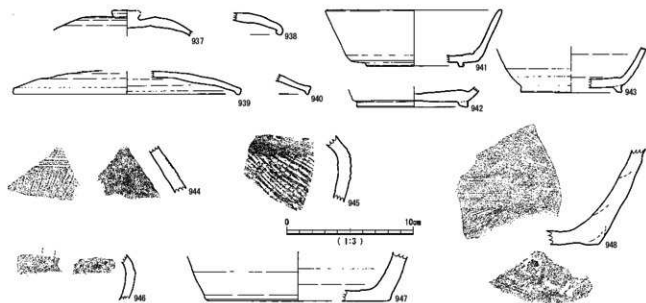
934は高台付蓋の高台を打ち欠き、底部近く内面を使用した硯である。

935は内外とも条痕のタタキと当て具痕があり、内面を使用している。側面を丁寧に打ち欠いて、両側面を擦っている。

936は、つまみを有する蓋の内面が利用され、光沢面をなす。また、放射状の擦痕がみられる。表面の摩滅度合いから、使用頻度が高かったと推定される。8世紀代に比定される。

8) 須恵器 (937～966)

937～940は蓋である。937は天井が平らとなり、ややふくらむ天井部であるつまみは扁平な宝珠形である。938・939は端部が丸く収められ、内面側にかえしの段を有する。939の口径は18cmである。940は口唇端部にナデ調整



第131図 包含層出土の須恵器(1)

が加えられ、二又状を呈する。939・940は、端部に帯状の色調が暗い部分がある。いずれも、縁が丸く膨らむ形状であり、8世紀代と考えられる。

941～943は罎である。941・942は、高台付の罎である。941は口径14.0cm、高台径7.6cm、高さ4.4cmの大型のものである。体部は底と立ち上がりか段をもって屈曲しており、体部に比べ高台は小さい。942は、高台が歪んだ台形状を呈し、全体的にひずんでいるため左右の立ち上がりも非対称である。943は底部で、高台は貼り付けて作出され、接合面の調整は粗い。9世紀前半のものと考えられる。

944～948は壺である。944は肩部片で、櫛歯状の工具により連続した斜位の刺突文が施されている。945は小型壺の頸部～胴部と考えられ、肩部はタタキがナデ消されている。外面の色調は赤みが強く、胎土はマーブル状をなす。946はハソウであり、古墳時代の可能性もある。外面には、櫛歯波状文が描かれている。947は、外面の色調が明るく、焼成もやや悪い。948は外面にタタキを消した粗いナデ調整の痕跡が残る。器面の凹凸がある。底に同心円当て具痕がみられる。

949～966は甕である。949は頸部から口縁へ外反し、口縁外面はくぼみをもっている。口径19.2cmで、外面は条痕タタキ、内面は同心円文当て具痕が残っている。口縁付近は内外とも横ナデである。灰色を呈する。950～952は、中小型の二重口縁壺の口縁部と考えられる。950は色調が赤みを呈し、口唇部は内傾する。外面には、1条の波状文が描かれている。952は二重口縁で口唇端部がナデにより凹み、頸部が鋭角に屈曲して肩部が張るものと考えられる。器壁や器面のカーブから中型～大型甕と想定される。953は口縁が強く外反し、端部は矩形を呈する。外面から内面口縁にかけて自然灰釉により暗赤褐色の発色をしており、外面は格子状、内面は同心円のタタキ痕

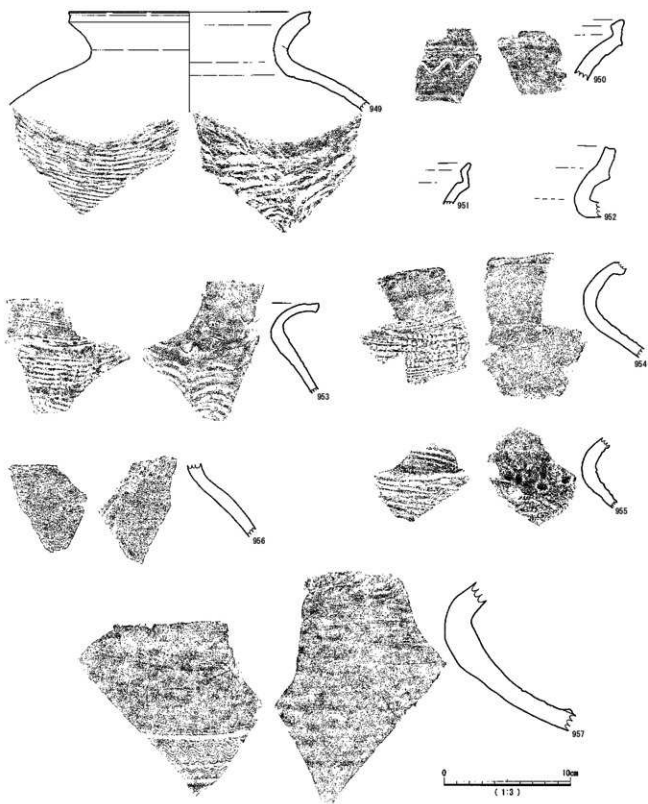
が残るが、口縁は内外とも横方向にナデている。954は摩滅が激しく、焼成が不良である。口縁部を欠いているが、二重口縁である。外面は正格子状のタタキ痕がみられるが、内面はナデで仕上げられている。955～957は頸部から肩部である。955は、頸部である。外面は格子状の当て具で、ガラスが発泡したような自然釉が付着する。内面は同心円の当て具で、上半は暗緑色の自然釉が流れ、水滴状に溜まっている。956は肩部である。内外面ともタタキ痕はみられず、ナデ調整である。957は器壁が厚く、内外面とも丁寧な回転ナデ調整であり、胴部に断面三角形の突帯が部分的に残存する。また、その上部には幅の異なる2条の櫛歯波状文が施されている。958は外面が浅い条痕タタキ、内面が同心円文当て具である。

959～966は胴部である。959は外面側が赤い色調を呈する。960は外面が正格子タタキ、内面がこまかい同心円当て具で、灰色を呈す。961は胎土に黒色の粒子を多量に含み、器面は斑点状になっている点で、他の須恵器と質感が異なる。962は外面が格子状、内面が平行状の当て具痕が複数切り合う。

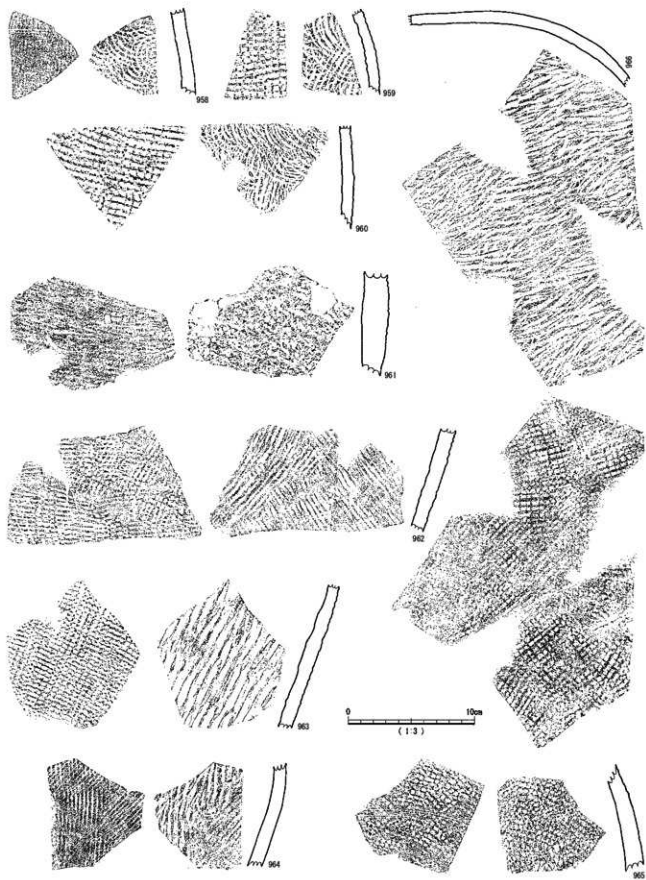
963・964は内面等が条痕だが、964はそのあとをナデている。外面タタキは963が小さい正格子、964は条痕である。

965は内外面とも細かい格子状のタタキ痕を有し、外面は筋状にナデ調整が加えられている。966は底近くでゆがんだへこみがみられる。外面は正格子タタキ、内面は条痕当て具である。内面は灰色を呈しているが、外面は赤みがかかった茶褐色、淡黒褐色を呈し、部分的に窯との接合痕がみられる。

蓋は8世紀代に比定されるが、大型の甕類は9世紀代まで下ると考えられる。



第132図 包含層出土の須恵器（2）



第133図 包含層出土の須恵器（3）

第6節 中世の調査成果

中世と確定できる遺構は検出できていないが、中世の土師器・陶磁器・瓦質土器・土質土器・石製品・土製品など多様なものが、数は多くないが出土している。

1 土師器 (967)

967は底の切り離しが糸切りで行われている完全な坏である。体部外面には回転ナデの残線痕跡が明瞭に残り器面に凹凸があり、器形がゆがんで底面はやや外に張り出している。口径15.8cm、底径9.4cm、高さ4.2cmと大型で、内底面は中心が凹み、周囲が盛り上がる。

胎土には、白色石・金雲母を多く含む橙色を呈している。12世紀代に比定される。

2 青磁 (968~975)

青磁は碗・坏・小型壺・香炉が出土している。

968は口縁断面が玉縁状を呈する大形の碗で、口径は18cmある。緑っぽい灰白色を呈している。

969は口縁部が外反している薄い作りの坏である。

970から973は碗である。

970は器形に凹凸があり、外面に蓮弁文の一部が残存する。釉が厚く、高台で釉薬が溜まっている。

971は高台下半が内外とも削り出でて、段を有する。また、見込みには菊花文のスタンプが押されている。畳付部から高台内にかけては露胎である。

972の高台は細く、端部は矩形を呈している。高台径5.0cmである。内底部と畳付部は軸割りが施されている。

973は外面を直に削り出した安定した高台で、体部下半から高台にかけて露胎である。内底部は蛇の目軸割りが施されている。高台径は4.4cmである。内外とも明緑灰色

の釉がかかっている。露胎部は灰白色を呈しているが、畳付部と高台内、内底の一部は赤橙色を呈している。

974は高台直径が5.8cmの台付小型壺である。外面にはオリブ灰色の釉がかかっており、磁胎は灰白色である。内面は露胎、畳付部は軸割りがされている。

975は香炉で、口唇部が凹み、内面側に張り出す。内面下半は無釉である。

これらは15世紀頃のもので、ほとんど龍泉窯系のものであると思われる。

3 白磁 (976・977)

白磁は小坏・坏が出土している。

976は口径12cmの小坏である。底部から内反ぎみに口縁部へ立ちあがる。口縁部は丸みを帯びている。やや青みがかった灰白色の釉がかかっているが、体部下部は露胎となつてにぶい橙色を呈している。内底は軸割りがされている。

977は高台付き坏である。高台はやや内反ぎみで、直径6.2cmである。端部は丸みを帯びている。畳付部付近は軸割られ、内底部に軸切れがみられる。

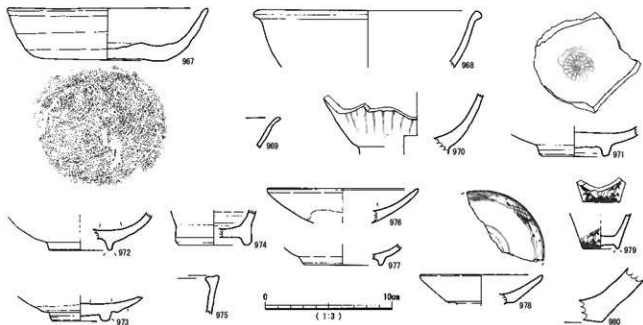
976は15世紀、977は16世紀頃のものである。

4 染付 (978・979)

978は口径9.8cmの小さい坏で、内面口縁近くに火押状の斜格子文が、底近くに圏線がある。オリブ灰の釉がかかっており、外面には軸切れがみられる。

979は高台付きの壺で、外面に草花文が描かれている。

高台径は2.8cmで、高台内に軸切れがある。底は分厚く、高台断面は矩形である。



第134図 中世の出土遺物 (1)

外面は黄灰色、内面は灰白色を呈する。

5 須恵質土器 (980)

安定した平底の壺である。硬質に焼け、外面は丁寧なナデている。

細かい胎土を用いている。

6 瓦質土器 (981～983・985)

捏鉢・鉢・播鉢などの鉢類がある。

981は口径21.6cm、底径12.8cm、高さ6.4cmの捏鉢で、器高は低く、口唇部は丸みを帯びる。外面には指頭押圧状の揃るやかな凹みが連続する。内面は横方向のナデ調整。底の調整は丁寧である。

灰色を呈し、軟質に焼けている。

982は底部径22cmの安定した鉢で、底から体部への屈曲は鋭い。胴下部に断面が台形の突帯が貼り付けられ、突帯の先端はくぼんでいる。内外とも丁寧なナデ仕上げで、内面下部には横方向のハケ目が見える。

外面体部は濃い黒色を呈し、内面と底は黒褐色で、底は擦れている。

983は播鉢で、6本一単位の摺り目が幅を置いて下から上へ引かれている。985は播鉢の底部で、下から6本一単位の摺り目が幅広く引かれている。底は丁寧にナデてい

る。

ともに灰白色を呈し、軟質である。

7 土師質土器 (984・986)

984は幅広の5条から成る摺り目のある播鉢の胴下部である。

浅黄橙色を呈し、硬質に焼けている。

986は玉縁状口縁のある鉢である。内弯ぎみの口縁部で、軟質である。内外とも丁寧な横ナデ整形で、軟質に焼けている。

外面口縁から内面は黒褐色、外面下部は白色を呈する。

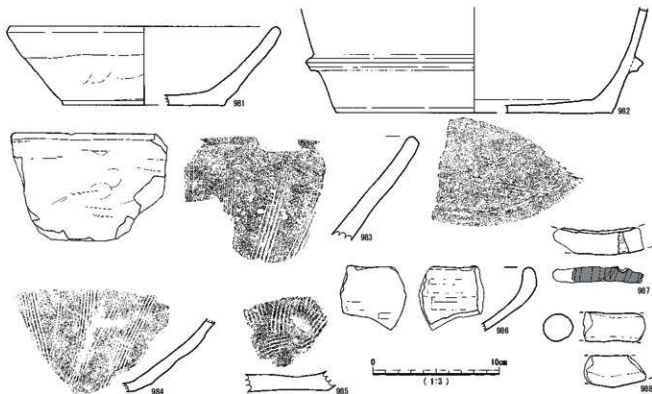
8 石製品 (987)

滑石製石鍋を横方向に切った破片で、外面にススが付着している。上部に吊り手孔痕がある。表面は平坦である。

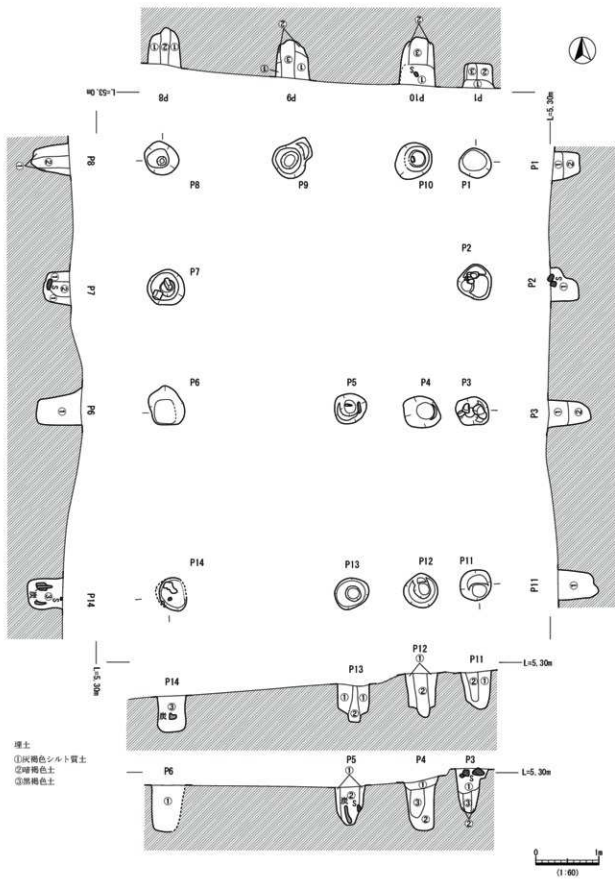
9 土製品 (988)

硬質の土師質土製品である。直径2.2cmの棒状をしており、やや曲がっている。把手あるいは棒状の脚である可能性もある。

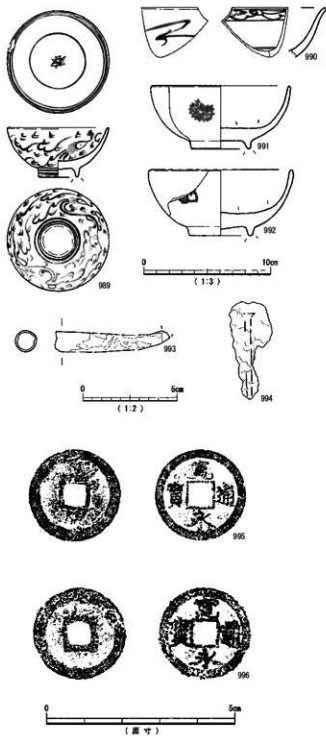
白色石・茶色石が多量に含まれ、にぶい橙色を呈する。



第135図 中世の出土遺物(2)



第137図 掘立柱建物跡6号



第138図 掘立柱建物跡6号出土の磁器と
青銅・鉄製品・古銭

柱穴は50～70cmの円形をしており、深さも30cm～50cmとしっかりしている。柱痕跡の残ったものが1本ある。ピット14には、径が約50cmの柱痕跡があり、炭化材も一部残存している。他の柱穴にも炭や礫の入ったものもある。

図化した資料は、いずれもピット9から出土したものである。

989は、磁器小碗である。口唇部を一部欠くのみで、ほぼ完形である。外面には龍が描かれ、内面は圏線と見込みに虫文が描かれている。二次被熱により、器面がただれて文様がかすれている。990～992は肥前系の碗である。990は端反碗で、内外面とも圏線及び草文が描かれている。

991は見込みの蛇の目輪割ぎにやや砂質のアルミナが塗布されている。外面には、淡い呉須で菊花文が描かれている。992は見込みの蛇の目輪割ぎが幅広く、アルミナが厚く塗布されている。また、直径約5cmの重ね焼きした器の高台の跡がみられる。やや緑色がかったガラス質の透明釉が施軸され、器面は細かく貫入がみられる。外面に、部分的に花文が残存する。

993はキセルの雁首と吸口部分の間である。火皿へ続く部分が細くなって弯曲していることから羅字キセルではないかと思われる。全体的に緑青が付着している。

994は錆に厚くおおわれた鉄製品で、元形が不明だが、釘の可能性がある。995・996は裏は無地の寛永通宝である。

②掘立柱建物跡7号（第139図）

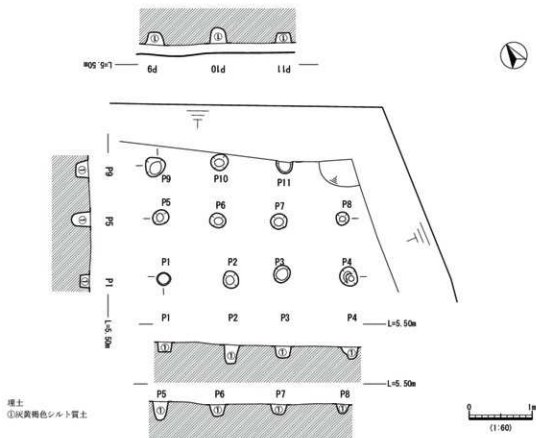
C・D-27区、IIc層で検出された。2間×3間の総柱建物で、未調査部分（生活道下）へ延びる可能性もあるが、調査では検出されなかった。

検出された部分は東西に長い長方形を呈し、主軸はN30°Eである。梁行P1-P9=1.8m、桁行P1-P4=3mである。ピットの形状は円形を呈し、径30cm前後、深さ20～30cmである。

③掘立柱建物跡8号（第140図）

E-29・30区、III層で検出された。古墳時代の堅穴建物跡11号の範囲に取りまり、堅穴建物跡11号より新しい。ピットは6基あり、ピット間は平均1.7m程の間隔で、周辺では同様のピットが確認されていないことから、1間×1間の簡易な建物と想定される。主軸はN10°Eである。埋土の特徴から、ピット1～4とピット5・6の2種に分けられる。ピット5・6は、のちの建て替えによるものと考えられる。

遺物は、ピット2から大型で平面を有する礫が検出され、上面に直径13cm程、シミ状に変色が見られた。柱根の可能性もある。



第139図 掘立柱建物跡7号

第10表 近世・近代遺構番号新旧対応表

掘立柱建物跡

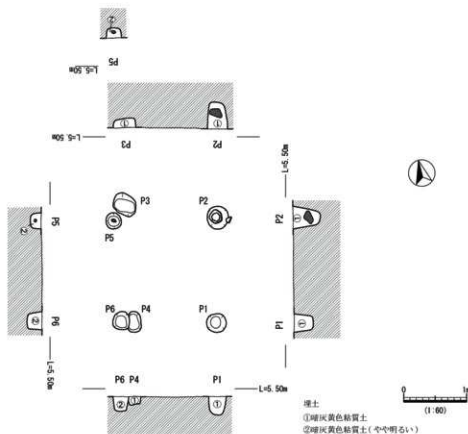
新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SB 6	SB1	SB 7	SB 2	SB 8	SB 9

土坑

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK60	SK 6	SK62	SK55	SK64	SK28
SK61	SK 7	SK63	SK30	-	-

溝状遺構

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SD 3	SD 2	SD 4	SD 6	-	-



第140図 掘立柱建物跡8号

2) 土坑

①土坑60号と出土の鈴 (第141図)

D-26区、西方向へゆるやかに下るⅡb層で検出された。南側約1m離れて掘立柱建物跡6号が位置する。平面形は、62cm×41cmの東西方向に長い楕円形を呈する。断面形は、深さ約60cmの胴長の丸底形を呈する。

下位に磁器製の皿、上位に青銅製の鈴が2個並んで出土した。出土状況から、埋め戻し時に磔や磁器は投げ込まれ、鈴は上位近くに埋めた可能性がある。近世と考えられる埋土から染付の碗が出土している。鈴も同時期のものと思われる。碗以外に、径40cm～50cm大の自然礫が出土しており、何らかの上部構造が想定される。底面の北側に径40cmほどの円形ピットが検出された。

997・998は青銅鈴である。正面形は縦に長い円形を呈する。997はほぼ完形だが、998は下半部の一部が欠けている。997は長径3.8cm、短径2.9cmで、998は長径3.7cm、短径3.0cmとほぼ同じ大きさである。997の鈴口は幅1mm、長さ2.7cmで、西端に径0.5cmの円形の孔がある。998の鈴口はややずれてくっついている。上に円形の帯状

環が付いている。997は欠損しており、998は径9mmで、幅5mmの帯となる。鈴体の中央付近に両者とも幅0.5cmの帯状突帯が巡っている。997が16.7g、998が12.0gである。997は暗緑灰色、998は緑黑色を呈している。

②土坑61号 (第142図)

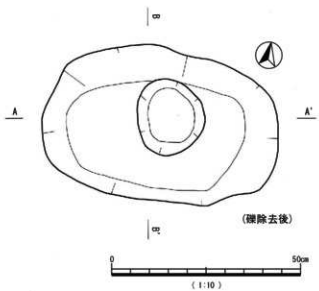
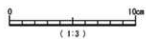
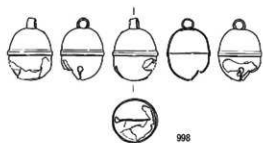
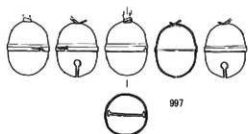
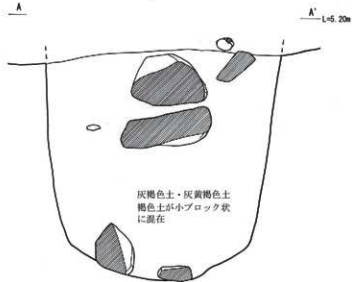
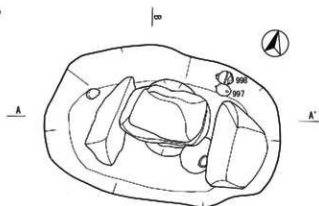
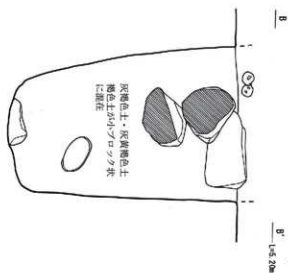
D-26区、Ⅱc層で検出された。東方向へ向かって上る河岸段丘との傾斜面である。平面形は、径が60～70cm前後のほぼ円形を呈し、北側の一部は下層確認トレンチにより消失した。断面形は、深さ約70cm弱の深ナベ形を呈する。深さ約40cmの明瞭な柱痕跡が残存している。

柱痕跡の下部約10cm、底面近くに一辺20cm大の角礫の板石が出土した。

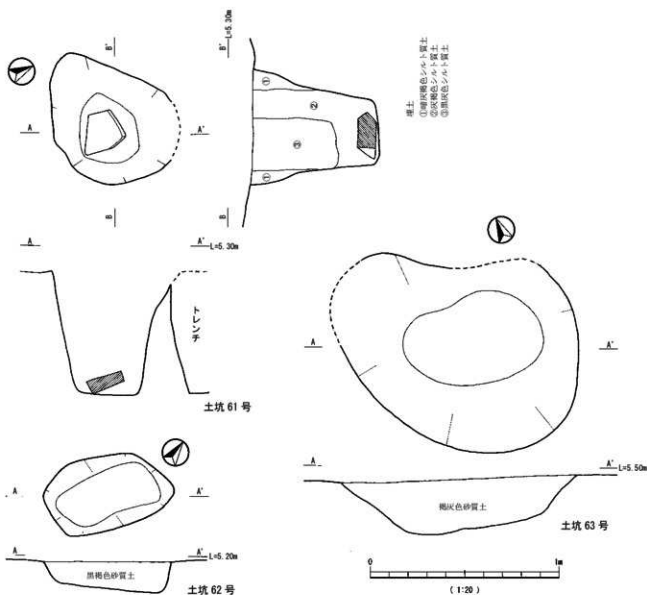
③土坑62号 (第142図)

C-27区、Ⅱc-2層で検出された。平面形は、約40cm×70cmの長楕円形を呈する。断面形は、西側から東側へと深くなり平底のナベ形を呈する。

埋土から陶器片が出土している。



第141図 土坑60号と出土の鈴



第142図 土坑61号～63号

④土坑63号 (第142図)

E-28区、石列遺構2号の下位で検出された。土坑64号の南側を掘り込むように検出された。平面形は、部分的に消失部分があるため不明な所もあるが、約1m×1.4mの不定形な凹形を呈する。断面形は、深さ30cm弱で、深皿状を呈する。

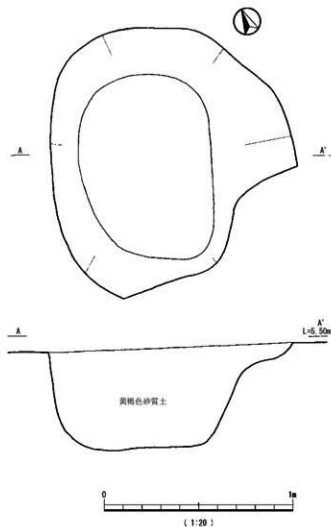
⑤土坑64号 (第143図)

E-28区、石列遺構2号の下位より検出された。南側は土坑63号により消失している。平面形は、約1.4m×1.3mのほぼ円形を呈する。断面形は、深さ50cmで、ボウル状に丸底を呈する。埋土も石列遺構2号と似る。

3) 祭祀遺構 (第144図)

地元の人達に「ウッガンサー」と呼ばれ、信仰の対象として大切に守られてきた場所から発見された。巨木を中心に塚状の盛り上がりが見られたが、全体が竹林や雑木林に覆われ、厚く積もった表土により、周囲を取り囲むような石列は確認できなかった。

列石は、ゴミ捨てのため部分的に攪乱が見られるが、畑との境界から石列遺構本体を含む全体に、径5cm前後の小石が敷き詰められたように広がっていた。石は自然礫が大部分を占め、10cmを超えるものや礫石器の破損品、石臼の破片なども含まれていた。一部南側からの進入路らしき場所に、径3cm前後の玉石のようなものが敷き詰められた箇所が確認された。



第143図 土坑64号

石列の形状により、4つの遺構に分けて調査を進めた。西側の半円形に並べられた石列を石列遺構1号とした。東側の巨木の根を囲むように方形に並べられた石列を石列遺構2号とし、その下の石列を石列遺構3号とした。石列遺構2号の南側の巨石が並んだ石列を石列遺構4号とした。

検出面から陶磁器片、古銭、石臼、現代の陶磁器類などが、埋土中から染付、煙管などが出土した。

また、E-29区の石列は、石列遺構5号とした。

①石列遺構1号（第145図）

表土に埋もれて巨木を取り囲むような円形や方形の石列を確認した。東側は攪乱により消失していた。2号よりやや大きい40～50cm大の自然礫が主流である。

径約3.5mの円形を呈し、面積約10㎡である。北側は用地外へ延びており、1/3ほど検出された。

遺物は1009、1072、1073、1074、1075などが出土した。

②石列遺構2号（第146図）

表土に埋もれて巨木を取り囲むような方形の石列を確認した。大きさは20～30cm大の自然礫が大部分を占め、部分的に残っている。主軸は東西方向、部分的に抜けているが、約3×2mの方形を呈し、面積約6㎡である。

遺物は、1006、1008などが出土した。

③石列遺構3号（第147図）

石列遺構2号の下で石列を確認した。上部のものより一回り小さく、南西部は確認されなかった。下部石列内は土坑状に掘り込まれており、平面形は、石組遺構全体に沿った向きで、一辺が約1.3mのほぼ正方形を呈する。西側の一部は、巨木の樹痕により破壊されている。断面形は、深さ約30cmで、レンズ状を呈している。検出面の中央部付近に炭化物の集中が見られた。中央部付近の埋土中に、小礫（5～10cm大）を平坦に敷き詰めたような部分が検出された。

遺物は、小礫の上下を含め、999、1011、1012など石製品・磁器片・陶片・煙管等が出土した。

④石列遺構4号（第148図）

巨木の根の南側に石列を確認した。50cmを超える巨石が直線上に並んでいる。略東西方向に一辺が約4mである。さらに、南側に1.6mほど石列が続く痕跡がみられる。また、西側にも延びる可能性がある。北側の巨木の根と南側の石列の間には、5cm前後の小礫が覆うように敷かれており、部分的に1cm大の小石を敷き詰めた部分もみられた。

⑤石列遺構5号（第149図）

E-29区の土坑58号（古代）の北側に接して検出された。偏平な円礫を底面を描いて直線状に配置してあるが、それぞれに隙間があり、組んであるようには考えられない。長さが約1mである。

⑥祭祀遺構出土の遺物と石製品・青銅製品・古銭（第150図）（1000～1014）

祭祀遺構は最近まで森となっていたため、現代のごみ捨て場にもなっていた。そのため現代のものも多く含まれていた。ここでは主なものを紹介する。

999は、ほぼ半割れの形状を留めた茶臼である。

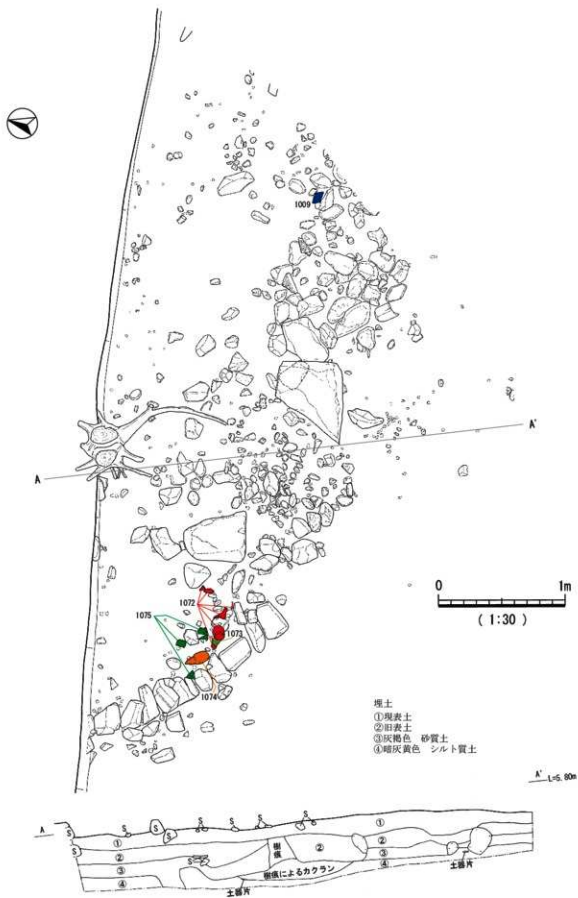
1000は、皿である。内面に圏線及び連点文が描かれ、見込みの蛇の目軸測ぎにはアルミナが塗布されている。呉須の色調が鮮やかなため、近代以降の物と考えられる。

1001～1006は、碗である。

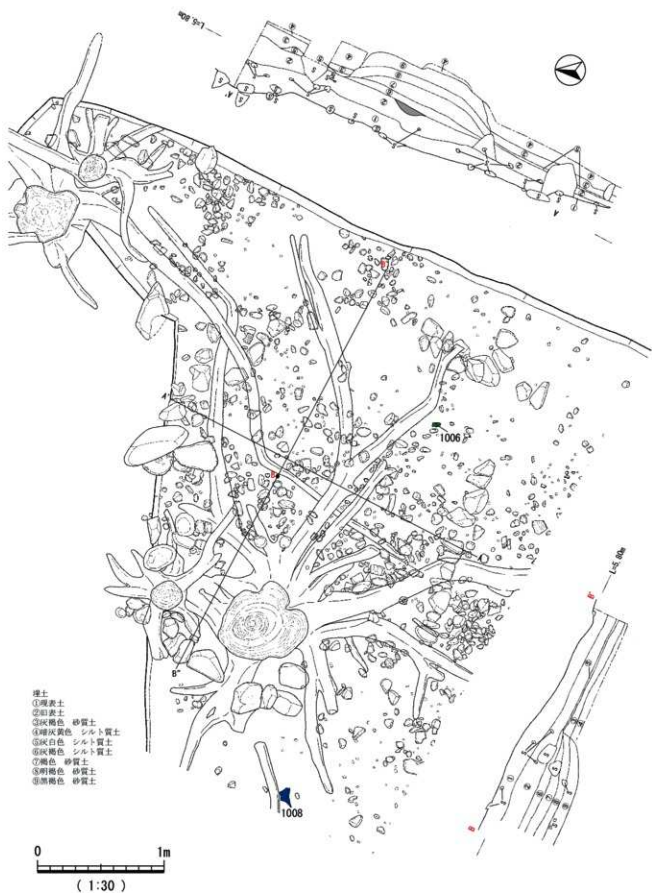
1001は、肥前系陶器である。削り出しによりやや高さのある高台が作出され、高台付近は露胎している。見込みはハケ状の工具で掻き取るように、蛇の目軸測ぎが施



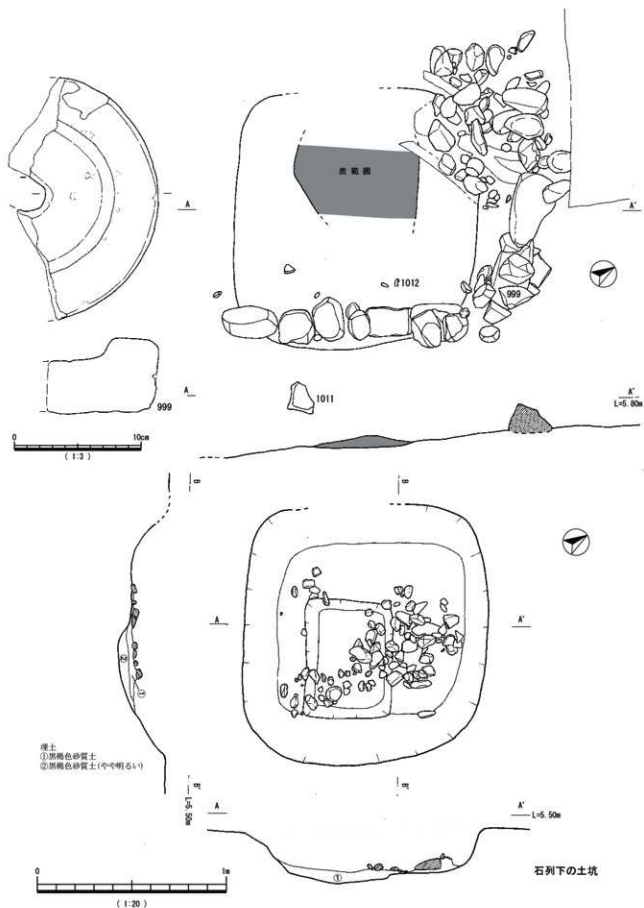
第144図 祭祀遺構



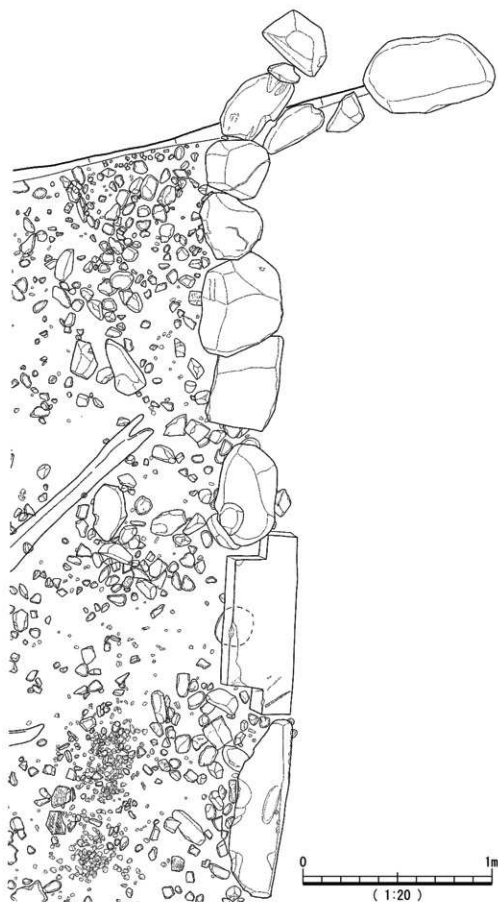
第145図 石列遺構1号



第146図 石列遺構 2号



第147図 石列遺構3号と出土の石製品



第148図 石列遺構4号